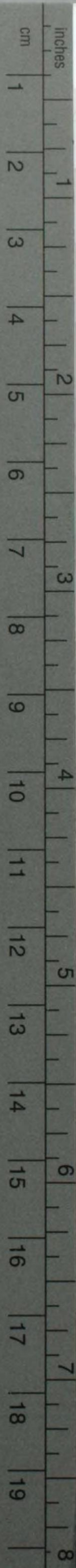


Kodak Gray Scale



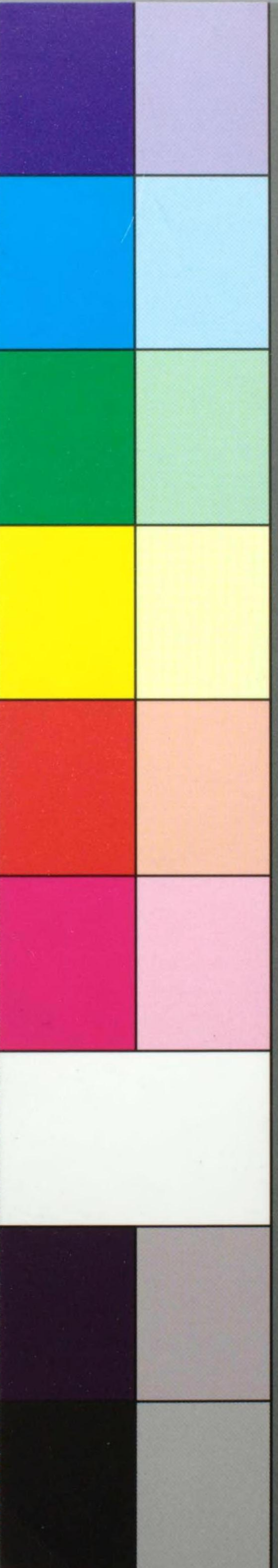
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

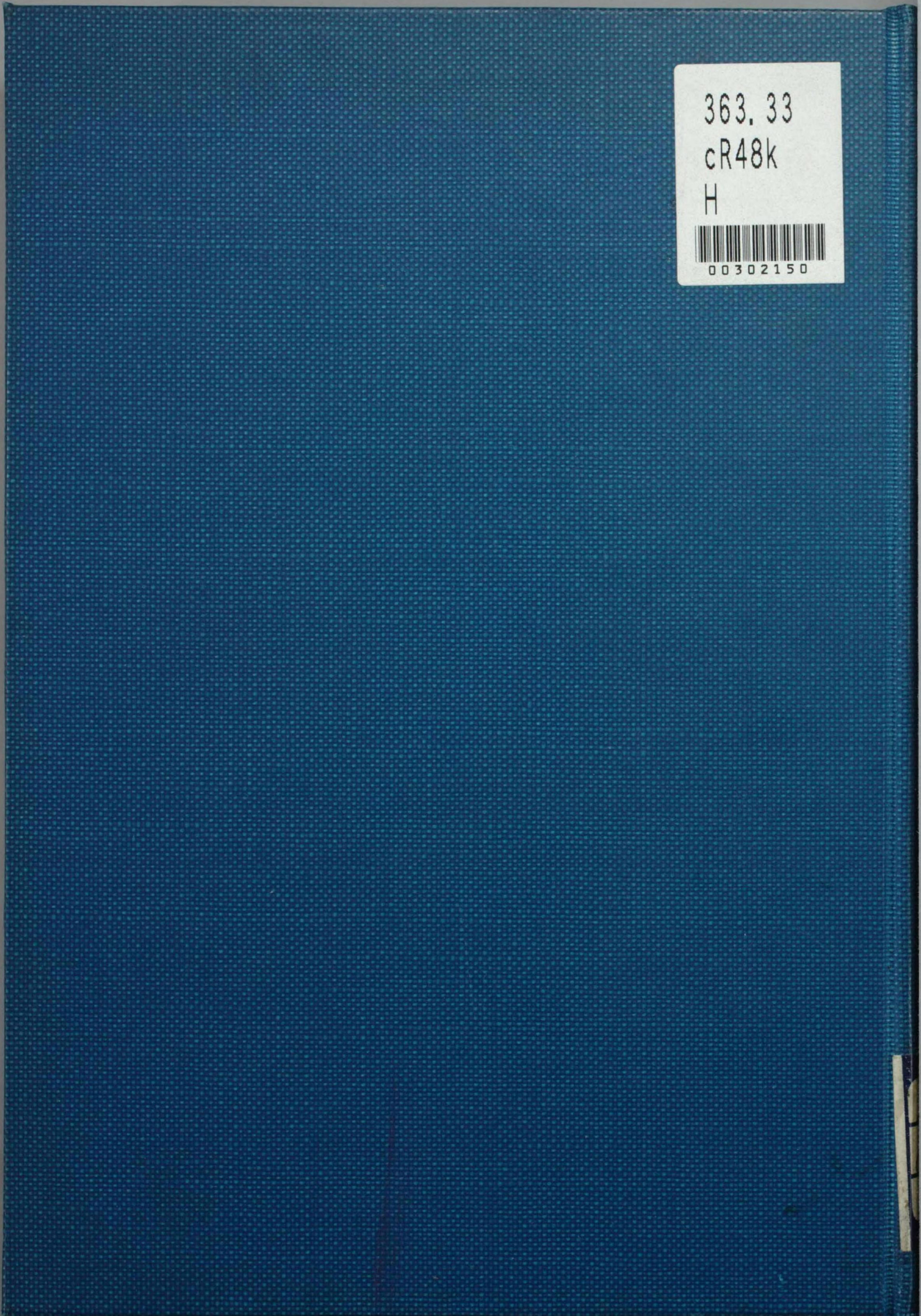


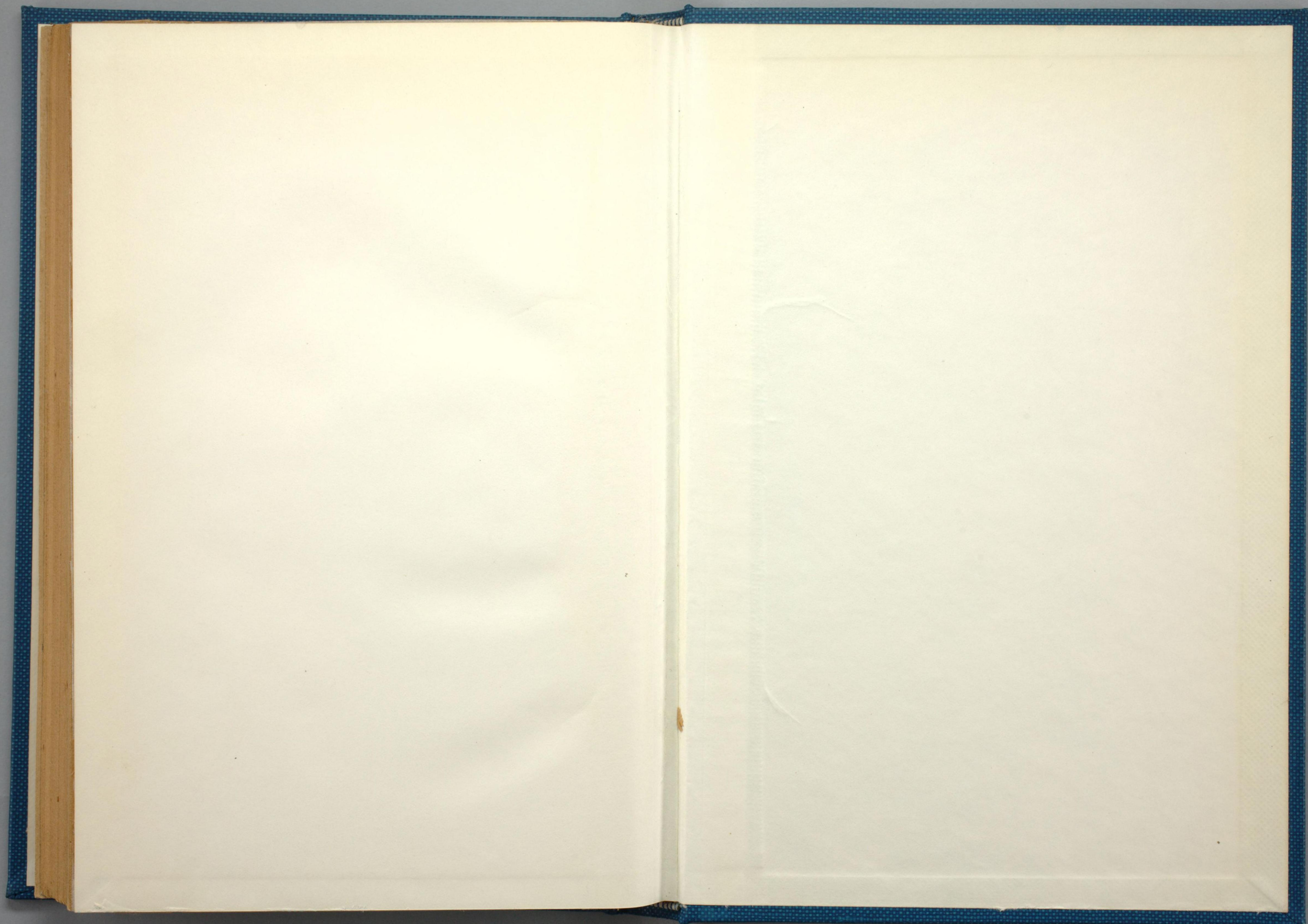
Kodak Color Control Patches

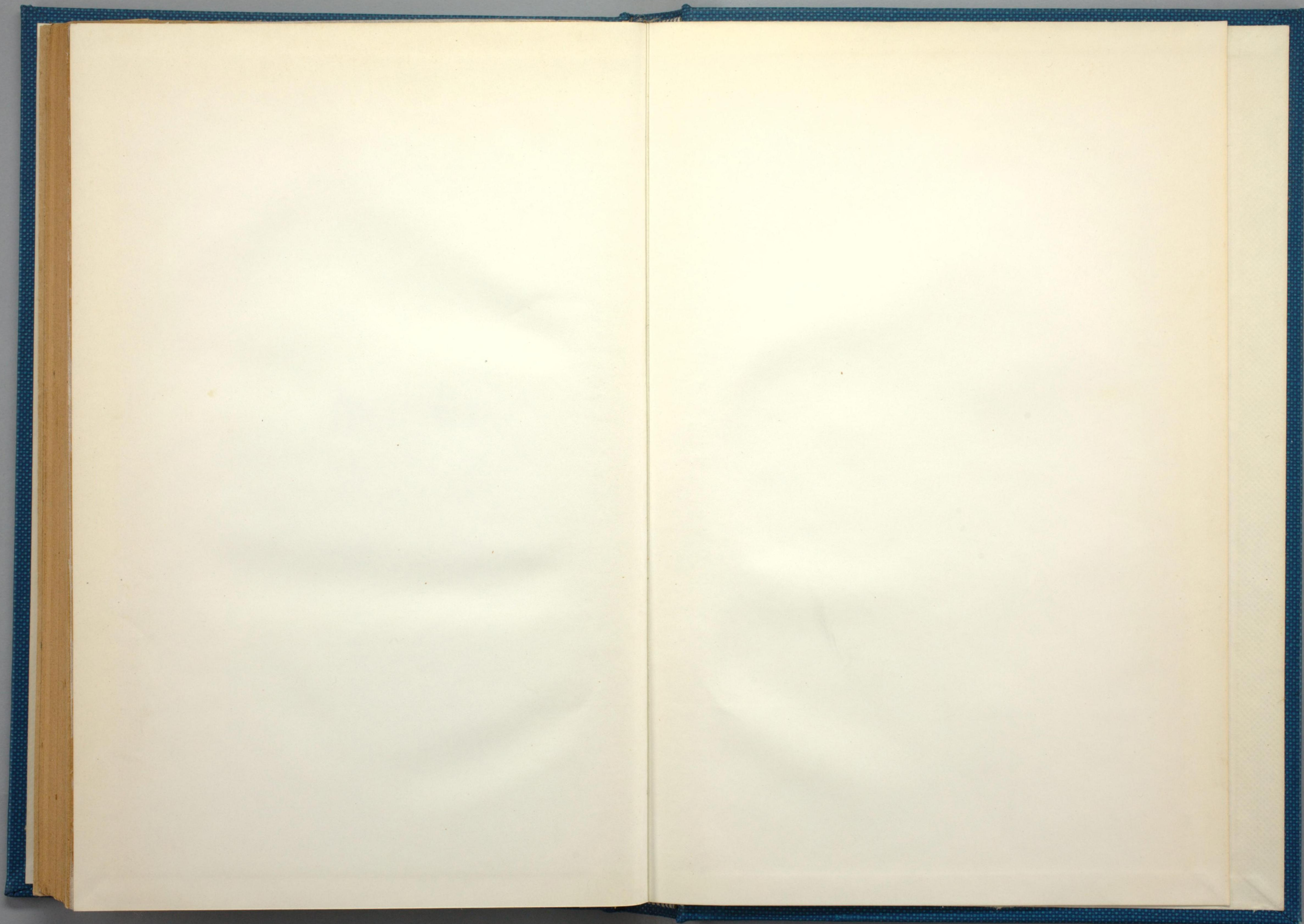
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



363.33
cR48k
H
00302150







ITG-51

共産黨宣言

(詳解版)

エ マ
ン ル
ゲ ク
ル ス
ス ス
共著

ナ
ウ
カ
社
刊

363.330R482H



363.33
CR482
H



302150

共産黨宣言 (詳解版)

目次

邦譯再版への序
編輯者第一版への序
同第二版への序

序文

- 一八七二年ドイツ版への序文 (マルクス、エンゲルス)
- 一八八三年ドイツ版への序文 (エンゲルス)
- 一八八三―九〇年ドイツ版への序文 (エンゲルス)
- 一八八八年英譯版への序文 (エンゲルス)
- 一八九二年ポーランド版への序文 (エンゲルス)
- 一八九三年イタリア版への序文 (エンゲルス)

共産黨宣言

- 一、ブルジョアとプロレタリア
- 二、プロレタリアと共産主義者
- 三、社會主義及び共産主義文書

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

- 一、反動的社會主義……………
- A 封建的社會主義……………
- B 小ブルジョア社會主義……………
- C ドイツ社會主義又は「真正」社會主義……………
- 二、保守的社會主義又はブルジョア社會主義……………
- 三、批評的空想的な社會主義及び共產主義……………
- 四、革命諸政黨に對する共產黨の態度……………
- 共產黨宣言評註（デ・リヤザノフ）……………
- 序論への評註……………
- 第一章への註解……………
- 第二章への註解……………
- 第三章への註解……………
- 第四章への註解……………

邦譯再版への序

リヤザノフの「共產黨宣言評註」は最初一九二九年に故早川二郎氏の手で邦譯され、半合法的な形で出版された。

「宣言」の正確適切な翻譯がいかに困難な仕事であるかと云ふこと、またその理解がその書かれた時代の歴史的事情の把握なしには極めて困難であると云ふことについては、リヤザノフの「第一版への序文」に詳しく述べられてゐる。

「宣言」本文の邦譯の完璧については、尙ほ將來に期待されねばならないであらう。それにも拘はらず、いまこの「評註」版の邦譯を再版に附する理由は、「宣言」の註解に對する必要がいま我國において痛感されてゐるからである。

リヤザノフが政治的行動の誤謬により學者としての權威的地位を失つたことは人の知るところであるが、この註解版は今日でも「宣言」の歴史的意義の理解を助ける手引として役立つものであらう。

（發行者）

編輯者、第一版の序文

『宣言』のロシア譯は數種存在する。——このうちにはバクレーニンのもの、ブレハーノフのもの、ボッセのもの、オルロフスキーのもの等々がある。これらのうちで最もよいのは誰れのかと云ふと、それはブレハーノフのものである。一八七〇年に既に出版されてゐるバクレーニンの翻譯を改訂して、ロシア・マルクス主義の創設者たるブレハーノフは、術語上その他に於て不確實な點を是正し、且つ四十年代のヘーゲル派流の舊式な文體を著しく新しいものにしてゐる。併し尙ブレハーノフの翻譯にも、その莫大なうちにもかゝらず、少からざる悲しむべき遺漏と抄譯とがある。

そんなわけで、宣言を新しく翻譯する事は止めにして、我々は我々の本の臺本としてはブレハーノフの翻譯を用ひた。併し、それを注意して再吟味する事にした。その際、出来る限り、文體を傷けない様に、同時に全く正確な且つ完全な翻譯をつくらうとつとめた。『共産黨宣言』の公刊されてから一九二三年の始めまで七十五年になる。それにもかゝらず、それは決して少しもその根本的な結構に於ては陳腐になつてゐない。併し、あらゆる歴史的文書がさうであるやうに、それはその時代の痕跡を背負つて居り、それ故に、それを産んだ歴史的な時代と關聯させて考へなければそれは理解され得ない。この中にあげられてゐるいくつかの事象は既に歴史の領域中に消え去つてゐる。同じく、それは事實に據る多くの補足を必要とする。正にそれ故かくも切々と、宣言の詳細な註解に對する必要が感ぜられるのである。

かゝる註解は次の諸條件を充すものでなければならぬ。第一に、それは、最初の國際的共産主義的組織の綱領として宣言を産んだ當時の、社會革命運動の歴史を知らずものでなくてはならぬ。第二に、それは、宣言のあらゆる根本的な諸思想の生成、發生を究めるものでなくてはならぬ。かくして、マルクス及びエンゲルスに依つてあたへられた宣言のなかに於ける、その先行者のものに比しての眞實、新しいものが指摘され、人類思想史上における宣言の地位が決定されなければならぬ。第三に、それは、宣言が、いかなる程度にまで歴史の批判にたゞてゐるか云ふ事が、即ちその如何なる部分が訂正され補足されなければならぬかと云ふ事が指摘されねばならない。

文獻上この要求を充さうとする試みは存在してゐる。イタリアのマルクス主義者、故アントニオ・ラブリオラのものに屬する註解の如きはそれである。彼は宣言研究の入門書を書いてゐる。併し、それは、壓縮されてゐるのと、抽象的なので、處々宣言自身よりも

理解に苦しむ個所がある。同じく、皮相的な且つ、處々に於ては全く凡俗に墮してゐる、ブルジョア社會主義者、アンドレールのもの如きがある。それはロシア語に譯されてゐる。これは我が黨學校の教師達にも使はれうるであらう。

宣言に精通したい同志等に對しては我々はエンゲルス及びマルクスの次の小冊子をすすめる。
1、エンゲルス『共産主義の原理』これは宣言の著者二人のうち一人によつて書かれ、その最初の原案である問答體になつてゐる。非常に通俗的に解説されてゐる。

2、マルクス『賃労働と資本』、エンゲルスの序文附。

3、エンゲルス『空想より科學への社會主義の發展』この本は七十年代の終りに書かれてゐる。宣言の公刊以來經過せる三十年間に於いて、マルクスの理論的思想が、主として獲得した諸結果が要約されてゐる。

附録に於ては、同志達は、一八四八年の革命に至るまで社會主義史上及び社會運動史上における主要な諸事件のいくつかの註解と短い年代記的な要略とを見るであらう。それらが宣言の理解を容易ならしめ、我が黨學校で宣傳及び教授の仕事に従事しなければならぬ同志達に用ひられる事を望む。

デ・リヤザノフ

* 附録は最初の邦譯版では悉く収録されてゐるが、この譯書では省いた。(出版者)

第二版への序文

誤解を避けるために次の事は強調しておく必要があると思ふ。私は、前に説いた様な任務を有する註解はまだ出してゐない。唯、單に若干の註を付したに止まつてゐる。一九一九年——一九二〇年に、スウェルドロフ大學に於て、また、一九二一年——一九二三年に、社會主義大學のマルクス主義科に於て私が指導した『共産黨宣言』についてのゼミナールは私に次の事を知らしめた。社會主義史及び労働運動史の領域に於けるいくつかの説明と補註なしには、我が黨學校の學生等は——その充分に豫備知識を有する者でも——宣言の豊富な内容を正しく把握する事は出来ない、と。併し、聽講者や學生等の間における生々とした交流のうちにて理論的思想のこの著作を註解する事とこの註解を紙上に定著させる事とは別個な事である。後者は非常な豫備的勞作を必要とし、且つ、それは綿密に行はねばならない。これなしには多くの命題は不充分にしか立てられず、議論の餘地が出来て了ふ。特に、傳統的な解釋に對し注意深

い再審査をせねばならぬ個處に於て然りである。

『共産黨宣言』の中に於て始めてそれが解説された様な形における科學的共産主義なるものは、その歴史的諸前提——フランス大革命以來の社會思想史及びプロレタリア階級闘争の發展史——を知らないでは理解する事はできない。唯、十九世紀の前半の時代における労働運動史及び社會主義史の研究、且つその研究をその諸源泉にまでさかのぼらす事のみが、宣言の著者達が労働運動史、社會主義史中にもたらした新しい部分を正しく定め、彼等の獨立的な理論的思想の生産物を決定する事ができる。この宣言は、全國際労働運動の綱領となつたものであるが、それ自身、社會主義史上にあつて、最も國際的に出来上つたものである。これはドイツ人によつて書かれたものであるが、我々はこれについてこれの著者が英國及びフランス史のあらゆる諸結果を理解してゐるドイツ人である事を、且つ、マルクス及びエンゲルスは自分達の書いたものの一文字はその時代の知識ですつかり武装して書かれてゐると主張し得ると云ふ事を、且つ、それはラッサールよりもずつと大きい權利を以てさう主張しうるのだと云ふ事を、宣言は社會主義思想史上における一新段階をなすものであるのみならず、また人類の思想史上に於ける一新段階をなし、人類文化史上における新時代の出發點をなすものであると云ふ事を忘れるならば、依然としてそれは謎であるだらう。そこで、宣言の歴史を記し、その中に展開されてゐるあらゆる思想の生成を究める様な宣言の註解は、尙いくたの準備的勞作を要する將來の仕事である。

正にこれ故に私は、宣言に對する註解を書けど申し込まれて、それを拒絶し、單に必要な評註だけに止める事にしたのである。

第二版は初版より次の變更された點や補足された點を有する。評註には、エス・ウシリチェンコの助言と助力に依つて小見出しが附けられた。これは、いくらか、索引に代用する事も出来るであらう。(以下略——邦譯再版用版者)

序 文

一八七二年ドイツ版への序文

(一)

『共産主義者同盟』——それは國際的労働者組織であつたが、當時の狀勢の下にあつては、言ふまでもなく單なる秘密的なものたらざるを得なかつた。——は一八四七年十一月ロンドンに開かれた會議に於て、公表するための、理論並びに實踐に互る、詳細な黨綱領の編纂を、この書の署名者(マルクスとエンゲルス)に委任した。かくてこの宣言が成り、原稿はフランス二月革命の數日前に、ロンドンへ印刷に廻された。最初ドイツ語で公表せられ、ドイツ、イギリス、アメリカに於て、少くとも十二種の版本で刊行せられた。英語では、最初一八五〇年ロンドンで、ヘレン・マクファーレン嬢により、『レッド・レパブリカン』誌に翻譯せられ、次いで一八七一年にアメリカで、少くとも三種の翻譯が出版せられた。フランス語では一八四八年の六月一擧の少し前、パリで出版されたのが最初であり、次いで近頃、ニューヨークから、『ル・ソシアリスト』誌上で新譯された。更に新しい翻譯も準備されてゐる。ポーランド語には、ロンドンでドイツ語の第一版が出た直ぐ後で翻譯された。ロシア語には、ジュネーヴで、一八六〇年に、デンマーク語には、やはり直ぐその後で翻譯された。

最近二十五年間に、諸狀勢は甚だしく變化したけれども、この宣言の中に展開してある一般的原则は、大體に於ては、今日も尙、全き正しさを保持してゐる。個々のことは、處々、改めねばならぬところがあるであらう。これらの原则の實際的適用は——宣言の中にも説明してある通り——あらゆる場處及び時に於て、歴史的に當面する、諸事情

に従はねばならない、それ故第二章の末尾に提唱してある革命的方策には、決して特に重きをおいてあるのではない。この箇所は今日では多くの點に於て變へられることになるであらう。最近二十五年間における大工業の巨大な進歩、およびそれに伴つて進展しつつある、労働者階級の黨組織に當面して、又第一には二月革命の實踐的經驗、更にプロレタリアートが始めて二ヶ月間政權を握つたバリー・コムミュンの、はるかに勝れた實踐的經驗に當面して、今日この綱領は處々陳腐となつた。特筆すべきは、コムミュンが次のことを立證したことである。『労働者階級は單に出來合の國家機關を占有して、それを自己の目的のために利用することはできない。』(『フランスの内亂、國際労働者同盟總評議會演說』を以て、ドイツ版十九頁、そこにはこの問題が更に展開してある。)更に又、社會主義文獻の批判(第三章)は、一八四七年までの分であるから、今日では缺陷のあることは言ふまでもない。同様に又、各種の反對黨に對する共產黨の態度についての敘述(第四章)は、根本的な點は今日も尙正しいが、その實行に於ては、政治的狀勢が全然變つたし、また歴史的發展の結果そこに列擧してある諸黨派の大多數がこの世界から消滅してしまつたので今は既に陳腐となつてゐる。

* 宣言の實踐的綱領の若干の條項の批判を、同志達は、エンゲルスによつて指摘されたマルクスの小冊子『フランスの内亂』に見出すであらう。

併しながら、この宣言は既に一つの歴史的文献となつてゐるので、それを變更することはもはや吾々の權限ではない。次の改版には、一八四七年から今日までの始末を記した序文を添へるであらう。この度の改版は思ひがけないとき以來たので、その暇を得なかつた。

ロンドン、一八七二年六月二十四日

カール・マルクス
フリードリツヒ・エンゲルス

一八八三年ドイツ版への序文

(11)

この度の出版の序文は、残念ながら、私が獨りで署名せねばならない。ヨーロッパ及びアメリカの全労働者階級が、誰に對してよりも以上に、感謝の念を捧げてゐる人、マルクスは今ハイゲートの墓地の中にやすらふてゐる。その墓よりも高く、既に新草が生ひ茂つてゐる。彼の死と共に、宣言を改作補充しようとすることは、もはや全く不可能となつた。それ故、私はここに次のことを、再び、明瞭に規定して置くことを一層必要と思ふ。

* マルクスは一八八三年三月十四日ロンドンで死去した。——編輯者

この宣言を一貫する根本思想は次のとおりである。あらゆる歴史時代の經濟的生産、およびそれから必然的に生じてくる社會の構成は、これらの時代の政治および學問の歴史の根底をなす。それ故に、(古代土地共有制の滅亡以後の)全歴史は階級闘争——社會の種々な發展段階における、被搾取階級と搾取階級および被支配階級と支配階級の闘争——の歴史であつた。この闘争は、然しながら、今や、一つの次の如き段階に到達した。そこではもはや被搾取、被壓迫階級(プロレタリアート)が、同時に全社會を、永久に、搾取、壓迫、および階級闘争から解放することなしには、搾取し壓迫する階級(ブルジョアジー)から自己を解放することは出來ない。——この根本思想は、唯だ専ら、マルクスにのみ屬するものである。*

私はこのことを既に、屢々語つた。然し今は正に、宣言の序文としてこのことを述べるのが、必要である。

ロンドン一八八三年六月二十八日

フリードリツヒ エンゲルス

*私の見るところでは、この思想は、ダーウインの進化論が自然科学のために築いたと同じ進歩を、歴史科学のために築くべき使命を負ふものである。私は英譯の序文において述べてゐる、「この思想へ、吾々二人は一八四五年の數年前に於て、すでに漸次近づきつゝあつた。私が單獨でその方向に如何なる程度まで進んでゐたかは、私の著『英國勞働階級の狀態』に表れてゐる。然るに、一八四五年の春、私がブリュッセルで再びマルクスと會つたとき、彼はその思想を完成して、殆んど私が右に、總括的に述べたやうな明晰な言葉で、それを私に提示したのであつた。」

一八八三——九〇年ドイツ版への序文

(三)

前の序文が書かれてから、今また、宣言の新しいドイツ語版が必要となり、また宣言について種々な事柄も起つてゐる。それをここに述べねばならない。

第二のロシア語譯——ヴラ・ザズリツチの譯——が一八八二年ジュネーヴで現れた。その序文はマルクスと私が書いた。残念なことに、ドイツ語で書いたその原稿が、私の手元に無くなつてしまつた。それで、私はロシア語から復譯するといふ、全くむだな仕事をせねばならない。その序文は次のとおりである。*

*我々は最初のロシア本よりとる——(リヤザノフ)我々も同様(譯者)

『共産黨宣言』のロシア語の最初の出版は、バクーニンの翻譯で一八六〇年頃『コロル』印刷所で出版された。その當時、本書のロシア譯は、西歐にとつて、たがだか、一つの骨董的文獻の意義しか有つてゐなかつた。今日では、そんな見解はもはや成り立たない。宣言の最初の公表當時(一八四八年一月)プロレタリア運動の傳播區域が如何に狹隘なものであつたかは、本書の最後の章、『各國における各種反對黨に對する共産主義者の態度』に最もよく表れて

ゐる。これには、第一に、ロシアと合衆國とが缺けてゐる。それは、ロシアがヨーロッパの反動の、最後の、大きな豫備隊となつてゐた時代であり、また合衆國への移住がヨーロッパ・プロレタリアートの過剩力を呑み込んで了つてゐた時代であつた。兩國とも、ヨーロッパに原料を供給し、同時にその工業生産物の販賣のための市場として役立つてゐた。それ故兩國は種々な方法で、ヨーロッパの社會秩序を支持するものとして現れた。

それらすべてのことは、今日如何に變つてしまつたか！正にヨーロッパの移民によつて、北アメリカの農業の巨大な發達、その競争によつてヨーロッパの大小の農業を根本から撼がすやうなその發達が可能にされた。同時にそれによつて、合衆國はその豊富な工業的資源の開發を、而も、ヨーロッパの工業獨占を忽ちに没落せしめずには置かねやうな、規模と精力とをもつて始める、可能性を與へられた。この兩事情は、アメリカに對し、革命的意味に影響する。アメリカの全政治秩序の基礎たる、農場主(ファーマー)の小中土地所有が、大農場との競争に直々壓倒されてゆき、一方、工業地區においては、それと同時に、夥しいプロレタリアートとすばらしい資本の競争とが始めて發達してゆく。(譯註)

(譯註)ドイツ本には、……「それと同時に、龐大な資本の集中に伴つて、夥しいプロレタリアートが始めて形成されてゆく」となつてゐる。

ロシアを見やう。一八四八——四九年の革命當時には、ヨーロッパの君主のみならずヨーロッパのブルジョアまでも、ロシアの干渉をもつて、當時、まさに自己の力に目醒めやうとしつゝあつたプロレタリアートに對抗する唯一の救ひとなしたのであつた。彼等はツァールをヨーロッパ反動の元首として推戴した。今日では、彼は革命の捕虜としてガッチナにゐる。そしてロシアはヨーロッパの革命運動の前衛である。

共産黨宣言の任務は、不可避的に當面しつゝある、現在のブルジョア財産の没落を宣告することであつた。然るに

ロシアに於ては、急激に發展しつゝある資本主義秩序および漸く出來かかつたばかりのブルジョア地主地所有と相並んで、大半の土地が農民の共有財産になつてゐるのを見る。

そこで次の如き疑問が生ずる。ロシアの共同體——この形態は確かに、原始土地共有制の既に非常に崩壊したものであるが——は直接的に高度の共產主義的土地所有形態に移りうるか、それとも、その前に、西歐の歴史的發展が示してゐると同じ分解過程を通過せねばならぬか？

唯一つの、今日與へうる この問題の解答は次の如くである。若しも、ロシア革命が西歐労働者革命の烽火となり両者が互に相補ふならば、今日のロシアの土地所有制は共產主義的發展の出発点として役立ちうる。

ロンドン、一八八二年一月二十一日

* エンゲルスは間違つてゐる。ロシア譯はヴェテ・ザスリツチでなくブレハノフに依つてなされたのである。バクーニンの譯は一八七〇年に出た。ロシア版への序文はアレクサンドル二世の暗殺後數ヶ月にして出た。「人民の自由」(ナロードナヤ・ヴォリヤ)は當時その流行の最高潮に達してゐた。アレクサンドル三世はガッチナにのがれてゐて、「即位式の祝祭」をのばしてゐた。一八八三——一八八四年に至つて始めて、終局的に、「人民の自由」の大なる勝利は同時にその敗北であり、ヨーロッパにおける革命運動の前衛隊は其の故郷に於ては革命的軍隊のない前衛であり、英雄的ではあるが、力不相應なロシアのツァールとの闘争に於ては無力であることが判明したのである。(ト(リヤザノフ)

新しいポーランド譯が、ロシア譯と同じ頃ジュネーヴで現れた。Manifest Komunistyczny.

更にデンマーク語の新譯が一八八五年、コペンハーゲン出版『社會民主主義文庫』に現れた。それは、遺憾なことあまり完璧な譯ではない。譯者に困難を與へたと思はれる二三の重要な箇所が省略されており、その他にもあちこちに、急いだために粗雑にした痕跡が認められた。譯者も少しの注意さへあれば優れたものを作りえたであらうといふことが、その勞作について認められる場合には、かゝることは一層不愉快に感ぜられる。

一八八六年に、フランス語の新譯がバリーの『ル・ソシアリスト』誌に現れた。それは今までに屬した中の最も優れたものである。*

* ラウラ及びポール・ラファルグの譯。——リヤザノフ

それに次いで、同年にスペイン譯が、最初マドリードの『エル・ソシアリスタ』誌に、後にパンフレットとして、公けにされた。Manifesto del Partido Comunista por Carlos Marx y F. Engels, Madrid, Administracion de el Socialista, Herman Cortes 8.

珍奇なことを一つ述べる。一八八七年にアルメニア譯の原稿が或るコンスタンチノーポリの出版業者に送られた。だがその善人は、何だか知らぬがマルクスの名の書いてあるものを印刷する勇氣がなかつた。それで譯者の名を著者として書いた方がよからうと云つてきた。然し譯者はそれを拒絶した。

後から後からと、どれも多少誤譯のあるアメリカの譯本が數種英國で出版された後に、遂に一八八八年定譯が現れた。それは私の友人サムエル・ムーア氏の手になり、印刷前更に吾々二人が共に目を通したものである。書名は次の通り。Manifesto of the Communist Party, by Karl Marx and Frederick Engels, authorized English Translation, edited and annotated by Frederick Engels, 1888, London, William Reeves, 185 Fleet st. E. C. 1130 註釋を私はこの書の現在の版に加へておいた。

宣言は一つの特種な經歷を有つてゐる。その出現の瞬間には、當時まだあまり多數でなかつた、科學的社會主義の前衛から『第一の序文に記してある翻譯が示す如く』熱狂的に歡迎せられたのであつたが、一八四八年六月におけるバリー労働者の敗北と共に始まつた反動によつて、忽ち背後に押しこめられ、ケルン共産黨裁判(一八五二年十一月)によつて、遂に『法律により』禁止を宣告されたのであつた。二月革命に始まる労働者運動の、公然の舞臺から

の消滅と共に、宣言も亦た背後に隠れることになつた。

ヨーロッパの労働者階級が、再び支配階級の権力に對する新しい攻撃のために十分な力を蓄へたとき、『國際労働者同盟』が成立した。それはヨーロッパおよびアメリカの全戰闘的労働者をうつて一丸となし、一大軍隊を形成することを目的とした。それ故それは宣言に書いてある諸原則から出發することはできなかつた。それは英國の労働組合に對しても、フランス、ベルギー、イタリア、スペインのブルドン主義者に對しても、またドイツのラッサール派に對しても、門戸を閉ざさぬところの、綱領を持たねばならなかつた。この綱領——インタナショナル規約討議案——はマルクスにより、バクレーン其他の無政府主義者さへも認められたほどの巧妙さを以て、起草された。宣言中に立てられた諸命題の、最後の勝利のためには、マルクスは唯、この共同的活動および討論から必然的に生れてくるにちがひない、労働者階級の智的發達にのみ信頼した。資本との鬭争における諸事件や諸變轉は、戰敗は、戰勝より以上に、戰闘者とその從來の萬能樂の無能なることを明瞭に知らしめ、彼等の頭腦をして、労働者解放の眞の條件への根本的洞察に對して、を一層鋭敏ならしめずにはおかなかつた。マルクスの考へは正しかつた。一八七四年インタナショナル解散の際の労働者階級は、一八六四年その創立の際の労働者階級とは打つて變つてゐた。ラテン系諸國におけるブルドン主義、ドイツにおける、特種的な、ラッサール主義は死滅に瀕してゐた。當時極度に保守的であつた、英國の労働組合さへも次第に進歩して、一八八七年スワンシーにおける、その會議の議長が、組合の名をもつて次のやうなことを言ひうる程にまでなつた。『大陸の社會主義はもはや我々を恐怖せしめない。』大陸の社會主義とは然し、既に一八八七年においても殆んどやはり宣言に發表されてある理論のことに過ぎなかつた。かくして、宣言の歴史は或る程度まで一八四八年以來の近代労働運動史を反映してゐる。現在では、それは疑ひもなく全社會主義文獻中、最も廣く傳播された、最も國際的な產物である。シベリアからカリフォルニアにいたる、すべての國々の數百萬の労働者の共通綱領である。

の共通綱領である。

*ラッサールは、個人として吾々に對しては、常にマルクスの『弟子』として自認し、従つて言ふまでもなく宣言の基礎の上に立つてゐた。これと異なり彼の追隨者の或るものは、國家の補助を受けた生産組合といふ彼の要求以上に進まなかつた。そして全労働者階級を國家の補助を受ける者と自己獨立者とに分類した。

然るに、我々は、この宣言を出すとき、それを社會主義宣言と名付けることはできなかつた。一八四七年當時社會主義者といへば二種類の人々のことであつた。一方では、種々な空想的理論體系の信奉者、殊に英國のオーエン主義者およびフランスのフリーエ主義者を指した。この兩者は、當時すでに一つの、單なる、漸次に死滅しつゝある宗派に萎縮してしまつてゐた。他方では、種々様々な、社會的醫者を指した。この連中は種々な萬能樂やあらゆる切り張りの術を用ひて、資本や利潤を聊かも傷つけずに、社會の害惡を除くと稱してゐた。二つの場合ともに、労働運動の外部にあつて、むしろ『教養ある』階級に支持を求めてゐた人々であつた。これに反して、労働者の或る部分は單なる政治的顛覆の不充分なることを確信して、社會の、根本的な、變革を要求してゐた。この部分は當時共產主義者と稱してゐた。それは、ほんの荒削りの、只本能的な、時としては多少粗暴な共產主義であつた。然しそれは、二つの、空想的共產主義の體系、フランスではカベットの『イカリヤ』共產主義、ドイツではワイトリングの共產主義を生み出したほど有力なものであつた。一八四七年頃、社會主義はブルジョア運動を意味し、共產主義は労働者運動を意味した。社會主義は、少くとも大陸では、客間的であり、共產主義はその正反對であつた。そして吾々は當時すでに、『労働者の解放は労働者自身が完成せねばならない』といふ意見を斷乎としてつてゐたので、いづれの名を選択すべきかといふ疑問は一瞬間たりとも起りえなかつた。その後もまた、この名を撤回しようなどといふ考へが起つたことはない。

『萬國のプロレタリア團結せよ!』今から四十二年前、プロレタリアートが自身の要求を提げて立ち上つた、かのパリ第一革命の前夜、吾々がその言葉を世界に向つて叫びかけたとき、應へた聲はほんの僅かにすぎなかつた。然るに、一八六四年九月二十八日には、殆んど全西歐諸國のプロレタリアが、光榮の追憶をもつた國際労働者同盟に團結したのであつた。インタナショナル自身はなるほど僅かに九年しか生存しなかつた。けれども、それによつて基礎づけられた萬國プロレタリアの永久的結合は、今日もなほ生存し、しかも益々強く生存してゐるのである。そのことの最もよい證左は今日といふ日である。何故なれば、今日、恰かも私がこの文章を書いてゐる時に、ヨーロッパとアメリカのプロレタリアートは、一つの軍隊として、一つの旗の下に、一つの直接的目的——既に一八六六年ジュネーブ會議により聲明せられた、八時間標準労働日の立法化——のために、始めて動員せられた、その戰鬥力の開兵を行つてゐるのである。そして今日の開兵こそは、あらゆる國々の資本家地主どもの眼を開かして、今日こそ眞に萬國のプロレタリアが團結したのだ、といふことを見せしめるであらう。

マルクスが今もなほ共に在つて、このことを彼の眼で見ることができたならば!

ロンドン、一八九〇年五月一日

フリードリッヒ・エンゲルス

一八八八年英譯への序文

この『宣言』は『共產主義同盟』の綱領として發表されたものである。『同盟』は労働者の團體で、始めはドイツ人に限られ、のち國際的となり、一八四八年以前のヨーロッパ大陸の政治的狀態の下では、やむなく秘密結社であつた。一

八四七年十一月ロンドンに開かれた『同盟』の大會において理論上及び實踐上における完備した綱領を發表するためマルクスとエンゲルスとが起草委員に選ばれた。一八四八年一月その草稿は先づドイツ文で起草され、二月二十四日のフランス二月革命前、ロンドンの印刷所に送られた。そして一八四八年六月の一揆の直ぐ前に、その佛譯がパリに現はれ、一八五〇年、ヘレン・マクファーレン嬢の手に成つた第一英譯が、ロンドンの雑誌『赤い共和主義者』に現はれた。オランダ譯とポーランド譯もまた次いで刊行された。

プロレタリアとブルジョアとの最初の大会戰たる、一八四八年六月のパリー一揆が敗北したので、ヨーロッパ労働階級の社會的及び政治的活動は、また暫く後ろの方へ押しこまれてしまつた。その後權勢の爭奪は、二月革命前と同じく、また有産階級の諸黨派の間にはかり行はれ、労働階級は僅かに政治的自由のために闘ふ事となり、中産階級急進派の左翼たる地位に引下げられた。そして獨立のプロレタリア運動がなほ多少の生氣を示してゐるところでは、容赦もなく叩き伏せられてしまつた。かくてロシアの警察は、當時ケルンに置かれてあつた共產主義『同盟』の本部を捜し出した。それで本部員は皆捕縛され、十八箇月の監禁の後、一八五二年十月、始めて公判に付された。この有名な『ケルン共產黨裁判』は十月四日から十一月二十五日まで繼續し、被告の中七名は三年から六年まで、それぞれの刑期を以てある要塞に禁錮する旨を宣告された。この宣告の後間もなく『同盟』は殘餘の黨員に依つて形式的に解散された。従つて『宣言』もそれより埋没されたものの如くであつた。

ヨーロッパの労働階級が更にその權力階級に向つて一撃を振ふべき充分の銳氣を回復した時、かの『國際労働者同盟』が勃興した。けれどもこの同盟は、専ら歐米全體の戰闘的プロレタリアを打つて一丸とする目的であつたので『共產黨宣言』に掲げられた趣旨を取つて、直ちにそれを標榜するわけには行かなかつた。即ちこの同盟は、イギリスの労働組合、フランス、ベルギー、スペインにおけるブルードン派及びドイツにおけるラッサール派に容認されう

べき漠然たる綱領を持つものでなければならなかつた。マルクスはその綱領を起草して右の諸黨派に満足を與へたが、彼としては全く、この協同の運動と、相互の討究とから必ず生ずべき筈である、労働階級の智力的發展に信頼してゐたのであつた。資本に對する戰鬥の事實、及びその戰況の變遷は、殊に敗戦の場合は勝利の場合よりも甚だしく、人をして種々なる家傳秘法の不十分を感知させ、従つて又、労働階級解放の眞正の條件について、一層深奥なる見解に到達させないではおかない筈である。

マルクスの見る所は正に當つた。一八七四年『インターナショナル』が解散した時、それを創立當時の一八六四年に比べると、労働者は丸で別人のやうになつてゐた。フランスのブルードン派、ドイツのラッサール派は皆な既に死滅に瀕し、保守的なイギリスの労働組合も（その大部分は疾くにインターナショナルと分離してゐたが）なほ能く漸次にその歩みを進め、去年スワンシーでその會長が、組合の名において『大陸の社會主義も最早我々に恐怖を感ぜしめぬ』と云つた程になつて來た。即ち實際上『宣言』の趣旨は著しく各國労働者の間に浸透してゐたのであつた。

* ラッサールは個人として我々に對する時には、常にマルクスの弟子たる事を承認し、従つて又『宣言』の論據の上に立つてゐた。然し一八六〇年から六四年までの公けの運動に於ては、彼は國家の保護を受ける組合の要求以上に進まなかつた。

かくて『宣言』そのものも再び表面に現はれた。ドイツの原文は一八五〇年以後、スキス、およびアメリカで幾度も翻刻され、一八七二年にはニューヨークで英文に譯されて、ウードハル・エンド・クラフリン週報に掲載され、その英譯からして、同地の佛文雑誌『社會主義者』に佛譯が現はれた。その後アメリカで發表された英文の抄譯が少な、とも二種あつて、而もその一種はイギリスで再版された。また第一のロシア譯はバクーニンの手に成り、一八六三年頃、ジュネーヴなるゲルツェンの雑誌『コロコル』の發行所から出版され、第一は女丈夫ヴェラ・ザスリッチの手に成り、一八八二年、同じくジュネーヴで出版された。また一八八五年、コペンハーゲン發行の『社會民主主義文庫』の中に、

一つの新しいデンマーク譯がある。一八八六年、パリーの『社會主義者』に又一つ新しいフランス譯が出た。そのフランス譯からしてスペイン譯が作られ、一八八六年マドリッドで出版された。ドイツに於ける翻刻は數へきれないほどで、少なくとも十二種はあつた。アルメニア譯は數日前コンスタンチノポリで出版される筈であつたが、發行者はマルクスの名を冠した書籍を出す事を恐れ、譯者は又それを自分の著述とする事を拒んだので、とうとう世に出る事が出来なかつたと云ふ。以上のほか更に他の國語に譯されたものもあつたと聞いてゐるが、自分は未だ見た事が無い。かくて此の『宣言』の歴史は大體に於て、近世労働運動の歴史を反映してゐる。そして今日に於ては、この『宣言』こそ疑ひもなくあらゆる社會主義の文書中、最も廣く世に行はれ、最も國際的な産物であつて、シベリアからカリフォルニアまで幾百萬の労働者に依つて承認されたその道の綱領である。

然るにこの『宣言』の起草された時、我々はこれを『社會黨宣言』と呼ぶ事が出来なかつた。一八四七年の當時では、社會主義者と云へば、一方において、種々なる空想的諸制度の信者、即ちイギリスのオーエン派、フランスのフリエル派などを意味し、その兩派とも既に單なる『おかたまり』の地位に下り、次第に死滅に瀕してゐた。また一方に於て、社會主義者といふ名は種々雑多なエセ改良家を意味し、その連中はあらゆる切り張りの術を説いて資本と利潤とは何等の危害をも加へないで能く社會一切の害惡を除去すると稱してゐた。そしてこの兩者とも労働階級以外の運動であつて、寧ろ謂ゆる教養ある人士に向つてその支持を求めてゐた。これらの間に立つて、單純なる政治革命の無力を悟り、社會の根本的變革の必要を宣誓した者が、労働階級中のどれだけの部分であつたかは分らないが、その部分だけは自ら共產主義者と稱してゐた。それは因より粗雑な、荒削りの、純然たる本能的共產主義者ではあつたが、それでもその主張はよく急所に當つて、労働階級の間有力となり、フランスのカベール、ドイツのワイトリングのやうな、空想的共產主義者を産出してゐた。そこで一八四七年に於ては、社會主義は中流階級の運動であり、共產

主義は勞働階級の運動であつた。また少なくとも大陸においては、社會主義は『品のよい者』であり、共產主義は全くそれに反してゐた。そして我々の意見は最初から『勞働階級の解放は勞働階級自身の行動でなければならぬ』と云ふのであるから、この二つの名稱の何れを選ぶべきかに就て、疑義の起る筈がなかつた。それに我々はその後と雖も、會てこの名を排斥した事は無いのである。

この『宣言』は二人の合作であるけれども、自分はその核子を形成する根本の提案がマルクスに屬する事を明言する義務があると思ふ。その提案とは、歴史の各時代において經濟上に生産及び交換の慣行方式があり、また必然にそれから生じて來る社會組織があり、その時代の政治及び文明の歴史はこの基礎の上に建設され、またこの基礎に依つてのみ説明されうると云ふ事。故に人類の全歴史（土地を共有してゐた原始的氏族社會が消滅した以後）は階級闘争の歴史であり、搾取者と被搾取者、抑壓階級と被抑壓階級の對抗の歴史であると云ふ事。そして是等の階級闘争の歴史が進化の諸段階を形成し、それが今日では又一つの新しい段階に到達し、この段階では、被搾取、被抑壓の階級（即ちプロレタリア）が、搾取壓伏の階級（即ちブルジョア）の權勢から解放されようとするには、それと同時に今後永久に、一切の搾取、抑壓、階級差別、及び階級闘争から社會全體を解放するより外に道がないといふ事である。

自分の見る所では、この提案は、丁度ダーウキンの進化論が生物學に與へたと同様の効果を、史學の上に與ふべきもので、マルクスと自分と二人共に、一八四五年以前において、漸次それに近づきつつあつたのである。最初自分が獨り、如何なる程度にまでそれに向つて進んでゐたかは、自分の著書『英國勞働階級の狀態』（一八四四年）において最もよく見ることが出来る。然るに一八四八年の春、自分が再びブリュッセルでマルクスと會つた時、彼は既にそれを完成して、殆ど自分が今ここに記してゐるやうな明晰な文句で、それを自分に提示したのであつた。

自分は茲に、一八七二年のドイツ版に付した我々の合作の序文の中から、左の一節を引用する。最近廿五年の間に

において、社會の狀態は大いに變化してゐるけれども、この『宣言』の中に開陳されてある根本の趣旨は、大體において今も猶ほ正確である。細目には所々訂正すべき點もあるだらう。又この趣旨の實際の適用は、『宣言』の中にも云つてある通り、總ての處、總ての時に於いて、現存せる歴史は其の狀態に依つて決せらるべきものであるから、第二章の終りに提出されてゐる革命的諸政策には必ずしも重きを置くに足りない。あの一段は、多くの點において、今日ならばすつと違つた文句で書き現はされるであらう。一八四八年以後における近世産業の長足の進歩、及びそれに伴つて進歩し擴大した、勞働階級の團結から見ると、又第一にはフランスの二月革命に於ける實際の經驗、第二にはプロレタリアが始めて二ヶ月間政權を握つたパリ・コムミュン一揆のよき經驗から見ると、この『宣言』中の綱領は或る細目において既に廢物に歸してゐる。特にパリ・コムミュンに依つて立證された一事がある。即ち『勞働階級は單に出來合の國家機關を握つて、それを自分の目的に使用する譯には行かない』と云ふ事である。又この『宣言』の社會主義文書に對する批評は、一八四七年以前に限られてゐるのだから、現時に關して多くの缺點がある事は明白である。また共產主義と種々の反對黨との關係についての叙述（第四章）は、その趣旨は矢張り正確であるけれども、實際の適用上には既に廢物になつてゐる。今では政治界の形勢が全く變化し、歴史の進歩によつてそこに數へあげてある諸政黨の大部分は地上から一掃されてゐるからである。

然しこの『宣言』は今ではもう歴史的文書になつてゐるので、我々は最早やそれに變更を加へる權利がない。この英譯は、マルクスの『資本論』の大部分を譯したサミュエル・ムーア氏の手に成り、氏と自分と一緒に校訂を爲し、自分は更に歴史的用語を説明して二三の註を付け加へた。

一八八八年一月三十日、ロンドンにて

フリードリッヒ・エンゲルス

一八九二年ポーランド版への序文

『共産黨宣言』の新しい版が必要となつた事情と云ふものは色々に考へられる。

先づ第一に次の事を記さねばならない。宣言は、最近では、ある程度までヨーロッパにおいて、大工業發達の標準となつたと云ふ事。ある一國に於て大工業が發達するに比例して、その労働者の間には財産所有者の階級に對する、労働者の階級としての己れの位置を知らんとする欲求が強められてくる、労働者の間には社會主義運動が盛んになつてくる、そして宣言の需要が強められてくるのである。かくて、充分に正確に、各國々における労働運動の状態のみならず、また大工業の發達程度は、その一國語内に普及してゐる宣言の部數によつて決定され得るのである。宣言の新しいポーランド版も亦ポーランドの工業のたえまなき生長を物語つてゐる。最近の版が出た時以來十年間に、實際、どんな成長が起つたかは全く疑ふ餘地のない所である。ポーランド王國はロシア國の大工業地帯と化した。

ロシアの大工業がまばらに分散してゐる——一部はフィンランド灣の周圍に、一部は中央諸縣（モスクワ及びウラヂミール）に、一部は黒海及びアゾフ海の沿岸に——の對し、ポーランドの工業は比較的小區域に集中されてをり、集中の利益と不利益とを二つながらに持つてゐる。この利益はロシアの工場主達には、よく知られてゐる處であつて、彼等は全ポーランド人をロシア化さうと云ふその熱心な希望にもかゝはらず、ポーランドに對して保護關稅を敷くことを要求してゐる。不利益——それはポーランドの工場主とロシアの政府にとつてのものであるが——はポーランド労働者の間における急速な社會主義思想の普及と、宣言に對する需要の増加の絶えまなき増大である。

併し、ロシアの工業をすつかり追ひ越して了ふポーランドの工業の急速な發展は、今度は、ポーランド民族の不滅の生命力の新しい證明となるものであつて、また、その將來の國民的甦生の新しい保證たるべきものである。併し、獨立した、堅固なポーランドの復活はポーランド人にとつてのみ大切なのではない。我々凡てにとつても亦大切なのである。ヨーロッパ各國民の緊密な國際的協同は、これら各國民が各自の故郷で完全な主人となる時に於てのみ可能である。プロレタリアートの旗の下に、プロレタリアートの闘士をして、唯單にブルジョアジーのために火中の栗を取り出す様なまねをさしてしまつた一八四八年の革命は、同時にその遺言執行者——ナポレオン及びビスマルク——の手によつてイタリア、ドイツ及びハンガリアの獨立を完成した。然るに一七九一年以來、これら三つの國民を全部一緒にしたよりも、より以上に革命的事業のために盡したポーランドは、一八六三年に何十倍も強いロシアの強國に粉碎されて了つた時に全くこのこされて了つたのである。

シユリクタ（ポーランドの貴族——譯者）は獨立を擁護する事も獲得する事も出来ない。ブルジョアジーにとつては獨立と云ふ事は一日一日とより利益を感じぬものとなつて行く。獨立は唯だ若いポーランドのプロレタリアートによつてのみ獲得され得るところである。また、プロレタリアートの手中にあつてのみ、ポーランドの運命は希望に充ちたものである。この故に西歐の労働者はポーランドの解放にポーランドの労働者と同様に利害を感じてゐる。

ロンドン一八九二年二月十日

エフ・エンゲルス

一八九三年イタリア版への序文

『共産黨宣言』の發表は——若しかく云ふ事が許されるとすれば——三月の十八日、即ちミラノ及びベルリンの革

命と日を同じくした。これらの革命は、一つはヨーロッパ大陸の、もう一つは地中海の中心に位する二つの國民の反亂であり、現在まで内亂と軋轢によつて四分五裂し、それ故に他國の支配を受けてゐた二つの國民の反亂であつた。イタリアがオーストリア皇帝に從屬してゐたとすれば、ドイツはより保守的であつたとは云へ、それほど效力を有たなかつたロシアのツァール(王)の羈絆のもとにあつた。三月十八日の革命はイタリア及びドイツをこの屈辱から解放した。而して一八四八年から一八七一年に至る間にこれら二つの偉大なる國民が復興せしめられ、ある程度まで『自家に戻つた』とすれば、これ正に、カール・マルクスの云つた如くに、一八四八年の革命を抑壓した同じその人間達が、不本意ながらもその遺言執行人となつたからであつた。

到る處でこの革命は労働階級の仕事であつた。労働階級こそ防柵を築き、その生命を犠牲に供した人々であつた。パリーの労働者のみは政府を倒すと共に、ブルジョアの支配の總てをも倒さうとする固き、しつかりとした意圖を有した唯一のものであつた。併し、パリーの労働者がかかる自分自身の階級とブルジョアとの間に存する宿命的な對立と云ふものを既に自覺してゐたとは云へ、國內の 濟的進歩にせよ、フランス労働大衆の智的發展にせよ、尙、社會革命が可能である程度にまでは達してゐなかつた。そこで革命の果實は結局資本家のものとなつて了つた。然るに他の國々、イタリア、オーストリア、ドイツに於ては、労働者は最初から、唯、ブルジョアが權力を握るのを援助したに過ぎなかつた。然るにまた、各國ともに、ブルジョアの君臨は唯、國民的獨立の條件のもとにのみ可能であつた。かくて一八四八年の革命は、尙、當時、それらを、即ちイタリア、ドイツ、ハンガリアを領有してゐなかつた各國國民の統一と獨立と云ふ事を引き起さないではおかなかつた。ポーランドもいつかその後を追ふであらう。

従つて、一八四八年の革命は社會主義革命ではなかつたとしても、それは、社會主義革命のために道をきり開き、

社會主義革命のために素地をつくつたのである。一八四八年の革命があらゆる國々に於て大産業の發達のためにあたへた大きな刺戟の結果として、ブルジョア社會はこの四十五年間に、無數の、結合された、確固たるプロレタリアトを生み、かくして、宣言の文句を用ひるとすれば、自分自身の墓掘人をつくつたのであつた。各國國民が個々に獨立し統一される事なしには、プロレタリアートの國際的統一も、共通の目的のためにされるこれら國民の自然發生的及び意識的協働も不可能である。若し諸君にそれが出来るならば、イタリア、ハンガリア、ドイツ、ポーランド、ロシアの各労働者の、一八四八年以前に存在してゐた様な政治的條件のもとにおける共通の國際的行動と云ふものを考へて見るがよい。

かくの如く一八四八年の戰闘と云ふものは決して無駄なものではなかつた。全く同様に、この革命時代を去る四十五年間の時代と云ふものも無駄にすぎ去つてしまひはしなかつた。果實は實り始めた。そして私の希む凡ては、このイタリア譯の發表がイタリア・プロレタリアートの勝利のよき前兆となることである。原本の發表は國際革命の豫言となつたのである。

宣言は資本主義が過去に於てなした革命的功績を全く正當に評價してゐる。最初の資本主義國民はイタリア人なのである。封建的中世制度の夕やけ、近代的資本主義時代の朝やけは一人の偉人によつてしるされた。この偉人はイタリア人である。この偉人、ダンテは中世紀の最後の詩人であると共に新しい時代の最初の詩人であつた。現在、一三〇〇年時代の如くに、新しい歴史的时代は描き出され始めた。イタリアは、この新しいプロレタリアの時代の誕生の時をしるす新しいダンテを産むであらうか？

一八九三年二月一日、ロンドンに於て

エフ・エンゲルス

共 産 黨 宣 言

一つの怪物——共産主義の怪物がヨーロッパを徘徊してゐる。舊いヨーロッパの全ての権力が、法皇もツァールも、メッテルニヒもギゾーもフランスの急進黨も、ドイツの官憲も、神聖なるこの怪物退治のためには同盟してゐる。

在野の政黨で在朝の政敵から共産主義的だと非難されたことのないものがあるか、在野の政黨で、より急進的な反對者ならびに、より反動的な政敵に共産主義の烙印を捺した抗議を投げ返したことのないものがあるか。

二つのことがこの事實から分る。

共産主義はすでに全てのヨーロッパの権力者から、一つの勢力として認められてゐること。

共産主義者が見解、その目的、その傾向を全世界の前に公然と表示し、その黨綱領をもつて共産主義の怪物啗しに對立せしむべき時期が來てゐること。

この目的のために、諸國の共産主義者がロンドンに集つて、次の宣言を起草した。これは英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、フレミッシュ語、及びデンマーク語で公表される。(一)

一、ブルジョアとプロレタリア

一切の従来社会の歴史は階級闘争の歴史である。

* 正確にいへば、文書によつて傳つてゐる歴史のことである。一八四七年には、有史前の社会史、すべての書かれてある歴史より以前にあつた社会組織は、まだ殆んど知られてゐなかつた。その後、ハクストハウゼンはロシアで、土地共有制を發見し、マウレルはそれを、全ドイツ民族が歴史上出發してきた、社会の基礎であるとして指示した。そして次第に、土地共有制の村落體がインドからアイルランドに至るまで、社会の原始形態であつたといふことが知られてきた。終に、この原始共產社会の内部的組織が、モルガンの氏族の眞の性質とその種族に於て占める地位とのすぐれた發見によつて、その典型的形態で明示せられた。この原始共同體の崩壊と共に、社会の、個々の、遂には互ひに對立する諸階級への分裂が始まる (二)

自由民と奴隸 貴族と平民、領主と農奴 親方（ギルドの組合員たる職人）と職人（親方に雇はれてゐる職人）、要約すれば壓迫者と被壓迫者とが、絶えず互ひに對立して 或は隱然の、或は公然の闘争を繼續してゐた。そして其の闘争はいつでも、社会全體の革命的變革に終るか、或は交戦階級の共通の没落に終つた

過去の諸時代に於て、殆んど到る處に、種々なる階級への、社会の、完全な構成、社会的地位の種々様々な區分を見る。古代ローマには、貴族、騎士、平民、奴隸があり、中世には、封建領主、家來、親方、職人、農奴があり、そして更に猶ほその諸階級の殆んど總てに、また夫々の區分がある。

封建社会の滅亡から發生した、現代ブルジョア社会は階級對立を揚棄したのではない。それは、たゞ

新しい階級、新しい壓迫條件、新しい闘争形態を、古いものと替へただけである。

けれども、我々の時代、ブルジョア時代の時代は、階級對立を單純化したといふことを特徴としてゐる。全社会は次第次第に、敵對する二大陣營、直接相互に對立する二大階級に分裂しつゝある。即ちブルジョアとプロレタリアである。

中世の農奴の中から、初期の都市の城外市民（譯註）が發生し、この城外市民からブルジョア時代の最初の要素が發展した。

（譯註）中世の都市は、言ふまでもなく城廓を以て圍らされてあつた。この内部に住み得るものは市民權を有するものでなければならなかつた。そこで、特に城廓の外部に居住を許された、準市民とも稱すべきものが發生した。それがこゝにいふ城外市民（Phalinger）である。

アメリカの發見 アフリカの廻航は、新興のブルジョアジーのために新しい天地を作り出した。東インド及び支那の市場、アメリカの植民、植民地との貿易、交換手段及び商品一般の増加は、商業に、航海に、工業に、未曾有の飛躍を與へ、それによつて、崩壊しつゝあつた封建社会内部の革命的要素に急激な發達を與へた。〔三〕

従來の封建的、ツンプト的工業經營法は、もはや新しい市場と共に増大する、需要に應ずることが出來なくなつた。工場的手工業がそれに代つた。ツンプトの頭（組合長）は工業的中産階級に押しつけられた。種々の組合間における分業は、單一工場内の分業の前に消滅した。〔四〕

然るに、市場は益々擴大し、需要は益々増加した。工場的手工業も、もはやそれに應ずることが出來

なくなつた。そこで蒸氣と大機械が工業的生産を革命した。工場的手工業の代りに近代的大工業が起り、工業的中産階級の代りに産業的大富豪・全産業軍の指揮者・近代的ブルジョアが起つた。

大産業は、アメリカの發見によつて準備された世界市場を建設した。世界市場は、商業に、航海に、陸上交通に、絶大な發達を興へた。この發達はまた、産業の擴大に復作用し、工業、商業、航海、鐵道が擴大すると同じ度合において、ブルジョア階級が發達し、その資本を増加し、中世から殘存してゐる總ての階級を背後に押しこめてしまつた。(五)

斯くて我々を見る、近代的ブルジョア階級はそれ自身、長い發展行程の、生産及び交易方法における幾多の變革の産物であることを。

ブルジョア階級の發達の各段階には、それに相應する政治的進歩が伴つてゐた。封建領主の治下における被壓迫階級、コムミュンなる武裝的自治團體、或る處では獨立都市共和制、また他の處では王政治下の第三階級——租稅負擔階級、次に工場的手工業時代にあつては、半封建的もしくは專制的王國における貴族との均衡物、一般大王國の主要なる基礎、最後には、大産業と世界市場との建設以來、近代代議制國家において獨占的政權を獲得した、現代國家權力なるものは、全ブルジョア階級の共同的業務を監理する委員會に過ぎない。

*イタリー及びフランスの都市民は、封建領主から最初の自治權を買取り若くはねち取つた後に、その都市共同體をコムミュンと呼んでゐた。(六)

ブルジョア階級は歴史上に於て、一の極度に革命的な役割を果した。

ブルジョア階級は、政權を握るや否や、一切の封建的、家長的、牧歌的諸關係を破壊してしまつた。人をその生れながらの目上と結びつけてゐた、色彩華かな、封建的羈絆を無残にも引きちぎつて、人と人との間には、たゞ赤裸々な利害、冷酷な『現金勘定』より以外に何らの羈絆をも殘さなかつた。宗教的の熱情や、武士的の感激や、町人的の人情などといふ神聖な渴仰心を、氷のやうに冷たい利己的な打算の、水の中に溺らせてしまつた。人の値打を交換價值の中に消え去らしめ、無數の、折角得た、特許的自由の代りに、たつた一つの、無茶な商業の自由を設立した。これを一言にすれば、ブルジョア階級は、宗教的及び政治的幻想をもつて覆はれた搾取の代りに、公然たる、恥知らずの・直接的・露骨な搾取を設立したのである。(七)

ブルジョア階級は、從來、名譽な、敬虔な畏敬をもつてみられた一切の職業から、その後光を剥ぎ去つてしまつた。彼等は、醫師、法律家、僧侶、詩人、學者を、その賃銀労働者に轉化してしまつた。

ブルジョア階級は、家族關係から、その感傷的なウェールを引き裂いて、純然たる金錢關係にしてしまつた。

ブルジョア階級は、反動主義者が、中世について痛く讚嘆してゐる蠻勇的行動が、懶惰を極めた安逸生活と如何に似合の相棒であるかを明示した。ブルジョア階級は、始めて、人間の活動がどれ程のことを爲し遂げ得るかを示した。彼等は、エジプトのピラミッド、ローマの水道、ゴシックの堂塔とは全く異

つた大工事を完成し、民族移動、十字軍とは全く異つた大遠征を遂行した。

ブルジョアジーは、生産機械・従つて生産關係・従つて全社會關係を絶えず革命することなしには、生存し得ない。これに反し、古い生産方法を變化させずに保存することが、全ての過去の工業階級の第一生存條件であつた。生産の絶えざる革命、全社會状態の不斷の擾亂、永久の不安と動搖は、ブルジョア時代が他時代と異なる特徴である。一切の・確固とした・錯ついた諸關係は、それに伴ふ古く奥床しい思想と共に消え去り、一切の・新しく作られたものは、それが固定せぬ前に陳腐となる。堅牢なものは悉く氣化し、神聖なものは悉く褻瀆され、そして人間は、遂に自分の生活状態と自分の對他關係とを、冷靜な目で見つめざるを得なくなる。〔八〕

自己の製品の販路を絶えず擴大しようとする欲求は、ブルジョアジーを驅つて地球の全面に追ひやる。彼等は、到る處で巢を作り、到る處に住みつき、到る處に連絡を作らねばならぬ。〔九〕

ブルジョアジーは、世界市場の開発によつて、あらゆる國々の生産と消費とを世界主義的なものとした。反動主義者が痛く嘆いてゐるやうに、産業からその國民的地盤を引き抜いてしまつた。古來の國民的産業は破壊された。そして猶ほも日々に破壊されつゝある。それら國民的産業は、新産業——それを採用することは總ての文明諸國民にとつて生死の問題である——によつて壓倒される、その新産業とは、もはや國內原料ではなく、遠隔の地にある原料に加工し、又その製品も國內のみではなく、同時に世界中に到る處で消費されるものである。昔の・國産品によつて充足された・需要の代りに、新しい・遠隔の

國土の産物によらねば充足されない。需要が生じてゐる。昔の・地方的及び國民的の・自足と鎖國との代りに、諸國民相互間の・全面的交易と全面的依存とが生じてゐる。そして物質的生產に於けるが如く又精神的生產に於ても然りである。個々の國民の精神的所産は共有財産となる。國民的偏見と狹量とは次第次第に不可能となり、多數の・國民的地方的文學から、一つの世界文學が形成される。〔一〇〕

ブルジョアジーは、生産機關の急速な改善により、また甚しく容易になつた交通により、總ての國民を、最も野蠻な國民をすらも、文明の中に引き入れる。彼等の商品の廉價なることは重砲の如きものである。彼等はそれを以て、あらゆる支那の城壁をも撃破し、如何に頑固な、野蠻人の、排外心をも降服させてしまふ。總ての國民は、若し滅亡を欲しないならば、ブルジョアジーの生産方法を習得せねばならない。所謂文明を自國に取入れねばならない——即ちブルジョアにならねばならない。之を一言にすれば、ブルジョアジーは自分自身の姿に模して世界を創るものである。〔一一〕

ブルジョアジーは、地方を都會の支配下に從屬せしめた。彼等は巨大な都會を創つた。都會の人口を地方の人口に較べて甚しく増加させた、そして人口の多大な部分を、農村生活の愚昧から拉し去つた。地方を都會に從屬せしめた如くに、未開國・半未開國を文明國に、農業國民をブルジョア國民に、東洋を西洋に從屬せしめた。〔一二〕

ブルジョアジーは、生産手段の・財産の・および住民の・分散を、次第次第に揚棄する。彼等は、住民を聚合し、生産手段を集中し、財産を少數者の手に集積した。その必然的結果は政治上の中央集權で

あつた。別々の利害、法律、政府、税制をもつた。獨立の。殆んど單に聯合してゐたにとゞまる。諸地方が、一つの國民、一つの政府、一つの法律、一つの全國的階級利害、一つの税關區域に押し固められた。(一三)

ブルジョアジーは、僅か百年ほどの。その階級的支配に於て、過去の。一切の諸時代を合したよりも、より多量なより巨大な生産力を創り出した。自然力の征服、大機械、工業及び農業への化學の應用、汽船、鐵道、電信、全世界各地の開墾、呪文を以て地下から呼び出したやうな、夥しい人口——これ程の生産力が社會的勞働の胎内に眠つてゐるやうなどは、如何なる前世紀の人々が豫想したであらうか。(一四)

我々は以上述べた所により次のことを知つた。ブルジョアジーが成立した基礎なる。生産手段及び交易手段は、封建社會の中に於て發生した。この生産手段及び交易手段の一定の發展段階に於て、封建社會の生産し交換した諸關係、即ち農業及び工業の封建的組織、略言すれば、封建的財產關係が、既に發達した生産力に、もはや適合しなくなつた。それらは生産を促進せず、かへつて阻害した。それらは邪魔物に變じた。それらは爆破されねばならなかつた、そして爆破されたのである。

その跡には自由競争が、それに適合した社會的・政治的構造を伴つて、即ちブルジョア階級の、經濟的、政治的支配を伴つて現れた。

いま我々の眼前にも、これと同様な動きが進行しつゝある。この偉大な生産手段及び交易手段を魔術的に現出せしめたところのブルジョア的生產交易關係、ブルジョア的財產關係、即ち、現代ブルジョア社會は、自分が呪文を唱へて呼び出した。地下の魔物を自分で支配することが出来なくなつた魔術師の如きものである。數十年この方、商業及び工業の歴史なるものは、近代的生産力が、ブルジョアとその支配の存立要件たる。近代的生產關係及び財產關係に對してなしたる叛逆の歴史に過ぎない。その例證としては、かの商業恐慌を挙げれば足りる、それは周期的に回歸して、一回毎に益々脅威的に、全ブルジョア社會の存立を危からしめるものである。商業恐慌に際しては、出来上つた生産物の多大な部分が定期的に破壊されるばかりでなく、既に作られた生産力も亦破壊される。恐慌に於ては一種の社會的流行病——それは過去のあらゆる時代ならば不條理のことと見えたであらう——過剰生産の流行病が發生するのである——社會は突如として、一時の野蠻状態に還つたやうに見える。饑饉と大破壊とが社會から一切の生活手段を杜絶したやうに見える。工業も商業も破壊されたやうに見える。それは何故か。外でもない、社會が、あまり多くの文明を、あまり多くの生活手段を、あまり多くの工業を、あまり多くの商業を有するからである。社會の用を務むべき生産力は、もはやブルジョア的財產關係を促進させる役には立たない。反對に、それはこの財產關係に對してあまりに強力になり、財產關係によつて阻害されることとなつた。そして生産力がこの阻害を突破するや否や、全ブルジョア社會は無秩序に陥り、ブルジョア財產の存立は危くされる。ブルジョア的諸關係は、自分の作り出した富を包容するのに、あまりに狭過ぎるものとなつた。——何によつてブルジョアジーは恐慌を切り抜けるか。一面には、多量の生産

力の止むに止まれぬ強制的な破壊によつて、他面には、新市場の獲得と舊市場の、より根本的な榨取とによつて。そうしてどうなるのか。結局、より全面的な・より強暴な・恐慌を準備し、恐慌を防遏する手段を減少せしめることになる。(二五)

ブルジョアジーが封建制度を倒したその武器が、今はブルジョアジー自身に向けられてゐる。

然しブルジョアジーは、自分に死を齎すべき武器を鍛へ上げたばかりでなく、その武器をとるべき人——即ち近代の労働者、プロレタリアをも作り出した。

ブルジョアジーが——即ち資本が——發達すると同じ度合に於て、プロレタリアート——近世労働者の階級——も發達する、この階級は、仕事のある間だけしか生活が出来ない、またその仕事が増加する間だけしか仕事にありついでゐることが出来ない。自分の身を切賣りせねばならない。この労働者なるものは、他のあらゆる賣物と同様に、一つの商品である。それ故他の商品同様に、一切の、競争の變化や市場の動搖に曝されてゐるものである。(二六)

プロレタリアの労働は、機械の擴大と分業とによつて、一切の個立的性質を失ひ、従つて労働者のために一切の興味を失つた。(二七)

プロレタリアートは、單なる・機械の附屬物となり、機械から、極く單純な・極く單調なる。極く容易に習得される・手業を要求されるに過ぎない。従つて、労働者にかかる費用は、殆んど僅かに、その一身を維持し、その種を蕃殖させるに必要なだけの、生活手段に制限される。然るに、商品の價格は、從

つて、労働の價格も亦、その生産費に等しいものである。そこで労働の没趣味が増加すればするほど、それと同じ度合に於て賃銀は減少する。更にまた、機械と分業とが増大すればするほど、或は労働時間の延長により、或は一定時間内に要求される労働の増加により、或は機械の運轉速度の増加等々によりそれと同じ度合に於て、労働量は増加する。(二八)

近代的産業は、家長的な親方の小さな職場を、工業資本家の大工場に變じた。労働者の群、工場に詰めこまれて、軍隊的に編成されてゐる。彼等は産業軍の兵卒として、士官、下士等から成る。完全な位階制度の統御の下に置かれてゐる。彼等はブルジョア階級、ブルジョア國家の奴隸であるばかりでなく、機械によつて、監督者によつて、殊に製造家たる個々のブルジョアによつて、奴隸として使役されてゐる。この専制政治はその目的が營利であるといふことが、益々公然と明言されればされる程。いよいよ蔑しむべく、厭ふべく、憎むべきものとなつてくる。(二九)

手の労働が熟練と力とを要することが少くなるに從つて、即ち近代的産業が發達するに從つて、男子の労働は女子と幼年の労働に取つて代られる。性の差異と年齢の差異とは、労働者階級にとつてはもはや何等の社會的價值を持つてゐない。彼等は皆等しく労働器具であつて、たとそ年齢と性によつて使用上に費用の多少を生ずるだけである。(三〇)

労働者が、その労働賃銀を現金で受取つて、製造家からの榨取が先づ一段落すると、今度はブルジョアジーの他の部分、即ち家主、小賣商人、質屋等が彼に襲ひかゝる。(三一)

從來の中産階級の下層、小工業家、小商人及び小地主、職人及び農夫、總てこれらの諸階級はプロレタリアートに零落する。その一部の原因は、彼等の小資本が大産業の經營に不十分であり、大資本家との競争に負けるからであり、また他の原因は、彼等の技術が、新しい生産方法によつて無價値となるからである。かくてプロレタリアートは住民のあらゆる階級から徵募される。〔三三〕

プロレタリアートは種々な發展段階を通過する。そのブルジョアジーに對する闘争はその存在と共に始まる。

最初は個々の労働者が、次には一工場の労働者が、次には一地方に於ける一労働部門の労働者が、直接に彼等を搾取する個々のブルジョアに對して闘ふ。彼等はブルジョアの生産關係に對してのみ、その攻撃を向けるのでなく、生産機關そのものに對して攻撃を向ける、彼等は外國の競争品を破壊し、機械を叩きこわし、工場を焼き拂ふ、彼等は既に亡びた、中世労働者の、地位を取り戻さうとするのである。〔三四〕

この段階にあつては、労働者は、全國に散在した・競争によつて分裂した・集團である。當時に於ける労働者の大衆的團結は、未だ彼等自身の結合の結果ではなく、ブルジョアジーの結合の結果である。ブルジョアジーは自己の政治的目的を達成するために全プロレタリアートを動員せねばならない。そして一時はまだそれを爲しうるのである。この段階にあつては、それ故、プロレタリアは自分の敵と戦ふのではなく、敵の敵、即ち專制王制の殘存物、地主、非工業的ブルジョア、小ブルジョアなどと戦ふのである。

かくて一切の歴史的運動はブルジョアジーの手中に集中せられ、それによつて獲得される一切の勝利はブルジョアジーの勝利である。〔三五〕

然るに産業の發達に伴つて、プロレタリアートは、單に増加するばかりではない。それは一層大なる集團に押し堅められ、その力が増大し、その力を益々感知するやうになる。機械が次第次第に労働の差違を抹消し、賃銀を殆んど到る處に於て、平等の・低い水準に引き下げるので、プロレタリアートの内部における利害、生活状態は次第次第に平均して来る。ブルジョア相互間の激化する競争、及びそれから生ずる商業恐慌が、労働者の賃銀をいよいよ動搖させる。益々急激に發展する・絶え間なき・機械の改善が、彼等の全生活状態をいよいよ不安にする。個々の労働者と個々のブルジョアとの衝突は、次第次第に二階級の衝突たる性質を帯びて来る。そこで労働者はブルジョアに對抗する聯合を作り始める。彼等は労働賃銀の主張のために一致する。彼等は臨機の反抗運動のために、豫てその資力を養ふべく、永續的團體をも設立する。處々で、闘争が一揆暴動となつて激發する。〔三五〕

労働者は折々勝利を得るが、それはたゞ一時的に過ぎない。彼等の闘争の眞の効果は、その直接的成果ではなく、益々擴大して行く労働者の團結である。労働者の團結は、大産業により作り出される交通機關の發達によつて促進される、それは諸地方の労働者を互ひに連絡せしめる。そしてたゞこの連絡さへあれば、何處でも性質の等しい・多數の・地方的闘争は、一つの全國的闘争に、一つの階級闘争に集中することが出來たのである、そしてあらゆる階級闘争は政治闘争である。かくの如き團結は、中世の

市民があつた狭い道路によつてなしたならば數世紀を要したであらうが、近世のプロレタリアは鐵道によつて數年の中にそれを成就したのである。(二三六)

かくの如きプロレタリアの階級的組織、従つてその政黨的組織は、労働者自身の間における競争によつて、絶えず幾回となく破壊される。けれども、それは必ずまた、一層有力に、一層堅固に、一層強力になつて再興する。それはブルジョア諸黨の争ひを利用して、労働者の個々の利益の・立法的承認を強制的に獲得する。イギリスにおける十時間労働法の如きがそれである。

舊社會の諸衝突一般は、プロレタリアートの發展行程を、種々な點から促進する。ブルジョアは不斷の闘争の中に立つてゐる。最初は貴族に對して闘ひ、後には大工業の發達と利害が相反するやうになつた・ブルジョアの一部に對して闘ひ、又常にあらゆる外國のブルジョアに對して闘ふ。これら總ての闘争に於て、ブルジョアはプロレタリアートに訴へ、その助力を借りることを必要とし、従つてプロレタリアートを政治運動の中へ引き入れねばならぬことになる。故にブルジョアはプロレタリアートに對して、自己教育の要素、即ちプロレタリアートがブルジョアと戦ふ武器を、自ら供給することになる。

更に又、前述した如く、産業の進歩、支配階級の・多大な構成部分がプロレタリアートの隊列の中へ投げ込まれ、または少くともその生活條件を脅威せられる。これらの人々も亦プロレタリアートを教育する要素となる。

最後に、階級闘争が愈々決戦に近づく時期には、支配階級の内部における・舊社會の内部における・

分解過程が、頗る強烈鮮明な性質を帯び、支配階級の一小部分は自らその所屬を脱して、革命的階級へ・將來をその手の中に握つてゐる階級へ・味方することになる。故に、昔貴族の一部がブルジョアに移行したやうに、今はブルジョアの一部・殊にこの歴史的運動全體を理論的に理解しうるに至つたブルジョア思想家の一部分が、プロレタリアートに移行する。(二三七)

今日ブルジョアと對立してゐる・總ての階級の中で、ただプロレタリアートのみが眞實の革命的階級である。他の諸階級は大産業のために衰頹し没落するが、プロレタリアートは大産業に最も特有な産物である。

中産階級たる小工業家、小商人、職人、農夫等は皆、自己の・中産階級としての・存在を維持せんがために、ブルジョアと闘ふのである。故に彼等は革命的ではなく保守的である。否寧ろ彼等は反動的である、彼等は歴史の車輪を逆に廻さうとするのである。彼等が革命的なる場合ありとすれば、それは彼等が、目前に迫つてゐる・自己のプロレタリアートへの移行を見通してゐる場合である、即ち現在の利益を擁護せず將來の利益を擁護し、プロレタリアートの地位を得るために自身の地位を放棄する場合である。

ルムペンプロレタリアート——舊社會の最下層たる無氣力な腐敗墮落者——はプロレタリア革命により、場合によつては革命運動の中へ引き込まれることもあらう。だが彼等の生活状態全體から見れば、彼等は寧ろ喜んで反動的陰謀のために買収されるであらう。(二三八)

舊社會の生活條件は、プロレタリアートの生活條件の中に於ては、既に破壊されてしまつてゐる。プロレタリアは無財産である。彼等の妻子に對する關係は、もはやブルジョアの家族關係とは何等の共通點をも持つてゐない。近世的産業労働、即ち資本の下への近世的奴隷化——それはイギリスに於ても、フランスに於ても、又アメリカに於てもドイツに於ても同一である——はプロレタリアから一切の國民的性質を剥ぎ去つてしまつた。法律、道德、宗教はプロレタリアにとつては悉くブルジョアの偏見であり、その背後には悉くブルジョアの利益が隠されてゐるのである。(二九)

從來政權を握つた總ての階級は、全社會を自己の收益條件に屈從させることによつて、自己の・既得の生活地位を確保しやうとした。プロレタリアは、從來の・自己の所得方法、従つて從來全般の所得方法を廢除することによつてのみ、社會的生産力を獲得することが出来る。プロレタリアは自分の物を何一つ保護するを要しない、彼等はたゞ、一切の・從來の私有的保證や私有的保護を破壊すれば足りるのである。

從來の・總ての運動は、少數者の運動若くは少數者の利益の爲の運動であつた。プロレタリア運動は、莫大な多數者の利益のための・莫大な多數者の自主的運動である。現在社會の最下層たるプロレタリアートは、外面の公的社會を構成してゐる・層の上部建築全體を爆破することなくしては、起き上ることも、立ち上ることも出来ない。

プロレタリアートのブルジョアに對する鬭争は、實質上はさうではないけれども、形式上は最初一

國的である。各國のプロレタリアートは、もちろん先づ自國のブルジョアを處分せねばならない。

我々はいま、プロレタリア發展の・最も一般的な諸段階を叙述して、分明不分明の差こそあれ現存社會の内部にひそんでゐるところの・内亂が、公然の革命となつて爆發し、ブルジョアの暴力的打倒によつてプロレタリアートが政權を樹立する點にまで到達した。(三〇)

一切の・從來社會は、前述の如く、壓迫階級と被壓迫階級との對立の上に立つてゐた。けれども一階級を壓迫しうるためには、その階級が少くとも奴隷的存在を續けうるだけの條件が、保證されてゐなければならぬ。農奴は農奴制の下に於て、コムミュンの成員に立身することが出来たし、小市民は封建的專制政治の抑壓の下に於て、ブルジョアに出世することが出来た。現代労働者は之に反して、産業の進歩と共に向上するのではなく、却つて自己の階級の生活條件より以下に段々下降してゆくのである。労働者は貧民となり、そして貧窮は人口や富より一層急速に發展する。そこで次のことが明瞭となつてくる、ブルジョアは、いつまでも社會の支配階級として存続し、その階級の生活條件を社會に規準として強ひることはできない。彼等が支配できないといふのは、彼等が彼等の奴隷制度の内部に於ては、奴隷に生存そのものをすら保證し得ないからである。即ち奴隷に養はれないで却つて奴隷を養はねばならぬ程の境遇に、奴隷を沈ませるの止むなきに至つたからである。社會はもはやブルジョアの下に生活することは出来ない、換言すればブルジョアの生活はもはや社會と兩立しえないのである。

ブルジョア階級の存立と支配との・重要な條件は、私人の手に富を蓄積すること、即ち資本を形成

し増大することである。そして資本の條件は賃労働である。賃労働は必ず労働者相互間の競争の上に立つてゐる。然るに産業の進歩——その無意思無抵抗な。實行者はブルジョアジーである——は競争による労働者の孤立に代へて、協力によるその革命的結合を作る。だから大産業の發達と共に、ブルジョアジーが生産し生産物を收得する。基礎自體が、ブルジョアジーの足下から引き抜かれることになる。ブルジョアジーは何はさておき自己の墓堀人を産出することになるのである。彼等の没落とプロレタリアートの勝利とは同様に不可避である。(三二)

一、プロレタリアと共産主義者

共産主義者はプロレタリア一般に對して、どんな關係にあるか。

共産主義者は他の労働者諸黨と對立して特殊の一黨派を作るものではない。

彼等は全プロレタリアートの利害から分離した、何等の利害を持つ者ではない。彼等は特殊の原則を定めて、プロレタリアの運動を其の型に入れようとする者ではない。共産主義者がプロレタリアの他の諸黨派と異なる所は只次の二點である。即ち、一面に於ては、プロレタリアが種々なる一國的闘争をなす場合に於て、其の國籍から獨立した、全プロレタリア階級の共通利益を強調し標榜する。そして他の一面に於ては、プロレタリアとブルジョアジーとの闘争が經過する種々なる發展段階に於て、常に運動全體の利益を代表する。

かくて共産主義者は實踐上に於ては、全世界の労働者諸黨中に於て、最も大膽な、最も前進的な部分であり、理論上に於ては、プロレタリア運動の諸條件、進行及び一般的结果に關し、プロレタリアの他の多數に先だつて、先見的洞察を持つてゐる者である。共産主義者の直接の目的は他の總てのプロレタリア諸黨派のそれと同一である。即ちプロレタリアの階級的結成、ブルジョアの支配權の顛覆、プロレタリアの政權獲得。(三三)

共産主義者の理論的命題は、決して某々社會改良家達の發明し若くは發見した理想や、原則の上に存するものではない。

共産主義者の理論的命題は現存せる階級闘争の事實關係、即ち我々の眼前に起りつゝある歴史的運動の、一般的表現である。從來の財産關係を廢絶する事は、何等共産主義を根本的に特徴づけるものではない。總ゆる過去の財産關係は絶えず歴史的の轉換を受け、又絶えず歴史的の變化を蒙つてゐる。

例へば、フランス革命は、ブルジョアの財産の利益の爲に、封建的財産を廢絶した。

故に共産主義の特徴とする所は財産一般の廢絶ではなく、只ブルジョア財産の廢絶である。

然し近世ブルジョアの私有財産は、階級對立の上に立ち、一階級による他階級の搾取の上に立つ所の、生産及び領有方法の、最終にして且つ最も完全なる表現である。

この意味に於て、共産主義者はその理論を一言に要約する事が出来る。曰く私有財産の揚棄。

世人は我々共産主義者を非難して云ふ。共産主義者は、人が自己の労働に依つて獲得した其の個人的財産を廢絶しようとする。即ち總ゆる個人的の自由、活動、及び獨立の根底たる財産を廢絶しようとするのだ、と。

自己の労働に依つて、自己の獲得した、自己の儲けだした財産と云ふのか。それはブルジョア財産の以前に在つた・職人の財産、農夫の財産の事を云ふのか。それならば我々が廢絶するには及ばない。産業の發達が既にそれを廢絶し、猶ほ日々廢絶しつつあるのだ。〔三三〕

それとも近世のブルジョアの私有財産の事を云ふのか。

然し、賃銀労働、即ちプロレタリアの労働は労働者の爲めに作るか。決して作らない。それはただ資本を作る。資本は賃銀労働を搾取する財産である。そしてそれが更に賃銀労働を作り更にそれを搾取すると云ふ條件の下に於てのみ増大し得る財産である。現今の形態に於ける財産は、資本と賃銀労働との對立の中に生産してゐる。我々をして此の對立の兩面を檢せしめよ。

資本家たる事は、生産界に於て純個人的の地位を持つばかりでなく、また一つの社會的地位を持つ事である。資本は協力的産物である。多數部員の共同作業に依つてのみ、否究極すれば、社會全員の共同作業に依つてのみ働き得るものである。

故に資本は決して個人的の力でなく、一つの社會力である。

故に資本が共有財産、即ち社會全員の財産に變更される場合、それは個人的財産が社會的財産に變更

されるのではない。只だ其の財産の社會的性質が變更されるのである。即ち財産の階級的性質が失はれるのである。〔三四〕

次に賃銀労働を檢せしめよ。

賃銀労働の平均価格は労働賃銀の最低である。即ち労働者が労働者として生命を保つに必要なだけの生活資料の額である。故に賃銀労働者が自分の活動に依つて獲得する所は、ただその赤貧の生活を再製するに足るだけのものである。我々は決して、この直接な・生命の再製の爲にする・労働生産物の個人的收得を廢絶しようとするのではない。即ち他の労働を支配すべき何等の餘剰を生じない此の收得を廢絶しようとするのではない。我々はただ此の收得の悲惨な性質、即ち労働者 資本を増大する爲にのみ生活し、支配階級の利益がそれを要求する間だけ生活し得るといふ、其の悲惨な性質を無くしようとするのである。〔三五〕

ブルジョア社會に在つては生きた労働は只だ蓄積された労働を増大させる手段にすぎない。共産主義社會に在つては、蓄積された労働は、ただ労働者の生活を擴大し、豊富にし、向上させる手段であるにすぎない。

故にブルジョア社會に在つては、過去が現在を支配し、共産主義の社會に在つては、現在が過去を支配する。ブルジョアの社會に在つては、資本は獨立的であり、個性的であるのに、生きた人間は從屬的であり、非個性的である。

然るにブルジョアジーは、かういふ諸關係の廢絶を目して、個性の廢絶！ 自由の廢絶！ と云ふのである。然し無理もない。之は如何にも、ブルジョアの個性、ブルジョアの獨立、ブルジョアの自由の廢絶なのである。(三六)

現在のブルジョアの生産關係の下に在つては、自由とはただ自由貿易を意味し、自由賣買を意味してゐる。

然し賣買といふ事が無くなれば、自由賣買も無くなつてしまふ。一體ブルジョアの自由賣買といふ事、及び一切の自由呼ばわりは、中世時代の制限された賣買、束縛された商人に對してこそ意義もあるが、共産主義が主張する賣買の廢絶、ブルジョアの生産關係の廢絶、及びブルジョアジーそのものの廢絶に對しては、何等の意義もないのである。

諸君は、我々が私有財産を廢絶しようと思ふのに驚いてゐる。然し諸君のこの現在の社會において、人口の十分の九は既に私有財産を失つてゐるではないか。そしてそれが存在してゐるのは、實にそれがその十分の九の爲に存在してゐないからではないか。故に諸君が我々を非難する、その財産の廢絶と云ふのは、社會全員の大々多數の無財産を必然的條件とする、その財産の廢絶なのである。

要するに諸君は、我々が諸君の財産を廢絶しようとするのを非難するのである。如何にも我々はそれを欲するのである。

諸君は、労働が最早や資本に變ぜず、貨幣に變ぜず、地代に變ぜず、つまり個人的に獨占しうる社會

力に變じ得ない事になる其の瞬間から、即ち個人的財産が最早やブルジョアの財産に變形し得ない事になる其の瞬間から、諸君は個性が廢絶されると云ふのである。

故に諸君は白狀してゐるのである。諸君の謂ゆる個性とは、ブルジョア以外の、ブルジョア財産所有者以外の何物をも意味してゐないのである。そして、それらの個性は固より廢絶すべきものである。(三七) 共産主義は誰人に對しても、社會的生産物を收得する力を奪ふものではない。只だその收得に依つて他人の労働を屈服させるその力を奪ふのである。

或者は反對して云ふ。私有財産が廢絶されれば、それと共に一切の活動が停止し、従つて一般的怠慢に陥るであらう、と。

若しそうならば、ブルジョア社會は疾くの昔、怠惰の爲に滅亡してゐる筈である。ブルジョア社會では働く者は儲からないし、儲ける者は働かないではないか。だから此の反對論は結局、資本が無くなれば賃銀労働が無くなるといふ、分りきつた同義反復に陥入つてゐるにすぎない。(三八)

物質的生産物に對する共産主義的收得方法及び生産方法に向けられた總ての攻撃は、更に精神的生産物の收得及び生産にまで延長されてゐる。階級的財産の廢絶が、ブルジョアに取つて、生産其物の廢絶であると同じく、階級文化の廢絶は、彼等に取つて、文化一般の廢絶と同意義である。「彼等が爾くその消滅を悲しんでゐる、その文化なるものは、大多數の人に取つては、ただ人間を機械にする爲の教育である。」(三九)

然し諸君が、自由、文化、權利等に關する諸君のブルジョア的見解を標準として、ブルジョア財産の廢絶を律しやうとする間は、論争は無益である。諸君の思想そのものはブルジョア的生産關係及び財産關係の産物である。それと同じく諸君の權利も亦、諸君の階級的意志を法律としたものに過ぎない。そしてその意志の内容は、諸君の階級の物質的生活條件から生じたものに過ぎない。

諸君の利己的謬想、——即ち諸君の生産關係及び財産關係は、生産の進歩に従つて生滅する歴史的關係であるのに、それを永劫の自然法及び道徳法に變更させる——その諸君の利己的謬想は總ての滅亡した過去の支配階級が皆な諸君と同じく持つてゐたものである。諸君が古代の財産に對して理解した所、及び封建的財産に對して理解した所のものを、諸君はいま、ブルジョア的財産に對しては理解しえないのである。〔四〇〕

家族制の廢絶！ 共產主義者のこの非倫的な提案に對しては、最急進派の人々すらも憤激する。

然し、現在の家族制度、ブルジョアの家族制度は如何なる基礎の上に立つてゐるか。資本の上、私收入の上に立つてゐる。完全に發達した此の家族制度は、只ブルジョア間のみに存在してゐる。そしてプロレタリアの強制的無家庭と、公娼制度とが、その補足物になつてゐる。

ブルジョアの家族制は、固よりこの補足物の消失と共に消失する。そして兩者とも、資本の消失と共に消失する。

諸君はまた、子供に對する親の搾取を廢絶するものとして我々を攻撃するが、我々は甘んじてその罪人たる事を自認する。

然し（と諸君は云ふだらう）家庭教育を廢して社會教育をもつてそれに代へるのは、最も神聖な家族關係を廢絶するものであると。

處が、諸君の教育もやはり社會に依つて決定されるのではないか。諸君が教育を施されるその社會的諸關係に依つて、決定されるのではないか。學校などを通じて、直接間接に行はれる社會の干涉に依つて決定されるのではないか。共產主義者は教育に對する社會の影響を發明したのではない。彼等はただその影響の性質を變じて、教育をして支配階級の勢力から脱出させようとするのである。

家族制度や教育の事について、親子の間の神聖な關係などいふ事について、ブルジョアがこんな言草を云つてゐる時、大産業の結果として、プロレタリアの家族關係が段々に破壊され、その子供達が單なる商品と労働器械とに變形されて行くのを見ると、我々は實に嘔吐を催すの感がある。

だが君たち共產主義者は婦人の共有を行はうとしてゐるのではないか、と全ブルジョアが我々に向つて異句同音に絶叫する。

ブルジョアは自分の妻を單なる生産器具と考へてゐる。そして生産器具が皆な共同に利用されると聞いたのだから、その共同利用の運命がやはり婦人の上にも來るものとしか考へられないのは、無理もない話である。

共產主義者の目的とする所は、そつといふ單なる生産器具としての婦人の地位を廢絶しようとするにあ

るのだなどとは、彼等が思ひもそめない事である。

然し何れにしろ、我がブルジョア諸君が、その謂ゆる共産主義者の婦人共有制に對して、道德的義憤を發した事ほど笑ふべきものはない。共産主義者は婦人共有を創設する必要がない。それはとうの昔から存在してゐるではないか。

我がブルジョア諸君は、公娼の事はしばらく措くとしても、プロレタリアの妻や娘を勝手にしてそれでもなほ満足が出来ないで、更に自分等の妻を互に誘惑する事を無上の快樂としてゐるではないか。

ブルジョアの結婚は、その實質上、正に妻女共有制である。さすれば彼等が共産主義者に對して加へ得る攻撃は、偽善的に隠蔽されてゐる婦人共有制の代りに、公然たる正式の婦人共有制を設けやうとするからいけない、と云ふのが精々である。これはまた、云ふまでもない事だが、現今の生産關係を廢絶すれば、その關係から生じた婦人共有制、即ち公私の賣淫制度が、皆を消滅するのである。(四二)

共産主義者は更に、祖國を廢絶し、國民性を廢するものとして攻撃されてゐる。(四三)
労働者は祖國を持つてゐない。その人の持つてゐない者をその人から取ることは出来ない。プロレタリアは先づ政權を握らねばならぬ。國民的階級たる地位に登らねばならぬ。自己を國民として結成せねばならぬ。だから、その意味において、ブルジョアジートの意味とは全く違ふが、やはり國民的である。

國家間の差別及び人種間の反目は、ブルジョアジートの發達のために、通商の自由のために、世界市場のために、生産方法及びそれに相應する生活關係の同一化のために、最早や段々消滅しつゝある。

プロレタリアの政治は一層多くそれを消滅させるであらう。少くとも文明諸國間だけでの力の結合と云ふ事が、プロレタリア解放の第一條件の一つである。

一の個人が他の個人を搾取する事が止めば、それと同じ比例において、一國民が他國民を搾取する事も止むであらう。

一國の内部における階級對立が無くなれば、國と國との敵視もまた無くなるであらう。

宗教的、哲學的、及び理想的見地一般からの、共産主義に對する攻撃については、詳細に點檢するだけの必要がない。

人間の生活上の諸關係と共に、その社會的諸關係と共に、その社會組織と共に、その思想、觀念、及び見解、一口にいへばその意識もまた變化するといふ事を理解するのに、そんなに深い洞察力を要するだらうか。

古來、思想の歴史が示してゐる所のものは、精神的生産が物質的生産と共に變化するといふ事より外に無いではないか。或る時代を支配する思想は、いつでもただその支配階級の思想であつた。

或る思想が全社會を革命したといふ事がある。それはただ、舊社會の内部に、新社會の要素が發育したといふ事實、古い生活關係の解體と共に、古い思想の解體が同一の歩調を取つたといふ事實を指すにすぎない。

上古の世界が滅亡に瀕した時、古い諸宗教は皆なキリスト教に征服された。十八世紀に、キリスト教

の思想が啓蒙思想に壓せられた時、封建社會は當時の革命的ブルジョアと生死の戦ひをやつてゐた。良心の自由、及び信仰の自由といふ思想は、只だ知識の領域における自由競争の支配を云ひ表したものに過ぎない。〔四三〕

『けれども』と誰か、云ふだらう、「宗教的、道德的、哲學的、政治的、法律的の諸思想は、如何にも歴史發展の道程において變化したには相違ないが、宗教、道德、哲學、政治、法律は、常にその變化の間に嚴存した。』

『それにまた、自由、正義などと云ふ、あらゆる社會状態に共通する、永劫の眞理がある。然るに共產主義は、その永劫の眞理を廢絶する。宗教、道德を改新するのではなく、全くそれを廢絶する。だから共產主義はあらゆる過去の歴史發展と矛盾する。』

この難詰は一體どういふ事に歸着するか。あらゆる過去の社會の歴史は、階級對立の中に發展してゐる。そしてその階級對立は時代々々によつてその形態を異にしてゐる。

然しその形態がどうであつても、社會の一部分が他部分を搾取するといふ一點は、總ての過去の諸時代に共通な事實である。従つて、總ての時代の社會的意識が、その表現の多種多様なものに拘らず、或る共通の形態を以て働くのは、當り前の事である。そしてそれら意識形態は、階級對立の全き消滅と共に、始めて完全に解體すべきものである。

共產主義の革命は、在來の財産關係の根本的な破壊である、従つてその發展の過程において、在來の

思想が最も根本的に破壊されるのは、當り前である。〔四四〕

然し、共產主義に對するブルジョアの非難は、もうこれで棄て置く事にしよう。

我々は既に以上において、労働者革命の第一歩が、プロレタリアを支配階級の地位に上げる事にあるのを見た。即ちデモクラシーの獲得にあるのを見た。

プロレタリアはその政治的支配權を利用して逐次にブルジョアから一切の資本をもぎ取るであらう。一切の生産機關を國家の手に、即ち支配階級として結成されたプロレタリアの手に集中するであらう。そして生産力の總量を出來るだけ急速に増大するであらう。〔四五〕

勿論、最初は、財産權に對する、またブルジョア的生產關係に對する、壓倒的侵害に依らなければ右の事は行はれ得ないであらう。従つてその方策は經濟上、不徹底であり薄弱であるかに見える。然しそれが運動の進行に連れて、自然に元の埒外に跳り出る。そしてそれが生産方法の全體を變革する手段として、避くべからざる方策となる。

尤も、この方策は、それぞれの國情に従つて、それぞれの差異を呈するであらう。

然し最も文明化した諸國にあつては、左の諸方策が大概一般に行使され得るであらう。

- 一、土地財産の收奪、及び地代を國家の經費に充てる事。
- 二、強度の累進所得税
- 三、相續權の廢止。

- 四、總ての移出民及び叛逆者の財産の沒收。
- 五、國家の資本を以て全然獨占的な國立銀行を作り、信用機關を國家の手に集中する事。
- 六、交通及び運輸機關を國家の手に集中する事。
- 七、國有工場、國有生産器具の増大、共同的計畫に依る土地の開墾及び改善。
- 八、總ての人に對し平等の勞働義務を課する事。産業軍隊を編成する事（殊に農業に對して）。
- 九、農業と工業との經營を結合する事。都會と地方との區別を漸次に廢する事。
- 十、總ての兒童の公共無料教育。現今の形式における幼年の工場勞働の廢止。工業生活と教育との結合等。（四六）

かくて、發達の進行につれ、階級の差別が消滅し、總ての生産が、協同する個人全體の手に集中されるならば、その時、公的權力はその政治的性質を失ふ。元來、政治的權力なるものは、一階級が他階級を壓迫する爲に組織した強力である。プロレタリアはブルジョアに對する戰闘の必要上自ら一階級を形成し、革命に依つて自ら支配階級となり、そして支配階級として強制的に古い生産關係を揚棄すれば、今度は、その生産關係の揚棄と共に、階級對立の存在條件を揚棄し、階級全體を揚棄し、從つてまた、自らの階級的支配權をも揚棄するのである。

かくていよいよ古いブルジョア社會、その諸階級及び階級對立の代りに、各人の自由な發達が衆人の自由な發達の條件となるような、協力社會が生ずるのである。（四七）

三、社會主義及び共產主義文書

一 反動的社會主義

A 封建的社會主義

フランス及びイギリスの貴族は、その歴史的地位からして近世ブルジョア社會に反對する小冊子を書くべき任務を帯びてゐた。一八三〇年のフランス七月革命において、またイギリスの改革運動に於て、彼等は更にこの憎むべき成上り者のために組み敷かれた。本氣な政治的闘争はもはや問題にならなくなつた。彼等に殘されたものはただ文筆上の争ひのみであつた。（四八）然しその文筆の方面でも、復活時代の古い言葉では通らなくなつた。彼等貴族が世間の同情をよび起すためには、自分の利害關係をかくして、ただ搾取されてゐる勞働階級の利害關係においてのみブルジョアに對する訴狀を作らねばならなかつた。かくて彼等は、新しい支配者を譏諷する歌を歌ひ、又多少とも不祥らしい豫言をその耳に囁いて、わずかに自ら腹いせをしてゐたのである。

*これは英國の復活時代（一六六〇—一六八九）ではなくフランスの復活時代（一八一四—一八三〇）である——英國版へのエンゲルスの註

封建的社會主義はかやうにして起つた。半ばは哀歌、半ばは皮肉、半ばは過去の餘音、半ばは將來の脅威、そして時には、深酷痛烈な批判を以てブルジョアの腹を刺す事があつても、近世史の進路を

理解する能力が全く缺けてゐたので、それは常に滑稽にしか響かなかつた。

彼等は民衆を自らのうしろに集めるためにプロレタリアの乞食袋を旗印として振りかざした。けれども民衆は、そのうしろに集まるや否や、彼等の背中に昔の封建的紋所を見つけたして、輕蔑の高笑ひを殘して逃げ去つた。

フランス勤王派の一部と、青年イングランド黨とは、この芝居の好適例である。

封建主義者は、自分達の搾取がブルジョアの搾取とその形態を異にしてゐると云ふが、それは彼等が今日とはまるで違つた、そして今日では時代おくれになつてゐる事情と條件との下に、搾取をやつてゐたといふ事を忘れてゐるのである。彼等の支配下には近代のプロレタリアは存在してゐなかつたと云ふが、それは矢張り、近代のブルジョアジーが彼等の社會組織の必然の子孫だといふ事を忘れてゐるのである。

それに彼等は、自分達の批評の反動的性質を殆んど隠してゐない。彼等のブルジョアジーに對する主なる詰責は、ブルジョアジーはその支配下に、舊來の社會組織を全部空中に跳ね飛ばすやうな階級を發展せしめてゐるといふに歸着する。

彼等がブルジョアジーを責めるのは、それが一般にプロレタリアを作り出したと云ふ事よりも、寧ろ革命的プロレタリアを作り出したと云ふ事にある。

故に彼等は政治上の實際においては勞働階級を壓迫するやうな立法に加擔し、また日常の生活におい

ては、その有らゆる大言壯語にも似ず、黄金の橋を拾ひ集め、眞理や正義や名譽を、羊毛や砂糖やジ

ヤガ芋酒の商賣と取りかへる事を辭さなかつた。(四九)

僧侶がいつでも封建諸侯と手を携へてゐたと同じく、僧侶的社會主義がまたいつでも封建的社會主義に同伴してゐた。

キリスト教の禁慾主義に社會主義的色彩を附けるのは何よりも容易な事である。キリスト教は私有財産に對し、結婚に對し、國家に對して、熱心に反對したではないか。キリスト教はそれらの代りに、慈善と乞食と、獨身主義と禁慾主義と、僧院生活と教會とを説教したではないか。キリスト教社會主義は貴族の憤怒を淨めるために、僧侶が注ぐ聖水である。(五〇)

* この林檎の事は主としてドイツを指したのである。ドイツでは地主貴族や郷土がその領土の大部分を番頭役の者に耕作させて、自らその利益を收め、更に又、大規模の砂糖製造をやリ、ジヤガ芋酒の醸造をやつてゐた。イギリスの富裕な貴族はまだそこまで事はやらなかつたが、それでも怪しげな株式會社の空株券に名義を貸して地代の減少の埋め合せをすることは知つてゐた——エングルス。

B 小ブルジョア社會主義

ブルジョアジーのために没落させられた者、近世のブルジョア社會の中にその生活條件を萎微凋落させられた者は、封建貴族階級ばかりではなかつた。中世の城外市民と小農階級とは近代ブルジョアジーの先驅であつたが、工業發達の遅れた國々では、これら階級がやはりまだ、新興のブルジョアジーと並んで生きながらへてゐる。

近代的文明の發達してゐる國々では、一つの新しい小ブルジョア階級が形成されてゐる。それはプロレタリア階級とブルジョア階級との間を彷彿してゐるもので、ブルジョア社會の補足的部分として常に益發生しつつある。然しその成員たる人々は、たえず競争のためにプロレタリアに突落され、しかもそれが大産業の發達につれ、近代社會の獨立分子としては全く消滅に歸し、その代りに商工農業における勞働監督者及び番頭支配人となる時節が近づきつつある。

フランスのやうな、農民階級が人口の半ば以上を占めてゐる國々では、プロレタリアに味方してブルジョアに反對する文士等が、小ブルジョアの及び小農的標準でブルジョアを批評し又その小ブルジョアの立場から勞働黨に加擔するのはまことに自然の事であつた。かくて小ブルジョア社會主義が起つた。シスモンディーはフランスばかりでなく、オギリスにおいてもこの學派の巨頭であつた。

この社會主義は最も鋭利に、近世の生産關係における矛盾を解剖した。經濟學者の偽善虚飾を暴露した。また最も有力に、機械と分業との破壊作用、資本と土地との集中、生産過剰、恐慌、小資本家と小農との必然的滅亡、プロレタリアの悲惨、生産界の無政府状態、富の分配の驚くべき不均衡、諸國民間における破壊的な産業戦争、舊習慣、舊家族關係、舊國民性の解體を論證した。

然しこの社會主義は、その積極的内容においては、昔の生産交換方法とともに、昔の財産關係および昔の社會を復興しようとするのか、さもなくば、近世の生産交換方法を、舊財産關係（近世の生産交換方法に依つて勿ねとばされた處の、又勿ねとばされねばならなかつた處の、その舊財産關係）の外殼の中に無理に再び押し込まうとするのであつた。いづれにしても、それは反動的であり、また空想的であつた。

製造工業においてはツンプト制度、農村においては父家長制度、それが彼等の結論であつた。

この學派は、その後の發展において、遂に意氣地のない宿醉状態におちいつた。〔五一〕

C ドイツ社會主義又は『眞正』社會主義

フランスの社會主義的及び共產主義的文書は、支配階級たるブルジョア階級の壓迫の下に起り、その支配權に對する戦闘の文學的表現を爲してゐたのであるが、その文書がドイツに輸入されたのは、丁度ドイツのブルジョア階級が、封建的専制政府に對して戦闘を開始した時であつた。

ドイツの哲學者、半哲學者及び文藝家は熱心にこの文書を耽讀したが、ただ彼等は、その文書がフランスからドイツに移植された時、フランスの生活關係がそれと共に移植されなかつたといふ事を忘れてゐた。そこでこのフランスの文書は、ドイツの社會關係にたいして全くその直接實際的意義を失ひ、ただ單純な文學的の姿を示してゐた。従つて、それは、人間性の實現に關するノンキな學究的思辨となるより外はなかつた。かくて十八世紀のドイツの學者にとつては、フランス第一革命の要求は『實踐理性』の一般的要求といふだけの意義で、革命的フランス・ブルジョアの意志表現も、彼等の眼にはただ純粹の意志、あるがままの意志、眞の人間の意志の法則としてのみ映じたのである。

そこでドイツの學者達の仕事はただ新しいフランス思想を自分等の古い哲學的良心と調和させるか、

或は寧ろ、自分等の哲學的立場からフランス思想を修得しようとするのであつた。

この修得方法は、丁度、翻譯によつて外國語を習ふのと、同じやり方で行はれた。

中世の僧侶どもが古代異教國の古典の原稿を塗り潰してその上に無味乾燥なカトリック聖僧傳を書いた事は、人のよく知る所である。ドイツの學者達は俗界のフランス文書にたいして正にその反對をやつたのである。彼等はフランスの原書の裏に、自分等の哲學的駄辯を書いた、例へば貨幣の作用に關するフランス批評の裏に『人間性の離反』を書き、ブルジョア國家に關するフランス批評の裏に『絶對普遍政治の廢止』を書いたりした。

* Kode x plinapestus

こういふ哲學的用語をフランスの史的發展の上に當てはめることを、彼等は『行爲の哲學』、『真正社會主義』、『ドイツの社會主義科學』、『社會主義の哲學的建設』などと僭稱した。

フランスの社會主義及び共產主義文書はかやうにして明かに去勢された。そしてそれらの文書がドイツ人の手の中で、一階級の他階級に對する鬭争の表現たる意義を失つた時、ドイツ人はそれで『フランス的偏見』を克服したと思ひ、眞實の要求でなく、眞理の要求を代表したと思ひ、プロレタリアの利益でなく人間性の、即ち一般人間の利益を代表したと思つてゐた。然るにその人間とは、どの階級にも屬せず、現實の者でもなく、ただ哲學的空想の雲霧の中のみ屬する者であつた。

かやうに重くらしい學校演習を眞面目に莊重にやり、法螺を吹き立てたドイツ社會主義も、暫くにし

てようやくその術學的な無邪氣さをうしなつた。

ドイツ、殊にプロシアのブルジョアジーの、封建貴族と專制王政にたいする戰闘、即ち自由主義運動が、次第に本物になつて來た。

これに依つて、謂ゆる『真正社會主義』は、多年要望してゐた好機會をつむことができ、政治運動に社會主義的要求を對立させ、自由主義に對し、代議政體に對し、ブルジョアの自由競争に對し、ブルジョアの言論自由に對し、ブルジョアの立法に對し、ブルジョアの自由平等に對して、その傳統的呪咀を投げつけ、そして民衆に向つては、彼等がこのブルジョア運動のために、得る所は一つもなく、失ふ所は一切の物であるべき事を説法した。ドイツ社會主義は、この時、自分が受賣をしてゐる處のフランス批評が、近世ブルジョア社會の存在を前提とし、及びそれに隨伴する物質的生活條件と、それに適當する政治組織とを前提とするものである事を、折よくも忘れてゐたのである。即ちその前提を獲得する事が、ドイツでいま漸く問題となつてゐる事を忘れてゐたのである。

故に、ドイツの專制政治及びそれに伴ふ僧官、教授、地方貴族、官僚などにとつては、この社會主義は、ブルジョアジーの襲來にたいする、誠に恰好の案山子であつた。

あたかもこの時、ドイツの專制政府は勞働階級の動亂に對して、鞭と銃丸の苦い藥を與へた後であつたので、この社會主義は實に甘い口直しであつた。

この『真正社會主義』はかくドイツ政府のためにブルジョアジーと戰ふ武器となつたと同時に、また

直接に、一つの反動的利益（即ち特権市民階級の反動的利益）を代表してゐた。ドイツにおいては、十六世紀以來の遺物であつて、そしてその後絶えず、種々の形で復活してゐる小ブルジョア階級、現存状態の特殊の基礎を作つてゐる。

この階級を維持する事は即ちドイツの現存社會状態を維持する所以であつた。然るにブルジョア階級が産業的及び政治的支配權を握れば、一方には資本の集中のために、一方には革命的プロレタリアの發生のたゞにこの階級が確かに没落する恐れがあつた。そこで『真正社會主義』は彼等にとつて一石二鳥を併す者の如く見えた。従つてそれが流行病のやうに蔓延した。

更にこのドイツ社會主義者は、空想の蜘蛛の網で織られ、修辭の花で刺繡せられ、濃やかな感情の露に染められた、浮世ばなれのした衣の中に、その哀れげな『永久の眞理』を包んだので、右の人々の間におけるこの商品の賣行は、いよいよ盛んなものになつた。

かくてドイツ社會主義は、次第々々に、この小市民階級の立派な代表者としてその使命を認識した。彼等はドイツ國民を以て模範的國民となし、ドイツの小市民を以て模範的人間となす事を宣言した。そしてその模範的人間の醜行に對して、その真相と正反對なる、隱微な、崇高な、社會主義的意義を附與した。要するに彼等の結論は、直接に、共產主義の『殘虐な破壊性』に反對し、一切の階級闘争に超越して不偏不黨の態度を宣明するに在つた。今ドイツで行はれてゐる、謂ゆる社會主義文書及び共產主義文書は、ごく少數の例外はあるが、皆この醜穢な、骨抜きな著作部類に屬してゐる。〔五二〕

（原註）一八四八年の革命騒ぎは、總てこの見苦しい傾向を試ひ去り、その唱導者から、引續き社會主義者として立つほどの興味を奪ひ去つた。この傾向の主なる代表者であり、又その古典的タイプの人、カール・グリュン氏である。

二 保守的社會主義又はブルジョア社會主義

ブルジョア階級の一部分は、ブルジョア社會の永續を計るために、社會の病所を匡正する事を希望する。經濟學者、博愛家、人道家、労働階級の狀態改善者、慈善事業家、動物虐待防止會員、禁酒會員、その他種々雑多の小改良主義者は、皆な之に屬してゐる。そしてこのブルジョア社會主義が、また一個の學說に作りあげられた。

その一例として、ブルードンの『貧困の哲學』を擧げる事ができる。〔五三〕

この社會主義的ブルジョアは、近代社會の生活條件を欲しながら、その必然の發生物たる闘争と危険とを免かれないのである。彼等の欲する所は、革命的及び解體的要素を引去つた現存社會である。彼等はプロレタリアのないブルジョア階級を希望してゐる。ブルジョア階級は固より、自分の支配してゐる世界を最善の世界だとしてゐる。ブルジョア社會主義はこのおめでたい考を、一つの、或は半分の學說に作りあげた。彼等はプロレタリアに對し、その學說を實現して、新しいエルサレムに到達せよと勸めてゐるのだが、實質上、現在の社會に立ち止りながら、その現在の社會に關する忌はしい思想を取り去ることを望んでゐるに過ぎない。

この社會主義の、一層非學理的な、然し一層實際的な、第二形式は、労働階級の利益が政治的變化の

中に存せず、ただ物質的生活關係即ち經濟關係の變化の中にのみ存する事を論證して、それによつて労働階級にあらゆる革命運動を嫌はせようとするのである。然しこの社會主義が云ふ所の物質的生活關係の變化とは、決してブルジョアの生産關係の廢絶を意味するものではない。その關係の廢絶は革命によつてのみ成し遂げられるものであるから、彼等はただその生産關係の地盤の上に行はれる行政上の改善を意味するのである。従つてそれはまた資本と賃銀労働との關係に何等の變化を與へるものでなく、せいぜいブルジョアジーをして、その支配費用を節減せしめ、その國家財政を單純化せしめるに過ぎない。故にブルジョア社會主義者は、單純な修辭的形式においてのみ、初めて自分にふさはしい表現に到達する。

労働階級の利益のための自由貿易！ 労働階級の利益のための保護關稅！ 労働階級の利益のための獨房監獄！ これがブルジョア社會主義の、最後の言葉であり、ただ一つ眞面目に考られた言葉である。要するに、ブルジョアジーの社會主義はただ、労働階級の利益のためにブルジョアがブルジョアであると云ふ主張に基づいてゐる。〔五四〕

三 批評的空想的な社會主義及び共產主義

我々がこゝで述べようとするのは、あらゆる近代の大革命に際して、プロレタリアの要求を發言した（例へばバブーフの著書などのやうな）文書についてではない。〔五五〕

一般的動亂の時代、封建社會顛覆の時代において、プロレタリアが直接に自分の階級的利益を樹立しようとした第一の試みは、プロレタリア自身の發達が幼稚なためと、彼等を解放さすべき物質的條件の缺乏のためとに依つて、必然的に難破した。もともと彼等を解放すべき物質的條件は、ブルジョア時代の産物なのである。そこでこの最初の眞面目なプロレタリア運動に伴つた革命的文書は、その内容からいへば、必然に反動的である。即ちその教へる所は、一般的の禁慾主義であり、また素朴な平等化主義である。

眞の社會主義及び共產主義學說、即ちサン・シモン、フーリエ、オーエン等の學說が、プロレタリアとブルジョアとの闘争がまだ十分發達しない初期の時代に現はれた事は、前に説いた通りである。〔ブルジョアとプロレタリアの章参照〕〔五六〕

尤も、これらの學說の發明者達も、階級の對立と、ブルジョア社會そのものの中における解體的要素の作用とを認めた。ただ彼等は、プロレタリアの方面において、何等、歴史的獨立性を認めず、彼等に特殊な何等の政治運動を認めなかつた。

階級對立の發達は産業の發達とその歩調を同じくするものであるから、彼等はまだ幾許もプロレタリア解放の物質的條件を見出す事が出來ないで、ただ何等かの社會的の學問に依り、社會的の法則に依つてその條件を作らうと試みた。

そこで社會的な活動の代りに、彼等の思ひつきに依る個人的な活動が起り、解放の歴史的條件 代

りに、空想的條件 起り、プロレタリアを一階級として自然に追々と團結させる事の代りに、諸々の發明した社會組織の考案が起つた。彼等にとつては、將來の世界歴史は、彼等の社會組織案の宣傳と實行とに歸着すべきものであつた。

但し彼等は、その組織案が、社會の最も痛ましい階級たる労働階級の利益を代表する事を覺つてゐた。プロレタリアはただ、最も痛ましい階級といふ意味で彼等の目に映じてゐた。

けれども、階級闘争の未發達の形式と、彼等自身の生活上 地位 ため、彼等は自然に階級對立の上に超然たる者だと信じてゐた。彼等は總ての社會構成員のために、その最も善き地位に居る者のためにすらも、その生活状態を改善しようとした。従つて彼等は不斷に、無差別に、社會全體に對し、否、殊に支配階級に對して訴へた。人が苟くも彼等の學説を理解する以上、最上可能の社會に對する最上可能の考案として、それを認めない筈がないと云ふのであつた。

故に彼等は、總ての政治的、殊に總ての革命的行動を排斥した。彼等は平和の方法によつてその目的を達しようとした。そして小さな（然、失敗に歸すべき）實驗によつて模範を世に示し、その力によつて新らしい社會的福音の道に進まうとした。

この未來社會の空想的描寫は、プロレタリア階級の發達がまだ幼稚であり、従つて自分の地位もただ空想的に考へる時代において、社會の一般的改造に對するその最初の豫感的渴仰から生じたものである。

然しこの社會主義及び共產主義文書は批評的要素をも含んでゐる。彼等は現社會の一切の根本を攻撃した。故に彼等は、労働者の啓蒙のために最も價值ある材料を供給した。未來の社會に對する彼等の積極的提案、例へば都會と農村との對立の廢止、家族制の廢止、私的營利事業の廢止、賃銀労働の廢止、社會的調和の宣傳、國家を變じて單純な生産管理機關とする事、すべてこれらの提案は、まったく階級對立の消滅に歸着するものである。しかし當時にあつては、その階級對立が漸く僅かに發達しかけてゐたので、彼等はまだその初期の漠然たる 不確定の姿においてのみそれを知つてゐたのであらう。従つて右の諸提案も純然たる空想的意義を持つてゐたのである。

この批評的、空想的社會主義及び共產主義は、歴史的發展と逆行する意義を有してゐる。階級闘争が發達し形成するに従つて、階級闘争に對するこの空想的な超越とこの空想的な攻撃とは、一切の實際的價值、一切の學理的妥當を失ふ。そこでこの學派の創設者たちは多くの點において革命的であつたけれども、その門弟等は皆な反動的分派を作つてゐる。彼等はプロレタリアの歴史的發展に反對して、その師の舊説を固守してゐる。従つて彼等は畢竟、階級闘争を鈍らし、階級對立を調停しようとする。彼等は今でもやはり、自分等の社會的ユートピアの試験的實現を夢み、個々のフランスチール（1）を起す事、『内國植民地』（2）を設ける事、『小イカリヤ』（3）を作る事などといふ、新エルサレムの小版本を試み、そしてそれらの空中樓閣を築くためには、ブルジョアジーの慈善心と財囊とに哀訴せざるを得ない。かくて彼等は次第々に上記の反動的、もしくは保守的社會主義の範疇におちいり、ただそれ

と異ふ所は、やや組織的な術學と、その社會學の奇蹟的效果に對する熱狂的迷信をもつ事である。

故に彼等は、労働階級が一切の政治的運動をなす事に極力反對する。彼等に依れば、政治運動はただ新福者に對する盲目的不信からのみ生ずるのである。〔五七〕

イギリスのオーエン派がチャーチストに反對し、フランスのフリーエ派が改良黨に反對するのは即この故である。〔五八〕

(1) フアランスチールとは、フリーエの考案に成る社會的宮殿の名稱。(2) 内國植民地とは、オーエンの共產主義的模範社會の稱。(3) イカリヤとは、カペーが描き出した共產主義的理想郷の稱。

四、革命諸政黨に對する共產黨の態度 〔譯註〕

既成の労働諸政黨に對する共產黨の關係、從つてイギリスのチャーチスト及び北アメリカの農民改革黨などに對する關係は、第二章の説述で自然に明瞭となつてゐる。〔五九〕

共產黨は労働階級の直接眼前の目的と利益とのために戦ふものであるが、然しその現在の運動の中において、その運動の將來を代表する者である。フランスにおいては、共產黨は社會民主黨〔註〕と提携して、保守黨及び急進ブルジョア黨と戦ふ。但し大革命から傳來した種々の謬見謬想に對しては、批評の權利を保留してゐる。〔六〇〕

スキスにおいては、彼等は急進黨を助ける。但し同黨が二個の反對する要素、即ち一はフランス流の

民主的社會主義者、一は急進的でブルジョアジから成る事を見逃してはゐない

ポーランドにおいては、彼等は、土地革命を以て國民的解放の主要條件とする黨派を助けてゐる。この黨派は一八四六年クラカウ一揆を起させた事がある。〔六一〕

ドイツにおいては、彼等は、ブルジョアジーが革命的に行動する時、それと提携して專制王政、封建的地主、及び小ブルジョアと戦ふ。

〔註〕この黨派は、議會においてはレドリユロランによつて、文學においてはルイ・ブランによつて、日刊新聞においてはレフォラムによつて代表され、多少社會主義の色彩をおびた民主黨もしくは共和黨の一部であつた。

然し彼等は未だかつて一刻たりとも、ブルジョアとプロレタリアとの對立の、出来るだけの明瞭な自覺を労働者に起させる事を忘れてゐない。ブルジョアの支配と共に必ず採用される筈の、その社會的及び政治的條件を、ドイツの労働者が直ちに自分の武器としてブルジョアジーに向け得るために。またドイツ反動諸階級の没落のち直ちにブルジョアジー自身に對して戦闘を開始するため。共產黨は主としてドイツに向つてその注意を集中する。ドイツはいまブルジョア革命の前夜にあり、またその革命が歐洲文明國一般の進歩と條件の下に行はれ、その上に十七世紀のイギリス、十八世紀のフランスよりも遙かに高く發達したプロレタリアを有し、從つて、ドイツのブルジョア革命は、まさにプロレタリア革命の直接の序幕となり得るからである。〔六二〕

要するに共產黨は到る處において社會的及び政治的の現状に反抗する各種の革命運動を擁護する。す

べてこれらの運動において、共産黨は常に財産問題を標榜してゐる。その財産問題の發達程度がどうあらうとも、彼等は常にそれを運動の根本としてゐる。

最後に、共産黨は到る處において、萬國の民主的諸黨派の團結と一致とのために努力する。

共産黨はその見解と意圖とを隠蔽するのを餘計な事だと考へてゐる。彼等は公然と宣言する。彼等の目的は一切の從來の社會組織を強力的に顛覆する事によつてのみ達せられる。支配階級をして共産主義革命の前に戦慄せしめよ。プロレタリアは自分の鎖より外に失ふべき何物もたない。そして彼等は獲得すべき全世界をもつてゐる。

萬國、プロレタリア團結せよ！

(譯註)ここでいふ革命諸政黨は現代の社會民主主義的黨派ではない。當時における反政府黨のことで、『在野諸政黨に對する共産黨の關係』とすればハッキリしよう。

共産黨宣言評註

デ・リヤザノフ

序論への評註

一、一八四七年における共産主義者選治 一八四六年王位についた法王、ピアス九世は、當時『自由主義者』と思はれてゐた。併し、社會主義者に對してはその敵意においてロシアのツアルニコライ一世とかはりがなかつた。ロシアのツアルは既に一八四八年の革命以前からヨーロッパ憲兵の役をつとめてゐた。オースタリー帝國の大宰相であつて、全ヨーロッパにおける反動の指導者と認められてゐたメッテルニヒは、丁度この時に至つて、特に、キゾーと接近するに至つた。キゾーは傑出した歴史家であり、フランスの宰相であり、そして大金融及び大工業ブルジョアジの理論家であり、且、プロレタリアートの和解し得ない仇敵であつた。ロシア政府の要求によつて、キゾーはマルクスをバリーから追ひ拂つた。ドイツの警察は、共産主義者をドイツにおいて安穩にさせはしなかつたばかりでなく、フランス、ベルギーにおいても、スウキスにおいてさえも安穩にはさせなかつた。全力を盡し、全手段を盡して、共産主義者達の宣傳を妨害し、彼等を地下へ追ひこんだ。フランスの急進主義者たち——マラー、カルノー、マリー——は社會主義者、共産主義者達と論戦したただけではな

つた。また、當時のレドリユ・ローランやフロマンを首脳とする社會民主主義的な諸黨とも論戦を開いた。

第一章への註解

二、ハクストハウゼン、マウレル、モルガン ハクストハウゼン(一七九二年——一八六六年)はプロシヤの男爵であつた。ニコライ一世より、ロシアの農業制度及びロシア農民の生活状態を研究する目的を以てロシアに入る許可をえた。一八四三年——一八四四年)彼の著述の最初の二卷(ロシアにおける民衆の生活の内部状態及び土地問題^{オプシチナ}について)は、一八四七年に出た。併し、彼が主として土地共同體に關する問題を検討してゐる。第三卷は宣言の現れた後に、一八五二年に至つて公表された。ロシアにおいてゲルツェンと會見したハクストハウゼンはロシアの土地共同體を非常に重要視し、ロシアをプロレタリアートの『禍害』から免れしめる方法を其處に見出した。マウレル(一七九〇——一八七二年)はドイツの大歴史家及び大法學者であつて、數多の著述をしてゐる。これらの著述は五十年代及び六十年代に出版された。その中で農村及び都市の共同體の歴史を研究してゐる。宣言の中にもその痕跡を残してゐる舊い見解に反對して、彼は、最

初の中世都市の都市住民は中世的城塞から形成されたものでなく、この反對に、都市は自由な農村共同体（中世的マルカ〔譯註〕）から發達したものである事を指摘した。モルガン（一八一八年—一八八一年）はアメリカの有名な原始的制度の研究者である。彼はその生涯をインディアンの習慣や風俗の研究にささげた。彼の意見によると、歴史的發展の根本的因子は技術の領域における発見及び發明、物質的諸關係の發達であつた。家族及び特に血縁的制度の發達に對する彼の見解はエンゲルスによつて採用されてゐる。エンゲルスは『その著書』『家族、私有財産及び國家の起原』（一八八四年刊）において、歴史以前の社會の發展過程及びその社會階級への轉化を究めようと試みてゐる。

（譯註）古代獨逸における農村社會の單一體。

三、中世紀的經濟の破壊と世界貿易の發達、十五世紀の後半にあつて、中世紀社會は、それに特徴的な小生産と共に、既に純然たる解體の過程をたどつてゐた。貨幣經濟の繁榮、國內的及び國際的な交換の急激な發達の結果は、貨幣資本及び商業資本の發達にとつて好都合な環境をつくり出した。農村においては自然形態をとつた貢税にかはつて貨幣とする租税が發達した。自由民、或は農奴である農村の小生産者の状態は非常に悪化した。封建的な土地所有者は、全力を盡して貨幣を追求する農村の經營者となつた。封建的領主等の數多の從者や下僕達は解放されて、彼等の永代の土地から追ひ拂はれた農民達とともに道路や都市を一杯にした、放浪者の數をいよいよ増した。獨立のツンプト的な手工業——この内部ではすでに親方と職人との間に開争が燃え上つてゐたので

あるが——商業資本の權力下におちいつてしまつた。

鑛山事業、紡績工業、航海の諸領域に於ける、軍事上の、また、時計、天文學上の用具の生産上における幾多の技術的完成、科學上の諸成果——このなかには星學も含まれる——すべて此等のものは、生産力の發達、企業心に富んだ人々の發意に強い刺激をあたえた。

地中海の西部や大西洋岸に散在する商工業の中心地（リスボン、ゼノア）とアジア貿易を全部にわたつて獨占し、地中海の東部を支配したベニスとの競争は、ポルトガル人、ゼノア人、スベイン人をして執拗にインドに達する海路を求めしめた。航海王ヘンリー（一三九四—一四六〇年）は、既に十五世紀の前半においていくたの遠征隊を組織した。その結果、ポルトガル人はアフリカにそつて南下して行つた。アゾレス群島、カナリヤ群島、マデイラ群島を發見し、更に進んで赤道に近づいた。バルホロマイ・デ・アツは喜望峯に到達した。ポルトガル人が、印度に到達するため新しい探險隊を再び組織するに至る前に、ゼノア人のコロンブスは、西に向つて進んで、このパレンスタインの地に到達しようとして試みた。而して一四九二年にはアメリカを發見した。一四九七年にはジョン・カボットは北アメリカの海岸に到達し、遂に、一四九八年に至つては、バスコ・ダ・ガマはデアツの事業を完成し、インドに到達する海路を發見した。一五〇〇年に、ポルトガル人のカブラルはブラジルに上陸した。そして、一五一九年——五二一年に、マゼランが最初の世界一週の旅を完了した。

かくて十六世紀において海の市場と世界貿易との發展の、新しい、より廣い外洋がつけられ、それ以來、近代資本主義の獲得された。從つて流通に投ぜられる銀貨の量も増加した。

英國人の北アメリカへの組織的な植民は一六二〇年にはじまる。英國人につづいてフランス人も植民した。インド諸島は始めポルトガル人が領有したが、一六〇〇年には既に英國人がオランダ（一六〇二年）と殆ど同時に特殊の一會社を創立し、それは次第次第に、ヨーロッパ人の競争相手——ポルトガル人、オランダ人、後にはフランス人——との戦ひにおいて、インド諸島を征服してしまつた。支那とは一五五七年に澳門を占有したポルトガル人が始めて交通を始めた。英國人は一六八四年に至つて始めて支那に地歩を占めた。

四、マニファクチュア（工場的手工業） 我々の問題とするのは、工業資本主義の特殊の一發展段階としてのマニファクチュアである。歴史的には、それは獨立した手工業の對立物として發展して来た。商業資本が手工業を從屬させてしまふや否や、それを、商人たる企業家達は一つの屋根の下に——以前には相互に獨立した非常に澤山の者達によつてやられてゐたのだが——結合させることとなつた。彼等は例へば裁縫室におけるが如くに一個の同じ仕事をする人々である場合もあつた。或は、例へば馬車の製造における様に各自種々な仕事をして、それを結合すると一個の生産物ができる様な場合もあつた。かやうな製造業の利益は第一に生産が大規模に行はれる事、多くの餘計な出費を節約する事であつた。その後、この基礎の上に、もつとこまかな労働の分割が行はれ、マニファクチュアが一個の複雑な機構となるまでに發達して行つた。この機構の個々の部分は、以前の仕事の唯ほんの零細な一部分を行ふ労働者と非常に専門化された工具とであ

時代が始まるに至つた。厚額無恥な掠奪と土人の殺戮——最初の土産者達の從事した處の（コルテスはメキシコに、ピサロはペルーに）——は十六世紀の後半に至つて漸く奴隷による新開地の組織的な開拓にその地歩を譲り始めたにすぎない。アフリカは數世紀の間、黒人狩りの場所となつた。そして黒人等は何萬となくアメリカに送られた。一五〇八年から一八六〇年に至るまでにこうして千五百萬人以上の黒人が移送され、殆どそれと同數のものは輸送の途中において『博愛的な』ポルトガル人、スペイン人、フランス人、それからイギリス人の奴隷所有者の犠牲となつて斃死した。『リバプール』は奴隷の貿易によつて發達し、重要性を獲得した。この信心深い都市にとつては人間の肉の貿易は本來的蓄積の手段をなしたのである。そして、今日に至るも尚、リバプールの『勝れたる』市民等は奴隷貿易の素晴らしい事を頌めたたえる。奴隷貿易こそ商業的企業精神を最も強く鼓舞し、有名な船乗りをつくりあげ、莫大な金銭をもたらしたのである。』（マルクス、資本論）

事實、十九世紀に至つて始めて、即ち英國における綿工業の發達が北アメリカの南部諸州の綿栽培の發達に刺激をあたえた後に至つて始めて、奴隷制度はアメリカにおいて一般的制度となり、奴隷の分配が貿易企業となつたのであつた。

金銀及び特に銀鑛の發見——一五四五年に始まるボリビアでの、一五四八年に始まるメキシコでの——はヨーロッパにおける金及び銀の貯藏量の莫大なる増加となつた。一五〇一年から一五四四年に至る間に、銀四億六千萬マルクが獲得されたのに對し、一五四六年から一六〇〇年に至る間には二十八億八千萬マルクが

る。英國、オランダ、フランス(フランスにとつては少しおそく)、
において、資本主義的工業のマニユファクチュア時代は十六世紀
の後半に始まる。しかし、それは十八世紀の前半に至りその最繁
榮期に達した。

五、産業革命と機械生産の發達 産業革命——これの結果とし
て、資本主義的マニユファクチュアはその主權を機械生産を基礎
とする大工業に譲つた——は、英國において十八世紀の最終の三
分の一に始まつた。そして大體において十九世紀の前半に至つて
終つた。産業革命はいくたの發明及び發見に始まる。それは畜
産、農業、鑛山、紡績、運輸の諸領域において、根本的に技術を
變革した。産業革命の出発点となるものは、以前の手工業的な或
はマニユファクチュア的な労働者の工具にとつてかはつた所謂勞
働機械の改善である。一七七三年に、ケイは自動浚機を發明し
た。しかるに一七三八年には、ポール及びワットは、『指の助けを
借りないで紡ぐ』事のできる最初の紡績機械を發明した。一七六
四年にはハグリーヴスは、始めには十六個の紡績で、次には百二
十個の紡績で作業し得られる紡績機械をつくりあげた。一七六九
年には、エークライトが彼の紡績機械(水力機械)を造つた。一
七七五年——一七七九年にはクロムプトンがハグリーヴス及びア
ークライトの發明を結合して新しい紡績機械をえた。それは、一
八三五年に至つて始めてロベルトスによつてつくりあげられた、
近代的自動紡績機(自動機)にとつて、その雛型となつた。
最初の機械的な紡績機械はカートライトによつて既に一七八五年
には發明されてゐる。しかし一八二三年におけるホロックスによ
るその改善の後に始めて、それは舊い手動機を、十九世紀の三

珍奇な變種をつくり出した。舊い土地關係は徹底的にブルジョア
的生産條件に從屬せしめられた。舊い土地所有者と土地のない農
民、百姓との間に、大規模の農業家、工業資本家が入りこんで來
た。彼等は賃銀労働者の労働を用ひて、土地から、自分のために
は利潤を、地主のために地代をつくり出した。併し、十九
世紀の二十五年から五十年に至る後期における農業經濟の進展に
おいてはより一層大なる進歩を見る事が出来る。

六、ブルジョアジーの政治的進化 此處の説明の基礎として
は、主として、フランス・ブルジョアジーの政治的進歩があら
れてゐる。『ブルジョアジーの歴史において——とマルクスは「哲
學の貧困」において語つてゐる。——我々は二つの段階を區別し
なければならぬ。即ち彼等が封建制度ならびに專制君主制度の
支配下において、自らを一つの階級に形作るに至つた處の段階
と、既に階級を形成するに至つた彼等が、社會をブルジョア的社
會たらしめんがために、封建制度と君主制度とを打破した處の段
階とを。之等の段階のうち最初のもは、第二のものより長期に
わたり、且、最も多くの努力を必要としたのであつた。』フランス
の自由市は十二世紀及び十三世紀において封建領主と闘争した。
そして封建領主相互間の闘争を自分の利益になるやうに利用し、
廣々主權を授助した。十四世紀の初めには彼等は三部會に代表權
をえた。パリの商人の頭領たるエチエン、マルセルを首領とす
るパリのブルジョアジーは一五五六年から一五五八年の間に三部
會をば、特に王の召集なしにも定期的に開きうる代議機關とせん

十年代から四十年代にわたる時期において驅逐した。

十八世紀における鑛山業の發達(石炭の採掘量は、一七〇〇年
には二十一萬四千八百噸、一七七〇年には七百二十萬五千四百噸)
は揚水機の改良に對する要求をうながした。このために、鑛山業
において最初に、蒸氣力が應用されることとなつた。ワットの最初
の機械は、既に鑛山業において用ひられてゐたニュートンメンの機
械の、單なる改良に過ぎなかつた。次の機械、二倍の効力ある次
の機械——これに對する特許をワットは一七八四年にとつてゐる
——に至つて始めて、それは、以前の鑛山業の必要をのみ充して
ゐたにすぎない専門的な機械からして大工業における一般的な動
力機となつたのである。その動力機こそ大工業をば自然的な水力
に對する從屬から解放した。十九世紀の始めの四分の一に至つて
始めて、廣い範圍にわたつての動力としての蒸氣力の應用が始つ
た。それは、最初は紡績業において、役には運輸業において起つ
た。フルトンは一八〇七年に汽船を發明した。スチブソンは既
に用ひられてゐた機關車を根本的に改良した。アメリカからヨ
ロッパへ向つて、一八一九年に最初の旅をした汽船(サワンナ號)
はこのために二十六日の日子を費した。公衆の利用を目的とする
最初の鐵道は一八二五年に、英國に開通した。英國の鐵道網は、
一八三〇年には九十二キロメートル、一八四〇年には千三百四十
九キロメートル、一八五〇年には一萬六千五百五十キロメートルに及
んだ。

農業方面においては果實交代法による舊い三順耕地法の徹底的
な驅逐が起つた。畜産においてはベクセルが綿羊の飼養を工場的
な企業にしてしまつた。彼は思ふままに市場の要求に應じて最も
ことを試みた。併し專制君主制は各身分の間における紛争を利用
し、ブルジョア反對派にうちかつた。ブルジョアジーは中央集權
化された君主制國家の第三身分に、貢納身分になつた。そして己
れの全力をば、貿易及び産業の發展のために、國家機構の利用に
向けた。その先頭には金融ブルジョアジーがたつた。彼等は自
分の扶養してゐる宮廷貴族と共に實際上に、王權をば自分の武器
に變じてしまつた。國民大衆の容赦なき擄取、小ブルジョアジー
の利益の無視に基礎づけられたこの政策の破産は十八世紀の終り
において大フランス革命(一七八九—一七九九年)を惹起した
のである。その最高潮に達した時期はジャコピン派の支配せる
時期(一七九二—一七九四年)である。ナポレオン帝國の短い
時期(一八一五年までの)及びブルボン王朝の復興の後に、一八
三〇年の革命は七月の君主側の創立に導いた。それは大ブルジョ
アジーの議會主義的な支配の古典的な形態であつた。

ネーデルランド(オランダ)では市民達は封建領主達と頑強な
闘争を行つた。それは、折々、執拗な内亂の性質を帯びた。(一三
二四—一三二八年におけるイボル及びブリユッゲに指導された
フランドルの各都市の反亂)。十六世紀の後半においては、ネーデ
ルランドのブルジョアジーは中貴族及び下層貴族と同盟して、ハ
ブスブルグに對する國民的反亂の先頭にたち、長い戦争の後に完
全な獨立權を獲得した。ネーデルランドは十七世紀において最初
のブルジョア國家たるに至つた。そしてそれは、西ヨーロッパの
各國において發展しつたあつたブルジョアジーの理想となつた。

イタリーの獨立都市共和國は、その舊土地所有貴族をかたづけ、事に成功せる後、商工業者の寡頭政治となつた。しかし資本主義が他のヨーロッパ諸國よりも早く發達した北イタリーの貿易的優越が消え失せると共に、それは、その以前の重要さを失ひ、十四世紀に至るに及んで始めて新たにイタリーブルジョアジーの政治的統一の過程が始つたのであつた。英國においては都市の自治體は非常に早くから議會に代議權をえてゐた。しかし工業資本主義の發達が始まるやうになると、漸く英國のブルジョアジーは單に助言者たる事、請願者たる事だけでは満足しないやうになつた。そして、次第次第に執拗に政治權力の獲得を問題とするに至つた。一四六一—一六四九年には大きな一揆が勃發した。この一揆は國王カール・スチュアートの死刑を以て幕を閉ぢ、クロムウェルを首領とする共和國の建設を以て終つてゐる。短期の復興の後、新しい、所謂『名譽革命』なるものが一六八八—一七八九年に終局的に立憲君主側の支配をうちたてた。この立憲君主側のうちにあつて、ブルジョアジーはブルジョア化された地主を己れのための忠實なる同盟者とした。十九世紀に至るや始めて、産業革命の結果として、一八三二年の選挙法『大』改正及び一八四六年の穀物條令の廢止以後に、國家は全世界を搾取するための全ブルジョアジーの株式會社となり、政府はこのブルジョアジーの共同事業を遂行する委員會となつたのである。

わずかに相互間の連繫をたもつてゐた各地方を、一個の國民に結合した政治的な中央集權化の過程は、十九世紀においてはドイツ及びイタリーに最もよいこの例を見る事が出来る。それは特にはつきりと明確に行はれたフランスにあつては、それは既に、一七八九—一八一五年には終つてゐる。

七、交換の發達と現金勘定の支配 『交換には交換の歴史がある。交換は種々なる段階を経て來たものである。中世におけるが如く、剩餘、即ち消費に對する生産の超過分のみが交換された時代もあつた。また、剩餘のみに止まらず、あらゆる生産物が、あらゆる産業的存在が、取引の目的物となつた時代、生産が擧げて交換に依存した時代、もあつた。……最後に、人類がこれまで讓渡不可能のものとして考へてゐたあらゆるものが、交換即ち取引の目的物となり、讓渡され得るやうになつた時代が到來した。それは、これまで、傳授されたが決して交換されず、贈與されたが決して賣却されず、取得されたが決して購買されることのなかつたもの、即ち、徳、愛、意見、科學、良心、等々まで、いまや凡そありとあらゆるものが、交易の目的となるに至つたところの時代である。それは一般的腐敗の時代、何事も金次第の時代である。經濟學上の言葉で云へば、精神的、物質的、ありとあらゆる事物が販賣價值となり、その最も正當なる價值に於て値ぶみされるために、市場に運びゆかれる時代である。』(マルクス、哲學の貧困、ロシア譯、四十一頁)(譯註)邦譯「哲學の貧困」七一九頁(普及版)參照。

『商品交換價值として、また交換價值を商品として、保留しおく可能性が生ずるとともに、金に對する貪欲が頭をもたげる。』

商品流通の擴張につれて、貨幣の權力がいつでも戰闘準備のとなつた、絶対に社會的なる形態の富の權力が、増大して行く。『金は驚嘆すべきものである! それを有する者は、彼の望むあらゆるものを支配することが出来る。金によつて人は靈魂を天國に到らしむることすらできるのである。』(ロムプスのジャマイカからの手紙、一五〇三年)貨幣を見ただけでは何がそれに轉形してゐるか解らないから、商品であらうがあるまいが、あらゆるものは貨幣に轉形される。あらゆる物が賣買され得るやうになる。流通は、貨幣の結晶として再びそこから出てくるために一切の物がその中へ飛び込んでゆくところの、社會的な大蒸溜器となる。この煉金術には聖骨すら抵抗できぬ、況んやもつと規硬である。(Res sacrosanctae, extra. Cunctumhominum) (人間の商取引の外にある聖物)は猶更のことである。諸商品の一切の品質的差別は貨幣となることにおいて消盡されてゐると同じやうに、貨幣は貨幣で、徹底的な平等主義者として更に萬物の差別を消盡する。(マルクス、資本論、一〇三—一〇四頁)(譯註)河上譯、資本論二一八—二一九頁)參照。

尙ほ産業革命の前夜において、英國におゝて支配的であつた家長的牧歌的諸關係はエンゲルスにより彼の著者、『英國勞働階級の状態』中ではらしく巧みに描き出されてゐる。この中で、彼は尙己れの一片の土地を持つてゐる織匠の状態をえがいてゐる。

『此の階級の道徳的並に理智的性質は容易に分明する。彼等は都會——彼等の作つた捻絲や織布は都會から出張してくる代理人に一定の賃金と交換に引き渡されるから彼等は決して都會に行く様な事はなかつた。——から分離されてゐた。則ち彼等は都會の

極く近くに住居して居つても、機械の發明によつて其の仕事を取はれ労働を求めて都會に入り込む事を餘さなくされるまでは遂ひぞ一度も田舎の老人達が都會に入つた事の無いと云ふほど都會から區劃されて居たので、彼等の道徳や理智は其の少しの小作地を持つたために通常直接の關係を結んで居たところの農民(小地主)のそれと同一程度の段階にあつた。彼等は其スクワイヤー地頭——其地方最大の地主——を彼等よりも當然、自然的に上位にあるものと認めた。地頭に話の相談を持ちかけたり、彼等間に起る小爭論を解決して貰つたりした。そして地頭には家長制度様の關係に伴ふあらゆる尊敬を拂つた。彼等は所謂『尊敬す可き一人々であり、又善良なる家の長即ち父であつた。其生活は道徳的であつた。蓋し彼等の界限には所謂銘酒店もなければ隣味屋もなかつたから、非道徳的である爲の何等の原因もなかつたのだ、彼等が間々行つては湯を醫して居つた料理屋の主人も亦等しく尊敬すべき人物であり、多くは自ら一個の大小作人であつてビールレスベックの良いや、店の規則の正しい事や、終業時間の早い事を自慢にして居たからである。彼等は其子供を終日自分の側に、家に置いて柔順しく敬虔に養育することが出來た。青年達が未だ結婚しない前は、彼の家長制度的家族關係は完全に保たれて居つた。青年は田舎風の無邪氣と遊び仲間コンパニオンに對する相信用の心を以て生長した。婚姻前にも確かに性的交際は行はれたが、而もそれは婚姻に對する道徳上の責任が双方から認められた場合にのみ限られて居つた。そしてやがて來る結婚は萬事を好都合にした。要するに、其當時の英國の工業労働者は全然體面的に、隱退的に、何等精神上の活動もなく、一生涯に何等の重大なる動搖も感ぜずに、丁度今

日尙（十九世紀の四十年代の始め）ドイツに於て往々見られると同様に生活し考へて居たものである。彼等の中讀書の出来るものは少かつた。書く事の出来る者は一層少かつた。彼等は規則正しく教會に行つた。政治を論じたり政黨を結ぶ様な事もなければ、思想を練る事もなく、體育を喜んだ。傳來の敬神の念を以て聖書の講義に耳を傾けた。何等の要求も持たない柔順の心を以て社會の尊敬される階級と極めて折合よくやつて行つた。其代り精神的には死んで居た。唯彼等自身の微かなる利益の爲めに生活し、彼等の織機のために、彼等の小さな庭園のために生きて居た。そして彼等の外の世界で人類を通して捲き起つてゐる偉大な動搖などと云ふことに就ては夢にも知る處がなかつた。彼等は其閑寂なる植物的生活に於て愉快を感じて居た。若もかの産業革命なるものがなかつたならば、恐らくは彼等は此極めてローマンチックの趣味ある生活、而も人間としての價値に乏しい生存から脱出することをし得なかつたであらう。實に彼等は人間ではなかつた。彼等は其當時迄社會を統率し來つた少數貴族の役に資する單純なる機械に過ぎなかつた。『英國勞働階級の狀態』（邦譯）三—五頁参照）ブルジョア社會における『現金勘定』の支配、唯、『現金を』と云ふ合言葉のみ知るブルジョアの凡ゆる心理生活の主要な刺激として、その演ずる決定的な役割を、エンゲルスは次の個所で描いてゐる。『イギリスのブルジョアにとつては彼の使役する勞働者が餓死しようがしまいが、全然そんな事は無關係である。——只自分が金さへ儲けられれば……彼は勞働者を人間と思はないで「手」——不斷に彼は勞働者に面と向つてさう稱呼して居るのである。——と見なし、彼はカールライルの道

破する様に「現金勘定が人間と人間との間の唯一無二の聯鎖である」事を容認してゐる。彼ブルジョアと彼の妻との間の紐帯すらも百中九十九までは單純なる「現金勘定」に外ならぬ。金錢にブルジョアが縛られてゐる淺間しき狀態は、ブルジョアジの支配に依つて言葉の上にも印刻されてゐる。此人は一萬磅の價値を所有すると云ひたい場合に、此の人は一萬磅の價値があると云ふではないか？ 金を有するものはレスベクタブル（尊敬すべき人）であり、ザ・ベター・ソート・オブ・ピープル（よりよい種類の人々）に屬し、『感化力』を有し、而して其者のなす事は其社會に新紀元を劃する。掛引打算的精神は凡ての言葉に滲入してゐる。一切の關係は商業用語で述べられ、經濟的範疇に於て説明される。需要と供給は、之に従つて英國人の論理が一切の人間の生活を判斷するの形式である。それ故に自由競争は如何なる點に於ても、従つて自由放任制度は行政となく、醫學となく、教育となく、然り國家の支配力が益々崩壊しつつある宗教界に於てすらも、やがて行はれんとしつつある。『英國勞働階級の狀態』（邦譯）四〇—四二頁参照。

八、資本の革命的性質 『手工業及びマニユファクチュアリーが社會的生產の一般的な基礎となつてゐる限り、生産者を特殊の生産部門に專屬させることは、本來彼れの勞働に含まれてゐた多様性を裂斷してふことは、發達上の必要なる一段階となる。かかる基礎上に立つ特殊の各生産部門は己れに適應した技術上の形態を實驗的に見出して徐々に完成し、一定の成熟程度に達するや否や、急速にそれを結晶させて了ふのである。此處彼處に變化を喚び起すものは、商業に依つて供給される所の新たな勞働素材

と勞働器具の上に生ずる徐々たる變化とのみである。經驗上適當とせられる形態は、一度び獲得されると化骨して了ふ。これは一つの生産部門が同一の形態を以つて、幾千年の間、一の代から他の代へと傳承されてゆくことが屢々あるといふ事實に依つても知られる。……近世工業は一つの生産行程の與へられたる形態をば、決して終局的のものとする事なく、又かかるものとして取扱ふこともない。近世工業の技術的基礎は、従前における一切の生産方法の技術的基礎が本質上保守的であつたのと反對に革命的である。生産の技術的基礎と共に、勞働者の機能や、勞働行程の社會的結合も亦、機械や、化學上の手續や、其他の方法に依つて不斷に革命される。これがため、社會内部に於ける分業も亦不斷に革命され、大量の資本及勞働者が絶えず一の生産部門から他の生産部門に移轉されることになる。』（マルクス、資本論、第一卷、四八六—四八八頁）資本主義の歴史的作用に關しては、ブレハノフの『我々の不一致』（全集、第一卷、二二〇—二二七頁）を見よ。

九、資本主義の地理的擴張 世界市場の擴張が十六世紀において近代資本主義發展の出發點となつた一方において、十八世紀の産業革命以來、ブルジョアジは始めて地球のあらゆる方向に向つて、實際に、驅け廻り始めた。そして、或は宣教師を用ひ、或は學校教師を用ひて、地球の最も遠隔なる隅々まで入り込まうとした。一七七〇年より一八四八年に至る間において、英國人はオウストリア、ニュージランド、南米、及びインドを占領した。フランス人はナポレオン戦争時代に英國のためにその植民地の一部を失つたが、北アフリカにおいてそのつぐなひを受けた。

一〇、世界市場の量的及び質的成長 『機械の發明されない前は、一國の産業は、主として自國の生産物を原料としてその上行はれてゐた。即ちイギリスには羊毛、ドイツには亞麻、フランスには絹と亞麻、東インドから東方諸國にかけては棉花と云ふ風に。機械と蒸氣との應用された結果、分業は擴張されて大工業は自國の土地から解放されて、専ら世界市場、國際的交換、國際的分業に依存するに至つた。』（マルクス『哲學の貧困』一一二頁）棉花、黃麻、石油、彈性ゴムなしにはヨーロッパの工業は破滅しなければならぬであらう。イタリアの全機械製造及自動車工業は輸入の石炭及び金屬を基礎として行はれてゐる。世界貿易が如何なる範圍にまで達してゐるかはその数字が示し出す。中世紀的貿易の繁盛期にゴータルドを越えてある一年に移送された全商品は容易に二つの貨物列車によつて輸送し得たであらう。未だ一八〇〇年には世界貿易の流通額は六十億五千萬マルクであつた。一八二〇年にはそれが六十八億二千萬マルクになつた。一八四〇年には百十五億萬マルク、一八五〇年には百六十六億五千萬マルクに達した。一九〇〇年には五倍以上のぼり、八八五億萬マルクに達した。だが一九一二年には千六百九〇億萬マルクに達した。世界市場に投せられる種々な商品の種類は何十倍にも増大した。尙十八世紀の終りまでには世界的交換において『貴族的』商品が優位を占めてゐた。富裕階級の消費物が優位を占めてゐた。ただバルチック海とヨーロッパの西北岸との間のみ穀物や木材の貨物が取引されてゐた。世界貿易の最大の中心地たるロンドンへは一七九〇年に船についで全部で五十八萬噸（一八九〇年に七百七十

萬九千噸になつた)だけのものもつてこられた。北アメリカにおける棉花生産の尭大なる成長(一七九〇年の收穫は二百萬フントであつたが一八二〇年には一億八千萬フントに上つてゐる)を呼び起したところの木棉工業の發達は英國への棉花輸入の次の如き成長をもたらしてゐる。(一七五一年には五百萬フント、一八二〇年には一億四千二百萬フント)

十九世紀の一世紀間に世界市場に流通する貨物の種類は全く變つてしまつた。北アメリカからは小麦、棉花、石油、銅、南アメリカからは、コーヒー、海馬糞、チリ硝石、肉類、アジアからは小麦、黄麻、棉花、米、茶、オーストラリアからは小麦、肉類、獸毛——そして、凡てこれらの大量の貨物は世界貿易において何萬隻と云ふ汽船を一抔にしてゐる。

一、資本主義下における交通、運輸の諸手段の發達 『農工業上における生産方法の革命は、また特に社會的生產行程の一般條件たる運輸及交通手段の革命を必要ならしめる。フリーエは、小農業及びその家庭的副産業と都市の手工業とを樞軸とする一社會について語つてゐるが、かかる社會の運輸及び交通手段を以てしては最早、擴大した社會的分業や、労働用具並びに労働者の集中や、植民市場などを伴つたマニユファクチュア時代における生産上の欲望を充足させる事は出来ない。そこで此等の運輸交通手段の上にもまた事實上革命が生ずることとなつたのであるが、それと同様に、マニユファクチュア時代から傳へられた運輸及交通手段もやがて、生産の熱病的速度や、生産上の尭大な規模や、多量の資本及労働者を間斷なく一つの生産部面から他の生産部面に移轉せしめる事實や、新たに造り出された世界市場的の聯絡な

は全部で十七時間ですむ。一八一二年にハムブルグからニューヨークに旅行するのに四十八日を要したのに、一九一二年にあつては七日で充分である。郵便は、英國に於てロウランド・ヒルによつて改良された後始めて、一八四〇年からして大工業の要求に適するものとなつた。十九世紀の終りには郵便は殆ど全地表をとらえてしまひ、北はスピッツベルゲンから南はパンタ・アレナス(熱帯)に至るまで規則正しく手紙がとどく様になつた。世界郵便條約によつて、全地表は『一個の郵便王國』となつた。

最初の視力による通信(尙現在に至るまで鐵道の信號器として保存されてゐる)はフランス革命時代にシャツプ兄弟によつて造られた。それは憲法議會側の軍隊が君主側の同盟軍と闘ふのに評價しがたい程の功績をあたえた。しかし十九世紀の三十年代に發明された電信機が始めて——特にモーゼの印字機の使用後になつて——一八四四年以來、世界市場の流通速度の示す要求を満足せしめる通信手段となつたのであつた。この機械によつて始めて世界經濟に於ける生産物價格の設定と平均化は、現在の様な速度を以て行はれる事となつた。電信によつて始めて——一八六五年からは海底電信網も發達しだした——中心諸國と植民地、中央工業、同業とその支部や枝葉とを結びつける關係は緊密に設定され得る事となつた。十九世紀の終りには電信網は約八百萬キロメートルとなつた。十九世紀の七十年代の終りから電話が普及し出した。それは、それ以來、各都市を結びつけるだけではなく、國際的通信機關たるに至つた。現在、電信及び電話網の延長は六千四百萬キロメートルに達し、それは地表を千六百回捲くであらう。無線電信及び電話の發明以來、通信手段の發展史はまた新たな時代に

どを特徴とする大工業にとつて堪え難い桎梏と化するのである。

かくして帆船築造の上に生じた革命的な變化はともかくとして河川汽船や、鐵道や、大洋汽船や、電信などの組織が與えられた結果、運輸及交通手段は次第に大工業の生産方法に適合せしめられることとなつた。(マルクス、資本論、第一卷)既に十八世紀の後半に至つてもイギリスからインドに行く船は、その往復に十八ヶ月から二十ヶ月の期間を要した。此等の船の普通の大きさは三百トンから五百トン(容積)を出でなかつた。此等帆船隊は十八世紀の終りに百七十二萬五千トン位あつた。始めは外輪の、後には推進器による汽船の發明によつて、始めて、これら商船隊の容積量と速力とは非常に増大した。現在、貨物船が一萬トンから一萬二千トンの容積を持ち、そのなかに、四萬トンから四萬五千トン位の巨大な船もある。客船では、速力が一時間四十七キロメートル位であるのは普通の現象である。ノルウエイの統計家、キエルの計算によると、一八二一年における世界の船の容積合計は五百二十五萬トンであつて、そのうち唯の〇・二%が汽船であるとある。一八一四年にはそれは既に三千五百萬トンに上つてゐる。全地表における鐵道延長線は、一八四〇年には七千七百キロメートル、一八五〇年には三萬八千六百キロメートル、一八七〇年には二十二萬一千八百五十九キロメートル、一九一三年には百四十萬四千二百二十二キロメートルに達してゐる。貨物列車の平均時速力は三十キロメートルから四十キロメートル、客車の平均時速は六十キロメートルにも達する。一八一二年にはベルリンからヴイーンまでの旅行には五日を要した。一九一二年には十二時間で済む。一八一二年にはパリまでは九日を要したのに一九一二年に入り始めた。

その商品の安價な事によつて、主として綿製品の安價な事によつて、イギリス人はインドを破産させ、その古い綿工業を滅してしまつた。この『經濟的』手段のうへに彼等は良心のいささかの苛責もなしに『政治的』手段をも加えた。支那には彼等は大砲の力で阿片を買ふ様に強制した。同じくアメリカ人は強制的に、日本人をして、對外貿易のために、一八五四年にその國境を開かした。

一、農村と都市との分離 『哲學の貧困』のなかで、マルクスは次の如く書いてゐる。『ドイツにおいては最初の大規模的分業即ち都市と農村との分離がたてられるためには、まる三世紀と云ふものが必要とした。ただこの都市對農村の關係が變化するに従つて、社會もまた全體として變化するに至つた。單に分業のこの一方面のみを見んとするならば、古代的共和國を取り來るも、キリスト教的封建制度を取り來るも、古代英國とそのバロンを取り來るも近代英國とその綿業貴族を取り來るも、よいであらう。ただ植民地の存在するなく、未だヨーロッパにとつてアメリカの存在するなく、アジアは僅かにコンスタンチノープルを介してのみ存在し、地中海が商業活動の中心たりし處の、十四、十五世紀と、スペイン人、ポルトガル人、イギリス人、フランス人が世界のあらゆる地方に植民地を打ち建てた處の十七世紀では分業は、全く異つた形式、全く異つた外觀を呈してゐるのである。』『資本論』のなかで、マルクスは再びこの思想にたちかへり、つけ加へて云ふ。『商品交換の方法によつて實現せらるるあらゆる商品的な分業の基礎たるものは、都市の農村よりの分離である。社

會の全經濟史はこの對立運動に要約される、とも云ひ得る。

大工業は舊式な農村經濟に終局的な打撃をあたえた。大工業は最も徹底した方法で農民をば鈍重な農村生活の環境からつれ出した。農業の領域において——とマルクスは云つて居る——大工業は最大の革命性を以て作用する。それは次の様な意味で。大工業は舊い社會の支柱、『小作』農民を廢棄して了ひ、そのかほりに賃銀労働者を持つてくる。かくして、社會革命の要求及階級對立は農村に於ても都市と同じ様になつてくる。……資本主義的生產方法は農業と工業との原始的な家族的結合を分離して了ふ。それは兩者の未發達な形態を互ひに結合せしめてゐたのであつたが。

十九世紀の前半において、都市人口が農村人口を犠牲にして如何に急速にその成長を遂げたかは、次の證據によつて明かである。一八〇〇年にはロンドンの人口は九十五萬九千人であつた。だが一八五〇年には二百三十六萬三千人に達してゐる。パリ市においてはは一八〇〇年から一八五〇年に至る間に五十四萬七千人が百五萬三千人に増加した。ニューヨークにおいてはこの同じ時期に六萬四千人が六十一萬二千人に達した。新しい工業中心地——マンチエスタ、バートン、シエーフィールド、ブレットホードの人口は比較にならぬ程より急速に成長した。しかしこの成長も一八五〇年以後の都市人口の成長に比べれば、實に遅々たるものである。

ウキーン	一八五〇年	一九〇〇年
ベテルブルグ	四四四、〇〇〇	一、六七五、〇〇〇
ベルリン	四八五、〇〇〇	一、一三三、〇〇〇
	四一九、〇〇〇	一、八八九、〇〇〇

この收入の半分は人口の八分の一のもの所有である。イギリスにおける株式會社の數は一八八四年には八千九百九十二であつたが、一九〇〇年には二萬九千七百三十に増加した。そして一九一六年には六萬六千九百九十四に達してゐる。これらの諸會社の資本もこれに應じて、一百二十億フランから一九〇〇年には四百十億フランに、一九一六年には六百八十億フランに成長した。

一九〇九——一九一三年の計算によれば、フランスの國富は二千二百五十億フランであり、それは二千一百六十三萬四千八百人の所有者の間に分有されてゐた。このうちで二十萬フラン以上を有する九萬八千二百四十三人のものが六十億フランを領有してゐる。即ち、全國富の約半分にあたる。若し百萬長者をのみとりあげるとすれば、己れの手の中に六百五億フランを集中せしめてゐる一億八千五百八十六人の人々は一億フラン以下の財産の所有者たる九百五十萬人の人々の六百六十億フランよりもほんの少しだけ少く領有してゐるにすぎない。

ロシアでは九百マルク以下の收入を有する八百五十七萬四百十八人の人々は全部一掃にしてもこれより上の部類の收入を有する十四萬六千人の人々に及ばない。一九二三年には十萬マルク以上の收入を有する人々は四千七百四十七人であつた。一九一四年には五千二百十五人に、一九一七年には一萬三千三百二十七人に至つた。

合衆國の國富は一八五〇年には七十一億ドルであつたが、一八七〇年には既に三百億ドルに達し一九〇〇年には八百八十五億ドルに達してゐる。一九一二年には、それは二倍になつて千八百七十七億ドルに達した。そして、ある經濟學者たちの計算によれば、

ミューンヘン	一一〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
ゴッセン	九〇、〇〇〇	一一九、〇〇〇
ライプチヒ	六三、〇〇〇	四五六、〇〇〇
シカゴ	三〇、〇〇〇	一、六九九、〇〇〇
ニューヨーク	六一、〇〇〇	三、四三七、〇〇〇

既に一八五一年には英國の都市人口は八百九十九萬二千人、即ち全人口の五〇%をなしてゐた。だが一九〇一年には二千八百十六萬九千人、即ち七八%に達してゐる。英國の人口が如何に急速に成長したかは、次の數字によつて見られる。一六九〇年には、それは五百萬人であつた。一八〇一年には九百萬人に達した。一八五一年には、千七百九十萬人、一九〇一年には三千二百五十萬人に達してゐる。一八〇〇年に、一立方キロメートルあたり五十八人であつた人口密度が一八四〇年には百〇五人三に達し、一九〇一年には二百十五人に達してゐる。

一三、資本の蓄積 個々の資本家の中への資本の蓄積は二つの方法によつて行はれる。それは労働者から搾りとつた利潤による自動的な増加によつて(資本の集積)、或は、同一の諸資本家達の資本を、株式會社の形態で、後には、トラスト、シンデゲイト、カルテルの形態で結合する事によつて。(資本の集中)

所得税を課せられる收入の總額は一八五六年に聯合王國において三億七千六萬八千八百フランであつたが、一八六五年には三億八千五百五十三萬二十フランとなつた。一八八二年には六億一千四百五十五萬九百七十七フランに、一九一二年には十一億一千一百四十五萬六千四百三十三フランになつた。この數字に税金を課せられない全收入を加へれば、我々は二十二億萬圓と云ふ額を得る。

ば、一九二〇年には既に五千億ドルになつてゐる。一九一七年には五萬ドル以上の年収入を有する人々は一萬九千三百三人と註された。そのうち百四十一人は百萬ドル以上の年収入を有する人々である。加工産業には次の如き資本が投下された。一八九九年には八十九億ドル、一九一四年には二百二十七億ドル。鐵道に投資された資本は一八九九年には百十億ドル、一九一四年には二百二億ドルであつた。

最大のトラストの代表者たちの手中にある有名な銀行——National City Bank——は既に一八七九年に一千六百七十萬ドルの資本を所有してゐた。併し、一八九九年には一億二千八百萬ドル、而して現在は十億ドルの資本を擁してゐる。合衆國の人口は全世界の人口の六%であり、土地は全地表の七%であるのに、この資本主義的共和國は、全金産額の二〇%、全小麦産額の二五%、全銅鐵及び鐵産額の四〇%、全鉛産額の四〇%、全銀産額の四〇%、全亜鉛産額の五〇%、全石油産額の五二%、全銅産額の六〇%、全綿産額の六〇%、全石油産額の六〇%、全穀物産額の七五%、全自動車生産額の八五%を産する。あらゆる此等の生産は少數のトラストの手中に集中されてゐる。これらのトラストの首領には二十人の百萬長者——ロックフェラー、モルガン、フォード、マク・コーミック、アーマア——がたつてゐる。

一四、自然力の資本主義と人類への從屬 一八四八年以前において自然力の人類への從屬は比較的徐々に行はれた。空氣及び水力の最良の利用と並んで、蒸氣力の利用が行はれ出した。そして、それは特にワットが改良された蒸氣機關を發明して以來、盛

んになった。併し一八二〇年以來、電氣現象の研究の方面で発見が相ついで行はれた。(エルステッド、ジイベック、フアラディ)そして、十九世紀の終りの三分の一には既に電信と電氣鍍金術とをのぞけば、電氣力の工業的な利用が行はれてゐた。そして全然新しい工業部門——電氣技術——がおこされた。

化學の農業への應用、云ひ換えれば、農業化學は、その成果について英國の化學者、ヘンリー・デービー(一七七八—一八二九)の他には、ドイツの學者、ユスツス・リービヒ(一八〇三—一八七三)に負ふところが一番多い。彼の名著『農業及び生理に應用したる化學』は一八四〇年に初版を出した。マルクスは『資本論』の中で、自然科学の立場から近代的農業の否定的方面を展開したのはリービヒの不朽の功績の一つであると云つてゐる。(譯註新潮社版資本論六六六頁を見よ)『資本制生産の下においては大きな中心地に集積される所の都市人口が益々優勢となつてくるのであるが、これがため、一方には社會の歴史的動力が蓄積されると同時に、他方には人類と土地との間の代謝機能(換言すれば、人類が衣食上の資料として消費した土地成分をば土地に復歸せしめる機能)は破壊され、かくして、土地の永久的肥沃を維持するために必要な自然條件が破壊されてしまふことになるのである。同時に、また、都市労働者の肉體上の健康と、農村労働者の靈性上の生命とが破壊されることにもなる。(譯註新潮社版資本論六六五参照)

リービヒは、土地が消耗する原因はこうした人間と土地との間の代謝の破壊であり、代償なしに土地から植物にとつて必要な礦物質を抽出してしまふ事である、と云ふ事を最初に指摘した人たコルタルからして、次々と新しい多くの、人工的な有機染料が抽出されるに至つた。

マルクス及びエンゲルスが云つてゐる世界の隅々までもの開拓と云ふ事は、一八四八年以前においてはまだほんの手がつけられただばかりと云ふ段階にあつたところの過程であつたにすぎない。それは、まづ、合衆國に行はれた。合衆國は、一八一五年以來、やつと綿産國たるに至つた。一八〇〇年には七萬三千捆が産出され、一八四〇年には既に百三十四萬八千捆が産出されてゐる。この過程は、合衆國が自國の穀物生産をば驚くべき範圍にまで發達させた一八五〇年以後には一層比較にならぬほど急速に進んでゐる。小麦の生産は一八四〇年にはまだ八千四百八十萬ブツセル(註譯)であつたが、一九〇一—一九〇五年の五ヶ年間の年平均は六億六千二百萬ブツセルに上つてゐる。一八四八年の全穀物生産額は三億七千七百萬ブツセルであつた。一九〇一—一九〇五年には年平均二十一億萬ブツセルの産出高になつてゐる。アラスカ、カナダ、南アメリカ、オーストラリア、シベリア、アフリカの開拓は、既に一八五〇年以後に至つて始つたのである。

(譯註) ブツセルは二斗一合。

河川を舟行に便ならしめると云ふ事は十八世紀の終りの三分の一時代に至るまでは、舊式な手段によつて行はれてゐた。英國においては運河の建設は一七五五年にやつと始められたに過ぎない。フランスにおいても、四通八達した、至る處に通じた運河の網が發達し出した。しかし、その技術は、尙ほ河床を直接改良すると云ふ仕事はやり終えなかつた。河川自身を運河にすると云ふ

である。都市と農村との分離と云ふ事を特徴の一つとする資本主義的農業の特徴は、土地から引きあげられたものが肥料のかたちで再びかへされないと云ふ事である。植物性の生産物が殆ど全くその生産された場所が必要される自然經濟においては、土地の回復のためには自然の肥料で充分であつた。農業生産物の莫大な量を需要する大都市の發達した時において事情は全く一變した。自然的な肥料の不足するがために、人工的な肥料が必要とされ、土地から引きあげられた礦物質を土地にかへしてやる事が必要となるのである。リービヒの合理的肥料に關する學説はこうした事情に基いてたてられた。その學説によれば、植物は磷酸、加里、窒素を充分にあたえられねばならないと云つてゐる。そこで、四年代から種々な肥料の需要が生じた。——磷酸、過磷酸、骨粉、加里鹽、智利硝石、それから、一八七八年には、鋼鐵生産の新方法——煉鐵礦から精煉する方法——が發見された。そしてその後は、この製造した後の粕が、肥料に用ひられるに至つた。

化學の工業への應用——化學工業は十八世紀の終りからして發達し出した。ルブランは曹達を得た。そしてこれは、最も多くの工業諸部門における最も重要な材料の一つたるに至つた。石炭の乾溜によつて、瓦斯の製造が始められた。石鹼及びステアリン製造の發達に對し、一つの刺激となつたところの脂肪工業が新たに發達してきた。しかし化學工業の新しい發展時代が始まつたのは、共產黨宣言の公刊された以後である、五十年代にすぎない。同様に紡績工業部門においても、今まで織布及び紡績を革新して行つた産業革命は、一八四八年以後になると、遂にその最後の段階にまで達した。それは染色業をまきこんで了つた。石炭からとつ

事は十九世紀の三十年代の終りに至つて始めて發達したに過ぎない。その時に至つて始めてしつかりした水堰が發明され、容易に、流れの急な澤山の水を通じ得る様になつた。濠によつて大きな屈曲部や水路を眞直ぐにする事、水堰によつて河川をよくする事、浚漕機によつて河床や河口の閉塞と戦ふ事は、河川の舟行状態を非常によくした。そこで再び河川はよく鐵道と競争し得るに至つた。

一五、恐慌の理論及び歴史に對して 恐慌の詳細な叙述はエンゲルスによつて既に、その著書『英國労働階級の状態』中にあたえられてゐる。エンゲルスは恐慌が資本主義的産業及び競争の本質そのものから起るのだと云ふ事を指摘してゐる。『近代的な生産及び生産物分配の無秩序的制度のもとにおいては、直接、需要を充すためにあらずして利益のための生産のもとにおいては、各自が、各個に冒險と危険をおかして仕事をし、富裕になつて行くと云ふ制度のもとにあつては、いかなる時にも停滯によつて脅威されざるを得ない。……工業の發達せる初めにあつてはこれらの停滯は何等か一つの産業部門か、一つの市場に限られてゐた。併し、競争の集中化する作用によつて、一つの生産部門において、仕事をうばはれた労働者は最も容易に修得し得られる部門をえらんで他の産業部門に投ずるし、また、一つの市場で賣られない商品は他の市場へ投ぜられるので、同じ様な小さな恐慌は次第に相接近して來て、週期的にくりかへされる大きな恐慌の一般なものなかに合體せしめられる。かかる恐慌は通常、短かい繁盛期と一般的な好景氣の後に五年目毎に襲來してくるのである。』

他の個所では彼は五六年間の週期と云ふ事を云つてゐる。併し

『共產主義の原理』では五年或は七年の週期と云ふ事を云つてゐる。かくの如く、前世紀の初めからして産業の状態はたまなく繁盛期と危機との間を動搖してゐた。殆ど同じ様に五年或は七年毎に恐慌が襲來した。そしてそれはいつも労働者の非常な貧困化と、一般的な覺醒及び現存秩序すべてにとつての最大な危険ともなつた。』

やつと、一八四八年以後に至つて始めてマルクスは、その著書『資本論』を書きあげて、次の結論に到達したのであつた。即ち、産業が、通常の進行状態、繁盛期及び恐慌を経る期間の週期は、五年や七年ではなく、十年、十一年の年月であると云ふのだ。『機械工業が非常に深く根を下ろして、國の産業の上に主裁的な影響をもたらすやうになり、且、それによつて、外國貿易が内國貿易に對して優越する様になり、世界市場が己れのためにアメリカ、アジア、オーストラリアに莫大な領域を開拓し、そして、遂に、互ひに競争するに至る。工業國民が莫大な數にのぼるに至つた時以來——かかる時以來よりして、毎度更新されるかの週期が起る。その週期のつづく一段階は數年間にのぼり、そして、それは、常に、一つの週期を完成させ、新しい次の週期の始りとなる一般的な恐慌を誘導する。現今までは、かかる週期は普通十年から十一年であつた。併し、我々はこれ等の數字を不變なものと思ふべき何等の根據も持たないのである。』國民的な境界を越えた最初の恐慌は一八二五——一八二六年に起つた。この恐慌には一つの投機の熱病が先行した。その主な刺激となつたのは南アメリカ市場の開始であつた。次の一般的な恐慌は、一八三六——一八三七年に起つた。この恐慌にはイギリス工業のすばらしい繁盛と、輸出

の増加、特に北アメリカへの輸出の増加が先行した。第三の恐慌は一八四七年に起つた。その後には資本は特別の熱心を以て鐵道の建設にとりかゝつてゐた。

鐵道建設の中止の結果として五萬人以上の鐵道労働者が失業した。その他、綿、鐵道、石炭産業も非常な苦痛をなめた。英國やアメリカや、ロシアを除く全ヨーロッパ大陸をまきこんだところのこの恐慌の最高潮にあつて、マルクスは共產主義者同盟の委託により、宣言を書いてゐたのだ。そして、この恐慌はまた一八四八年の革命的爆發を準備したのである。

一六、プロレタリアートの歴史的發展
プロレタリアー——水呑百姓、子負ひ蟲——と云ふ言葉はラテン語の Proletarius から出た言葉である。唯だ子孫を、子供等を所有し、繁殖するに過ぎないものと云ふ事を意味する。最初、プロレタリアはローマの住民中の最も貧困な階級であり、軍務及び納税の義務を免除されてゐた。後には軍隊にはいる事を許され、國家から軍事上の支給を受けてゐた。ローマの農民が既に零落してしまつてゐた内亂時代及びその後のローマ帝國の建設時代には軍隊の核心をなしたものはこれであつた。平和の時にあつては、國家の費用によつて養はれ、穀物の食扶持を受けてゐる。ローマのプロレタリアとヨーロッパのプロレタリア、無宿者、宿なしの水呑百姓との間にはその名稱をのぞいては何等の共通のものもない。マルクスが次の様に云つたのを忘れてはならない。『古代ローマにおいては階級闘争は特權を有する少數者の間だけで、即ち自由な富裕人（オプティマト、貴族）と自由な貧民（平民、プロレタリア）との間だけで行はれた。そして、その場合住民中の生産を行ふ廣大な大衆、即

ち奴隸は闘争者達にとつては單に受動的な踏臺たるに過ぎなかつた。人々はシスモンデーの的にあつた註釋を忘れてゐる。ローマのプロレタリアートは社會のおかげで暮してゐた。しかるに、近代社會はプロレタリアートのおかげで暮してゐる。』

賃銀労働者の階級を意味する「プロレタリアート」と云ふ言葉は漸く十九世紀の前半になつて用ひられ出したに過ぎない。エンゲルスはその著『英國労働階級の狀態』——十九世紀の四十年代までに英國プロレタリアートの發達の詳細な描寫はこの著書によつて始めてあたえられたものである——への序文の中で次の様に云つてゐる。彼は、『労働者、プロレタリア、労働階級、非所有階級、プロレタリアート』と云ふ如き言葉を同義語として用ひた、と。他の個所で彼は次の如くに云ふ。『プロレタリアートとは如何なる資本からの収入にもよらないで、特に自分の労働（労働力）の販賣によつて生活手段を得てゐる社會階級である。プロレタリアートとは、その階級の幸福も零落も、生も死も、あらゆるその生活が労働（労働力）に對する需要の如何に、即ち事業の沈滞と復活に、無秩序な競争の動搖にかゝつてゐる階級である。これこそ十九世紀の労働階級である。』賃銀労働者階級、或ひはプロレタリア階級は英國においては既に十四世紀の後半に發生してゐる。約百五十年間の間にプロレタリア階級は住民中のほんの少部分を占めたに過ぎず、且つ次第に農奴制的な從屬から自由になりつつあつた職人や農民からもきはめて徐々に分離しつつあつたに過ぎなかつた。

最初の間、プロレタリアートは、その社會的狀態からしては、殆ど職人や農民からして區別されるどころがなかつた。併し資本

主義が發達するにつれ、プロレタリアートもだんだんに他の者達と區別される様になつてきた。プロレタリアートと農民や職人ととの區別は次の點にある。プロレタリアートは生産手段を奪はれて居り、そしてそれ故に他人の生産手段を用ひて労働する。そして農民や職人の如くに自分の經營としてではなく、他人の經營として、資本家の經營として労働する。プロレタリアートは自身自身を、自分の労働力を商品として賣り、そして労働賃銀を受けとる。

資本主義の年齢がまだ若かつた時代には、貨幣資本、商業資本が工業資本に變ずる事が、農村における封建的秩序、都市におけるツンフト的秩序によつて抑壓されてゐた時代には、新しいマニユファクチュアールがツンフトの支配の手のとどかない様な都市の流竄地に逃げ込んでゐなければならなかつた様な時代には、賃銀労働者、プロレタリアは、彼等にとつて敵對的な立法にもかかはらず、資本の蓄積によつて起る彼等に對する需要のあらゆる増加を享受する事ができた。寺院の所有地がち奪され、國有の采地が割取られ、共同體の土地が收奪されるに至つた十六世紀以後に至つて始めて、何千、何萬と云ふ人口が生活手段から切り離され、街頭に投げ出された。そして賃銀労働者の状態がまたたく間に悪化して行つた。マニユファクチュアールの發達、獨立して事業を起すに必要な資本額の増加は獨立した主人の状態に至り得べき彼等のあらゆる希望を奪つてしまつた。なんとなれば手工業（メスリ）のものがいまや次第に資本主義的經營にその地歩をゆづりつつあつたからである。マニユファクチュアールが漸く次第に——十七世紀の後半より十八世紀の後半までの間に——都市や農村の産業を占有し

つたつた云ふ事は事實である。併し尙ほプロレタリアートは次第に一個の他と區別されべき階級となりつた。つたつたとは云え、その數からすると職人や家内労働者にとつてゐた。始めて都市の手工業や農村の家内工業に決定的な打撃をあたえたのは大機械工業であつた。大機械工業が始めて、職人や家内労働者をして『むかしの状態』にたちかへるあらゆる可能性を奪ひ去り、それら無数の者達をプロレタリアートの列中に投げ込んだのであつた。大機械工業が始めて、商品市場へ己れ自身の筋肉を持ち込むところの、且、競争の渦中に投げられたところの人々の眞正の階級をつくりあげた。

『競争は——と、エンゲルスは云ふ——近代プロレタリア社會に存在してゐる萬人の萬人に對する戦争の最も完全なる表現である。この戦争——生存のための戦争、存在のための戦争、凡てのための戦争、従つて、必要ある場合には生きるか死ぬるか戦争——は、社會の各階級間に起るだけではない。それこれの階級の内部の各成員間にも亦起るのである。ある者は他の者の邪魔をしてゐる。そこであらゆる人々は自分の邪魔をしてゐる者をおしのけて、その位置にとつてかはらうとする。ブルジョアも、労働者も仲間同志競争する。機械機械に向つて働いてゐる機械工は手工業的職人と競争する。仕事がないか、或は、低い賃銀を受けてゐる者は、仕事を持つてゐるか、高い賃銀を受けてゐる他の者と競争する。そして、その人間をおしのけやうとする。この労働者の仲間同志の競争は労働者の近代的な状態のもとにおける最悪の現象であり、ブルジョアの手の中にあるプロレタリアートに對する最良の武器である。』

段となる。蓋し機械は労働者を労働から解放する事なく、寧ろ労働からその内容を奪つてしまふのである。』(マルクス、資本論、四一八—四一九頁)(譯註)

(譯註) シシファスとは地獄の刑場で山の上に轉ばし上げても轉ばしあげても再び落ちてくる岩石を上げる事を命ぜられたギリシヤの王、日本で云へばさいの河原で石をつむの類

(譯註) 新潮社版『資本論』五四八頁参照。

機械生産は未成材料、半成品、労働要具の量を増加し、産業部門の多様さを豊富にした。これらの未成材料、半成品の造出は無数の新しい部類、種類の間に配分された。そして、それに應じて職業の數も増加した。獨逸の統計によると一八八二年には職業の數は六千であつた。しかるに一八九二年になると、同じ統計が職業の數、約一萬をあげてゐる。

かくして、その資本主義的形態を以つてした大工業は化石化した専門部門を有する舊い分業を再生産するだけではない。それはまた専門部門の數をふやすのである。大工業は局部的な労働者を一層悪い位置におとすのである。労働者を全く行きあたりばつたりの偶然な機會と云ふものに從屬さしてしまふ。労働者の物質状態のあらゆる保證と確實性を失くしてしまふ。

一八、労働と労働力 マルクス及びエンゲルスは宣言の中で彼等が後に至つて棄て去つたところの術語を用ひてゐる。その量の如何に、つて商品の價値を決定するところの労働が、商品としての労働と區別した上で用ひられてゐる。商品労働と云ふ術語のか

一七、マニユファクチュア時代及び工業時代における分業

職人は種々な局部的な作業を順々に行ひ、そしてこれらの諸作業があつまつて一個の生産物の生産が行はれたのであつた。ツンブト的な手工業の最も繁盛した時代においてさえ、一産業部門内の小分けの數は尙大した數にはなつてゐなかつた。マニユファクチュアの發達とともに始めて技術上の分業が發達してきた。そして其處では労働者は單に一個の局部的作業を遂行する様になつた。しかしマニユファクチュアの支配した時代においてさえも、分業、職業の細分は、ある少數の産業部門内のみ發達したに過ぎなかつた。その上、あらゆる生産の根本をなすものは尙手でする労働であり、労働者自身の熟練と技巧とであつた。

『マニユファクチュア及び手工業においては、労働者が道具を使用するのであるが、工場においては、機械に労働者が仕へるのである。前者において労働要具の運動の起點となるものは労働者であるが、後者においては労働要具の運動に労働者が従つて行かなければならない。マニユファクチュアにおいては、労働者は生きた機構の組成器官となるのであるが、工場においては死んだ機械が労働者から獨立して存在し、労働者は生きた附屬物としてこれに併合されてしまふ。』(同一の機械行程を不斷に反覆すると云ふ限りの労働苦の陰鬱な年中行事は、宛らシシファスの労働(譯註)の如くであつて、労働の重荷はシシファスの轉るばす巖と同様に焦悴した労働者の上に絶えず轉るげ戻つて來るのである。『機械労働は神經組織を極度に疲勞せしめると同時に、又、筋肉の多岐な作用を抑壓し、身心兩面における一切の自由な活動を沒收してしまふ。労働は輕易になつても、それですら却つて苛責の手

はりにマルクスは後に至つて労働者の労働能力、生産物を生産する能力を意味するために、労働力と云ふ術語をもちひた。労働者は生産手段を奪はれてゐるので、自分の能力を仕事について發揮することが出来ない。そこで市場に行き自分の労働力を商品として販賣する。マルクス及びエンゲルスは同様に労働商品、換言すれば労働力の價値が何によつて決せられるのであるか、と云ふ問題についてもその見解を變更した。エンゲルスは『經濟學批判の大意』といふ著書の中でも、また『英國労働階級の状態』といふ著書の中でも、『労働』の價値は任意の商品の價値が決められるのと同じ法則によつて、即ちその生産に要した費用によつて決せられるのだと云ふ事から出發してゐる。そして、『労働』にとつて、かかる費用をなすものは労働者をして労働能力を保たしめるに必要な生活手段である、と云ふのだ。かくて『労働』労働力の價値換言すれば労働賃銀なるものは生活を維持するに必要なものの最小限となる。マルクスも亦この見地に立つてゐた。『哲學の貧困』や『賃労働と資本』の中において彼は労働賃銀をかくの如くに説明してゐる。『かくて單一なる労働(労働力)の生産費は總計すると、労働者の生存費及び生殖費となる。この生存費及び生殖費の價値が賃金を形成する。かくて決定された賃金は、これを最低賃金と名づける。賃金のこの最低限は、一般に生産費による商品の價格決定と同じ様に、一々の個人に當はまる譯ではなくてただ種族に當はまるだけだ。個々の労働者は、數百萬の労働者は、自ら生存し且つ生殖し得るに十分なものを受けてはゐない。けれども全労働者階級の賃金は、その變動のうちこの最低限に合致する。』(賃労働と資本)

この公式は後に至つてラツサーがとつた。しかし、ラツサーに屬するところは、唯だ彼の命名した賃銀の『鐵則』と云ふこの法則の煽動的な名稱だけにすぎない。

『資本論』のなかでマルクスは次の様に書いた。『労働力の価値は、他のあらゆる商品の価値の如くに、それを生産するに必要な労働時間によつて決定され、そして労働力の生産のために必要な労働時間は労働者がそれによつて、以て自己の食料、衣服、燃料、住居、等々の要求を満足せしめる生活手段の生産に必要な労働時間に歸する。』と。しかしながらこれらの必要な要求なるものの範圍は、彼等の満足的手段と同じく、それ自身歴史の産物であり、大部分は國々の文化的水準の如何に、とりわけ、自由な労働者達の階級が如何なる事情のもとにあるか、従つて如何なる、習慣及生活要求を持つてゐるか云ふ事の如何にか、つてゐるのである。かくて、他の商品とは反對に、労働力の価値決定には歴史的及び道德的要素が含まれるのである。労働力の最低、云ひ換えれば、最小限的限界をなすものは、物理的に必要な生活手段の価値である。もし労働力の価格が、換言すれば、労働賃銀がこの最小限にまで落ちてくるとすれば、それは價值以下に下る事になるのである。なんとなれば、かかる事情の下においては、労働力はやつと不十分な程度において維持され得るにすぎないからである。マルクスは、さらに、資本主義社會においては、労働者は一日のある種の部分を働く事に同意する場合にのみ自分自身の衣食のために働く事を許されるのだと云ふ事を示してゐる。この無料で働く時間で彼は資本家のために餘剰價值をつくり出す。マルクスは資本家が、勞

(註譯2) 新潮社版資本論五四九—五五〇頁参照。

マルクスはこの個所でエンゲルスを引用してゐる。エンゲルスは、この文の書かれた二十年前に工場の専制のはつきりした特徴づけを行つてゐる。

『ブルジョアによつて強制されたプロレタリアの奴隷状態は、何處においても、工場制度の下におけるよりもヨリ明瞭な形を採つて現れる事はない。其處では、法律上にも事實上にも、一切の自由が消滅してしまふのである。労働者は午前五時半には工場にきて居らなければならぬ。若し二三分でも遅刻すれば罰を受け、十分遅刻すれば、朝飯の済むまで工場の内にいる事を許されず、一日の賃銀の中から四分の一だけ差引かれるのである。(彼は十二時間労働日のうちから唯二時間半だけ働かなかつたに過ぎないにもかゝらず) 彼れは命令によつて、飲食し、睡眠しなければならぬ。……彼れは暴虐な鐘の響きによつて、ベットから呼び起され、朝食や晝食から呼び立てられる。處でまづ、工場の内部はどんな工合になつてゐるか? 其處では工場主が専制立法者である。彼れは欲するままに工場取締規則を制定し、欲するままに法典を變更し補足する。そして彼れが愚劣極まる補足をした時、法廷は労働者に向つて、汝等は任意にこの契約を結んだのであるから今それを履行すべきは當然であると云ふ。』

舊い革命前のロシアにおいてこの工場専制がいかに厭ふべき形態をとつてゐたか、經濟勘定にせまられた我が自存のロシアの工場主達が如何に典雅な技巧をこらして罰金制度をこしらへあげ

働時間の増加によつて、或ひは労働の緊張度の強化によつて、或はまた、その生産性の増大によつてこの無料の労働を増大し得る様になり、且、かくして、次第次第に労働力の價格、労働賃銀を、その實際の價值以下に低下し得る様になる諸條件を説明してゐる。

一九、工場の専制 『労働要具の劃一的な進行に技術上労働者が隷屬せしめられ、且つ労働總體が男女老幼様々な個人によつて構成されるやうになると、茲に兵營的な規律が造り出される事になる。そしてこの規律はさらに完全な工場規律制度となり、前に述べた監督上の労働を充分に展開せしめて、筋肉労働者と労働監督者、産業上の兵卒と下士とへの分業を生ぜしめる。……ブルジョアは他の方面では權力の分立を歓迎し、代議制度に至つてはさらに著しく歓迎する所となつてゐるのであるが、工場法典においては、資本は私的立法者の如く、專横をもつて労働者に對する獨裁権を確立するのであつて、かかる工場法典は實に、大規模の協業が起り、共同的の労働要具、殊に機械が採用されるにつれて必要となる所の、労働行程の社會的規則について與えられた資本主義的の戲畫に外ならないものである。奴隷驅使者の鞭に代つて、監視人の刑法典が現れる。一切の刑罰が、結局は罰金と賃金値下げとに歸するものであることは論を俟たない。そして工場のリクルダス(譯註1)たちの立法的聰明は彼等の造つた法律の遵守よりも寧ろ違犯の方が、出来るならば自己にとつてより有利のものとなるやうに仕組むのである。』(マルクス、資本論、四十九頁)

(譯註1) ギリシャ(スバルタ)における有名な立法家。

たか、それを最もよく示し出すのは、一八九七年に出版されたレーニンのすばらしい小冊子『罰金に關する諸規則の説明』である。

二〇、女子及び幼年の労働 『人間の筋力を不要ならしめる方面から觀察すれば、機械は筋力なき労働者、換言すれば、身體の發達未熟で、しかも四肢はヨリ柔軟な労働者を充用せしめうる手段となるものである。されば婦人労働及び幼年の労働は、資本制的機械充用の最初の言葉であつた! 労働及び労働者に對するこの巨大な代用具は、忽ちに老幼男女をとはず、労働者の一家をあげてこれを資本の直接的支配の下に編入することにより、賃銀労働者の數を増大する一つ的手段と化した。資本家のための強制労働は、單に小兒の遊戯の位置を奪ふのみではなく、また自家の必要のためにする自由な、合理的限界を超えざる家庭的労働の位置をも奪つてしまつたのである。』(マルクス、資本論)(譯註)

(譯註) 新潮社版資本論五〇七—五〇八頁参照。

今や、全家族を養つてゐた一人の成年労働者にかはつて全家族の者達が資本家のために働くやうになつた。男子は屢々賃銀を全然奪はれてしまつて慣れた産業部門以外に労働を求めたり、子供に養つてもらつたりしなければならなかつたりする様な破目になる。英國の紡績工業において、既に一八六一年には千人の従業労働者に對し、綿工業においては五百六十七人の女子、(一九〇一年には六百二十八人になつた)毛糸・織工業においては四百六十一人

(二九〇一年には五百八十二人になった) 絹物工業においては六百四十二人(一九〇一年には七百二人になった)の女子が加つてきた。十個の工業部門(製陶、化学、製材、紡績、食料品等)において一八四一年には百三萬六百人の男子に對し四十六萬三千人の女子が、一八九一年には百五十七萬六千一百人の男子に對し百四十四萬七千五百人の女子が働いてゐた。獨逸では百人の労働者に對し、紡績工業では、一八八二年には三十八人、一八九五年には四十五人、一九〇七年には五十人の女子が加つてきた。衣服の製造では、一八八二年には四十人、一八九五年には四十五人、一九〇七年には五十一人の割合になつてゐる。

二一、労働者は「労働力の使用価値を」資本家に貸しつける

資本家的な生産の仕方の行はれる總ての國々においては、労働力は賣買契約で確定されてゐる期間中すでに機能した後で、例へば各週の終りになつて始めて支拂はれる。それ故に、労働者はいつでも労働力の使用価値を資本家に前貸してゐるのである。彼等は労働力の價格の支拂を受ける前に、それを購買者の消費に委ねるのであり、従つて労働者がいつでも資本家に信用貸をしてゐるのである。かかる信用貸が決して空疎な妄想でないといふことは、信用貸になつてゐる賃銀が資本家の破産に際し時折取れなくなる事がこれを證明するばかりでなく、もつと永續的な諸結果の一系列がまたこれを證明する。

この個所に對する評註の中でマルクスは商店主達が如何に労働者の困難な状態をうまく利用して行くか、また如何に高利貸的な手段を以て労働者に貸しつけられた信用を支拂はせるに至るか、を示す證據が引用せられてゐる。

と數量が増加すればするほど、資本が増殖すればするほど、その度合に従つて、その利子は益々下落すると云ふ事、従つて小資本の利子に衣食する者は最早之が利子によつて生活することが出来なくなると云ふ事、従て又彼等は自ら事業を企て、小工業者の列に加はり、斯様にしてプロレタリアの候補者の數を増加するに至ると云ふ事、總て此等の事も亦説明を要せざる所である。』(マルクス、「賃労働と資本」)

二三、労働者の資本に對する反抗形態 資本主義社會は労働者をなげ落して商品にしてしまつた。この状態に對する反抗のみが、即ち資本主義及びその體現者たる資本家に對する闘争、ブルジョアジーに對する反抗と憎惡のみが労働者をして己れの人間の價値を保存せしめてきたのである。エンゲルスは云つてゐる。

『この反抗の最初の、最も粗野にして最も効果の少き形態は犯罪である。労働者は缺乏と貧窮のうちに生活し、他の人間が彼よりもよく生活し得られるのを見る。労働者は知る。なぜ社會のため、富裕な意欲者よりも多くのあらゆる事をやつてゐるこの労働者がこんなに嫌ふべき状態に生活せねばならぬのか、を。貧窮がこれに加はると労働者は財産に對する産れつきの尊敬の念を失つて、盜略する事を始める。かくて、工業の發達と共に犯罪の數も増加するに至る。年々、つくりあげられる捕縛者の數は加工され得べき綿の粗數とある種の關係を有する。併し労働者はやがて、すぐと、盜略が無駄なのを知る。犯罪者は唯單に個人々として現社會制度に對して盜略によつて反抗し得るに過ぎない。社會の全權力は各人をば各個に攻めたてる。そして、その極度に優越せる者によつてその個人をおしつぶしてしまふ。加ふるに盜略と

労働者が二週間に一回か、甚しきは一月に一回しか労働賃銀を受けとらない様な時には、労働者にとつて、状態はもつと悪化する。労働者は高められた價格を支拂はねばならず、商店主に事實上束縛されてしまふ。この商店主は例へば蜘蛛の様にあらゆる血液を労働者から吸ひとつてしまふ。労働者の受けとる生産物は常に品質のおとつた品物であるか、單に、偽造品であるかである。そこで、正に十九世紀における技術上の進歩と共に、全社會的消費商品の偽造と云ふ事がかくも大規模に行はれるに至るのである。同じ様な原因が労働者をば、家屋所有人に對する極端に困難な從屬状態に置いてしまふのである。家屋は悪ければ悪いほどそれからのあがり高は多くなる。そして最も高價な借家は貧民達の借家である。』これらの窮迫せる鐵夫達は——と、マルクスは云ふ——「家屋投機業者達によつて、最小の失費を以て最大な利潤を搾取せられるのである。それはボトンの銀鐵夫が曾て搾取されたよりも甚しい。』

二三、小ブルジョア及び中ブルジョアジーのプロレタリア化

『加ふるに労働階級へは、社會のより上層の者がこれに落ち込む。小企業者及び小資本の利子によつて生活しつつかある多勢の人が茲に落ち込んで来るが、これらの人々は、彼等の腕をば労働者に腕と並べて差し出す以外、他に策を有せざる者である。斯様にして、労働を求むるため空に擲げられる腕の森は益々繁つて行くが、腕そのものは益々やせて行く譯である。益々大規模に生産することが、即ち、大企業者であつて小企業者ではないことが、成功の第一條件の一つである。其の戰爭において、小企業者が勝つて制することの出來ぬのは、勿論、自明の理である。資本の分量

云ふ事は最も非文明的な、最も無自覺的な反抗形態であり、且、それ自身が、たとえそれが労働者達によつて是認せらるるにもせよ、労働者達の社會的意志の一般的表现とはなり得ないのである。殆ど同様な事を次の如き同じ種類の他の反抗形態についても云ひ得られるのである。それは資本主義發達の初期に見られるところである、工場主、監督等の殺害である。』(英國における労働者の状態)

聚合的な反抗の最初の形態は工場の一揆であつた。それは財産、特に機械の破壊をもなつた。機械に對する労働者のかかる闘争は機械の發明と共に始まる。しかしそれが大衆的な闘争となつたのは十九世紀の始めからにすぎない。ラッダイト運動なる名稱の下に機械の組織的な破壊が一八一一年にノーチンガム、ヨークシャー及びランカッシャーに起つた。ノーチンガムではそれは新しい靴下織機に對して向けられた。神話的な人物である「ラッダイトの首領」なる名前で工場主に對する暴力行爲が行はれ、工場財産が破壊され、高價な機械がこなごなに粉砕された。「ラッダイト」に對しては警察も無力であつた。政府は軍隊を動かした。そして労働者を徹底的に機械に向つて馴化するために、機械の破壊に對しては死刑を以て脅威する法律が制定された。この法律に對し、有名な英國の詩人バイロンは、貴族院において反對した。その演説はノーチンガムの労働者の窮乏のはつきりした光景を描き出す。運動は併し一八一二年にも盛んであつた。一八一三年の一月には三人のラッダイトが絞罪に處せられた。しかし一週間の後には織物機械の發明者たるカートライトの工場に向つて攻撃が行はれ、そのために十四人の人々が絞罪に處せられた。煽動者を

使つて政府は組織の痕を見付けだす事に成功した。産業の復活、労働者に機械の破壊の無意味なことを説明したコベットの煽動、労働者の間における意識の發達がやがてまもなくラッダイトの運動を終息に至らしめた。事實併し、この反抗方法はより自然發生的な形態でその後も尙用ひられた。特に新に機械が持ち込まれた新しい産業部門に於てはそうであつた。例へば、三十年代の始めにおいて農業労働者はデヨーク・スビンガ——これはラッダイトの首領と同じ様な神話的な人物である——の名前で、組織的に『赤い雄鶏』を放ち、そして自分達の主人の倉庫や乾草を焼いて廻つた。ドイツでは、一八四四年のシレジアの織物工の此種の争亂が特に強い印象を残した。これは、マルクスの友人なるウキルヘルム・ウオルフによつて書かれ、後にハッブトマンの有名な戯曲——『織物工』——の主題となつた。我がロシアにおいては工場財産の破壊をもつた工場一揆は十九世紀の八十一—九十年代に起つた。『労働者が機械と機械の資本主義的な適用とを區別し、そしてそれと共に己れの攻撃をば、生産の物的手段よりして、彼等を搾取する社會的形態に向ける事を知る様になるためには一定の時と經驗とを要するのである。』マルクス、「資本論」

二四、プロレタリアートの精神的採取 イギリス及びフランスのブルジョアジーは十九世紀の二十年代及び三十年代において労働者の指導者たる役割をやつた。そして労働者を自分自身の敵に對して利用した。『一方において最も巨大な工業がやつこの時期に至つてその包衣から抜け出た。一八二五年の危機を以つて始めて大工業の近代的生活の週期的循環が始つたのだと云ふ事情からしてもこの事は知られるところである。他方において資本と労働に對して一刺激をあたえた。労働階級はその後に至るまではブルジョア諸黨の急進的な一翼たる役割をつとめてゐたのに過ぎなかつた。』

二五、労働組合運動の生成と發達 労働階級の労働組合組織の發達過程を理論的に説明しようとする最初の企圖はエンゲルスの行つたところである。既に一八四五年に彼は當時の經濟學者や社會主義者と異つて、トレード・ユニオン（労働組合）ロシア語のプロフ・ソユーズ（職業組合）は労働者と企業者間の闘争の必然的結果であると云ふ事、且、それらは労働階級の階級的組織の本原的形態であると云ふ事を示し出した。最初、これはストライキ運動の過程中に發生した一時的な結合であるにすぎなかつた。法律が労働者のあらゆる結合、あらゆる團體を禁止——特にフランス大革命の諸事件の影響をうけて一七九九—一八〇〇年には法令が發布されたので——したので労働者は秘密結社をつくつた。

英國の労働者は、急進的民主主義的ブルジョアジーと共に行つた、結社権のための頑強な闘争の結果として、大臣、シドムットの反動的な『六法令』を呼び起したところの一八一六年、一八一七年、及び一八一九年等のいくたの革命的進出の後に一八二四年になつて結社の権利を得る事に成功した。翌年それは若干の制限を受けた。とは云え、労働者は次第に結社権を得るに至つた。

『一切の労働部門において今や各労働者をブルジョア階級の暴政と邪惡に對して保護すると云ふ事を公然目的とする労働組合が設立された。その目的とする所は——賃銀を確定する事、全體として一つの統一的力として雇主と交渉する事、賃銀を雇主の利潤に應じて調節すること、機會の與えられた時には賃銀を引上げ

働との間の階級闘争は後方へおしやられた。政治の領域では、神聖同盟の周圍に集つてゐた封建領主等及諸政府と、ブルジョアジーによつて指導された大衆との間の闘争によつてそれは蔽ひかくされた。經濟的領域ではそれは工業資本家と貴族的地主との間の紛争によつて蔽ひかくされた。フランスではそれは小地主及び大地主間の矛盾によつて隠蔽されてゐた。だが、英國では穀物條令以來、それは公然と破裂した。』

英國では、労働者は、ブルジョアジーが自由貿易主義の實現、穀物條令の廢止、刑事及民事法の改正、選舉權の擴張のために戦ふのを助けた。

リカルドの如き經濟學者、ベンタムの如き法律學者、ジョセフ・ユームの如き政治家は労働者の間においても莫大な權威をもち得た。急進的ブルジョアジーが、工業資本家にも選舉權及び政治權力をあたへると云ふ條件でいかにも、もろく妥協してしまつた一八三〇年以後に至つて、労働階級の先驅的部分とブルジョアジーの間には始めて深刻な分裂が起つた。

同様な青春期を、フランスの自由主義的ブルジョアジーも復興期（一八一五—一八三〇年）に經驗した。フランスの自由主義的ブルジョアジーは舊貴族及びブルボンの王朝的權力との闘争において民衆を指導した。それはあらゆる被搾取者の教師であり教育者であつた。それは最も巧妙な方法で自分等の利益と労働階級の利益との對立をば、工業ブルジョアジーの利益と貴族的地主の利益との一般的對立のうちにごまかし去つた。自由主義的ブルジョアジーの七月革命時代における裏切、労働者のリヨンの反亂（一八三一—一八三四年）が始めて、労働階級の獨立的な政治思想

る事、各國各種手工業を通じて賃銀を同一程度に維持する事等であつた。それ故組合は資本家と交渉して普遍的に遵守されるべき賃銀等級を確立せんとし而してこの等級に據る事を拒む者に對しては、罷工を斷行すべき事を命令した。更に組合は又徒弟養成の數を制限する事によつて労働者の需要を常に旺盛にし、そして是に由つて賃銀を高く維持し、機械工具の採用により製造家の狡猾な賃銀引下策に對して可及的に反抗し、そして最後に失業労働者を財政的に金錢手段に依つて保護しようとする企圖したのである。』

エンゲルスは既に地方的及び國民的規模において組合を造らうとした英國労働者の企圖を知つてゐた。『で若しもそれが可能であり、又有益である事が判つた時には各地の諸職業に従事する労働者仲間が合同して一聯合を組織し、一定の時を定めて其代表者の集會を催した。又所々では全イングランドを通じて一職業に従事する仲間の大同盟を組織する企畫が試みられ、又數回——第一回目は一八三〇年に——に亘つて全英國の總労働者團結（各職業は各々特殊の組織を有して）組織の計畫が企てられた。』

エンゲルスはさらに労働組合の闘争方法をしるしてゐる。『最初にストライキがあげられてゐる。それから『痺癢かき』換言すれば、ストライキ破りとの闘争、組合に入る事を拒絶するものに對する強制方法があげられてゐる。『之等の同盟の歴史は僅かの個々の勝利を除いては労働者の敗北の長い連鎖である。實に之等凡ての努力も、賃銀は労働市場における需要供給關係に由つて支配されると云ふ經濟學の原則を變更し得ない事は勿論の話だ。』しかしストライキの有利でないらしい事が全員にわかりきつてゐる時でも労働者は賃銀の低下に對して反抗しなければなら

いのである。なんとすれば、かかる反抗をしないと、企業家達は自分の食慾の程度を知らないからである。『之等の組合及び此組合より発生し来る同盟罷業に真正の意義を與ふる所以のものは、此組合及罷業が競争を廢止しようとする労働者の最初の試みに外ならないと云ふ事である。彼等はブルジョア階級の支配力は全く労働者相互間の競争に基づいて居ると云ふ事を認識するに至つた。』

ストライキをば聲をそへて非難した社會主義者や經濟學者に對し、エンゲルスはストライキの教育的意義を指摘してゐる。『之等のストライキは最初には小競合に過ぎぬ事もあるが、又往々激戦を演出する事がある。罷業は何物をも決定しない。されど罷業はプロレタリアートとブルジョア間の決定的闘争が近づきつつある事の最も確實な證左である。然りストライキは労働者の兵學校である。其處において労働者は最早到底回避すべからざる一大會戰の準備を整へて居るのだ。ストライキは大労働者運動に参加した事を發表する各種労働部門の反抗宣言である。そして、ストライキは、かかる兵學校として唯一無比のものである。』

同じく、ストライキに對し非常な拒否的態度を以てし、ストライキを『違法』なりと考へたブルードンに對する論戰においては、マルクスはエンゲルスの勞作に據つており、且つ一層明白な叙述をあたえてゐる。彼は労働階級の職業的(組合—譯者)組織の發達をその階級的組織の發達と密接に結びつけてゐる。

『相互に相結ばんとする労働者の最初の試みは、常に團結の形成の下にあらはれる。大産業は、互に見ず知らずの多數の人間を、一つの場所に寄せ集める。競争は彼等を利害によつて分裂させる。

併し乍ら、労働の維持と云ふ、彼等が彼等の主人に對して有する其道の利益は、再び彼等を同一の對抗の思想によつて結合する。

それが團結だ。故に團結は、常に、資本家に對して全部的競争を行ひ得んが爲めに、自分等相互の間の競争を廢止すると云ふ二重の目的を有するのである。かかる對抗の最初の目的が、單なる労働の維持と云ふ事にすぎなかつたとしても、資本家が資本家同志で之を抑制せんが爲めに相結合するに従つて、始めの間は孤立的であつた團結は、互に相合同し而して常に結合してゆく資本家に對抗する爲めに、組合の維持と云ふ事が、彼等にとつて労働の維持と云ふ事よりも、より一層必要なものとなつてくる。この事實の眞實なるは、英國の經濟學者が、彼等の眼には、單に労働の爲めのみ作られたものとより見えぬ結社の爲めに、労働者が彼等の労働の可成の部分犠牲にするのを見て、すつかり驚いてゐるのを見てわかる。かくの如き闘争——眞實には内亂——の中に、やがて來るべき戦ひに必要な一切の要素が、結合せられ、且つ發展するのである。一度びこの點に到達せんか、結社は此處に政治的特質を帯ぶるに至るのである。』(マルクス哲學の貧困(譯註))

(譯註) 淺野譯「哲學の貧困」三〇九—三一頁參照。

二六、労働階級の政治的組織、チャーチズム、ストライキの發生、労働組合の組織、これ等の組合の地方的組合への統一、まだ若干の組合の偶然的な結合に過ぎないと云え、それらを國民的規模のうちに結び合せようとする企圖は、労働者の政治闘争と手に手をとつて進んだ。この闘争は一八三六—一八三七年の恐慌の後尙一層重大な範圍に及んだ。この時期は労働者の最初の改

を確保する爲めに平等選舉區制を採用する事。(六)代議士に對し財産資格を廢止する事。

(譯註) 選舉され活動する爲めにその生計費としての歳費の支給。

「哲學の貧困」において、マルクスは労働階級が己れのための階級たるに至る過程、プロレタリアートの階級意識發展過程を、次の様に書いてゐる。

「經濟的諸條件は先づ國民の多數を労働者に轉化した。資本の支配はこれらの大衆に對して、一つの共通なる地位、諸種の共通なる利害を作り出した。されば、かくの如き大衆は、既に、資本に對しては一の階級である。併し乍ら、それ自らに對しては未だ階級ではない。我々が單にその二三の段階を示したに止まる處の、闘争の間において、之等の大衆は始めて相互に結合し、それ自らに對して一の階級を形作るに至るのである。かくて、彼等の防衛する處の利益は、直ちに階級の利益となる。さり乍ら階級對階級の闘争は、一つの政治的闘争である。」(譯註)

(譯註) 淺野譯「哲學の貧困」三二一頁。

階級それ自體としての、特殊なる社會的範疇としての、社會的生產過程において特殊なる役割を演ずる所の、人間集團としての、プロレタリアートは既に十四世紀の始めの、二十五年以前に形成せられてゐる。それは同時に社會科學の研究對象となつた。それは非常に早くから定義を下されてゐる。英國ブルジョア階級の偉大な理論家—經濟學者たるリカルドはブルジョア社會において庶

黨、チャーチスト黨の組織された時期である。エンゲルスは我々に、如何にして、個々の労働組合やそれらの聯合の局部的闘争が國民的規模における階級闘争となるに至るか、そしてそれに依つて政治闘争となるに至るかを語つてゐる。

『労働者は法律を遵奉せずして單に彼等が法律を改廢するの力を有しない場合に法律の力に屈從するに過ぎないのであるからして、彼等が少くとも法律改正の提案を出し、ブルジョアの法律の地位に代へてプロレタリアの法律を据えようとするのは當然の事である。かくてプロレタリア階級の提案にかゝる法律は彼の民衆綱領そのものである。これは其形式は純粹に政治的のものであつて下院に民主的基礎を要望して居るのである。チャーチズムはブルジョア階級に對する反抗の充實した形體である。彼の諸組合及ストライキにあつては反抗は常に個々のなるを脱しなかつた。そして個々のブルジョアに對して闘つた者は何れも個々の労働者又は労働者の群であつた。然るに戰闘が一旦一般的になつて來ると斯の如き個々の争闘は最早殆んど労働者側の志向でなくなつて了らう。それで苟くも志向的に行はれる場合には常にチャーチズムが其の志向の根底に横つてゐた。此チャーチズムにあつてはブルジョア階級に對抗して立ち、而して就中其政權、即ち此階級を圍繞する法律的壘壁を攻撃する者は全労働者階級そのものである。』

綱要は一八三六年に創立されたロンドン「労働者協會」によつてつくりあげられた。それは六ヶ條よりなる。(一)丁年以上の男子に普通選舉權を與ふる事。(二)議會は年々改選さるべき事。(三)貧しき者と雖も選舉され得んが爲めに議員歳費を支給する事。(譯註)(四)無記名投票によつて選舉する事。(五)平等選舉權

産物の分配が三つの社會階級間に、即ち地主、資本家及び労働者間に行はれる處の法則を明かにすること、經濟學の主要な任務だと考へてゐた。しかしさらに多く年月がたつた。そしてその結果、この労働階級はそれ自體のための階級たるに至つた。特殊な利害、特殊な歴史的任務を有する特殊な階級として、それ自體のための階級として、己れを自覺するに至つた。

二七、ブルジョア社會の内部における諸矛盾。プロレタリアー
トによるそれらの利用。ブルジョア階級の内部における不一致、ブルジョア階級の一層細分され種々なる諸部分間における闘争、大ブルジョア階級及び小ブルジョア階級間の闘争、資本主義的土地所有者と商工業ブルジョア階級との間の闘争、貨幣資本及び工業資本間の闘争——凡て此等の闘争は資本主義社會の構造そのものによつて呼び起されるものである。

「その歴史的発展の進展に従ひ、ブルジョア階級はその對抗的性質——それは、その頭初においては大きな小なり隠蔽せられた形にあり、潜在的状态において存在するにすぎない——を必然的に發展せしめる。ブルジョア階級の發達と共に、その胎内には一つの新たなプロレタリア、近代的プロレタリアが發達する。プロレタリア階級とブルジョア階級との間の闘争——それが双方の階級から感受され、認識され評價され、理解され、承認され、而して公然と宣告されるに至る迄は、部分的な一時的な衝突や、破壊的行爲によつて豫告時に表明されるにすぎないところの闘争——が發展する。他方において、近代的ブルジョア階級に屬する一切の成員は、彼等が他の階級に對して一階級を形成せる限りにおいて、同一の利害關係を有するものとするも彼等同士が相互に對立

依つて「穀物條令反對同盟」がつくられ、闘争は忽ち執拗なる性質を帯びてきた。双方ともに「下層階級」に訴へ、互に罪證のあはきつこをやつた。ブルジョア階級は農業労働者の凄惨な状態を指摘した。土地貴族は工業労働者の擁護に手を染め、工場立法のために戦つた。

「一方においては、保護院が實際の穀物生産者を如何に保護する事少きかを示すのはブルジョア煽動家の利益となつた。地方において、工業ブルジョア階級は、土地貴族による工場状態の曝露に對して、これ等の骨の髄まで腐りきつた、冷酷なる、且つ高慢なる無頼漢の、工場労働者の苦痛に對してなされた同情に對して、彼等の工場立法に對する外交的な熱烈さに對して、憤怒に燃えあがつたのであつた。舊い英語の諺がある。『二人の盗人が互に髪を掴みあへば、この事から何か有益な結果が得られる、と。』」

穀物條令は一八四六年の六月二十日に廢止された。穀物條令反對同盟はあらゆる方面において勝利を得た。而してこの闘争において労働者も亦この同盟を支持したのであつた。「英國の労働者達は、英國の自由貿易論者に對し、自分達はかの手品や欺瞞にだまされて居るものではないと云ふことを知らしめた。それにも拘らず、労働者達が、地主に反對して、彼等と一緒に行動を採つたのは、封建主義の最後の殘骸を破壊し盡し、而して後、その唯一の敵に當らんがためであつた。労働者達は、豫測を過らなかつた。地主達は、工場主達に復讐せんがために労働者に力を併せ、労働者達が三十年かゝつて駄目だつたかの十時間法の實施を成就せしめた。しかも、それが穀物條令の廢止後直ちに通過したのである。(マルクス、自由貿易に關する演説)(譯註)

する限りにおいては彼等は相對立し、相對抗する利害關係を有するものである。かくの如き利害關係の對立は、彼等のブルジョア的生活の經濟的條件から出てくる。(マルクス、哲學の貧困)(譯註)

(譯註) (邦譯普及版)『哲學の貧困』二〇七—二〇八参照。
十九世紀の前半における英國ブルジョア社會の歴史は此の場合に對する最もよい解答たり得る。

一八一五年、ナポレオンに對する終局的な勝利を得るや、英國の地主等は直ちに新しい穀物條令を布ひた。それによると英國への穀物の自由な輸入は小麦の價格が一クオート(譯註)につき八十シリング以下なる場合にのみ許されるにすぎない事になつた。新しい條令に對し——これに依つて大陸の穀物との競争をまぬがれた英國の地主は格外な收入を保證された——中産階級——小商人、職人、一般に云つて小ブルジョア階級——が、特に、熱心に反抗した。己れの利潤を高めんために闘争せる工業ブルジョア階級も同様であつた。始め煽動は平和的手段を用ひて行はれた。併しこれは無駄であつた。あらゆる論證に對し、地主は絶對的に拒絶を以て答へた。

(譯註) クオートは約我が六合四勺。

一八三二年の選挙改正も始め何等の役をもしなかつた。己れの地位を擁護せんとする闘争に土地所有貴族のあらゆる部分が合流した。かくて工業ブルジョア階級は政治闘争を始めんと決心した。そして地主に對して全「民衆」を動員した。一八三八年に、マンチエスターにおいて、二人の紡績工業家、コブデンとブライトに

(譯註) マルクス『哲學の貧困』(普及版)附録參照。

十時間法案は如何にして實施されたかについては、マルクスが「資本論」のなかで語つてゐる。

「穀物條令は撤廢され、棉花其他の原料に對する輸入税は廢止され、自由貿易が立法上の北斗星として宣揚されるやうになつた! 約言すれば、萬年太平の理想國が開始されたのである。他方にも、その年、チャーチスト運動と十時間労働に對する煽動とが絶頂に達した。此等の運動は、復讐に憧れてゐたトリー派の中に盟友を見出したのである。ブライト及びコブデンを筆頭とせる食言的な自由貿易軍からの熱烈的反抗があつたにも拘らず、斯く久しきに亘つて追求されてゐた十時間労働案は遂に議會を通過した。(譯註)

(譯註) 新潮社版『資本論』三五〇頁を見よ。

「穀物條令反對同盟」は煽動事業における英國労働者の教師であつた。同盟は莫大な財産を有してゐたので、巨額の費用を新聞、書籍、パンフレット、ポスター、宣言書の發行につかつた。一八四三年までだけでも一十萬部の小冊子が發行された。同盟の首脳部に執行委員會議があつた。この執行委員會議の役員が種々な各部門を指導した。此等の各部門に聯絡して労働者や婦人の組織さえもあつた。同盟の辯士はその演説中において暴力を力説する事をも躊躇しなかつた。而して最も激しい云ひあらはし方で國內の生産的階級を餓死にびんせしむる土地所有貴族のあらゆる汚穢さを語つた。

歴史的発展の全過程の理論的理解にまで高められ、プロレタリアートの見地をとるに至つたブルジョア思想家は、ブルジョアジーの陣列に來つた貴族思想家に比し、はるかにずつと稀れである。これの主たる原因は、ブルジョアとプロレタリアとの間の深淵が貴族と 特にブルジョア化された——ブルジョア階級との間に比し比較にならぬ程より深いと云ふ事に歸する。ロシアの革命運動史上において我々は知る。如何にかゝる思想家——我々のもとにあつて革命的知識階級と呼ばれ、民主主義的諸黨には充ちあふれた——が、比較にならぬ程、ほんの少しばかりしか戰鬥的プロレタリアートの戦列中に入り得たに過ぎなかつたと云ふ事。

二八、プロレタリアート、民衆、農民、搾取形態の責務
 プロレタリアートは他の被抑壓、被搾取階級と搾取の程度に依つて區別されるのではなく搾取の形態によつて區別されるのである。商品生産のもとにおいては、従て、資本主義、即ち、市場に特殊な商品——人間労働力——があらはれる様な商品生産の一形態のもとにあつても、唯、プロレタリアートのみが搾取の基礎そのものに反抗して戦ひるのである。なんとすれば商品生産が管打つものに、プロレタリアートの如く強く管打たれるものは何物もないからである。プロレタリアートは自分自身を、自分の労働力を賣つて生活してゐるのではない。しかるに他の被抑壓階級——あらゆる種類の小ブルジョアジー、農民、職人——は商品生産自身に反対すべきものは何物も持ち合さない。彼等は階級としては、唯、競争の領域において彼等の商品をば不都合な状態に至らしめる諸條件を排除せんと望んでゐるにすぎない。

我々は既に如何にして労働階級が形造られて行くか、又、如何に大工業の發達によつて労働階級がそれ自身としての階級たるに至るのを速める諸條件がつくり出されて行くか、と云ふ事を知つた資本の支配は労働者にとつて共通の状態を、共通の利害をつくりあげる。農民財産所有者は異つた條件のうちに生活してゐる。マルクスはこれをフランスの百姓を例にとつて我々に示してゐる。「分割地小農は歴大な大衆を成しており、その成員は同一状態の下に生活してゐるが、しかも相互の間に、多方面な關係を結んでゐなかつた。彼等の生産方法は、彼等を相互の接觸にもたらさないで、互ひに孤立させてゐる。この孤立は、フランスの貧弱な交通機關と、農民の貧困とによつて、一層甚だしくされてゐる。彼等の生産の場面たる分割地はその耕作に何等の分業を行ふ餘地もなく、何等科學を應用する餘地もなく、従つてまた、何等多方面な發達と、種々な技術と、豊富な社會關係とを許さぬものだつた。農民のおのの家族は、ほとんど自足的であつて、その消費品の最大部分を自ら直接に生産し、かくてその生活資料を社會との交通においてよりも、むしろ自然との交通によつて獲得する。一つの分割地には農民とその家族、それと並んで他の分割地には、他の農民とその家族といふ風で、これを寄せ集めたものが村をなし、村の寄せ集めたものが縣である。かやうにフランス國民の大きな大衆は、同じ大いさの單純な加算によつて形成せられてゐる。それはちやうど、一袋の馬鈴薯が、馬鈴薯一袋を成すやうに。幾百萬の家族が、彼等の生活様式と、その利害と、その教養とをその他の階級から切り離し、そして此等の階級と敵對的に對立せしめる様な經濟條件の下に生活してゐる、と云ふ範圍にお

かくの如く、奴隷化されてゐる事實のみが重要なのではない。他の諸階級もまた奴隷化されてゐる。その形態と云ふ事が無限により重要なのである。なんとすれば、この形態の變更と共に奴隷化されてゐるもの、頭の中に産れ、亦、産れ得、べき意見も亦變つてくるのだから、小ブルジョアジーの「見解」が彼等をして、彼等の利益と見えるもの——私有財産やあれこれの階級にとつては人間的自由及び個人的獨立の最高の到達と云ふ事など——に反して、支配的階級の無意識的同盟者たらしめる（最良の場合でさえも）様な場合に、プロレタリアートの「見解」は、より益々その利益と一致して來る。正にこれ故に、現在ブルジョアジーに對抗するあらゆる階級の中でプロレタリアートのみが眞の革命的階級なのである。あらゆる過去の諸階級は大工業の發展と共に衰退し、廢滅し去るのである。プロレタリアートは正しく大工業によつてつくりあげられる。

プロレタリアートの量的成長のみが重要なのではない。大衆運動は以前にもあつた。より重要なのはその「質的成長」である。資本主義の發達と共に他の勤勞階級の意義が日々失はれて行くに比し、プロレタリアートは、反對により益々、社會的生產組織において重要な因子となつて行く。「社會的有機體」の中で他の被抑壓階級の抵抗力は無数の個所に分散してゐるのに比し、プロレタリアートの力は、最も感じ易い僅かな個所に集中せしめられてゐる。プロレタリアートはあらゆる「特性」と云ふものを——職業的、宗教的、民族的等々の——ふりおとしており、よりよい未來のために闘ふ一個の偉大なる共同的な、強力的な一軍隊となる。

いて、彼等は一つの階級を形成する。けれども、分割地農民の間には、たゞ單なる地區的な關聯しか存しない。彼等の利害の同一が、彼等の間に何等の共同一致と、何等の全國的結合と、何等の政治的組織をも生じないと云ふ範圍においては、彼等は、何等の階級をも形成せぬ。それ故に、彼等はその階級利害を、或は議會に依つてでもあれ、また大會によつてもあれ、自己の名によつて主張する能力がない。彼等は自ら代表する事が出來ないで代表せられねばならぬ。彼等の代表者は、勢ひ同時に、彼等の主人と見え、彼等に臨む權威と見えそれは他の諸階級に對して彼等を保護し、彼等の上に雨を降らし日光を惠む、無制限な政府權力として現れざるを得ぬ。それ故に、分割地小農の政治的影響は、行政權が社會を從屬せしめると云ふことに、その最後の表現を見るのである。」(マルクス、ブリュメール十八日)(譯註)

(譯註) 「マルクス、エンゲルス」全集邦譯第五卷二二四—二二五頁及び岡崎譯「ブリュメール十八日」を見よ。

、その存在條件そのものに依つて、農民は一般的政治活動の出來ない要素である。所謂農民戰爭(一三八一年に、英國において、ワットタイラーの指導のもとに行はれたもの。一三五八年のフランスにおけるジャクエーリ。一五二五年のドイツにおける大農民戰爭。我がロシアにおけるライジン及びアガチエフの叛亂)は農民運動が一次的に都市の運動と合流した場合にのみ政治的因子を得たにすぎなかつた。利益の同一性と云ふ事が彼等の協働性と云ふ事と歩調を一つにし難い人民層たる農民は、全國内がい

の自然發生的な災害と云つた様な共通的な打撃を受け、その災害がこの社會秩序によつて準備され、同時に農民の經驗する不幸の盃の最後の一滴たる役割をする。云う場合にのみ一個の人間として反亂する。地方的利益は尙優越性を保持してゐる。そこで、それ故に、農民の反亂能力が如何にたまたま強い事があつても、彼等は容易に種々なる贈與物のえさにつれられて了ふ最初の爆發は忽ち消滅して了ふ。而して一つの村から次の村へと相ついで、小つほけな讓歩に満足して「共通の事業」を見棄て、行く。遠い運動目標を執拗に追求する事を心得てゐる事を示すところの政治的活動性は、農民が尙區々にあまり細かに細分されてゐない場合にも非常に微弱である。農民が貨幣經濟の強い影響を受けるに至るやそれは一層微弱になつて了ふ。農民は共同體、農村の内部において區々に細分されるのみならず、各々獨特な、相似の利益を有する種々の地域的集團に崩壊して了ふ。

所謂、ブルジョア革命時代に、區々散々に、それに先行して起つてゐる農民一揆は、農民があらゆる「粗野な地主」をすぐさま救助せんとする處の中央權力によつて阻止される時には特に強力に爆發した。併しかゝる時代において農民は革命そのものに對し能動的な役割を演じなかつた。農民の反亂は革命が既に都市において破裂した後に於いて始まるに過ぎず、その繼續物たるに過ぎなかつた。フランス大革命の時においてもさうであつたし、ドイツ及びオーストリアにおいても同様な事が行はれた。

ブルジョア思想家——特に大陸の——は、よく、すべてのプロレタリアートをば、マルクスがルンペン・プロレタリアートと名付けたところのものと一緒にしたがる。彼等にとつては、プロレタリアートとはかの極貧者、乞食、浮浪人、及び「零落者」なのである。既に、マルクスは、バクーニンの教師の一人たるマックス・スチルネルとの論争において、次の様な事を指摘してゐる。「極貧」とは唯、破産せるプロレタリアが生活して居るが如き状態を云ふ。抵抗力を失つたプロレタリアが身を沈めた最後の段階である。あらゆる勢力を失つたプロレタリアのみが極貧者となる。」

「資本論」中、マルクスが、資本主義生産のもとにおける相對的過剩人口の種々な形態を描いたところでは、彼は放浪者、犯罪者、賣淫生活者などを含むところのルンペン・プロレタリアをば、乞食、極貧の範圍において生活してゐる労働豫備軍中の最下層とさえまで、即この活潑な労働軍の廢兵院、労働豫備軍中の下積みとさえも區別してゐる。大都市に群つてゐるこのプロレタリアートの屑——盗人、無賴漢、乞食——は生産過程において如何なる役割をも演ぜず、その心理的傾向によつて常に反動家に賣收され、黒百人組或はフアシストの陣列を増大さす傾向がある。

「ブリュネメル、十八日」即ちナポレオン三世をしてその國家變革を遂行させた諸條件の天才的な歴史的分析において、マルクスはバリーのルンペン・プロレタリアートがブルジョアジー及ナポレオンのために演じた叛逆的行爲を指摘してゐる。一八四九年に起り、國家革命遂行の主要な武器となつた「十二月十日會」はルンペン・プロレタリアートの秘密組織であつた。

「生活方法の疑はしい、そしていかゞはしい前身をもつた落魄した放浪者や、零落した冒險的なブルジョアジーの落伍者と共に、宿無し、廢兵、免囚、脱走したガリー船の奴隸、詐欺師、大道商人、無賴漢、掏摸、手品遣ひ、博徒、誘拐業者、女郎屋の亭

主、荷擔ぎ人足、文士、法界節、屑拾ひ、鉄研ぎ、鑄掛屋、乞食、一言すれば、フランス人がラボエームと名づけるあらゆる不定な、解體した、あちこちに散亂してゐる大衆——ボナバルトは、自分に似寄つたこれらの要素をもつて、十二月十日會の根幹としたのである。」

二九、プロレタリアートと法に對する態度 私有財産は全ブルジョア社會の根本であり、その主要な生活條件である。公正と平等の名においてブルジョアジーは私有財産を封建的足枷から、獨占と特權とから、自由にした。資本主義的發展の諸法則のために、この私有財産は資本主義的私有財産に、即、正に、より益々澤山の人民層が却つて己れの私有財産を奪はれて了ふと云ふ事に基くところの財産となつて了ふ。ブルジョアが私有財産の神聖と不可侵とをより甚しく叫び、且配慮すればする程、ブルジョアは小商人、職人、農民よりして、より益々熱心に私有財産をとりあげ、彼等を私有財産を失つた人々、即、プロレタリアとして了ふ。プロレタリアートは私有財産の廢止を要求する場、プロレタリアートは唯彼等にとつて既に廢止されて了つたもの、その存在しない事が「彼等の衣食住の生活方法」を定めてゐるもの、廢止をさらに要求するだけである。プロレタリアートとは舊社會の尖鋭な解體よりして、中間的身分の解體よりして、主としてその下層よりして生じたところの大衆である。マルクスがプロレタリアートの歴史的役割に對する自分の新しい考へ方を述べたところの最初の論文において、彼は次の様に書いてゐる。

「プロレタリアートは從來の世界秩序の解體を告げる事に依つて、自分自身の生活の秘密になつてゐたものをば、あかすみに出

すのである。なんとなれば、彼の生活は、事實上、正に、此の世界秩序の解體となつてゐるのだから。プロレタリアートが私有財産の否定を要求する場合、彼等は唯、社會が彼自身の生活の原則として了つたもの、社會的否定的結果として、彼の手を借りずとも、プロレタリアートの間にあつては既に實現されて了つたものを、全社會の原則たる事にまで高めるに過ぎない。」(マルクス、ヘーゲル法理學批判)

私有財産を擁護する諸法律はブルジョア秩序より成長して行く。資本主義的發展と共に次の事がより益々明かになつてくる。即、此等の諸法律は己れの労働によつてかせぎ出された財産をさえ擁護する事、は出来ないと云ふ事。労働者にとつては此等の法律は唯、私有財産に對するあれこれの犯罪を懲罰する法律として存在してゐるにすぎない。唯、執拗な、莫大な犠牲を要する闘争に依つてのみプロレタリアートは彼の「財産」を、彼の労働力を、資本家側の略奪的な搾取から保護する諸法律を獲得し得るにすぎない。如何にしてブルジョア法律が労働者にとつてブルジョアの偏執物たるに至るか、如何に労働者がブルジョア法律に對し尊敬の念を失つて行くか、については、エンゲルスが英國の労働者を例に引いて最も美事に示し出してゐる。

「然り、ブルジョア自身にとつてこそ法は神聖である。何故ならば、それは手盛りの自製品であり、自己の賛意を以て自身の保護、利益のために制定されたものであるから。彼ブルジョアは從令個々の法律が自分に特定の不利を醸しても尙且立法の全體制は自己の利益を擁護し、而して就中、法の神聖、換言すれば社會の一部分の能動的意志表示及社會の他の部分の受動的意志表示

に依つて一旦確立された社會秩序の不可侵性は、彼の社會上の地位の最強なる支柱である事を熟知してゐる。英國ブルジョアの面目は、彼の法の中に恰も彼の神の中におけるが如くに複寫されて居るが故に、さうだ其故に彼は法律を神聖視するのだ。其故に彼にとつては巡査のもつ棒は——眞實の所彼自身の棒であるが——不可思議な鎮靜力を有してゐるのだ。然るに労働者にとつては全く反對である。労働者は法は自分にとつてはブルジョアが労働者用に調製した處の管である事をよく知り抜いてゐるし、又繰返し反復して經驗もしてゐる。それで労働者は萬止むを得ざる場合の外は決して法に訴へない。

プロレタリアにとつて泥棒をしないために如何なる理由があるだらうか。「財産は神聖なり」の語は洵に、如何にも美しい。又ブルジョア階級の耳には如何にも快適に響くのである。しかしながら、何等の財産をも所有せざる者にとつては財産の神聖も亦それ自身存在せざるものである。金錢は現世における、萬能の神である。ブルジョア階級はプロレタリアより彼の金錢を掠奪してしまふ。そして是れによつてプロレタリアを實際の無神論者に造り上げる。それ故にプロレタリアが自己の無神論を確認し、地上の神の神聖と權力とを最早尊敬しないのは何等異とするに足らぬ事なのである。若しもプロレタリアの貧困が不可欠の生活必需品の眞實の缺乏にまで昇進し、窮迫、飢餓に迄強められて來るならば、社會秩序への尊敬は更に益々地を拂つてくる。

労働者のあらゆる心理は大工業の發達に依つて、大都市における人口の集中に依つてつくりあげられる所の諸條件の影響の下に烈しく變つて行く。たとえ純粹に全く外部的方法によるものであ

らうと、お互に結合された労働階級は自分自身を階級として感じ始める。各自は孤立してゐては弱いが、尙、全てのものが一緒になれば一つの力であると云ふ事を知り始める。彼等はブルジョアジから自分達が獨立してゐると云ふ事を強く自覺する様になつてくる。労働者と彼等の状態とに特有な獨特の見解と思想とが發達して行く。抑壓の自覺が生じて來、そして労働者は政治的及び社會的な意義を獲得して行く。……労働者が奴隷である事を虚飾的におほひかくしてゐるところの父家長的状态の下においては、労働者は精神的に尙死物たらざるを得ない。彼等は自分の利害を全然自覺せず、少しも社會的意義を獲得してゐない。唯、主人が彼に對し他人たるに至つた時において、又彼が主人に對し、唯、個人的利害に依つてのみ、即ち利潤の追求と云ふ事に依つてのみ、關係があるにすぎない。と云ふ事を知つた時において、又、個人的の同情が、大概はほんの一寸したこと、消滅した時において、始めて、労働者は自分の位置、自分の利害を自覺し始め、精神的に發達し始める。始めて労働者は己れは己れ、感情、憧憬などにおいてブルジョアジの奴隷たる事を止める。……

ブルジョアジは彼と並んで暮してゐる労働者よりも、世界のあらゆる殘餘の民族と、より多くの共通性を持つてゐる。労働者はブルジョアジとは異つた言葉で語り、異つた思想と考へとを所有し、異つた習慣と道德原則とを所有し、異つた宗教と政治とを有する。ブルジョアジと労働者とは一般に二つの人種が相互に區別され得る程に、相互に區別されるところの二つの國民であるのだ。

三〇、平和的な進化と社會革命、プロレタリア運動の國際性

質 「抑壓された階級は、階級對立に基くところのあらゆる社會的生活條件である。されば、抑壓された階級の解放は、必然的に、一つの新たな社會の創造を含んでゐる。抑壓された階級が解放され得る爲めには、既に獲得された生産力と、現に存在する社會關係とが、最早相互に兩立し得ざるに至つたことを必要とする。あらゆる生産器具の中に就いて最大の生産力たるものは、實に革命的階級それ自らである。階級としての革命的要素の組織は、舊社會の裡において發展するを得たりし一切の生産力が既に存在することを前提するものである。この事は、舊社會の没落の後には、一の新なる政治的權力としての一の新なる階級支配が起るべき事を意味するであらうか。否、労働階級の解放の條件たるものは、實に一切の階級の廢止である。それは恰かも第三の身分たりしブルジョア階級の解放の條件が、一切の身分、一切の階級の廢止であつたのと同様である」(マルクス「哲學の貧困」)

(譯註) 邦譯五一四頁を見よ。

プロレタリア運動の國際的性質に關する問題については後に至つて、もう一度たちかへつて見よう(註の四〇を見よ)此處では、唯、宣言の著者が國民的と云ふ言葉を、國家領土的と云ふ意味に用ひてゐるのだと云ふ事だけは注意しておく必要がある。國民的闘争と云ふ事は唯、闘争が、あたへられた國民的國家——イギリスの、フランスの、ベルギーの、國家——の枠内において行はれると云ふ事を意味してゐるに過ぎないのである。國際的ブルジョアジをやつつけて了ふには、各國のプロレタリアートは——

プロレタリアートの闘争はその本質において、諸國プロレタリアートの同盟を豫想する國際闘争なのであるが——先づ第一に自分自身のブルジョアジをやつつけて了はなければならぬのである。第二インターナショナルがあの様な不面目極まる破産を遂げたのは、その主要な参加者達が、「祖國擁護」と云ふ事に幻惑されて、先づ最初に他國のブルジョアジを廢棄せんと企てたからであり、そして他國のブルジョアジと一緒に、己れの兄弟たる他國のプロレタリアのみならず、自分自身の國の、己れの「血を分けた」プロレタリアまでをも廢棄せんと企ててしまつたからである。歴史上において、如何に無慘な内亂時代、革命時代といえども、種々なる國民間の最も熱狂的な宗教闘争時代といえども、世界戦争が始まつた時程、人間の血を流し、人命を損じた事はない。この世界戦争は、ブルジョアジの暴力的廢棄が人間の血を流すからと云つて恐れてゐた者達の正にかゝる者達の、禍福として起つたのであつた。

「労働階級はその發展の途上において、舊市民社會に代ふるに、階級と階級對立とを排除するところの一つの結合を以てするであらう。而して最早や固有の意味においての政治的權力なるものは、存在せざるに至るであらう。何となれば、政治的權力なるものは、正しく市民社會における階級對立の官憲的契約だからである。

それ迄の間、プロレタリアとブルジョアジとの間の對立は、階級對階級の闘争であり、その最高の表現においては一の全體的革命たるべきところの闘争である。それのみではない。階級の對立を基礎とする一の社會が、最終の解決として、兇暴な矛盾に、肉體と肉體との衝突に導かれると云ふことが、果して驚くべきこ

とであらうか。社會運動は政治運動を排斥するものだ云ふこと勿れ。それが同時に社會運動でないような政治運動は、斷じて存在しない。最早や階級も階級對立も存在せざるが如き状態の裡においてのみ、始めて社會進化は政治革命たることを想するに至るであらう。その時に至る迄、社會のいかなる總體的變革の前夜に於いても、社會科學の最後の言葉は、常に次の如くであるであらう。「闘争か然らずば死か、血みどろの戦ひか然らずば無か。問題は不可避免的に右の如くに課せられてゐる」(マルクス)「哲學の貧困」

三二、資本主義的蓄積——勞働階級の貧弱と退化、收奪者の收奪
 プロレタリアが己れの勞働力をば最も好都合な條件で販賣し得たとしても、彼が勞働賃銀の最大量を受けとり得たとしても、尙、彼は産業循環の動搖には從屬させられてゐるのである。生活の保證されて居ない事、勞働賃銀のたえまなき動搖はしばしば純然たる失業を引き起す。總てこれ等の事はプロレタリアの状態を奴隷或は農奴の状態と鋭く區別するものである。「この二本の腕以外に何物をも所有して居らぬプロレタリアは、昨日獲得したものを今日食ひ盡してしまふ。彼はありとあらゆる偶然に支配される。——凡ての恐慌、彼の主人の氣紛、彼は其度毎に、パンを奪はれるのである。——實に、彼、プロレタリアは我等の考へ得べき最も非人道的な、最も見るに忍びない状態に置かれてゐるのである。思へ、奴隷には少くとも彼の生存は其の主人の利己心によつて確保されて居るではないか。農奴はそれでも、よつて以て生活し得べき一塊の土地が與へられてゐるではないか。農奴も、奴隷も、少くとも貧しいながらも生活そのものだけの保證は

持つてゐる。然るにこれに反して、プロレタリアは彼の身體それ自身に頼るより外に何等の術を持つて居ない。而も尙、彼はその技術を十分使用する事すら許されてゐないのである。プロレタリアが自己の地位を改善せんが爲めになし能ふ凡てのことも、此を彼が直接其の危険に曝されてゐる。而も彼には如何ともなし得ざる凡ゆる偶然に比せば、まさしく洋中の一滴とも云はれ得るものである。(エンゲルス、「英國勞働階級の狀態」)(譯註)

(譯註) 邦譯一七二頁參照。

大工業の發達によつて、資本の蓄積度の加速度と比例して勞働者の産業豫備軍がくり出され勞働者の非保證的狀態が益々尖鋭化する。この勞働者の産業豫備軍は、現役軍に對し不斷の壓迫を加へるものであり、工場に働いてゐる勞働者に對し、己れを要求を過度に高める事を許さなくするものである。普通程度の活氣、高い壓力のもとにおける生産、恐慌、沈滞の各時期に依つて絶えず交代されるところの循環の形態をとる近代工業の特性的な生活方法は過剰人口と生産豫備軍との範圍の動搖との擴大とともなはれるものである。この豫備軍が多くなればなる程、勞働者のより益々多勢のものが、極貧、乞食の列におちいる危険に、すなはち社會が彼等に對し赤貧給付をあたえて勞働者の家のうちでか外でか、彼等を養はなければならぬ様な状態になる危険にさらされる事になるのである。

「かくて資本の蓄積が進むに比例して、勞働者の位置は——彼れが如何なる支拂を受けてゐるかを問はず、善き支拂を受けてゐるにしろ、悪しき支拂を受けてゐるにしろ——ますます悪化しな

ければならないと云ふ事である。最後に産業豫備軍たる相對的過剰人口を蓄積の範圍及び精力と均衡せしめる法則は、火神ヘフェストスの楔が巨神プロメテウスを巖に打つけたより略より堅く勞働者を資本に釘付けるものであつて、それは資本の蓄積に照應した窮乏の蓄積を生ぜしめるのである。かくて一方の極における富の蓄積は、同時に又、その對極たる勞働階級、即ち己れ自身の生産物を資本として造り出す階級の側における窮乏、勞働苦、奴隷状態、無知、野獸化、道德的墮落の蓄積となるのである。」

資本主義社會の運命の豫測のなされてゐる宣言の第一章の最後の一節は第一卷(資本論)の最後の結論としてくりにかへされてゐる。併し、それは、さらに新らしい二十年の経験の基礎の上に、資本主義的蓄積の傾向のより一層深い分析の基礎の上になされてゐるのである。

「個人の勞働によつて獲得され得べき私有財産は、形式的にはまた自由な他人の勞働の搾取に基づく處の資本主義的私有財産となつてしまふ。かゝる轉形行程が舊來の社會を深きにおいても廣きにおいても十分に分解させてしまふや否や、勞働者がプロレタリアに轉化され、彼等の勞働條件が資本に轉化されるや否や、資本制生産方法が己れの脚を以つて立つやうになるや否や、勞働の更らに進んで社會化、及び土地其他の生産機關の、社會的に利用さるべき共同的なる生産機關への更らに進んだ轉化、隨つて又、私有者に對する更らに進んだ收奪は、一つの新たな形態を採るやうになる。」

今や、收奪される者は、もはや自家經營的の勞働者ではなく、多くの勞働者を搾取してゐる所の資本家である。

この收奪は資本制生産それ自身の内在的法則たる資本の集中に依つて完成される。つねに一人の資本家が多くの資本家を打ち殺すのである。この集中、換言すれば少數資本家に依る多數資本家の收奪と相成んで、勞働行程の益々大規模となりつゝある協業的形態、科學的意識的なる技術的應用、土地の計畫的利用、勞働要具の共同的にのみ利用し得べき勞働用具への轉化、凡ゆる生産機關を結合的社會的なる勞働の生産機關として使用することに基く節約、凡ゆる國民が世界市場の網に絡められると云ふ事實、それと共にまた資本制度の國際的性質等——此等一切の事象が發達してくるのである。かかる轉形行程と伴の一切の利益を横奪獨占する大資本家の數が益々減少すると同時に、窮乏や、壓迫や、奴隷状態や、廢頽や、搾取などの量は益々増大して行く。が、それと共に又、資本制生産行程それ自身の機構に依つて訓練、統合、組織される所の、益々膨大となりつつある勞働者階級の反抗が増進する。資本獨占は、それと共に、又その下に、開花繁榮した生産方法の極端となる。生産機關の集中と勞働の社會化とは、その資本主義的外殼とは一致し難き點に達する。資本主義的外殼は破裂する。資本主義的私有の終焉を告ぐる時の鐘が鳴る。收奪者は收奪されるのである。」(譯註)

(譯註) 邦譯「資本論」二〇二四頁。

第二章への註解

三三、共産主義者と労働者の政黨 「共産主義者は他の労働者諸黨と對立して特殊の黨派をつくるものではない。」と云ふ言葉は現在多くの誤解をよび起し得る。プレハノフが既に指摘してゐる所であるが、マルクス及びエンゲルスが特殊な共産黨の建設に反對したのであるかの様にも思はれるのだ。「マルクス及エンゲルスが共産主義者は特殊な黨派をつくらぬ」と云つた場合、この特別と云ふ形容詞は同じ一句の終りからしても明かなるが如く他の労働者の政黨に對立する、と云ふ意味にとるべきである。

「かゝる對立と云ふ事は存在しなかつたし、亦存在し得べきものでもなかつた。何となれば他の労働者も政黨も同様に、多かれ少かれ廣汎に、多かれ少かれ完全に労働階級の利益を代表してゐただから。而して、共産主義者も全プロレタリアートの利益と一致しないやうな利益は持つてゐるわけではない。」から。

プレハノフの説明は共産主義者同盟の形成された歴史的條件を勘定に入れてゐない。問題が國民的な労働者の政黨に關するものであり得る限り、當時、唯一個の労働者黨が存在したに過ぎなかつたのである。これ英國におけるチャーチズムである。フランスにおいては、レドリューローラン及びフロ、コンに依つて指導されてゐた社會主義者民主主義者の黨以外には、唯一、一八三九年五月における失敗に終つた、反亂の企圖以後彈壓に苦しんでゐたバルベツスやブランキの舊組織と聯繫ある諸集團「唯物論者民主主義者」及び

獨立の政黨に組織し、プロレタリアートの階級闘争のあらゆる現はれを指導し、プロレタリアートに對し、搾取者の利益と被搾取者の利益との和解し得べからざる對立を暴露し、プロレタリアートに對し、まさに來らんとする社會革命の歴史的意義と必要條件とを説明するのである。」

三三、封建的財産及びブルジョアの財産 「歴史上のそれぞれ時代に於て、財産は、それぞれ違つた具合に、しかも全然相異つた社會關係の一系列の裡に、發達した。さればブルジョアの財産を定義することは、即ちブルジョアの闘争の全社會關係を暴露することに他ならない。一の獨立せる關係としての一つの特殊の範疇としての、一の抽象的且つ永久的觀念としての財産の定義を與へやうとすることは、形而上學にあらずんば法律學の、一の幻想たり得るに過ぎないものである。」(マルクス、「哲學の貧困」)(譯註)

(譯註) 邦譯二七一—二七二頁參照。

財産についての問題は一般に産業發達の種々なる段階に關聯し、種々なる國々の産業發達の各特殊性に關聯し、最も種々なる形態をとるのである。

「英國同じくフランス革命時代において、財産についての問題は自由競争的環境の設定を意味した。且、封建的特權、同業組合、獨占等の如き封建的財産關係の凡ての廢止を意味した。此等の財産關係は十六世紀より十八世紀にかけて發達せる處の産業の制肘たるに至つたのである。産業發達の種々なる段階に關聯して、財産問題は常に一定の階級にとつて生命の問題であつた。十七世紀

「労働者民主主義者」の仲 間があつたにすぎなかつた。後の方の諸集團が社會主義者民主主義者の小ブルジョアの政黨と異り、殆ど全部プロレタリアのみより出來上つてゐたとしても、それ等は尙一八四八年以前においては集團主義の状態より抜け出てゐなかつたし、如何なる全國民的組織をも持つてゐなかつた。スイスにおいても、ベルギーにおいても、ドイツにおいても、その状態はこれ以上では決してなかつた。

何よりも明かな事は、國際的組織として最初からしてかためられてきた共産主義者同盟は、己れの、それに相應する國民的諸組織に對する關係をば、己れの各國民的部分と各國民的政黨との間の不必要な平行的主義を避ける様な工合に決定しなければならなかつたと云ふ事である。これは特に英國において必要であつた。此處ではチャーチズムが、主として、労働階級の政治的組織であつた。英國の共産主義者等は——このなかにはジョージ・ヒリアン、ハーニーヤエルンスト、ジョーンスの如きチャーチストが居た——新しい政黨を造らざるに、唯、チャーチズムをば共産主義と結合し、眞先に財産問題をかゝげ、おし出してそして、前衛の役割を演じやうと努力した。

宣言の中にあたえられてゐる共産主義者の諸任務の叙述は、問題が共産黨と労働階級との關係に關するものである限りは、現在においても、尙正しいのである。この叙述に一致して、我が綱領は云う。

「國際共産黨はプロレタリアートをして己れの偉大なる歴史的使命を果さしめる様にその任務とする。そして國際共産黨は、プロレタリアートをば、あらゆるブルジョア諸黨に反對な十八世紀において、封建的所有關係の廢止が問題となつた時には、財産問題はブルジョアにとつて生命の問題であつた。十九世紀において、ブルジョア的所有關係の廢止が問題たるに至つた時においては財産問題はプロレタリアートにとつて生命の問題となつたのである。」

ブルジョアはあらゆる舊い經濟形態、それに相應した財産關係、かゝる財産關係と共にその官憲的表現たる役を果す政治秩序を粉碎し去つた。封建的農奴的財産形態のかはりにブルジョアは己れのブルジョアの財産形態を以てした。公正と平等——これはブルジョアが封建的財産關係の碎片よりして己れの社會的建築物を築きあげんとする基礎なのである。ブルジョア社會のあらゆる成員——自由且つ平等な——は、財産所有者であつて、彼等は同様に平等であり、自由である財産所有者の所有する他人の商品との交換によつて己れの商品を收得するのである。この時、これ等の商品に對しては、彼は當然收得すべき筈のものを受けとらうと努めるだけにすぎない。而も尙、その結果として、特權、不平等、不正の上に基礎づけられた一つの社會が、封建時代よりもより一層激しい對立に基礎づけられた一つの社會が産れる。

「日一日とより益々次の事が明かになつてくる。その境界内においてブルジョアジーの運動が行はれる處の生産關係の性質は、一様なもの、單一なものでは全然なく二重に特徴づけられるのだと云ふ事、富の生産さるゝその同じ生産關係のもとにあつて同じく貧困も亦生産されるのだと云ふ事、生産力が發達せしめらるゝその同じ生産關係のもとにあつて、同じく抑壓の力も發達してくるのだと云ふ事、此等の生産關係は、ブルジョアの富、即、ブ

ルジョア階級の富をば、この階級の個々の成員の富の不斷的廢滅と、不斷に増加するプロレタリアートの形成と云ふ條件のもとに於いてのみつくりあげるのである。これである。」

「資本論」のなかにおいて、マルクスは、收得の法則、換言すれば私有財産の法則が、商品生産及び交換の状態下に於て、如何にして、特有の、内部的な、排除し得べからざる辯證法によつてその積極的な對立物たるにまで至るかを示してゐる。一度、何等かの歴史的原因によつて、商品市場に労働力の如き商品が出現するや否や、全く法則どほりにやつてゐて、即ち、少しも所有の法則を破壊することなく、組織的に、——資本家、生産手段の占有者にとつてだけではなく、他の同様な商品所有者、賃銀労働者より彼等によつて生産された生産物の一部を奪ひとる可能性がつかりあげられるのである。かくして資本家と労働者との間の交換關係は、流通行程に屬する所の單なる外觀——内容それ自身とは無關係であつて、寧ろ内容を紛はしくするに止まる所の單なる形式に過ぎないものとなつて了ふ。労働力の不斷的賣買といふ事は形式に過ぎず、等價を與へずして絶えず資本家の手に占有される處の對象化された他人の労働の一部が、ヨリ多量な他人の活労働と常に再交換されると云ふ事が内容となつてゐるのである。所有權なるものは本来、自己の労働に基づくものとして現れた。……所有なるものは今やこれを資本家の側について云へば他人の不拂労働なり其生産物を占有する處の權利として現はれ、労働者の側につひて云へば彼れ自身の生産物を占有する事の不可能として現はれる。所有と労働との分離は、本来雙方の一致に由来してゐる如く見える一法則の必然的な歸結となるのである。」

一樣にあらゆる、私有財産を廢止せんと欲してゐると云う事は出て來ない。私有財産たり得るものもあるのだし、さうであり得ないものも亦あるのである。

「社會的、集會的の財産に對立したものである私有財産は、労働要具及び其他の外部的労働條件が私個人のものに屬する場合のみ成立するものである。然しこの私個人が労働者であるか、または労働者以外の人であるかによつて、私有も亦異つた形態を帯びてくる。最初に私有を一瞥したとき我々の目に入る無数の濃淡は、畢竟するところこの兩極の間に存在する諸種の中間形態を反映するものに他ならないのである。労働者が彼れの生産機關を私有する事は、農業であるか、工業であるか、それであるか、或はこれであるか、を問はず小經營の基礎であり、而して小經營なるものは、社會的の生産と労働者自身の自由なる個性との發展上必要なる一條件となつてゐるのである。かゝる、生産方法は奴隸制度、農奴制度、其他の隷従事情の内部にも存在することは事實であるが、然しそれが滿開し、全勢力を奔放せしめ、適當なる典型的な形態を採るやうになるのは、労働者が己れ自身の運用する労働條件——即ち農民ならば己れ自身の耕す土地、手工業者ならば彼れ自ら専門技術者として取り扱ふ器具の自由なる私有者たる場合に限られるのである。これ、自分自身の労働によつて獲得されたる私有財産である。併し、社會がある程度に發展すると、かゝる私有財産は他人の、併し形式的には自由なる労働の搾取に基くところの資本主義的私有財産によつて追ひ拂はれることになる。

何故共產主義は、生産手段に對する私有を廢止せん事を己れの目的とするにかゝはらず、私有財産のこれ等の二つの形態に對

換言すれば、——「貨幣の本來的資本化は、商品生産の經濟的法則、及びそれから派生して來るところの所有權と嚴密に一致して行はれるものであるが、それにも拘らず左の如き結果を生ぜしめることとなるのである。(一)生産物は資本家の所有に屬するものであつて、労働者の所有に屬するものではない。(二)生産物の價值は前貸資本の價值以上に尙、一つの餘剩價值を含み、而してこの餘剩價值は労働者にとつては労働を要したものであるが、資本家にとつては何等要費するところ無かつたものである。而もそれは、資本家の合法的な所有に歸してしまふのである。

(三)労働者は引續き労働力を保有してゐて、購買者を見出した時には新たにこれを販賣し得るのである。……社會的の富をば益々著しく、絶えず新たに他人の不拂労働を占有すべき位置にある人々の所有に歸せしむる處の資本主義的時代においても、この所有權が依然有効となつてゐる事は、生産物が生産者自身の所有に歸し、而して生産者は等價を以て等價と交換しつゝ、だゞ己れ自身の労働によつてのみ富を與へられ得るに過ぎなかつたと云う、初期の時代における、異るところはないのである。」(譯註)

(譯註) 資本論 邦譯七七二乃至七七七拔萃

私有財産が廢止されてしまはぬ限り、あらゆるその結果たるもの——資本家階級による労働者の搾取——も亦力を失ふ様にはならない。それ故に、共產主義者の全理論は、私有財産の廢止と云う事に、それをばあらゆる生産手段に對する社會的所有と置きかへると云う事に歸する。併し、これからして共產主義者は一樣にあらゆる財産私有者の敵だと云う事はまだ起つて來ない。彼等はし全然異つた方法をもつて對するかと云う理由は此處にある。自己の労働に基づくところの私有財産の所有者に對しては、共產主義者は、商品生産の存在する限り小財産所有者の境界が望みのないものであり、私有財産は現在彼等を搾取する手段となつて了つたと云う事を示す様に努めるであらう。

社會革命の主要な行爲は被收奪者の收奪ではなく、收奪者の收奪である。自己の労働に基いた私有財産の收奪ではなく、資本主義的私有財産の收奪である。

三四、資本の歴史的性質 プルジョア經濟學者は資本をば、社會的の生産の永久的條件として、しかも、生産的労働と云ふ事が永久的條件であるのと同様であるかの様に見なしてゐる。彼等は一定の歴史的條件の下においてのみ、生産手段——労働要具と労働對象——が資本になり、勤勞者が賃銀労働者、プロレタリアになるのだと云う事は忘れ去つてゐるのである。

「資本は賃労働を前提とし、賃労働は資本を前提とする。兩者は相互に條件づける。兩者は相俟つて發生する。ある棉花工場に於ける一労働者、彼は唯綿製品を生産するだけであるか？否な彼は、資本を生産する。彼は、彼れの労働を支配し且つ之によつて新たな價值を作り出すために、改めて役立つ處の價值を生産する。資本は、それが労働力と交換せられ、賃労働者を活動せしむることにおいてのみ、その増殖を遂げ得る。又、賃労働者の労働力が資本と交換せられたならば、それは必ず、資本を増殖し、労働者を奴隸となしつゝある其の力を強めることに爲る。だから資本の増加は、プロレタリアート、即ち、労働階級の増加である。一定の社會關係の外においては、歴史的發展の一定の段階上に

ある社會の外においては、生産手段は決して資本たり得ない、これ個人の權力ではなく、社會的の權力である。

「黒坊は黒坊だ。只彼は一定の状態の下に始めて奴隷となる。紡績機械は絲を績ぐ機械だ。只それは一定の状態の下に始めて資本となる。此等の状態から切り離れたらば金がそれ自身において貨幣でないやうに、又砂糖は砂糖の價格でないやうに、それは少しも資本では無い。……資本もまた一の社會的生產關係である。それはブルジョア社會のブルジョア生產關係である。生活資料、労働要具、原料、——此等のものから資本は成り立つが——此等のものは與へられたる社會的條件の下で、一定の社會關係の内、産出され且つ蓄積されたものではないか？ 此等のものは與へられたる社會的條件の下で、一定の社會關係の内、新たな生産に利用されるのではないか？ さうして正に此の一定の社會的性質が、新たな生産に役立つ生産物を資本にするのではないか？」

併しこの社會的權力は私個人に所有さるゝ、個人的權力となる。この社會的權力は、この權力を拘束さるゝところなく處理する權利を得る資本家に人格化せられる。資本主義的生產方法がより急速に發達すればする程、それがより完全に各種の産業部門を發達せしめる程、それがより益々小生産を迫り出して去れば去る程、社會的生產と資本主義的領有との間の矛盾はよりはげしく現れるのである。それ等を社會的財產たらしめるためには、唯、社會的生產手段よりしてそれ等の資本主義的性質をとりさるゝ事のみが殘されてゐるのである。「プロレタリアートは社會的權力を握つて、此の權力の助けによつて、ブルジョアジーから強奪した社會的生產

手段を社會的財產たらしめるのである。これによつて、プロレタリアートは生産力をば、その近代的資本主義的性質より解放し、その社會的性質に對し完全なる發展の自由をあたえるのである。かくて、前以て熟考された計畫によつてする社會的生產が可能となるのである。生産の發達は種々なる階級の存在を時代錯誤にするのである。

三五、私有財産と個人的財産、共產主義社會における分配の原理 我々は既に資本主義的所有方法が如何に、資本主義的私有財産をつくり出すかを知つた。これは自己の労働に基ける個人的私有財産の完全な否定である。同じく、我々は、共產主義者は、唯、資本主義的私有財産をのみ收奪せん事を目的としてゐるのみだと云ふ事を知つた。共產主義はそれが他人の労働の搾取手段でない限り小生産者の手中に彼等の財産を残しておき、而して社會の全員の個人的財産と云ふ事を制定する。共產主義は直接生命の維持にとつて必要な生産物の個人的領有を廢止しやしない。併し、此の領有の乞食の如き性質を廢止せんために共產主義は此の個人的所有をば資本主義時代に獲得されたものゝ上に、即、自由な労働者の協力と生産手段（土地を含む）の彼等による共同管理との上に基礎づける。

此の個人的領有が、この個人的財産が、如何なる形態をとるか、社會的生產物の各労働者間への分配が如何なる原則の上に基礎づけられたか、この事は歴史的條件の如何に、プロレタリアートに依つて政治權力の把持がなされた瞬間における社會の生産力の發展程度如何にかゝつてゐるのである。社會的生產過程の順當の進行を維持するために必要なもの、生

産手段の償還、豫備基金の設定、一般的管理費用、社會的及び文化的要求の満足、不具者の扶養——をば社會的生產物から差し引いた後に凡て残りの消費對象は各生産者間に分配される。新しい社會が尙多くの點で舊い社會の硬い痕足を負ふてゐる過渡期においてはあらゆる生産者は、直接、彼の労働給付に相應しただけの生産物の分前を受けとる。階級的差別のなくなつた際においても尙、不平等な個人的能力の自然的な特權は殘つてゐるのであるから、労働に對する報酬は、労働の量、強度、若しくは質に相應する事になるのである。

唯「共產主義社會のより高い段階において、即ち個人が分業の下に受けてゐる奴隷的束縛が消滅し、従つて又精神労働と肉體労働との對立が消滅する時、又労働が最早や生活の爲の手段であるばかりでなく、労働そのものが生活の第一要求となる時、更に又、個人の多方面な發達と共に、生産力も増大して、共有財産のあらゆる水源が十分に流れ出す時、その時始めて狹隘なブルジョアの權利思想の水準を踏み越え、社會は始めて其の旗の上にこう書くであらう。「能力に應じて各人から取り、要求に應じ各人に與へる。」(譯註)

(譯註) マルクス「ゴータ綱領の批判」

三六、労働に對する資本の支配 資本はブルジョア經濟學者の定義によると新しい生産に手段として役立つ蓄積された労働である。彼等が資本をば、新しい生産物の生産過程のために必要な原料品、労働要具及び生活貯蔵品の結合と見る限り、彼等ははこの定義に歸結する。しかし、あらゆる此等資本の構成部分商品、即、

經濟關係の一定の發展程度においてのみそれらに被せられる一定の封包をつけた生産物である。資本はかくて、物的生産物の總計であるのみではなく、商品、交換價值、社會的量の總計なのである。しかし、他のあらゆる商品の總計もまた同じ様な交換價值の總計である。如何にしてそれは資本となるのであるか？ 「商品の一定量、交換價值の一定量が、資本となるのは、これらものが獨立した社會的の力として、即ち社會の一部の力として、直接の生きた労働力に對する交換によつてそれ自らを維持し且つ増加する、といふ事によつてだ。労働能力以外には何物をもたない一つの階級が存在することが、缺くべからざる資本の前提である。」

「直接の、活きた労働の上に行はるる處の蓄積された、過去の、物體化された労働の支配が、蓄積された労働をば始めて資本とする。蓄積された労働が、活きた労働のため、新たな生産への手段として役立つといふ事によつて、資本が資本たるのではない。活きた労働が蓄積された労働のため其の交換價值を維持し且つ増加するための手段として役立つと云う事によつて資本は資本たるのである。蓄積された死んだ労働の生きた労働に對する支配、過去の労働の、現在の労働に對する支配といふ事は、マルクスにより、「資本論」中に、よりはつきりといふ表はされてゐる。

「あらゆる資本主義的生產にとつては、即、それが單なる労働過程のみではなく、また、資本價値の増殖過程でもある限り、労働要具を使用するのは労働者ではなく、反對に、労働要具が労働者を使用するのだといふ事が特徴である。しかし唯、機械の使用と共に始めて此の轉換は技術的に明かな現實性を得るのである。

労働要具は、それが自動機たるに及んで、それにより、その過程
中において、労働者に對し資本として生きた労働力を支配する死
んだ労働として進軍し來り、生きた労働力をば絞りあげるのであ
る。

尨大な多數の人民が自分の身をみぢめな労働賃銀によつて賣ら
なければならぬ様な世の中をブルジョア經濟學者は自衛の世の
中と呼ぶのである。

自由といふ抽象的な言葉に魅せられるな。いつたい、何人の自由
であるのか？ それは、個人對個人の自由ではない。それは労働
者を壓迫するための資本の自由である。諸君は、いつたい、何のた
めに、かの自由競争をば、この自由の理想にまつて新たに神聖化
せんとするか？ この自由の理想を自身自身が既に自由競争の下に
おける一定の状態の産物に過ぎないではないか。」(マルクス、自
由貿易論)(譯註)

(譯註) 邦譯「哲學の貧困」(附錄)三七六一三七七頁參照

三七、ブルジョアの個性と人間的個性 マルクスのマツク
ス・スチンネルに對する論戰中に、我々は、ブルジョアの個性と
人間的個性との關係についての若干の興味ある指摘を見出す。デ
スチネトリートラシは財産といふ事をば、人間的個性といふ事
と不可分な、自然的に、それと聯繫せるものと見なす。彼にとつ
ては、財産インデビデュアリノスチ(個性)、といふ事は同一事
であり、一個のものであるのだ。「我」といふ觀念には、彼れの
意見によると、亦、「我の」といふ觀念も入つてくるといふのだ。
「自然は人間に對し、免れ得ぬ、分離し得べからざる財産とい

「ブルジョアにとつては——と、マルクスはつけ加へていふ
——商業、個性或は一般人間的諸事の同一をば自分の言葉によつ
て證明せんとする事は、この言葉そのものが、ブルジョアジの
産出物であり、そこでそれ故に、その言葉のうちには實際におけ
ると同じ様に、商業方面の事があらゆる他の方面の事の根本にな
つてゐるといふ事に依つて容易にされるのである。」

共產主義者は、私人的に獲得し得べき財産たる性質を全く失つ
てしまつた。私有財産をのみ廢止せんとしてゐるのにブルジョア
思想家達(この中にはブルードンやスチンネルの如き甚だ急進的
なブルジョア思想家達も入る)は、共產主義者は財産一般を
否定せんとする意向を有つてゐると云ふ。スチンネルは「私有財
産の廢止の不可能と云ふ事をば、次の様にして基礎づけた。私有
財産と云ふ事を財産と云ふ觀念に變じてしまつて、「財産」と
云ふ言葉と「自己」の「自己」と云ふ言葉との間の語原上の關係を利用
して、そして、共產主義社會においても尙亦、人は「自己の」胃
のふの痛みを持つてあらう事が考へ得られるからといつて、「自
己の」と云ふ言葉は永久の眞理であると宣言する。語原學に避難
所を見出したこの理論的無能事は、實際の私有財産が——これが
廢止こそ共產主義者の目的である——抽象的な「財産」の觀念に
變じ得られない限り、不可能であらう。」

私有財産とは個人的な各人の財産、——たとえほんの少量でも
他人の労働を支配する可能性をもたらさない、私のルバシカ(襦
衣)私のフロツクコート——とは區別せられねばならぬところ
のものである。私有財産のみが、實にそのみが、社會的權力を
獨占する可能性をもたらし、人々、及び物の自然的及個性的性質

ふ事——個性といふ事をば寄與した。……財産といふものは感覺
を有する個人の存在する處、凡てではないまでも、意志を有する
個人の存在する處には凡て存在するのである。」スチンネルも亦こ
の見解に遠いものを持つてゐたわけではない。

「若し——と、マルクスは書いてゐる——限られたブルジョア
が共產主義者に對し次の様に——君等は、財産を、即、資本家と
しての、土地所有者としての、工場主としての自分等の存在、勞
働者としての諸君の存在を廢止する事によつて、自分等や君等の
個性を廢止するのだ。自分等に對し君等を、労働者を、搾取する
事、即、利潤、利子或は地代をかき集める事の可能性を廢止する
ことによつて、君等は自分等から個人として存在する事の可能性
を奪ひとるのだ、——といふとすれば若し、ブルジョアが共產主
義者に、君等が、ブルジョアとして自分等が存在する事を廢止す
るならば、君等は個人としての自分等の存在を、自分等の個性を
廢止するのだ——といふとすれば、即、もしかやうにして、ブ
ルジョアが自分等のブルジョアたる事と、自分等の個性とを同一
化するとなれば、少くとも、彼の正直であると言ふ事と、無恥で
あるといふ事とは否定し得ない。ブルジョアについて此の事は實
際全く適用し得るのである。ブルジョアは彼がブルジョアた
る限りにおいてのみ個性たるのだと考へてゐる。しかしかはつて
ブルジョアジの理論家があらはれ、この主張に一般的表現を
あたえ、同様に理論的に、ブルジョアの財産とインデビデュアリ
ノスチ(個性)とを同一化し、此の同一化をば論理を以て正當づけ
やうと欲する段になると、その時には單なる無能事が莊嚴且つ神
聖なものとなつてくる。」

をば自分の利益になるやうに掠奪してしまふのである。
「地主にとつては、土地は單にその地代によつてのみ意義を有
するにすぎない。しかしこれは、土地がこれを失ふに際し、その
不可分の性質のほんの少しをも失はず、その豊饒さ、即ち、それ
の程度、存在する個々の地主の如何なる協力的なしにも造りあげ
られ、且つまた廢止され得るが如き性質のほんの一部分さえも
失はずしてしまひ得るが如き土地の性質である。同様な事は機械
につひても云ひ得るところである。貨幣、即ち財産のこの最も一
般的な形態は、それが如何に少量でも、唯々單純にそれに對立す
るものとして個的特質との間に共通性を有する。シエクスピ
アは我が理窟屋の可愛いブルジョアの誰よりもよくこの事を知
つてゐた。

……こいつが、このくらいありやア、黒も、白に、醜も美に、邪
も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇にすることが出来る。
且、またこのうらはしい奴隷が
癩病やみをも美事な身體にしてしまふ。(譯註)

(譯註) 若干言ひ廻しは異つてゐる様であるが譯譯に従つ
た。

一言にいへば、地代、利潤、等々、私有財産の經濟的な存在形
態は一定の生産段階に應じた社會關係である。これらが「個人的」
であつたのは、それが、既存の生産力によつて制肘たるに至らな
かつた間だけの事である。

三八、ブルジョアの勤勉とプロレタリアの怠惰 かつてこう云
ふ事が屢々指摘された時代もあつた。即、奴隸制度や農奴法の廢

止と共に、かつて奴隷であつた者、かつて農奴であつた者は甚だしく働く事を好まなくなり、場合によつては全然怠惰に陥つてしまふであらう。と。鞭や棍棒なしには「粗野な庶民の怠惰」を矯正する事は出来ない實際が此の見解の成立しない事を證明した。自由な労働はより生産的である事がわかつた。しかしこの「自由な」労働も亦労働者の労働である。事實、これは空を飛ぶ鳥の様に自由である。しかし同時にあらゆる生産手段からも自由にされてゐるのであつて、それ故に、労働者は自分自身を、自分の労働力を賣る様に強制されてゐるのである。棍棒や鞭のかはりに労働者を賣る家の工場に追ひやる苦しい貧困がとつてかはつた。労働は、尙、服従的のものであつた。舊い監督のかはりに、労働者のうしろからは罰金規則を持つ工場長が眼を光らす事となつた。しかし、分業の結果、労働者の労働は屢々あらゆる内容を失つてしまふ事となつた。分業の有害な諸結果は機械生産の發達と共に認められなかつたばかりでなく、反對に、より一層強められる事となつた。労働者の労働が實際に「自由な活動」であり、労働者の精神及び體力の自由な遊戯であり、而して、強制された單調な勤勉でない様な状態を造らんとする共産主義者の要求に對してブルジョア思想家は「粗野な庶民の怠惰」と云ふ題目を新たに變装させて持つてくる。

國家權力を占有したプロレタリアートは、實際、複雑極まる任務に當面するのである。革命そのものが生産過程の連續のうち無秩序をもたらす。「國內の平和」と云ふ状態になるには一定の時間が必要である。諸製造の衰退と云ふ事は全く不可避的である。これは、プロレタリアートがよく組織された企業を引継ぎ、手に入

れた様な最も好状態のもとにあつてもさうである。工場には生産手段を、労働者には食糧品を、正規的に補給し得ない様な場合、労働要具は使ひ減らされ、労働力は疲弊し、原料貯蔵は出拂つてしまつたと云ふ様な場合には、事情はもつともつと悪化する。

全社會的労働義務を施行する場合、プロレタリアートは監獄や軍隊の規則を思はせる様なものは一切避けねばならない。労働要具の社會的性質によつて、それが要求せられる限り、労働の意識的な規律を堅め且發達させるためには、資本主義の殻から飛び出したばかりの社會、それ故にあらゆる方面において資本主義の激しい痕跡を負ふてゐる社會にとつては、かかる早期の共産主義社會にとつては、労働に對して人心を鼓舞し、強める諸方策がとられねばならない。これについては、労働條件の改善、それへの誘引性の昂揚に關する諸方策以外に、尙、報酬標準を高める事に依つてする仕事獎勵の諸方策があるのである。しかし、凡てかやうな諸方策は、最初からして個々の労働者の離反、彼等を殘餘の労働者に對立させない様にしなければならぬ。反對に、個々の労働者の収入をこの労働者が屬する集團の一般的収入を高める事に依つて増大する事が目的とならねばならぬ。

三九、物質的生產と智的生產 智的労働の生産物の生産及び分配は物質的生產手段の量度及び發達、生産力の發達程度と密接なる關聯をもつてゐる。精神的、知識的生產の各形態は人間社會の種々な歴史的發達段階に應じて、全く種々な性質をとる。精神的生產と物質的生產との關係を研究するには、何よりも先づ物質的生產をば一般的範疇としてではなく、その一定の歴史的形態に對して研究する必要がある。かくて例へば、資本主義には中世紀的

生産方法とは異つた精神的生產の形態が對應することになるのである。若し物質的生產自身がその特殊な歴史的形態においてとりあげられないならば、それに対応する精神的生產の特殊な姿も亦同じく物質的生產と精神的生產との相關關係も、理解する事は出来なくなる。」

物質的生產の一定の形態によつて、それこれの社會的分業が決定される。而して、この社會的分業は精神的分業の根本になつてゐる。原始社會の解體の時以來、我々はいくたの精神的及び組織的仕事に社會的分業の特殊の種族に分割されたのを確證してゐる。

「生産が自然過程と同じ様にして發展する一切の社會——今日の社會もこれに屬する——においては、生産者が生産手段を支配するのでなく、生産手段が生産者を支配する。かやうな社會においては、生産を促進すべき新たなそれぞれの動力は必ずや生産者を生産手段の奴隷たらしめる一つの新たな手段と化する。これは、かの大産業の導入されるまでは、生産を促進すべき最も強大なる動力であつた分業については、殊にさうである。すなはち、都市と田園との分離といふ最初の大規模な分業が生ずるや否や、田園人口は數千年にわたる愚昧の運命を負はされ、都會人は各人が各自の手工業の奴隷となるの運命を負はされた。かやうな都鄙の分離は、農村に對しては精神的發展の、都會に對しては肉體的發展の基礎を破壊した。もし農民が土地を、都會人がその手工業を所有するといへるならば、正しく、同じ程度において、土地が農民を、手工業が職人を所有してゐるとも云える。労働が分たれることに依つて、人間もまた分たれる。ただ一つの働きの完成のた

めに、その他のあらゆる肉體的および精神的の能力が犧牲に供される。かやうな人間の萎縮は、分業——それはマニファクチュアールにおいて最高の發展を見る——と同じ程度において増進する。このマニファクチュアールは手工業を個々の部分的作業に分解し、この部分的作業の各々を、それぞれ個々の労働者に生涯の職業として指定し、かくて彼を一生涯、一定の部分的職能と一定の道具とに繋縛する。……そして、獨り労働者のみでなく、この労働者を直接または間接に搾取しつゝある階級もまた、分業の結果、彼等の活動上の道具の奴隷となる。心の荒んだブルジョアは彼自身の資本と彼自身の利潤慾との奴隷とされ、法律家は一個獨自の力として彼を支配するところの化石せる己が權、觀念の奴隷とされ、一般に「教養ある階級は、様々なる地方的狹量や偏見の奴隷とされ、また彼等自身の肉體的及び精神的近視の奴隷とされ、かかる一の専門にのみ仕向けられた教育（この専門がまるつきり何の役に立たない場合でも）に依つて畸形化される。」（エンゲルス、反デューリング論）（譯註）

（譯註）邦譯「マルクス、エンゲルス全集」二二卷四五八—四五七頁參照

種々な専門——技術的、學術的、軍事上、管理上の——の區分は支配階級の側へ、智識と經驗とを集積させ、勤勞大衆の精神的空虚さを起す。たつた今我々が知る如く、社會的分業とさへも關聯を持つてゐる精神上及び肉體上の畸形化に對して、技術的分業のより一層深刻なる影響が加はる。マニファクチュアール時代は社會的分業を固め且つ強めた、と同時に、マニファクチュア

1的分業をもつくりあげ、且つ、發展させ、肉體労働と智的労働とのより堅固な障壁をもうけた。

「野蠻人は戦争上の凡ゆる技術を彼一個の計略として行使するのであるが、丁度それと同様に獨立した農民なり手工業者なりに依つて小規模ながら展開される所の知識や意志は、今や作業場全體にとつての外は必要でなくなる。生産の精神的な力は、多くの方面に消滅すればこそ、一つの方面に擴大されてゐるのである。労働者たちが部分的に失ふ處のものは、彼等に對立した力として資本の中に集積される。彼等にとつて、物質的生產行程の精神的な力が他人の所有物として、又彼等を支配する所の權力として、對立して来るやうになるのは、これ即ちマニファクチュアー的分業の結果であつて、かかる分離行程は、資本家が個々の労働者に對する關係において社會的労働體の統一と意志とを代表する所の單純なる協業のもとに開始される。それは労働者を不具なる部分労働者たらしめる處のマニファクチュアーのもとに發展せしめられ、科學を生産上の獨立した動力として労働から分離し、資本に奉公せしめる處の大工業のもとに完成されるのである。」

國民教育のあらゆる組織によつて、資本主義社會は、國民大衆のこの精神的剝奪と云ふ事を永久化さうと配慮する。労働運動が成長する事によつて始めて、支配階級は——非常にけち臭いものだが——國民教育の問題にも改良を行はなければならなくなる。だが、この際、近代的教育の階級的性質、教育のブルジョアジーの利益への完全なる從屬と云ふ事は決して少しもゆるめられな

5。 かつて農奴制、封建制下の思想、家達は、近代的ブルジョアジー

昔より尊敬を受けてゐたこれ等の卓越せる職業、國王裁判官、士官、僧侶等々、凡て、それ等に依つて産出せられ、ブルジョアジーに依つてつくりあげられた舊い思想社會——それ等の學者、博士、僧侶、——は、經濟的にはブルジョアジーの所有する下僕、幫間とかはりない。なんととなれば、彼等はブルジョアジー及び遊んで暮す有閑の富豪（土地所有貴族及び遊んで暮してゐる資本家）によつて養はれてゐるからである。彼等は、他のあらゆるブルジョアジーの下僕と同じ様に國家の下僕であるに過ぎない。彼等は他の人々の勤勉によつて造られる生産物を求めて暮してゐる。それ故に、彼等は必要なる最小限に縮小されねばならない。國家、寺院、等々は、それ等が、生産的ブルジョアジーの一般的利益を管理し或は支配するための委員會である限りにおいてのみ存在権を有するに過ぎない。それ故に、それ等に對する出費は、それ等が、それ自身では、生産に必要な出費に屬さないのだから、必要なる最小限に縮小されねばならないのである。この見解は古代の見解——ここでは物質的生產労働は奴隷制の烙印を押されておき、またここではかやうな労働は遊んで暮す市民のための脚臺であると思はされた——と同じく、中世制度の解體より生じた專制或は貴族王制の見解、それに依つて、尙、影響させられてゐたモンテスキューが「若し、富人が多くのものを散じなければ、貧民は餓えて死なねばならぬ」と云つた。かくも素朴に云ひ現したところの見解と激しく對立して一個の歴史的利益を代表してゐるのである。

これに反し、ブルジョアジーが、一部には國富をその手中に收め、また一部には國家の以前の所有者と妥協し、自分の足下に確

の思想、家としての、負けず熱心に封建的生產、及びそれと共に、

それに對應する精神的生產の廢止は、社會の滅亡と同一事だと主張した。ブルジョアジーは、其の時、舊い凡ての教育法式の身分的性質の用捨なき批評により、今まで尊敬の念を以て見なすを常とせるあらゆる種類の精神活動に對する露はな嘲笑を以て答えた。例へば、スミスやリカードの如き古典經濟學者は、また、いくたの職業の——それが舊い封建的生產關係と關聯し、それに依つて産れ、それに奉公する限りでの——労働の不生産的性質を證明した。

「社會において最も尊敬す可き階級に屬する一部の人々の労働は、家庭僕婢の労働と等しく、何等の價値をも産出せず、又其労働の終了後に存續して、後日之と同量の労働を求め得るが如き或種の恒久的物件又は賣却し得べき物品の中に固定され若しくは體現されることなし。例へば君主並に其下に職を奉ずる一切の司直及び軍務の官吏、並に一切の陸海軍人等は、何れも不生産的労働者なり。此等の人々は國家の使用人にして、爾餘の人々の勤勞より生ずる年々の生産物に依り給養されるなり。……牧師、辯護士、醫師、各種の文人、俳優、道化役者、音樂家、歌劇歌手、歌劇舞踊手等即ち是なり」(譯註)

(譯註) アダム・スミス、國富論、四三二頁(岩波普及版)参照
これに關しマルクスが行つたところの評註は甚だ興味深きものである。

「これは、全社會、國家等々を自分に從屬せしむる事に成功してゐない、尙革命的であるブルジョアジーの言葉である。づつと

固たる地盤が出来たと感じ始めるに至るや否や、ブルジョアジーは思想社會をも認めるに至り、至るところにおいてそれらを自身自身の性質に適する様に改造した上で自分への奉仕者とする。ブルジョアジー自身が、生産的労働の不生産的階級の代表者として對立する様な事はなくなり、反對に、ブルジョアジーに對して眞に生産的な労働者が擡頭し來つて、今度はそれがブルジョアジーに、汝は他人の労働によつて生活してゐると云ふ様になるや否や、ブルジョアジーが充分文明化して、全然生産に没頭せず、「文化的な」要求をも求めるに至るや否や、精神的労働さえもが次第次第にブルジョアの利益のために行はれ、資本家的生産に奉仕する様になるや否や、——かかる時より以來、事情は一變し來り、ブルジョアジーは「經濟的」にも、自分の見地よりして、以前己れが批判の武器を以て戦つたものをば正當づけ様と試みるに至る。」

ブルジョアジーとその腰巾着共——學者、専門家、哲學者——は、全くこれらのごとをすつかり忘れてしまつてブルジョア文化に對する攻撃を凡て文化一般に對する攻撃とみなすのである。高等及び中等の教育制度體系は凡てブルジョア制度に對する奉仕者と辯護者とを生産することを目的とするに至る。自分の昔の仇敵の經驗を利用して、ブルジョアジーは封建主義よりも一層大なる程度に、自分の忠實なる下僕のなかに下層身分の有材を引きいれ行くた様に、彼等に特典的な地位をくれてやり、自分の食卓の椅子を彼等に分けてやることによつてである。

しかし、資本主義的生產は、それ自身、精神的生產の新形體にと

つて、それに労働住民の越えたる大衆を引き込む事を許す様な物質的條件を準備する。工場は讀み書きの出来る労働者を要求する。一層大きな程度において大産業の地盤の上に發達した新しい交通運輸の諸手段はそうした労働者を要求する。工場立法は、初等教育を、労働の義務的條件とする。「ロバート・オーウエンに依つても詳細に確め得るが如く、單に社會的生產を増進する方法としてのみでなく、また全面的に發達した人間を生産する唯一の方法としても、一定の年齢を超えた凡ゆる兒童の爲に生産的労働をば智育及び體育と兩立せしめる處の、將來における教育の種子は工場制度の中から發芽して來たのである。……労働の變更は今や、威歴的な自然律としてのみ、また到るところ障害に逢着する自然律の盲目的破壊的な作用を以てのみ、實現されるのであるが、それと共に労働の變更と、従つて出來得る限り各方面への労働者の利用とを、一般社會的なる生産律として認め、かつ此法則の順當なる實現に生産上の事情を適合せしむることは、大工業に伴ふ激變それ自身に依つて一つの死活問題たらしめられるやうになる。要するに大工業なるものは、變化多き資本の搾取慾の爲に利用すべく豫備されてゐる窮乏労働者人口と云ふ奇怪な現象に代ふるに、變化多き労働上の要求に絶対利用し得べき人數を以てする事、換言すれば特殊な社會的分機能の負擔者に過ぎない部分個人に代ふるに、種々異つた社會的機能を交々負擔し得る處の凡ゆる方面に發達した個人を以てする事をば、一つの死活問題たらしめるのである。」

「かかる革命行程の要素として大工業の基礎の上に自然發生的に發展し來る現象の一つは、工業上及び農業上の學校であり、他は

がかつて人間による人間の搾取によつて當面せるが如き凡ゆる障害からは解放されるのである。

四〇、法的規律の永久性 ブルジョアの諸關係を永久なもののみならずブルジョア思想家の習慣をマルクスは既に、「哲學の貧困」において指摘してゐる。

「經濟學者は、物を取扱ふのに、奇妙なやり方をやる。彼等にとつては、人爲的制度と自然的制度との、二種の制度しか存在しない。封建制度は人爲的制度であり、ブルジョア制度は自然的制度である。この點において彼等は、宗教を二種に分つた神學者達に似てゐる。彼等の宗教以外のあらゆる宗教は人間の發明である。しかるに彼等自身の宗教は神の啓示である。經濟學者が現存の諸關係——ブルジョアの生産關係——を自然的であると云ふのは、それらの關係のもとに、富の生産及び生産力の發展が自然法則に従つて行はれてゐると云ふことを意味するのである。従つて、かかる關係それ自らは、時代の影響と無關係な自然法則である、と云ふ事になる。それは常に社會を支配すべき管の永久的法則である。従つて嘗ては歴史といふものが存在したが、今日では最早歴史は存在しないことになる。嘗ては歴史が存在した、何となれば、……封建制度なるものが存在し、かつこの封建制度においては經濟學者が自然的、従つてまた永久的のものとみなさうとするかのブルジョア社會の生産關係とは全然異つた生産關係が存在するからである。」

ブルジョアにとつては近代社會の法律を永久の法律規律としてしまふ事は最も重要な事である。これを破れば犯罪となる。これからして法律の立場を固執せんとする傾向が生れ、これからし

労働者の子女に各種生産器具の實地操縦や工業上の教育を授ける處の職業學校である。資本の手からもぎ取つた最初の貧弱なる讓歩としての工場立法なるものは、普通教育を工場的労働と兩立せしめるといふ結果を齎らすに過ぎないのであるが、労働者階級が不可避的に政權を占むるに至つたとき、學理と實際との兩面から見た工業教育も亦、労働者學校の内部に其位置を占むるに至ることは、豪も疑ひを容れざる處である。同時に又、生産の資本主義的形態と、それに照應せる經濟上の労働事情とが、かかる革命的の醜母、並びに其目標たる舊分業の廢絶なる事實と全く矛盾するものであることも、何等疑ひを容れない事實である。」(マルクス、資本論)(譯註)

(譯註) 邦譯(新潮社版) 六三六乃至六四〇頁參照

唯、近代社會の階級的性質の廢棄、肉體的、機械的のみある労働の呪縛よりプロレタリアートを解放する事によつてのみ、共產主義的な生産のための物質的條件がつくりあげられるのである。唯、搾取者の階級支配への奉仕者たることからの科學の解放、ロックフェラー(彼は、科學上の目的のために、數百萬金を「犧牲」にするが、それは、「科學の最後の言葉」に従つて、プロレタリアートから何百萬ドルもの金を搾り出すためである。)の寄贈物たる様な零落状態からの科學の解放のみが、そして、同時に、藝術的創作物を科學と共に眞に自由な創作物へ轉化させる事のみが全人類社會を、全面的に發達したる科學によつてすつかり武装し、自然との闘争を遂行する人々の自由な結合へ轉化させるのである。この自然との闘争は、しかし、其時に至ればこの闘争

で、ブルジョア階級は、革命的に物事をやらねばならぬ様な場合でさへも、法律的繼承物を保存せんとするといふ傾向が出て來るのである。

マルクスは、一八四九年二月に、税金の徵收者に對する武装反亂を召集したかどで、裁判に附された時、その辯明演説中で、合法性に對する自分の見解を次の様に述べた。

「然らば諸君、諸君は何を以て法的立場を守る事となされるか? 法律を守ることであるか? 併し、その法律たるや、過ぎ去れる社會の時代に屬し、既に没落せる、もしくは今や没落しつつある社會の利益の代表者に依つて作られたものであり、従つてそれは現在の一般的要求とは矛盾せる利益を保證するものではない。社會は併し法律の上に出來上つたものではない。こういうふのは一の虚構である。」

「法律は寧ろ逆に社會の上に成り立たねばならない。法律はある定つた時代の物質的生產方法によつて起る社會的利益を表現し、個々の個人の我儘に對してそれ等の利益を保證する事に役立つものでなければならぬ。」

「茲に自分はナポレオン法典を携へて居る。」
「此の法典は決して近代的ブルジョア社會を創造したのではなく、第十八世紀に起つて第十九世紀に發達したブルジョアが此の法典の中に法律的に表はされたといふべきである。故に法典が社會關係に相應しなくなつた瞬間から、それは單に一片の紙片たるに過ぎなくなるのである。此の時その古い法律が新しい社會進歩の基礎とせられ得ない事は、右の古い法律が昔の法的秩序を作り出さなかつたと同様である。」

「此の昔の社會よりして此の古い法律は生れたのであり、従つて前者の倒れると、前者もまた亡びなければならぬ。即、法律は變轉する生活様式と共に必然的に變化しなければならぬ。社會進歩の生む新しい關係及び要求に對して古い法律を主張する事は、その本質において、時代に適せざる私的利益を爲かに主張するものたるに過ぎないのである。」

「故に、この法律的立場を守れといふ事は、最早やかゝる支配的なものでなくなつた私的利益を、依然、支配的なものなりと主張せんとするものであり、新社會の生活關係に依つて、物質的諸條件によつて、その交易及び生産によつて否定せられてしまつた法律を、此の社會に押し付けようとするものである。それは立法者をして飽くまでも私的利益を迫り得る地位に置かんとし、國權を濫用して無理にも少數者の利益に多數者の利益を從屬せしめんとするのであり、従つてそれは絶えず現在の要求と矛盾し、交易、産業を妨害し、遂に政治革命たるに至る社會的危機を造り出すものである。(譯註)

(譯註) 邦譯「マルクス、エンゲルス全集」四卷六一七—一六
一八頁参照

四一、ブルジョア社會における家族 マルクス及びエンゲルスは宣言以前にも、一再ならず家族問題について意見を吐いた。

最初、より詳細にブルジョアジの家族について考察し、次にプロレタリアートの家族について考察した。

ブルジョアは家族關係の神聖な事について多くの事を云々する。實際の醜惡な狀景を蔽ひかくすために、虚飾的な云ひ廻しを用ひ

は、倦怠と金錢であり、それは、同時に家族のブルジョアの解體と結び合はさつて居り、かつその解體のうち、家族そのものが存在を續けていくのである。その汚はしい存在に對應して、御用的な空言のうちに、全社會的な虚飾のうちに神聖化された、その觀念が存在するのである。プロレタリアートのもとに見るが如く、家族が、實際に解體して了つた處には、家族觀念なるものは全然存在しない、と、同時に非常に現實的な諸關係に依存する、家族生活に對する憧憬は依然として見受けられるのである。十八世紀に、哲學は家族觀念をふんさいした、なんとすれば、實際の家族なるものが、文明の高度の段階にあつて、解體にひんしてゐたからである。家族の内部的聯繫、即、服従、敬神、貞操等々の如き、家族觀念を構成する各部分は破壊されてしまつた。しかし、家族の實體、財産關係、他の家族に對する排外的態度、強制的な共同生活、子供の存在、近代都市制度、資本の蓄積等々に依つてあつたへられた諸關係——凡てこれらのものは依然として存在し續けてゐる。なんとすれば、家族の存在は、ブルジョア社會の意志より獨立せる生産方法との關聯に依つて、さくべからざるものがあるからである。此の必然性はフランス革命時代に特徴的な様式を以て現れたその時、家族は外見的には法律によつて廢止されたのである。家族は十九世紀に至つてさへも、その解體が、より發達せる工業及び競争の結果として、全社會的になつたといふ差異を有するだけで依然として存在を續けてゐる。

ブルジョア家族の解體は、大思想家、特にフリーエの著作中にいかにも明瞭に描き出されてゐる。マルクスは「神聖家族」のなかで、フリーエを引用してゐる。彼に依つて引用された、部分に於

る。ブルジョアの結婚は既にづつと以前から賣買契約となつてしまつた。家族關係からは、官許のブルジョア思想家が非常に好んで口にする、その親しき、むつまじさと云つた様な性質は、既にづつと以前から失はれてゐる。

「ブルジョアは己れの社會制度に對するに、丁度、ユダヤ人が立法に對するが如くにふるまふ。ブルジョアは、あらゆる場合において、出來得る限りそれらを無視してしまふ。併し他人についていへば凡ての者が遵守して行く事を望む。もし凡てのブルジョアが皆んな一緒に凡ゆるブルジョア法律を無視するとすれば、彼等はブルジョアたる事を廢止することになつてしまふ——これは、勿論、彼等にとつては思ひも及ばない事であり、彼等の希望の埒外にあることである。放らつたるブルジョアは結婚を無視し、私かに姦通にふける。商人は他人の財産原理を、技機、破産等々により無視してしまふ。若いブルジョアは自分の家族にはおかまいなしに金錢を浪費する。家族はその利益の爲に實際上解體せられてしまふ。併し、結婚、私有財産、家族は理論上では、依然として不可侵である。なんとすれば、それらは、ブルジョアが自分の支配を築きあげた實際的な基礎であり、かつ、そのブルジョアをブルジョアたらしめる條件たるものであるからである。それは丁度、常に無視された立法が敬虔なるユダヤ人を敬虔なユダヤ人たらしむるが如きものである。ブルジョアが自分の生活條件に對するこの態度はブルジョア道徳にその一般的な表現を見出すことが出来る。一般的に云つて、「家族」を、靜止的なものとして語つてはならない。ブルジョアは歴史的に一家族にブルジョア家族たるの性質を附與したのだ。そこでは、それを結びつける要素

々は宣言の中で見受ける同じ様な思想を認出す。

「姦淫、誘惑は誘惑者た名譽を與へる。これは今の流行だ……併し可哀いさうな女よ！ 子殺しとは何と云ふ犯罪たらう！ 若しも彼女が名譽に汲々としてゐるならば、總ての功名の痕跡を抹消しなければならぬ。又若し彼女が子供を此の世の偏見の犠牲にしたのならば、彼女は一層耻辱である、そして法律の偏見に陥つたのである。……それは、總ての文明化せられた機械觀が記述する誤つた循環である。……若き乙女、彼女はこの少女の獨占を購ひ得やうとする誰かに向つて提供せられた商品ではないか？ 文法上二つの否定は肯定に値するやうに、夫婦關係においては二つの賣淫は一個の道徳に値する。……歴史上の時代の變化の自由への進歩の狀態に依つて決定せられる、何となればこの婦人の男子に對する關係、弱者の強者に對する關係に、人間性の野蠻性に對する勝利が最も明瞭に表はれてゐるから、婦人解放の程度は一般的解放の自然の標準である。……女性の屈辱は野蠻におけると同じく文明の一個の本質的特質である。唯、文明化せられた秩序は、野蠻が單純に行つた罪惡を結合せられた、二重の意味を持つた曖昧な、偽善的な存在形式に高めるの相違があるばかりである……女を、男自身よりもより以上に奴隸狀態に陥れてゐるものを決して罰しない。」(譯註)

(譯註) 「マルクス、エンゲルス全集」第一卷七二七—七二八頁を見よ。

賣淫、女郎賣買、生きた商品(白奴隸)の取引は十九世紀に至つて、全世界に技藝の組織を持つた、特殊商業部門たるに至つ

た。それと花柳病の流行的な蔓延——これブルジョアの家族及び結婚の結果である。

エンゲルスは「労働階級の状態」の中で、彼の見地より、労働者の家族を叙述してゐる。彼は性的放逸を、労働者が未だ自覚せる労働者軍の一員とならず、ブルジョアの社會秩序に對し恭順である場合における主要なる缺點の一つとして指摘してゐる。

「若も吾人が或人々を動物的行爲に出づるより外にどうする事も出来ない状態に置いたならば、彼等は、叛逆するか、又は極端なる野獸性に服従し、入り浸るより外に如何なる方法もとり得ないであらう。而して、更にブルジョア階級が賣春制度を維持する事について、充分盡力してゐる場合に、——毎夜毎夜、ロンドンの各辻々に充滿してゐる四萬人（現在ロンドンでもその數は、絶對的にもこれより少くないだけでなく、比較的な數字も減少してゐない。）の賣女の中の如何に多くが此高德のブルジョア階級の恩寵によつて、生活して居る事か？ 此等可憐なる賣女の中の如何計り多くの者が生きて行かんが爲めに、通行人に其肉體を提供せねばならぬ運命を、ブルジョアの口説落しに、感謝せねばならぬであらうか？」（譯註）

（譯註） エンゲルス、「イギリス労働階級の狀態」邦譯一九一一年九二頁を見よ。

ブルジョアは家族生活の必要條件をつくるためには、資金を自由に使ふ事が出来るにもかかはらず商業精神に依つて、自分自ら、それを毒してゐるに過ぎない。然るに、労働者は窮乏のためだけで、既にもう家族生活の團圓を形造る事が出来ない。「社會組織は労働者の家庭生活を殆んど不可能にしてゐる。住む事の出来

さうもない不潔な家、夜の臥床にもならない住宅、家具の備へも疎くない、雨に漏り、火の氣はなく、人間で一杯に盛り溢れてゐる

たつた一つの部屋の中の空氣は、微臭くじめじめして居る。此家に、どこに家庭らしきがあるか。夫は一日中労働に行つて歸つて來ない。多分、妻も大きくなつた子供等も、皆各々違つた場所であらう。朝と晩とにしか顔を合した事がない、おまけに、絶えず火酒飲用の誘惑が手傳ふ。それでゐてどうして此處に家庭生活が存在し得やうか？」

婦人の工場労働の普及は、家庭をこはしてしまふ、その有力な破壊要素となる。一方において妻が日々何時間もの間を工場に働いて居り、その夫も亦、同じ場所か、他の場所か働いてゐる場合があるとすると、子供等は其間、全く抛棄しておかれる。彼等は、かくして、路傍の草の様に生長するか、託児院にでもやられてしまふ。

婦人の工場労働の道德に對する影響は一層ひどい。種々な年齢の男女が狭い工作場に雜居してゐる事、低級な智的及び道徳水準の人々がぎつしりつまつてゐるといふ事、これは、工場において労働者の住宅——ここでは一部屋に對し富豪の住宅に數倍する居住者が入つてゐる——のぎつしり人であつてゐると云つた事と同じ様な結果をもたらす。これは加ふるに婦人及び娘達に對して工場主及びその手先達の力が加はつてくる。彼女達を、工場主及びその手先達は、凡てのブルジョアの調査者も認める處であるが、最も無情なやり方で享樂の對象とする。

大工業は工場における婦人労働及び小兒労働の適用を發展させ、次の事に依つても、舊い家族關係を破壊せよとせよ。それはき原生的に粗暴なる資本制形態のもとにおいては、腐敗と奴隸狀態との害毒の源泉たるといへ、適當なる事情の下に置かれる時それは寧ろ人間味ある發達の源泉とならねばならないことも、明白な事實である。」

（マルクス資本論）（譯註）

（譯註） 邦譯新潮社版「資本論」六四四—六四五頁参照
科學的社會主義の創設者達の結婚及び家族觀は、その全く發展せる形態を以てして、エンゲルスの著書「家族、私有財産及び國家の起源」中に表明されてゐる。多くの章における、結婚の種々な形態の歴史的順序の描寫は陳腐になつたとは云へ、資本主義的文明のもとにおける、私的利害、現金勘定等の支配下にあつての家族關係の描寫は現在に至つても尙、依然として最もすぐれたるものである。それはフリーエの假借なき批判を、「資本論」の天才的な經濟的分析と結合させてゐる。

我々は、此處で、マルクス及びエンゲルス以前の種々な社會主義者や、共產主義、特に、サン・シモン主義者や唯物主義、共產主義者の結婚及び家族觀の歴史をとりあつかつてゐるわけにはいかない。彼等はブルジョアの家族及び結婚の廢止を要求したのであつた。

四二、労働者と祖國 労働者は祖國を有しない。此の命題は宣言以前のあらゆる共產主義的文獻において——フランス及び獨逸の共產主義者のもとに——見受けるところである。この命題は、労働者はブルジョア思想家が常に口にすることが如き祖國を有しないといふ事實を確認してゐるにすぎない。ブルジョア階級の祖國は労働者にとつては存在しない。

階級それ自身としての階級からして、階級のための階級となり

父と子と、夫と妻の關係を全然革新してしまふからである。「家族の養ひ手」である事からして、父は工場立法が兒童労働を制限せざる限り、子供等の搾取者であり、販賣者になつてしまふ。妻は夫の賃銀によつて全家族に盡す「家庭團圓の確保者たること」から大事なかせぎ人になつてしまふ。子供や青年は、また、父母から關係のない、舊い「家長的」な諸關係とはあまり結びもつかない労働者となつてしまふ。家庭の主たる基礎が財産關係であり家庭を結び合はせるものは唯の私的利益的分配であり、家庭のそれこれらの成員達は自分達の引力を、彼がいくらだけ共同の釜の中に投げこむかといふ事の上にもつてゐるのである限り、かかる家族の扶養者、大事なかせぎ人たる役割の停止は、プロレタリアの家庭に對しても解體をもたらず。

しかし大工業は、それ自身、新しい家庭發展のための諸要素をつくり出す。「資本制度の内訌に行はれる舊來の家族制度の分解は如何に恐ろしく歴的なものであらうとも、大工業なるものは、それが家庭の範圍外に在る社會的に組織された生産行程の内訌において、婦人や、青年男女や、幼童などに割り當てる極めて重大な役割を以つて、家族及び男女關係のより高級な一形態の依つて立つべき新たな經濟的基礎を造り出すのである。キリスト教的・チュートンの家族形態を絶對視するは古ローマ的・古ギリシヤ的。又は東洋的・家族形態——此等の家族形態は又、相互に一つの歴史的發展系列を成すものであるが——を對視すると同じく迂屈な沙汰であることはいふ迄もない。又、男女及び様々なる年齢の個々の人を以つてする結合、労働總員の組成は、労働者をば生産行程の爲に存在せしめて、生産行程をば労働者の爲に存在せしむることな

つ、プロレタリアートは、分割された國民的階級闘争の内部における個々の自分の持場の闘争を一般化する、プロレタリアートが此の闘争を行ふ地盤は權力がブルジョアジーの手中にある國民的國家である。正にこれ故にこそ、本質的にはなくとも、形式的には、プロレタリアートの闘争は先づ第一に國民的なものであり、一定の國民の内部において行はれるのである。この國民の一部、ブルジョアジーのみが此等の國民的外枠内に自分の祖國なるものを造るのである。労働階級が尙階級それ自身としての階級たる間は、労働階級が階級意識によつて慣れない間は、この階級的國民的國家は彼にとつても亦、祖國たるのである。併し、労働階級は階級のための階級となつても、政治權力を占有せんと努力する様になつても、尙、國民的である。即ちそれは支配階級として國民の範圍内に足場を得ん事を望む。正に此の意味において労働階級は尙、國民的である。國民的獨立の弱められるにつれて各種國民間により一層の接近が起つてくる、彼等の特殊性はより一層消滅して行く、併し國民的國家は尙、存在する。各國におけるプロレタリアートの闘争により益々一様化し、彼等の綱領的任務はより益々同一化する。併し闘争は尙、インターナショナル的（國際的）であり、國民的である。世界的社會革命のみが、プロレタリアートの世界的支配のみが、新しい環境をつくり出す。その環境のみが、既に資本主義社會内に始まつた國際化の過程を無限に急速におし進め、國民内部の階級對立と共に、各國民間の對立をも消滅さす。プロレタリアートの努力の結合なしには、少なくとも最大なかつ文明の最も進んだ國々におけるプロレタリアートの努力の結合なしには、一國の、一國民のプロレタリアートの解

放は甚大な困難に當面しなければならぬ。

ブルジョアの祖國といふ事は、不斷の、時には隠蔽せられた、時には顯れた各國民間の闘争、民族的除外、一國民による他國民の抑壓といふ事を豫想する。國民内部の各種資本家間の關係は各國民間の關係においてくりかへされるのである。國內の競争領域で一人の資本家が他の資本家に勝利し、その資本を併合してしまふか、或は、已れに従屬してしまふかするが如く、國際的競争の領域においても一個の國民的國家は他の國家に勝利し、それを已れに結合させてしまふか、或は已れに従屬してしまふかするものである。而して、もしも、帝國主義戦争が各ヨーロッパ諸國のプロレタリアの間にも、尙、ブルジョアジーに對して精神的に従屬してゐる著しい部分があるといふ事を證明したとすれば、これは、プロレタリアートが、個々の國民の領域内においてさえも尙、充分には一様化されて居らず、各種の小集團に細断されて居り、唯一つの目的——支配階級としての組織、即プロレタリア國家の建設——をのみ知る一個の國民的階級となつてゐないといふ事に依つて説明されるのである。各國の労働者黨が活潑に一層結びつけばつて程、また彼等のブルジョアジーに對する闘争がより一層個別的なものから、一般的なものとなり、國民的なものから、國際的なものとなればなる程、またその闘争が、より、屬、各國プロレタリアートの眞實の團結たるに至れば至る程、社會革命の成功にとつての必要な諸前提は、より早く、よりよく用意されることとなるのである。マルクス及びエンゲルスは、その活潑なる革命的活動の全く最初から、國際主義を眞先にかかげてきた。自分自身の國は彼等にとつてば、唯、單に最もそばにあるその戰場たる

にすぎなかつた。而して彼等のあらゆる努力は國際的聯繫を強め、共產主義者の國際的組織をつくる事に向けられた。共產主義者同盟の組織さるる以前においても、彼等は、英國やベルギーにおいて國際的民主主義的組織をつくらんとする當時のあらゆる大きい企てには参加してゐる。既に一八四六年以來二人は、「諸國民の團結」といふ合言葉のかはりに、各國「プロレタリアの團結」と云ふスローガンを置く事の必要を力説してゐる。ロンドンに開かれた國際的集會の一つに關して、エンゲルスは書いてゐる。

「現在、各國民の團結」といふ事は、何時の時代におけるよりもより甚しく、且亦純粹に社會的意義を有してゐる。現今の政治組織のもとにおいてのヨーロッパ共和國の幻想、永久平和の幻想は、丁度、一般的交易の自由といふ旗の下での各國民の統一と云ふ空辭の如くに一つの笑柄にすぎない。かかる種類のあらゆる感傷的な妄想がその聲を失しつた正にその時において萬國のプロレタリアは、いさゝかも空辭に聲を高めるともなく、共產主義的民主主義の旗の下に實際的に團結し始めたのである。而して、獨りプロレタリアのみがよくこれをなし得るのである。なんとすればブルジョアジーは各國において自分等の特殊の利益を有し且、これ等の利益はブルジョアジーにとつては最高のものであるからして、ブルジョアジーは何時になつても、決して國民的たる事以上にはなり得ないからである。あらゆる獨特のすばらしい「主義」を持つたブルジョアの理論も亦何事をもなし得ない。なんとなればこれ等の理論はこれ等の相矛盾した利益を、一般にその存在するがままにそつとしておくからであり、而して、單なる空辭に終つてしまつてゐるからである。萬國のプロレタリアは一個の

且同一の利害を有するものであり、一個の且同一の敵を有するものであり、彼等は一個の且つ同一の闘争に當面してゐるのである。プロレタリアはその集團中において、既に事物の過程の結果として、國民的偏見を失つてゐる。そして彼等の發達及び運動は凡て本質的に人道主義的であり、反國民的である。プロレタリアのみがよく、國民的なものを廢止し得るのである。覺醒せるプロレタリアのみがよく、各國民間の團結をつくり得るのである。」

四三、階級闘争と歴史過程 宣言は、實に、新時代の歴史哲學である。それは歴史過程の説明をあたえてゐる。この歴史過程の結果としてプロレタリアートとブルジョアジー間の階級闘争が發生したのであり、且、發展しつたのである。宣言は最初に、劇的要素を、社會的、經濟的、諸關係のそれやこれやの構造によつて條件づけられるものとしての階級闘争をかかげてゐる。宣言の任務は、已れを解放せんがためのプロレタリアートの闘争、已れを解放せんがためのブルジョアジーの争の如くに、しかく歴史的に必須な現象であるといふ事を示す事であり、大工業の發達は新しい經濟的秩序のためにあらゆる必要な要素をつくりあげるといふ事を示すことである。マルクス及びエンゲルスは、如何なる時に於いても決して、彼等が、歴史のうちに階級闘争を「發見」せりとおもつた事はなかつた。反對に、彼等は自身、既に復興期のブルジョア歴史家が彼等よりずつと以前にこの階級闘争の歴史的發展を描き出し、また經濟學者らは、これ等の階級の經濟的解剖を行つたといふた事を指摘してゐる。マルクスは唯、單に、此の命題をば一般化し、歴史の領域よりして、此の歴史を創造する英雄、指導者などといふ考へを徹底的に追ひ出しただけである。マルク

スは階級の存在は生産の一定の歴史的発展段階と結びついてゐるといふ事を、諸階級の闘争はその新しい局面においては必然的にプロレタリアートによる政權の獲得になるといふ事を示しただけである。歴史の推進力としての階級闘争、これ等諸階級の生成、同一の利害を持った人間集團の階級としての階級よりしての階級のための階級への轉化、階級的覺醒の發達、此の階級の物質的存在條件よりして起る階級イデオロギー（觀念形態）、世界觀の成立、——凡てこれ等のことは彼をば、より益々歴史の唯物論的解釋の確固たる形成へと導いて行つたのであつた。彼は先づ第一に宗教思想が社會外に發生するといふことを片付けねばならなかつた。既にフオイエルバッハは、宗教の領域において、意識は存在によりて決定せられるものであり、宗教が人間をつくり出すのではなく、人間が宗教をつくり出すのだといふ事を指摘した。マルクスはこれに一步を進めた。個人が、自然に對立するのではなく、普遍化された人間が自然に對立するのである事、意識は個人的存在によつて決定されるものではなく、社會的存在によつて決定されるものである事、意識の變革は個人と共に發生する社會的變革によつて起るものである事が證明された。

「人間は宗教のうちにおいて、自分の經驗世界をばゆかりのないあるものとして自分に對立する想像された架空の存在に變ずる。此れは、「自覺」とか其他類似の下らな事によつて説明されるものではなく、生産及び交換の支配的方法によつて説明されるべきものである。その生産方法なるものも亦同じく純粹な觀念からは獨立してゐる。それは例へば機械織機の發明、鐵道の應用がヘーゲルの哲學からは獨立してゐるが如くに。」（マルクス）

深く研究しゆくことは、各世紀における人類の神聖ならざる、現實の歴史を研究すること、即ちこれ等人類を同時に彼等自身の戯曲の作者でもあり、演出者でもあるものとして示すことではあるまいか？」（譯註）

（譯註） マルクス「哲學の貧困」一九一—一九二頁を見よ。
（譯註） エンゲルス「哲學の貧困」序文を見よ。

併し、既存の秩序に向けられた革命思想、人間による人間の搾取は非難すべきものであり、廢止すべきものであるとなし、それは非道であるとなす、益々普及し來る確信は正しく、思想なるものが革命的傾向をつくりといふ事を證明してゐるのではないか？

「若し民衆の道徳的感情が往昔の奴隸制度もしくは農奴制度の如き經濟事實を不正なるものと見なすならば、それは、かかる事實そのものが一の殘存物であること、之をして維持すべからざるものたらしむる處の他の經濟事實の起り來れることを、證明するものである。」（エンゲルス）（譯註）これは、單に、舊い社會の内部に新秩序の諸要素が出來上つたといふ事を示す徴候であるのだ。

社會の階級的性質は觀念の階級的性質を、條件づける。財産形態の各々に應じて、生活の社會的條件に應じて、いくたの種々ななるかつ獨特の、感情、妄想、觀念及び世界觀が起つてくる。あらゆる階級は、すべて此等のものをば、自分の物質的條件とそれに相應する社會關係の地盤の上に創造し、かたちづくる。個々の個人は、自分の感情や見解を、傳承や教育によつて承けつぎつ

同じ様な事は他の觀念形態についても云ひ得る。
「社會關係なるものは、生産力と密接に結びついてゐる。人間は、新たな生産力を獲得すると共に、その生産方法を變化し、また生産方法を、即ち彼等の生活資料を獲得する様式を、變化すると共に、一切の彼等の社會關係を變化するのである。手で廻す粉挽車は、封建君主の社會を生み出し蒸氣で動く粉挽車は、産業資本家の社會を生み出すのである。彼等の物質的生產力に應じて社會關係を打ち立てるところのその同じ人間が亦、彼等の社會關係に應じて、原則や、觀念や、範疇を作り出すのである。それ故に、これ等の範疇も亦、それが表現するところの諸關係と同様に永久的のものではない。それらは歴史的の、一時的の、産物なのである。」（マルクス）（譯註）

（譯註） 邦譯「哲學の貧困」一七九—一八〇頁を見よ。

觀念や原則が歴史をつくりと主張する者に對し、マルクスは歴史的研究の任務を次の様に決定して、答へてゐる。

「更に進んで、歴史と原則との双方を救済せんが爲めに、何故にかくの如き原則が、恰かも十一世紀或は十八世紀において顯現せられ、他の世紀において顯現せられなかつたのであるか、を自問するならば、必然的に、十一世紀の人間は如何なるものであつたか、十八世紀の人間は如何なるものであつたか、彼等各自の慾望、彼等の生産力、彼等の生産方法、彼等の未製原料は如何なるものであつたか、最後にかかる生活條件から結果したところの人間對人間の關係は如何なるものであつたか、を精細に研究することの餘儀なきに至るべきである。而して、凡そかくの如き問題を

つ、自分が、自分の活動の眞の動機や出發點をつくりあげたのだと空想してゐるのである。

同じ歴史的運命に依つて結び合はされた種々な階級が同じ社會制度のうちに包含せられる限り彼等の觀念形態のうちにも共通の特徴が見られる。併し、この共通の特徴なるものは、個々の階級心理の特殊な特徴と比較すれば第二義的重要さを有するにすぎない。階級闘争に相應じて彼等の觀念形態の闘争が存在する。支配的階級の心理は、その痕跡を、その階級がその中であらゆる自分の能力を發展させるその歴史的時代におしつける。それは、支配的心理となり、云ひ換へれば、宣言がゲーテの言葉をまねて云つてゐる様に「一定時代の支配的思想は、常にいつも、單に支配的階級の思想たるに過ぎない」のだ。

四四、社會科學における辯證法と自然科學における辯證法

歴史的變化の一般的過程のなかにあつて、道徳と云ふものが如何に可變なものであるか、と云ふ事は、何が善であり、何が悪であるかと云ふ觀念に關する不斷の推移がこれを物語つてゐる。ある時代にあつて道徳的であつたものも、他の時代にあつては不道徳となつてしまふ。

「如何なる道徳が今日我々に説かれてゐるか？ 第一にキリスト教的封建的な往昔の信仰時代から傳來された道徳がある。それがまた根本的にはカトリックとプロテスタントとに分れ、更にそれがエスイットリカトリックと正統派プロテスタント道徳から、所謂「開けた」道徳に至る細分派に分れてゐる。これと並んで近代的ブルジョアの道徳及びプロレタリアの最も進歩した諸國においては過

去、現在及び未來が、三群の、同時にそして相並んで行はれる道徳説を給してゐる譯である。然らば何れが眞實の道徳であるか？ 絶對的終局的な意義においては何れも眞實ではない、が現在において現在の變革を、即ち將來を、代表する道徳、云ひ換へればプロレタリアの道徳が、最も多くの繼續的な要素を持つてゐるであらう。然しなほ我々が、近代社會の三階級、封建貴族、ブルジョア及びプロレタリアートが各々自らの特殊な道徳を有つてゐることを知るならば、我々はこの事實から唯左の結論を抽出し得るのみである。人間は意識的にか無意識的にか、自らの道徳觀を究極において、自らの階級狀態の基礎をなしてゐる。實際上の關係——彼等の生産し交換する所の經濟的の關係から、取得するのであると。

「然しながら上述した三個の道徳理論において、多くのものは三者に共通である——これは少くとも永久不變の道徳の一端ではなからうか？——が、かの道徳理論は同じ歴史的發展の三個の異つた段階を表はしてゐる。従つて共通な歴史的背景を有つてゐる。その故にまた必然的に多くの共通點をもつてゐるのである。そればかりではない、同一な或は同一に近い經濟的發展段階に對しては、道徳理論も必然的に多かれ少かれ一致せねばならない。動産に對する私有が發展した瞬間から、この私有が行はれてゐる凡ての社會に對して、汝盜む勿れ、と云ふ道徳命令が共通でなければならぬ。然らばこの命令はそれに依つて永久的な道徳命令になるのであるか？ 決してさうではない。窃盜への動機は排除された社會においては、即ち久しきにわたつて、精神病者が、窃盜をするに過ぎないやうな社會においては、汝盜む勿れ！ と云ふ永久

的の眞理を嚴かに宣明せんとする道徳説教者は、如何に嘲笑せられるであらうか。(エンゲルス、反ヂューリング論)(譯註)

(譯註) 邦譯「マルクス、エンゲルス全集」第十二卷二七四—二七五頁を見よ。

宣言が現はれた時代には進化、變化の思想は、まだやつと科學のなかにその道を開いたに過ぎなかつた。三十年代の終りに、スライデン及びスパンに依つて凡ゆる生物の基本的機關としての細胞に關する學説がたてられた。有機體の發展史は、カール・エルンスト・ベルの著書によつて強い刺激を受けた。

地質學では舊い大災厄説——この主要な代表者はキューベエであつた——が、ヒュットン及びライエルの新學説にその地歩を讓つた。その新學説によれば、大災厄變革の形において現はれる大變化は、非常に長い時代の間に小作用の總計された結果であり、量的變化が質的變化に移ることであると説明された。

既に無機物質と有機物質との間には一つの橋がかげられた。科學者——これにはリービッグ(この人の著作はマルクス及びエンゲルスに依つて既に四十年代に高く評價されてゐる)も入る——は植物が自分の最も重要な要素——炭素——を空中から攝取すると云ふ事を證明するを得た。即ち、植物は非有機物質を有機物質にするに云ふ事を證明したのである。かくてラファジエによつて開拓された物質保存の法則は、有機體に對してもおし續められた。一八二八年にはペーレルが實驗室で動物有機體に依つて造りあげられる物質たる尿素の合成を實現し、再出した。やつと四十年代に至つて、ロベルト・マイエル及びヘルムホルツに依つてエ

ネルギー保存の學説に對しその基礎があたえられた。ヘルムホルツの著書は宣言と殆ど同時(一八四七年)に現れた。エネルギー保存の學説は有機體の研究の領域から神祕的な生命力と云ふものを追ひ出し、今やエネルギーの一形態から他形態への轉化法則を研究する事を問題とするに至つた。

マルクスが既にその中で資本主義社會——これを彼は社會組織歴史的形成過程の特殊の一段階として描き出してゐる——の發展法則を發見し終つた、宣言の出た年から十一年たち、「經濟學批判」出版されるのと殆ど時を同じくして、有機體、史的發展過程、法則をたてたダウインの著作が發表された。人類學、人種學、諸制度史の發達、あらゆる社會生活の諸現象——宗教、道徳、文學、藝術、法律、政治——の研究に對する歴史的方法、適用は、六十年代に至つて始めて、ダウイン及びマルクスの影響の下に、實際的に着手され始めた。その後集集され、尙未だ充分には仕上げを加えられてゐない、尨大な資料も矢張り、充分に、マルクスの見解を、即ち、「一定の生産方法及びそれに對應する生産關係」一言に云へば「社會、經濟的構造」は、その基礎の上に法律的及び政治的の上部構造がよつてつたところの現實の基礎である。「物質的生活社會的意識形態がたつところの現實の基礎である。物質的生活の生産方法は社會的、政治的、および精神的の生活過程一般を制約する」と云ふ見解の正しさを確證する。

四五、プロレタリアートの獨裁 宣言においてマルクス及びエンゲルスは、常に、「プロレタリアートによる政治權力の獲得、プロレタリアートの支配」と云ふ事を云つてゐる。今、問題になつ

てゐる個所、「プロレタリアートを支配階級の段階にまで高める」と云ふ個所において「プロレタリアートの獨裁」と云ふ表現は見あたらない。併し、その内容の凡ゆる根本的な諸要素はそこにある。獨自の著述によつて、自分は、この表現が二月革命の經驗の結果として始めて表れたものであると云ふ事、マルクス及びエンゲルスはそれを、フランス・プロレタリアートの六月の敗北の後に始めて用ひ出したのだと云ふ事を示さうと思つてゐる。フランス・プロレタリアートの六月の敗北の後に、兩人にとつて、次の事が明かになり始めた。即ちプロレタリアートは唯單に、政治權力の獲得と云ふ事のみ満足してゐる事は出来ないと云ふ事、プロレタリアートは舊い國家機構を破壊し、新しい國家機構をつくりあげなければならぬと云ふ事、一過渡的段階として、プロレタリアートの階級的獨裁——そのみが搾取者の抵抗を壊滅せしめ得るのである——が必要であると云ふ事。かやうにしてのみ、始めて、プロレタリアートは、ブルジョアの支配をプロレタリアートの支配にし、支配階級として組織されたブルジョアを顛覆し、そのかはりに自ら自身を、即、今や支配階級として組織されたプロレタリアートを置く事が出来るのである。この革命的社會主義、共產主義に對しブルジョアはブランキイズムと云ふ名をあたへてゐる。マルクスは、この革命的社會主義を、「空想的社會主義」即ち「その幻想のうちに、諸階級の革命的闘争をば、それに必然的な諸現象と共に、小立憲主義や感傷主義に依つて排除してしまふ」社會主義と對比してゐる。

「革命的社會主義——それは、永久革命であり、プロレタリアートの階級的獨裁である。それは、あらゆる階級差別の廢止、この

差別のよつてもつてたつ生産關係の廢止に對する、且つこの生産關係に對應するあらゆる社會關係の廢止に對する、かつ亦、これ等の社會關係より生ずるあらゆる思想の變革に對する過渡の段階として必要なものである。

「ゴタ綱領の批評」においてマルクスは次の様に云つてゐる。「資本主義社會と共產主義社會との間には前者から後者に移る革命的變轉時代がある。そしてそれに相應して、また政治上の過渡時代がある。その過渡時代の國家は即ち「無産階級の革命的獨裁」となるより外に方法はない。」

而して、マルクスは「現今」のプロシア國家において宣傳の目的に役立つ事を豫想するやうな最低綱領に、その過渡的時代の事をとりあつかふ理由はないとつけ加へてゐる。

プロレタリアートが既に支配階級たるに至つた時代を豫想する綱領が提出されてゐる宣言の中においての事は別問題である。

この綱領を研究して見る前に、も一つ他の事について若干云つて置かなければならぬ。宣言は、労働者革命の第一歩が、支配階級の段階へまでプロレタリアートを高める事であらねばならぬと云ひ、つ、さらにつけ加へて「民主主義の獲得」と云つてゐる。

これは、ブルジョア民主主義と對立せるプロレタリア民主主義の獲得と云ふ事を意味してゐるのである。労働階級の政治的獨立的活動に對し完全なる自由をあたへる様な政治的條件の獲得を意味してゐるのである。プロレタリア民主主義はプロレタリア國家がブルジョア國家と區別されるが如くにブルジョア民主主義とは著しく區別される。労働階級民主主義は、財産を奪はれたる者の民主主義である。ブルジョアジの民主主義は財産所有者の民主

(譯註)

イスクラ開版「共產主義のABC」下巻附録、同開
吉田繁之譯「綱領問題資料集」參照

四六、過渡的時代に對する共產主義者の綱領

此の綱領を理解するためには、問題は社會革命の時期に關して云々されてゐるのだと云ふ事、「財産權に對して強力的な侵害」をなし得るのは、既に支配階級となつたプロレタリアートのみであると云ふ事を注意する必要がある。又、次の事をも忘れてはならない。此の数へあげられてゐる諸方策は殆ど至る所において採用され得る、と云ふ條件づけがなされてゐるが、それは凡ての最も文明の進んだ國々を豫定してゐるものであると云ふ事、従つてこの綱領は國際的性質をもつており、一般に英國をも、フランスをも、ベルギーをも、獨逸をも、豫想してゐるものである、と、云ふ事。これは各國の共產主義者が、その國の特殊條件に應じて、特殊の要求を提出するのを排除するものではない。

此等の要求は、それが宣言のなかに叙述された様な形においては、上記の原因によつて、特にマルクス及びエンゲルスに屬するものではない。それ等は大會において決定されたものである。多分は共產主義者大會の全部の集会的努力の結果であらう。それに對しては各個々の國々の社會的・政治的條件の多様性や労働者運動の發展程度を考慮に入れなくてはならない。綱領のなかには、既に以前に種々の共產主義者によつて提案せられ、極微量の不一致を起してゐる種々な諸方策が入つてゐる。

最初の要求はチャーチスト運動において熱心に論議されたものである。オコナーの追従者達は、その「土地同盟」案を支持した。

主義である。ブルジョア自由主義はフランス大革命時代に國民をば能動的市民と受動的市民とに分けやうとした。ブルジョア民主主義は唯、バリ・プロレタリアートの壓迫によつてのみ、選舉權を市民のあらゆる部類(下僕、日雇労働者を含めて)におし廣めたのである。民主主義の根本的標識は、民衆の主裁及び自治にある。完全な民主主義は、官僚主義の存在が最期を遂げたころにのみ可能なのである。それ故に労働者の民主主義は、全く官僚主義を拒否する。それは、あらゆる社會的及び國家的機能に、選舉及び交代權の原則を施行する。この根本的な特徴はプロレタリアートの階級支配の機關たる理想的なソビエツト制度のうち實現されてゐる。

「ブルジョア共和國は、全民族的、全國民的、或は超階級的意志といつたスローガンに依つて、御光をつけられた如何なる民主主義的なものであらうと、實際においては、土地や其他の生産手段に對する個人的所有が存在するために、ブルジョアジの獨裁であり、一握りの資本家に依る、尨大なる數の労働者に對する搾取と壓迫の機關である。これに對して、プロレタリアの、或はソビエツトの民主主義は、資本主義に依つて壓へられたその階級の、プロレタリアと貧農——半プロレタリアの即、人民の尨大なる多數者の大衆的組織を、全國家的機構の、地方的及び中央の、上端より下端までもその機構の不易の、且つ唯一の基礎としたのである。それに依つて、ソビエツト國家は就中、何處にも見られなかつた程の比較すべからざる廣汎な形態において如何なるものにもせよ上から任命された權力の絶對にない地方的自治を實現した。」(ロシア共産黨綱領)(譯註)

それは大土地所有者からの買収及びそれ等の細片を都市労働者に交付する事によつてする新しい小財産所有者の創設を目的とした。オ・ブライアンの追従者達は土地を國有財産とすること、即ち土地の國有を主張してゐた。此の點では、それ等は、唯、トーマス・スペンスの舊い要求を新らしくしたに止る。トーマス・スペンスは既に次の事、即、土地財産の收奪と地代を國家の費用にあてる事を主張してゐる。「哲學の貧困」で、マルクスは地代の資本主義的性質を指摘してゐる。

「耕作者が、産業資本家のために労働する單なる労働者、日傭取、賃銀労働者の役目まで押し下げられてしまつたこと、土地を工場同様に利用する處の産業資本家が乗り出して來た事、地主が小君主から俗的高利貸に轉化したこと、之こそ地代によつて表現されたところの、諸關係なのである。地代として土地財産は、動産化せられ、一種の商業的動産となる。都市産業の發展、並びにそれから結果する社會組織が地主をして、販賣利潤、即ち彼れの農産物の貨幣收入のみを追及せしめ、遂には自己の土地所有の中に、貨幣を打出す機械以外の何物をも見ないやうに餘儀なくせしむる時代に至つて、始めて地代が可能となるのである。……我々は、ミル、シエルブエリエ、ビルディッチ、その他の經濟學者が租税の納付に代ふるに、地代を國庫に歸屬せしめよと、要求したことを了解することが出来る。それは産業資本家にとつては、ブルジョアの生産の總體における一の無用物、一の蛇足と考へられる處の地主に對する彼等の偽らざる憎惡の表現だからである。」(譯註)かくの如く地代を國家の費用にあてよ、といふ要求は、四十年代において既に、ブルジョア經濟學者によつて要求された

ところなのである。

(譯註) マルクス「哲學の貧困」、邦譯二八二乃至二八七頁を見よ。

マルクス及びエンゲルスは大土地財産の收奪、それ等のプロレタリア國家の財産への轉化を擁護してゐた。この要求を、彼等は、ブルジョア民主主義の要求と對立せしめてゐる。

「ブルジョア民主主義と労働者との間の争闘を引き起す所の最初の問題は封建主義の廢止であらう。第一回フランス革命におけるが如く、小ブルジョアは封建的領地を、自由財産として農民にあたへる、即、農村プロレタリアートをば保存して、小ブルジョアの農民階級をつくりあげやうと欲するのである。併し此等小ブルジョア農民階級は現在、フランスの農村がそうである様な貧困化と益々増加する負債の山の中に沈んでゐる外、出道もない。労働者は、農村プロレタリアートのために、又、自分自身のために、この案に反對せざるをえない。労働者は、沒收された財産が國有となり、大農法のあらゆる優越さを享有する協同せる農村プロレタリアートによつて耕作される労働者の植民地となる事を要求したのである。これに依つて社會的所有の原則は、動搖せるブルジョア所有關係の間にあつて一度に大きな基礎を獲得するのである。民主主義者が農民と結びつく様に、労働者は農村プロレタリアートと結びつかねばならない。」

第二の要求は英國の事情を基礎としてたてられたものである。最初これはブルジョアジーの各部分間の闘争の結果として起つたのであつた。後には勤勞大衆の要求として主張された。英國の急

質的部分の一つたる保護制度(國民労働の保護)に依つて力を加えられるのである。

そして、マルクスはつけ加えて云ふ。「公債及びそれに照應する國家財政制度が、富の資本化と民衆に對する收奪との上に大きな役割を演ずると云ふ事實から、コベット、ダブルデーその他多くの著述家たちは、近世における民衆窮乏の根本原因を此點に求めるといふ錯誤に陥つた。」(譯註)

(譯註) 「資本論」第一卷(邦譯)二〇一五—二〇一六頁参照。

國債や租税制度に關するコベットの煽動は大きな役割を演じた。最初、一七九八年に「一時的の貢納」として施行された所得税は、フランスの敵手を容易く征服せんがために、ピットが英國ブルジョアジーから要請したものであつたから、平和の締結と共に直ちに廢止されて了つた。そして、この嫌ふべき租税のあらゆる回想を廢棄してしまふために、それに關するあらゆる證據は、ロイドブルームの提議に依つて、燒棄されてしまつた。

コベット及び其他の英國急進主義者等の煽動は此の後、唯、強化する一方であつた、そして、單に小ブルジョアジーの間だけに止まらず、労働者の間におきてさへも、次第に大なる成果をもち得て行つた。租税制度の改正にあつても穀物條令の廢止におけるが如くに、それを根本的要求として考へる事を拒否してゐたチャーチスト達は、コベットの批判を續けかつ發展せしめた。そして、ブキャンターアオ・プライアンがこれを行つた様に、租税政策の階級的性質を暴露した。三十年代には累進所得税を求めると請願が議會に提出された。さらに、労働者の不満、所得税に賛成する

進主義者は勤勞大衆の名においてそれを根本的要求として主張した。

膨大な國債の増加、此の國債に對して利子を支拂ふ事の必要は、凡ての租税制度の急進的な改變を必要とした。「國債は利子その他についての年々の支拂を支拂すべき國庫収入を支柱とするものであるから、近世の租税制度は必然に又國債制度の缺くべからざる補充となつて來るのである。政府は國債に依り、納税者には直接感知せしめずして臨時費を支拂し得るに至るのであるが、その結果は増税を必要ならしめることになるのである。他方に又、次ぎから次ぎへと負債が累積されて、増税が避け難くなる結果、政府は新たな臨時費に對し絶えず新たな公債を募集せざるを得なくなつて來る。されば最必要の生活資料に對する租税(隨つて又かかる生活資料の價格昂騰)を樞軸として回轉する近世の國家財政は、それ自身の裡に自動的進行の胚種を藏すこととなるのであつて、租税の過重は偶然の一件件ではなく、寧ろ一つの原則となるのである。さればこそ、この制度を初めて採用した國家なるオランダの大愛國者、ドウキツトは、彼れの金言の中に激賞を與えて、これ正に賃銀労働者を従順、節儉、勤勉ならしめると同時に、過度の労働をもなましむる最良の制度だといつたのである。だがこの制度が賃銀労働者の状態に及ぼす破壊的影響よりも當面の場合我々にとつてより重要なことは、この制度を通じて、小農民、手工業者等、一言に云へば小ブルジョア階級の凡ゆる分子の上に強行される所の收奪これである。この後の現象については、二つの異つた見解は存在して居らない(ブルジョア經濟學者の間にさへ)。そして此方面における收奪の効力は、國庫制度の本

か穀物條令を棄却するかの必要は一八四二年における所得税の復活となつた。今度は、唯、それを恒常的なものにする事を要求し、且、それを高率にして累進的なものにする事が問題たるだけになつた。この要求が決して、特にプロレタリア的、共產主義的なものでないこと云ふ事、これは、プロレタリアが自分の綱領の中に小ブルジョアジーの武器庫から持ち來つて入れた處の不充分な方策の一つであると云ふ事、それは、マルクスがフランスの急進主義者、ジラデンを批評した中に強調したところである。

「税制改革とは、凡ゆる急進的ブルジョアの口ぐせであり、あらゆるブルジョア經濟的改良家共の特權である。最古の中世紀の町人から始まり近代的英國の自由貿易論者に終る凡ての闘争はこの税制に歸結する。税制改革は産業の發達を妨げてゐる傳統的に傳承された税制の廢止を目的とするものであるか、國家の經營をより安價にし或は租税をより公平に分配する事を目的としてゐるのかである。ブルジョアは租税の平等的な分配と云ふ空想が實際において、その手から抜け出る事が多ければ多い程、より熱心にこの理想を追究する。ブルジョアの生産條件、労働賃銀と利潤、利潤と利子、地代と利潤との關係上に直接立てられた分配條件は、租税によつて、最良の場合といへども、唯、第二義的な點が改善され得るに止まり、その根本的な點は、尙改變されざる。租税に關するあらゆる考察と論議だては、此のブルジョアの諸關係の永久の保存と云ふ事を豫想してゐるのである。租税の全廢でさえもブルジョアの財産とその矛盾の發展を速めるだけにすぎないであらう。租税は一定の階級を特典的な位置におき、反對に他の階級の位置を非常に惡化させ得るものにすぎない。これ、例え

ば、貴族の財政支配下にあつて我々が見るが如きものである。租税は、唯單に、ブルジョアジーとプロレタリアートとの間に介在する中間的社會層を破産させるにすぎない。此等中間的社會層は租税の重荷を他の階級の上に轉化し得ぬ位置にあるのである。プロレタリアートは新しい租税と共により下層へ下層へと落込んで行く。古い租税の廢止は労働賃銀を高めない。それは利潤を高める。革命時代において、尅大に増量された租税は私有財産に對し、一つの攻撃的武器であり得るであらう。併しこの場合でさえもそれ自身では、新しい革命の方策となるか、或は、結局、再び古いブルジョア關係にたぢもどるか、そのどつちかであるにすぎない。租税の輕減、より公正なる分配——これ陳腐なブルジョアの改良である。租税の廢止——これブルジョアの社會主義である。このブルジョアの社會主義は特に工業的及び商業的の中間層及び農民の關するところである。既に現在において最もよい世界に住んでゐる大ブルジョアジーは、勿論、このより良い世界のための空想を鼻であしらふ。併し、資本税を唯一の租税とする事は一つの優越點を有する。あらゆる經濟學者、特にリカードは、かかる唯一の租税の利益である事を立證した。資本税を租税とする事は、一舉にして、無数の且つ費用のかかる税制管理のための、今までの職員を廢してしまふ事である。それは生産及び需要と供給の規則正しい過程の進行を最も破壞しない事である。それは他のあらゆる租税にもまして最も多く、奢侈に費される資本を確保する事である。マルクスにとつては租税の領域における要求は戰術的に考量されてゐる。その標準たるものはそれが私有財産に對して直接加ふる攻撃となる程度である。「若し民主主義者が適當量の租税と云ふ

事を提議するならば労働者は、累進的な租税を要求しなければならぬ。若し民主主義者が自分から、輕度の累進税を提議するならば、労働者は、その累進率によつて大資本が消滅せざるを得ない様に急速に増加する租税を主張しなければならぬ。若し民主主義者が國債の整理を要求するならば労働者は國家の破産を要求しなければならぬ。」

第三の要求はサン・シモン主義者の綱領の根本的條項の一つであり、後に至つて彼等から若干共產主義者にゆづり渡されたものである。資本主義秩序の主要な基礎には手をふれないでおくサン・シモン主義者の理論においてはこの相續權の廢止が現存秩序の不正を匡正する主要物、生れのよいと云ふ事と結びついた色々な特權に對する主要な解毒劑として、大きな役割を演ずるのである。生産手段が社會に屬し、私有財産が廢止され、唯、消費物に對する個人の所有のみが保存される様な共產主義社會においては相續に依つて渡される様な大きな財産の蓄積は不可能になつてしまふ。併し相續權の廢止は過渡期において、資本主義的及私有財産的諸關係を消滅させる手段として大きな役割を演じ得るのである。これも矢張り不十分な方法である。併しそれを徹底的に行ふ時には私有財産に對して大きな打撃を加へ得るのである。既にブルジョア社會の枠内においても、相續に對する累進説は、直系以外のもの相續權の剝奪と共に國家收入の源泉たり得るのである。

第一インターナショナル時代においては、相續權の廢止は根本的要求として、バクレーンに依つてかかげられた。マルクスを代表者とする總務會は、相續權と云ふものが生産の部類カテゴリーに入るものでないと云ふ事、相續に關する諸法律は原因ではなく結果であ

り、既存の經濟的社會組織の法律的表現であると云ふ事、生産手段を社會の所有にしてしまへば相續に關する法律は直ちに餘計なものとなつてしまふと云ふ事を指摘した。それ故に、目的とする處は個々の人々に搾取る經濟的の權力をあたえてゐる凡ゆる制度を廢止する事であらねばならない。併し、相續權の廢止及び制限は社會改造の出發點の一つたり得るのである。私有財産權及び相續權に對するかかる侵害は、過渡期、即ち、一方においては舊い經濟的基礎が未だ根本的な變化を受けて居ず、他方においては、労働階級が法律關係において急進的な變革の要求をかかげ得る程には力が充分でない時代にあつては、大切なものである。かかる過渡的方策として、相續税を高める事、遺産の權利の制限が推奨され得る。フランス大革命の實踐によつて起つた第四の要求は、既にこのままの形でバブーフの布告や訓令のなかにも見られ、三十年代及び四十代の、革命結社の綱領中にもくりかへされてゐる。

第五の要求は、銀行や信用に莫大な意義を附與したサン・シモン主義者の主要な諸條項の二つを想はせる。併しこれは單に形式的な類似に過ぎない。既に一八四七年ブルードンの無料貸付や國民銀行に對して用捨なき批判をあげたマルクスは、尙一層の事、サン・シモン主義者の信用や銀行の幻影には同意し得なかつたのだ。ブルードンの國民銀行が商品生産の諸法則を廢止するのに無力なのと同じ様に、サン・シモン主義者の中央銀行は生産を調節し、恐慌を排除する事は少しも出來ないのである。どつちの場合にもせよ、生産手段に對する私有の存置と云ふ事と共に、資本主義のあらゆる法則は尙力を有してゐるのである。

「銀行業が、一般的簿記と社會的規模に立つ生産物配分との形態

を伴ふことは事實であるが、伴はれるのは要するに形態のみである。信用制度及び銀行制度はかようにして、資本の私的性を廢除してしまひ、それ自身において、但しそれ自身に對してのみ資本そのもの、廢除を含むことになる。銀行制度は資本の配分をば特殊の營業として、社會的機能として、私的資本家及び高利貸附業者の手から取り上げてしまふ。が、それと同時に又、銀行及び信用は、資本制生産をそれ自身の制限外に出でしめる所の最も有力な手段となり、恐慌及び詐欺を助長する最も有効な要具の一つとなるのである。」併し、自分の手中に信用を集中せしめてゐる國民銀行が國民の生産のあらゆる動作を管理する事は出來ないとして——この任務は既にベケルが國民銀行に對し課してゐる處である——尙、それは、過渡期において、あらゆる國民的信用をプロレタリア國家の監督下に置く事を可能にし大なる役割を演じうる。

「最後に、資本制生産方法が共同的労働の生産方法に推移する過渡期に當り、信用制度が一つの力強き楨杆として役立つであらうことは、疑ひをいれない。が、それは、他の方面における生産方法それ自身の大なる有機的の革命と相關聯した一要素としてのみ、かく役立つのである。他方に又、一部社會主義者の抱懐する如き、信用制度及び銀行制度の奇蹟的の威力に關する幻想は、彼等が資本制生産及びその一形態たる信用制度について全く無智なる所から生じてくる。生産機關が資本に轉化される事なきに至るや否や（土地私有の廢止と云ふことも、その中に含まれる）信用制度は最早それ自身としては何等の意義をも持たなくなる。この事は、サン・シモン主義者でさえも看破してゐた所である。反對に資本制生産が存續する限り、利子附資本も亦その一形態として存續

し、これが實際に信用制度の基礎となるのである。」(マルクス、資本論)(譯註)

(譯註) 邦譯第三卷二〇八乃至二〇九頁參照。

第六の要求は第一及び第五の要求よりして論理的に起つてくるものである。鐵道が國家によつてでなく、私的會社によつて建設される場合でさえも、借り下げ金を利用して國家の費用によつて富んで行くのである。合衆國においては鐵道會社は國有土地の廣い地域をもらひ受け、そして國內最大の地主たるに至つてゐる。鐵道に關し専門的著述をなしてゐるベケルは、既に、此の要求をば、マルクス及びエンゲルスが、ドイツのために造つたかの専門的の綱領中で提議してゐると殆ど同じ言葉で叙述してゐる。

七番目の項目中に述べられてゐる國有工場はルイ・ブランの國民工場と同じだと云ふわけにはならない。これは國家の扶助による生産協同組合の組織と云ふ事ではなく、私有企業の國有化、私有企業の國有化された國家的企業への轉化と云ふ事になるのである。ルイ・ブランにとつては國有工場は労働に對する權利の實現である。共産主義者にとつては國有工場は凡ての人々に對しこの一様な労働義務の施行を豫想する。パブーフの布告においても既に述べられ、次の八番目の項目で主張されてゐる。この凡ての人に對しての一律な労働義務の施行と云ふ思想はもう一つ他の共産主義的要求、労働軍の建設と云ふ事と結び合つてゐる。これは、ワイトリング、同じくデザミの様なフランスの共産主義者のもとにおいて既に發見される要求であるが、最初、既にフリーエに依つて敘述されたものである。この労働軍の最も重要な任務の一つ

は共同計畫——同じくフリーエの好むところの思想——による田野の耕作と改良である。

我々は既に、マルクスが社會内及び工場内の分業に如何に大なる意義を附してゐたかを知つてゐる、都市と農村との分離が人類史上に如何なる役割を演じてゐるかを知つてゐる。これからして第九の項目に述べられた要求が起つてくるのである。

「既に空想主義者達も分業の影響について、即ち一方においては労働者の萎縮につき他方においては一生涯にわたる單調で機械的で同一行為の反復に限られた労働活動そのものの萎縮について完全なる理解を持つてゐた。フリーエも、オーエンも、都市と田圃との對立の排除をば、古き分業一般を廢除するための第一の根本條件として要請してゐる。彼等兩人にあつては、全人口は千八百人から三千人までの集團として田圃に分布され、この各集團はその割宛區域の中央にある大宮殿に居を構へて共同家計を營むことになつてゐる。フリーエは如何にも所々で都市を云々してはゐるが、これはしかし、それ自身かやうな相隣接せる四つ乃至五つの宮殿より成るものに過ぎない。彼等兩人にあつては、各社會成員は、それぞれ農業にも産業にも従事するのである。フリーエにあつては、産業では手工業とマニュファクチュアとが主役を演ずるのであるが、オーエンにあつては、これに反し、すでに大産業が主役を演じ彼はすでに家計上の仕事に蒸氣力と機械とを採用すべき事を要求してゐる。のみならず、農業なり産業なりの内部においても、彼等兩人は各個々人のために出来るだけ大なる仕事の交代を要求してゐる。……都市と田圃との矛盾の排除は工業及び農業生産上の利益のために行はれなければならぬばかりではない。

つて新たに受けとらなければならぬのである。

第一インターナショナルのジエネバ大會において採用された決議において我々にかかる労働と教育との結合の詳細なる基礎づけを見出すのである。

また社會保健の樹立のためにも行はれなければならないのである。たゞ都市と田圃との融合によつてのみ、今日の空氣、水、および土地、等の汚濁が廢除されるのであり、たゞこれによつてのみ、今や都市において衰弱しつゝある大衆が、その廢棄物を病氣の生産にではなく、自然の共同の實驗室における有用なる原料たらしめ、農業の進歩を助けしむるのである。……されば都市と田圃との分離の排除は、決して空想ではない、然りとて此の廢除が全田圃上にできるだけ平等に大産業の分布されることを條件とする場合においてもさうである。文明が我々に残してくれた大都市でふ遺産は、いふまでもなく、これを除去するに多くの時間と労苦とを要するであらう。けれども、この遺産をそれがたとへ緩慢ではあるにしろ、除去されねばならず、またされるであらう。」(エンゲルス、反デューリング論)(譯註)

(譯註) 邦譯、「マルクス、エンゲルス全集」一二卷四五九頁乃至四六三頁參照。

而して第十項目において述べられた要求における主要な諸任務の一つは智的労働と肉體的労働との分業の惡結果の廢止にある。全社會的及び無料の教授は既にパブーフや其の一派が要求したところである。これら凡ては大空想主義者が既に主張してゐたところである。教育は青年のために全面的な技術的活動を準備すべきだと要求せるオーエン及びフリーエの意見によれば、人間は全面的に發達しなければならず、且つ労働は、その分業の結果として、失はれたその誘引性をば、かゝる多様性とそれから起つてくる個々の労働の各「階程」(フリーエの表現による)の最大の連續によ

教育といふ言葉のうちに我々は三つのものを理解する。第一に智的教育。第二に肉體的教育。これは學校において體育及び軍事教育が行はれるのでなければならぬ。第三に技術的教育。それはあらゆる生産過程の一般的原则を知らせるものでなければならぬ。同時に、兒童に各種の労働要具の使用の實際的訓練をあたふるものでなければならぬ。智的及び技術的教授の順次的、累進的進行過程は青年労働者の分類に適應するものでなければならぬ。技術學校の費用及び維持費は一部分此等學校の製作物の販賣に依つてあてられなければならない。有給の生産労働と智的教育、肉體的訓練及技術的教授とを結び合せる事は労働階級を中間及び上層階級の水準以上に高める事になるであらう。」

再びくり返して云つておかねばならないのは、宣言の中にかかげられ綱領は凡て最も文明の進んだ諸國のためにかけられた國際的綱領である、と云ふ事である。併し個々の國々の共産主義者は、この綱領に對し、自分等が、先づ自分自身のブルジョアジーをやつつけてしまはねばならぬその國の特殊性だと考へてゐるものによつて方針づけられた、自分等の特殊な要求を付加し得るのである。この例證となるものは、一八四八年のドイツ革命の勃發以後、直ちに、即ち宣言の公布された數週後に、ドイツ共産主義者によつてかかげられた綱領である。マルクス及びエンゲルスに依つて署名されてゐるこの綱領は、いくたの項目において宣言のなか

に掲げられた綱領とは異つてゐる。それについては宣言の最後の章で評註において再び云はう。

四七、中央集権主義と國家 一八七二年のドイツ版への宣言のなかに於て、マルクス及びエンゲルは宣言の若干の項目は既に陳腐になつてしまつたと云つてゐる。彼等は、はつきりと、ブルジョア國家機關に對する關係の問題を指摘してゐる。しかしこれと共にまた政治的中央集権主義に關する問題もあるのである。この問題に關しても、同じくマルクス及びエンゲルスは五十年代の始めに至るまでにおいて自分等の主張した見解を否定してゐるのである。マルクス及びエンゲルスは、己れの戦術上の構圖においてフランス革命の經驗に依據しつゝ、且つ労働階級による政治權力の將來の獲得をば、國民集會時代との類似によつて考慮しつゝ、中央集権化された政治的機構——二人はこれをジャコビン派がつくりあげたものだと思つてゐた——に對して甚大なる意義を保證してゐる。此の機構を占領する事は、即ち、一國全部の革命的獲得の事業を容易にする事である。正にこれ故に、彼等は、一八四八年の革命以前に、革命中にも、尙又革命後にも數年間、熱心に、ドイツ及びフランスの民主主義者のあらゆる、聯邦的、非中央集権的傾向と戦つたのであつた。

「民主主義者は聯邦共和國の實現に邁進するか、若しくは少くとも單一不可分の共和國を避け得ない場合には、自治體に出来るだけの自治獨立を許して中央政府を傷けようと努むるであらう。労働者は此の計畫に對抗して、常に單一不可分の獨逸共和國の實現に努力すべきのみならず、共和國において嚴格なる中央集権實現を擧げなければならない。自治體の自由とか自治等に關する民主

主義者の餘舌に決して迷はされてはならぬ。除去すべき中世遺物や打破すべき地方的因襲の尙多數存在するドイツの如き國にあつては、斷じて村落、都市、州のために、中央部より發足してこそ始めて其全勢力を發揮しうべき革命的活動が新たなる障害を受けざる様な事は吾々の默過し能はざるところである。……一七九三年のフランスにおけると同様、今日のドイツでは、嚴格なる中央集権の實行が眞に革命的黨の任務である。」(譯註)

(譯註) 「マルクス、エンゲルス全集」第五卷四二二頁を見よ。此れは一八五〇年三月に書かれてゐる。然るに一八五二年二月には、マルクスは、「ブルジョアの十八日」の中で、フランスではあらゆる革命は政府機關を破壊しないで完成してしまつたと指摘してゐる。「交互に政權を獲得せんとして鬭争せる諸黨は、此の尨大なる國家建造物を勝利者の主要なる獲物と見なした。」マルクスは既に此の機關の破壊と云ふ問題を提出してゐる。しかし實際中央集権の保存と云ふ事を條件としてゐる。近代社會が必要としてゐる様な國家的中央集権主義は封建主義との鬭争において鍛えあげられた軍事的に官僚的政府機構の廢墟の上のみ勃興しうるのである。」

マルクスは尙次の事を、國民集會に依つて發展せしめられ、既に今までに國民的統一の建物のために着手されたものをさらに發展させたフランス大革命によつて完成されたと云ふ事、ナポレオンが始めてこの中央集権化を完成させたのだと云ふ事を強調してゐる。

ヤコビン黨の組織に依據せる中央集権主義——ロベスピエールが極壓的要素の徵罰とパリ支部の破壊とによつて、自分自身——その支極を破壊し去るまでの——この中央集権主義が不可分に革命的民衆の統治、中央の手にある權力と、縣、自治町村の完全なる自治、即、地方の手にある權力とを結合せしめてゐた、と云ふ事を見落してゐる。

後に至り五十年代における、社會的及び政治的諸制度史の領域におけるより深い研究はマルクス及びエンゲルスをして、共有的土地所有の意義に關する見解と共に、政治的中央集権主義及びその實現の形態に關する見解をも同じく變化せしめた。共產主義者同盟の廻狀中の、上に我々が引用した個所にエンゲルスが加えた註(一八八五年に書き加えられてゐる)において、彼はこの一個所は一つの誤解に基いてゐるのだと云つてゐる。

「今日においては、ブリュメール十八日に至る全革命期を通じて、縣郡都市町村の行政全部が被治者自身の選出にかかり、而も一般國法の範圍内においては完全なる自由を以て行動しうる官廳から成つてゐた事、米國のそれに類似した此地方自治こそ、正しく革命の最強の横杆となり、而もブリュメール十八日のクウデター直後、ナポレオンが急遽此自治に代ふるに當初から純粹の反動要具であり尙ほ現在も存立する知事行政を以てした程強力のものであつた事は周知の事實である。併しながら、地方自治が政治的、國民的中央集権と決して矛盾するものでは無い様に、地方自治は又スウィツルで我々に非常な不快の感を抱かせ、一八四九年には南獨逸の聯邦主義者が獨逸で常套手段としようとした、かの狹量なる縣市町村利己主義と必然に結び付くものでもない。」

パリ・コミューンの經驗は、マルクス及びエンゲルスに、徹底的に次の事を示した。即、「労働階級は出來上つた國家機關を單手に入れて、それを自分自身の目的に利用する事は出來ない。」と云ふ事。先づ、第一にブルジョア國家の主要なる諸機關を、破壊してはなければならぬ。——常備軍を破壊して武装せる民衆を以てそれに代へる。警察を破壊してそれからあらゆる政治的機能奪ひ去り、それをコミューンの責任を負はされた交代せらるべき武器とする。一般にあらゆる官僚制度なるものを廢止して、社會的職務が富裕階級の特權となる事を抑止し、それが、選挙で任命され、交代せらるべき執行者によつて、普通の労働者の賃銀によつて、遂行される社會的勤務たるに至らしめる。

コミューンは議會的であるばかりでなく、働か組織たらねばならない。それは執行する事と立法とを同時にやるのでなければならぬ。舊い中央集権的秩序は、地方においても勤勞者の自治にその地歩を譲らなければならぬ。國民の統一は、破壊されずかへつて、反對に、それはコミューン制度によつて組織されるに至るであらう。それは、自分をこの統一の化身なりと僭稱し、實際は、國民と云ふ身體に寄生した癌なのにもかかはらず、國民に超絶し國民から全く離反し自由になつてしまはうとする國家權力の廢棄によつて、始めて現實的なものとなるであらう。コミューンの眞の意義は、それが被搾取・支配階級間の鬭争の結果としての労働階級の政府であつた、と云ふ事、その中で労働の經濟的解放が行はれうべき最後に發見された政治形態であつたと云ふ事であつた。コミューンは、階級及び階級支配を維持してゐる經濟的基礎を破壊するために横杆として役立つものであつた。これは、労働

階級の獨裁であつた。

しかしこの國家形態は、次の様な時期の間だけ、即、資本主義社會が共產主義社會に革命的につくりかへられ、そこで、階級對立もなく、また階級の支配もなくなるに至るであらう時期のみ、保有されるものである。階級支配を保有せしめる經濟的基礎が破壊されると共に、プロレタリアートの獨裁は國家權力の最後の形態を破壊し去り、國家を單なる生産の管理者たらしめるに至る。

既に、サン・シモン主義者に依つても展開せしめられてゐる最後の命題は、共產主義者の共有財産となつてゐた。マルクスは唯、次の事を——これは、マルクスが、この問題において、その先行者のこうした理論のなかに挿入した新しい部分である——指摘したに止まる。即ち資本主義生産の諸條件に依つて規定されるものとしての階級闘争は、必然的に、プロレタリアートの獨裁となると云ふ事、また、この獨裁は、唯、あらゆる階級の廢止、無階級社會への過渡でのみありうると云ふ事。

「勤勞階級は、己れの發展の道をたどりつゝ、舊い市民社會をば一つの協同團體によつておきかへる。それは、それらの階級をその諸矛盾と共に除去し、本來の意味における政治權力をなくする。なんとすれば、政治權力は市民社會における階級對立の公の表現だからである。」

此の關係を全然理解しない、且つ、過渡期に於てプロレタリアートの獨裁が何故必然的であるかと云ふ事の理解を一寸も持たない無政府主義者等は此の過程をさかさに轉倒して、あらゆる國家權力の廢止から始めようとする。

一八四八年の革命以前にあつては特殊な黨綱としての無政府主義は存在しなかつた。無政府主義は、當時、若干の先行者を有してゐた。彼等の著作の中には主として經濟的な分野におけるその根本的諸命題が、見られるに過ぎなかつた。六十年代、即、第一インターナショナルの時代に至つて始めて、それは一定の理論體系をなして來、バクレーニンに依つて神と國家に宣戰し來つたのである。

これ何故にマルクス及びエンゲルスが、宣言の中で、次第に形成されつゝある共產主義社會の特徴は無國家と云ふ事であると云ふ己れの見解を諸々の社會主義者、共產主義者の共有財産たるに至つた見解の如くに叙述してゐるか云ふ理由である。

バクレーニン及びスウィツルの無政府主義者との論戰、後に至つてはデューリングとの論戰は、マルクス及びエンゲルスをして新たに、國家の役割及びそれとの闘争方法に對する彼等の見解と無政府主義者の見解との間の區別を強調する可能をあたへてゐる。

「階級對立をなして推移せる從來の社會は國家を必要とした。云ひかへれば、その時々々の搾取階級が自己の外部的生産條件を維持するための、即ちわけても現存の生産方法によつて與へられた抑壓の條件（奴隸制度、農奴制度または賦役制度、賃勞働制度）のもとに被搾取階級を暴力的に屈服せしめるための組織を必要としたのである。國家は全社會の公の代表者であり、眼に見らるべき一の物體への社會の概括であつた。けれども國家が然るものであつたのは、それが其の時代々々において自ら全社會を代表せる其の階級の國家であつた限りにおいてのみ、すなはち、古代においては奴隸を所有する國民らの國家であり、中世においては封建貴族

の國家であり、我々の時代においてはブルジョアジの國家である限りにおいてのみで然りであつた。この國家はやがて事實上、全社會の代表者となることにより、自分みづからを不用ならしめる。抑壓すべき何等の社會階級がなくなるや否や、また階級支配と從來の生産の無政府状態に基づく個別的生存競争とが廢止されて、これより發生する衝突や暴行もまた除去されるや否や、もはや抑壓すべき何物もなく、殊特な抑壓權力たる國家を必要ならしめる何物もない。國家が眞に全社會の代表者として現はれる最初の行爲——即ち社會の名においてする生産手段の掌握——は、同時に國家としての最後の、獨自なる行爲である。社會關係への國家權力の干渉は、一領域から他のそれへと漸次不用となり、かくて遂におのづから眠り込む。人に對する支配の代りに、事物の管理と生産過程の指導とが現はれる。國家は『廢止』されるのではなくして、それは死滅するのである。『自由なる民衆國家』なる言ひ草は、その時折の煽動的意味での正當づけについても、はた又その終局的の科學的不充分さについても、これを上述のところに照らして考ふべきであり、また國家は今日から明日にでも廢止さるべきものとする所謂無政府主義者の要求もまた、同じく上述のところに照らして考ふべきである。」（譯註）

（譯註） 邦譯「マルクス、エンゲルス全集」第十二卷四四八—四四九頁参照。

第三章への註解

四八、反動的ロマンチズム これは、封建貴族の間から、出たフランス革命の社会的反動の主要な代表者達である。この封建貴族に對しジャコピン黨員の主要な打撃が加へられた。フランスの文獻において、この反動はその古典的な表現をボナード（一七五四—一八四〇）及ジョゼフ、デ、メストル（一七五四—一八二一）の著作中に見出した。彼等は舊い秩序をその主要な基礎——神、王、及び絞刑吏と共に取り戻さうとした。ボナードはあらゆる革新に對し激しく反抗した。新しい工業の手になるものは凡て即ち「十八世紀の原理」を思はせるものは凡て、彼の用捨なき非難の對照となつた。大都市、信用、銀行——凡て これ等は悪魔のしわざであつた。「特に、工業及び技術の進歩はボナードを憤激させた。これ等工業及び技術の進歩のうち、彼は、正しくも、原初的な社會秩序、父家長的な習慣と、及び一般に中世紀的な孤立及閉鎖の精神と全然兩立しえざるものを認めた。正常な國家においては、彼の意見によると、地主階級の利益が第一におかされるべきであつた。この地主階級こそ最も堅實最も秩序と安寧に忠實なる階級であるからである。しかるに、商業、工業、資本主義の優越は國民の間に、可動的な「革命的」要素を持ち込んだ。長い時代に依つて神聖にされた社會の身分分けを握りくづしてしまつた。社會關係をおき換え、風俗を頹廢に導いた。石炭について、ボナードは深い憂愁の情を以つて次の如く語る。「この燃料は、黒煙を發し、不愉快な臭氣を擴め、憂鬱をもたらし、そして、長い間には

國民の性質をさえも亂してしまふ事になるのである。」と。宣言が、封建主義との闘争におけるブルジョアジーの革命的役割、中世紀的な牧歌をば歴史の渦に投げこむ工業の役割を畫いた時、それは、フランスにおいてはボナード、デ、メストル、シャトブリアン（一七九一年）の如き、イギリスにおいては、コールリッジ（一七七二—一八三四年）及びソウチ（一七七四—一八四三年）の如き中世紀的、カトリック的、封建的秩序の欽慕者の呪詛を考慮に入れてゐるのである。彼等は皆、大工業をば、それが舊い父家長的諸關係を破壊したと云つて難じたのである。この父家長的な諸關係においては、凡てがこれの定められた場所におちついて居り、且つ、この父家長的な諸關係においては、封建時代の仔羊は、地主と僧侶に、柔順に且つ恭々しく、王座と祭壇の榮譽のため己れの毛を剪まれたのであつた。

四九、封建的社會主義 封建的社會主義の代表者中のうちで、ここにはマルクス及びエンゲルスは、唯、「フランス勤王派の一部」と「青年英國黨」とをかぞえてゐるだけである。アンドレルは若干の名前をあげてゐる。併しそれ等の名前の大多數は無鐵砲にとりあげられたもので、充分な根據を有するわけではないこれはその右翼の同僚とも區別せられる勤王派で彼等は國王ルイ・フィリップ即ち「商店の顯現」をいたゞく・七月王政の商店主や製造場主を攻撃し、民衆の同情をかちえんとした勤王派の一部である。民魁たらんとして此等、勤王派の者共の滑稽な努力は既に、ハイネの笑ふところとなつてゐる。「サンキエロット（ズボン無し）」……急進共和主義者の事」の英雄を氣どり、ジャ

コピン黨員の赤い帽子と云ふこけおどしの風體でジャラつく、此等假裝の偽君子より以上に滑稽な見世物はない。時には、間違つて、僧正の赤いマントも引つかぶる。そして、皆に自分の坊主頭を示すために頭にかぶつた自分のかつらをとつて見せる。」

王座と祭壇のための煽動、——だが今のところ貧民のためにと云ふ煽動、これこそ、此の傾向の凡てを特徴づけるものである。その活動の時期、寺院との徹底的分離に至るまでは、ラメネースもこの派に屬した。しかしこの派の最も鮮明な政治的人物はモンタラムベル伯爵（一八一〇—一八七〇年）である。彼は、*ヴキルヌヴバルジュモン*（一七八四—一四五〇年）と共に、製造工業労働者の擁護に盡した。

兒童保護法案の審議に際し、モンタラムベルはブルジョア秩序を最も辛辣に攻撃した。彼は、貧民を、それらの妻を、彼の子を、不健康な兵營、まつたくの牢獄——此處であらゆる年齢の男も女も、法式通りの、累進的な頹廢へと運命づけられる——へ投げ込むために、その家族の爐邊から、農村生活の恵みから切り離す、紡績工業の罪を鳴らした。

グイルヌウヴ、バルジュモンについては、マルクスが「哲學の貧困」の中で（譯註）ブルードンを紹介してゐる。彼を、近代社會の向つて行く天理の目的はカトリック教であると指示する經濟學者として。而して、實際において、ボナードの政治教義とシスモンチの經濟批判とを結合せしめたこの經濟學者は勤王派のキリスト教派の經濟學の全體系をつくりあげたのであつた。主人と労働者との間に如何なる干渉をも拒否する自由主義經濟學に反對し、彼は労働立法の領域において多くの方策をあげてゐる。例えば、幼年

労働の禁止、衛生監督官、工場労働者の技術教育の義務、貯蓄及び保險金庫、等等。さらに進んで、この集團は所謂、カトリック的社會主義者となつた。その旗振人達は、苦悶する「庶民」のために天來の指導者として、既に、封建的貴族でなく、大産業の地主を求めてゐる。

（譯註）邦譯「哲學の貧困」二〇三を見よ。

「青年英國黨」の事については、既に一八四五年にエンゲルスはその著書、「英國労働階級の狀態」中に批評してゐる。それはずつとやはらかな調子をもつて。何故、彼等はブルジョアジーの個々の分派間に存する差別の検討に没入する事が出来ないかを説明し、彼は、尊敬に値する例外としてブルジョアジーの少數の代表者中に、若干の急進主義者と合同して、最近「青年英國黨」に組織された「人道的」なトーリー黨員を數へてゐる。これ等の人々のうち特に注目すべき人々は議員、ジースレイトリ、ボイスビック、フアイランド、ロード・ジョン・マナーズ、等である。ロード・エマシレイも亦これ等に伍してゐる。「青年英國黨」の目的は、あらゆる、その輝やかしい且つロマンチックな封建主義を備えた、「陽氣な英國」の復興である。この目的は、勿論、達し得られないものであり、笑ふべきものである。それは、歴史的発展に對する單なる嘲笑にすぎない。しかし「青年英國黨」の人々が、現存秩序に、支配的な偏見に、反對して戦ひ、且つ、現存秩序のあらゆる汚穢さを認めた善良な意圖と勇氣は認めてやるべきである。

「青年英國黨」は英國貴族の若い代表者達の一團であつた。その主唱者は、ジョージ・スミスであつた。工業資本主義と自由貿易

の反對者であつた彼等は、廣汎な民主主義的基礎を持つに、社會的
原則の上にたてられた眞正の貴族の政治的支配權の復興を空想
してゐた。

此の集團に富裕なヨーロッパの商人家族の幼芽たるジースレ・
イリーが（後にはロード・ピコンス・ファイルドが）接近して行つた。
既に一八三九年に、彼はチャーチストの請願に關する演説によつ
て注目を受けてゐた。この演説において彼は、綱要に同意したわ
けではなかつたが、それを擁護して戦つた。その小説、「カニング
スピ」及び、特に「神巫」、別名「二つの國民」において彼は、社
會上のトリー主義の思想を通俗的に解説してゐる。この第二の小
説においては彼はチャーチスト運動を同情の色を以て描き出し、
大工業の發展下にあつて、互に如何なる關係をも共鳴をも有せざ
るに至つた、互に異つた世界に、異つた遊星の上に住んで居るか
の如くにその習慣をも、思想をも、感情をも、異にしてゐる、「二
國民」に分けて、英國を鮮明に描き出してゐる。

此の叙述はさきに我々に依つて引用されたエンゲルスの叙述を
思ひ出させる。エンゲルスの著書はヂイスレイリーの小説と殆ど
時を同じうして出版されたのである。

政治的集團としては、「青年英國黨」は、既に、一八四五年には
瓦解を來した。ヂイスレイリーはやがてたちまち右翼トリー派の
陣營に移行し、後には、英國保守黨の官許指導者となつた。

ボースビック、フアーランド（彼の労働者を擁護する演説は、
マルクスに依つて「資本論」中に引用されてゐる。）ロード・エイ
ユリーは英國の工場立法史上において大きな役割を演じてゐる。
これ等の人々のうち、ロード・エイユリーは利得にかけての非

はカーライルをまつた多くの反動家としてしまつた。俗物に對する
正しい憤激は、彼にあつて、彼を岸邊にうちあげた歴史の波に對
する、俗物的な愚恥となしてしまつた。

「獨佛年誌」におけるその論文の一つにおいてエンゲルスは、甚
だしく共鳴的な解説を、カーライルに依り、其の著書「過去と現
在」中に解説された見解にあたえてゐる。この著書は、小冊子
「チャーチズム」と共に、社會貴族主義の見地から書かれた、英
國労働者の状態に關する最良なものである。

此等二つの著述がエンゲルスに對し、強い感銘をあたえたと言
ふ事は疑ひない。そこで、エンゲルスはどつちかと云ふと英國自
由主義者の黨、ホキッグよりもトリーを好んだ。「ホキッグはイ
ギリスの社會的狀態に關して餘りに主我的な黨派であるために判
斷を下すことが出来ないのである。即ち、イギリスの社會の中心
である工業は其手に握られてゐて、それを富ましてゐる。同派は
工業に何の非難すべき所もないと考へ、そして其擴張が一切の立
法の唯一の目的であると考へてゐる。何となれば工業は同派に其
富と權力とを與へたが故である。これに反し、トリー黨は、其
の權力も獨裁的支配も工業によつて破壊せられ、其の主義も工業
によつて動搖させられたので、工業を憎悪し、そして精々大目に
見ても、工業は止むをえない罪惡であるとしてゐる。それ故に、
ロード・エイユリー、フアーランド、ウオルター、オーストラレー等々
を主導者とするトリー黨の博愛的分派が作られ、そして、それ
が、自ら工場労働者を代表して、工場主に反對する事を自分達の
義務とした。トーマス・カーライルも亦、元來はトリー派の一
人であつて、今尙この派に對しての方がホキッグに對してよりも

常な専門家であつた。そこで、チャーチスト及びフリートレード
派（自由貿易の賛成者）にとつてはそのキリスト教的な偽善ぶり
が猛烈な非難の的となつた。それは、一つの形を以てしては、あ
らゆる缺點を攻撃し、しかし、それがその説教者自身に利得をも
たらす限りでは、眼を閉づるのである。

シェフツペーリー伯爵、即ち、又の名、ロード・エイユリーは
工場に對する貴族の仁慈な攻撃の先頭にたつてゐた。そこで、一
八四四年及び一八四五年において彼は「モーニング・クロニクル
（マブデン及びブライトの機關紙）によつて、農業労働者の状態
を、暴露する場合における好個の題目となつた。マルクスに依つ
て引用されてゐる表よりして、我々は、この敬禮的にして仁愛な
貴族の労働者が如何に貧弱な賃銀を得てゐたかを知る。その上、
この貴族は、この賃銀からして、家賃と云ふ口實の下にその著る
しい部分をも差し引く事を辭せなかつたのである。

封建的社會主義の代表者には有名な歴史家であり論評家である
トーマス・カーライル（一七九五—一八八一）をも加える必要が
ある。エンゲルスは彼に對しては一層、庇護的に書いてゐる。「全
然、獨立獨歩であるのはトーマス・カーライルである。最初、彼
はトリー黨員であつた。しかし後には彼は自分の黨以上に進み出
た。彼はいかなる英國のブルジョアにも増して、社會的紊亂を深
く理解してゐた。そして労働の組織化を要望してゐる。自分は、
正しき道を見出し得た彼、カーライルが、その道をより突き進み
得ん事を望んで止まない。自分は、多くの他の獨逸人の如くに、
最良の望を彼におくる。」

一八九二年出版の註にエンゲルスはつけ加えて云ふ。「二月革命

近い關係にある。」（譯註）

（譯註）「獨佛年誌」邦譯一〇六一—一〇七頁を見よ。

一一四五年の英國農奴の状態と一八四五年の英國労働者の状態
とのある程度の相似は、エンゲルスがその著書にひいたところで
あるが、カーライルに依つてしてゐるされてゐる處である。ブルジョ
アの英國社會における、貨幣取引、現金勘定の專制的支配の描寫
もカーライルに歸する。これの反響は宣言にも見られる。コムモ
ン（譯註）崇拜に情落して了つたブルジョアジーに反抗しつつ、
カーライルは「産業の總指揮官」、産業の組織に任ずる労働の指導
者などと云ふ事を空想してゐる。「此の組織の實現のために、虚偽
の指導をば、眞正の指導と眞正の政府に、よつて代置せんがため
に、カーライルは「眞の貴族主義」、「英雄崇拜」を求める。彼は
もう一つ他に大きな任務をあげてゐる。それは、その指導によつ
て不可避的な民主主義と不可缺的な君主制度とが結合せられるで
あらう様なこれ等、最良の人々を求める事である。」

（譯註）富の神の稱。

エンゲルスは既に一八四四年に、カーライルが宗教的世界觀よ
り解放され得ないと云ふ事を指摘した。彼の汎神論は、尙やは
り、そのままの人間より以上な、何かを認めるのである。……そ
れが爲に、彼は「眞の貴族」に對し、「英雄」に對して望みをかけ
るのである。即ちこの英雄と云ふものが、最もうまく行つた場合
には人間以上のものになる事が出来るかの如く思ふのである。若
し彼が、人間と云ふものを、どんづまりまで行つても人間である

人間として認めてゐたならば、恐らく彼は、人類を再び、牝羊と牡羊、支配するものと支配されるもの、貴族と賤民、主人と愚物との群に二分しやうと云ふ様な考を起さなかつたであらう。そして彼は才能の正當な社會的地位は、暴力による支配の中にあらずして、鼓舞と先驅との中にある事を見出してゐたであらう。……民主主義は確に唯通過點に過ぎない。が、然しそれは新なる改良せられた貴族政治に至る道程ではなくして本當の人間の自由に至るものである。丁度それは、現代の無宗教状態が、結局は一切の宗教的なもの、超人間的なるもの、及び超自然的なるものからの完全なる解放へと導き行かざるべきものであつて之等のものの再興に達せしめらるべきものでないのと同じである。」

「カーライルは『競争、需要及供給、拜金主義』等々の不完全を認めてゐる。そして土地所有の絶對的、正當を主張しやうなどとは毛頭考へてゐない。然らば何故に之等の前提の全てから當然に生ずる簡單な結論を引き出して、そして財産一般を非難しなかつたのであるか。「競争」「需要及供給」「拜金主義」等々の全てのものである根本である私有財産をその儘存続させておいて、どうして彼は之等のものを否定しようとするのであらうか。『労働の組織』はそれに對して何一つする事は出来ない。それは利益の同一性がなければ全然遂行せらるるものではない。」

既に一八五〇年には、我々は今よりは辛辣なカーライルの批評を「新ライン評論中」に發見する。カーライルは一八四八年の事件以來反動家となつてしまつた。「然し」彼れの舊い功績は認められてゐるのである。(譯註)

(譯註) 邦譯全集、四卷五九三頁以下を見よ。

してしまつた。この同情の核心は奴隸制度と名付けらるるものである。

五〇、キリスト教的社會主義 キリスト教的社會主義は封建的社會主義と密接な關係を持つてゐる。我々は、君主主義に對する崇拜が寺院に對する崇拜と、如何に、フランス大革命に對する社會的行動のあらゆる代表者等の著作中に結合せられてゐるかを見る。しかし、舊い絶對王制の威望が全く地に落ち、新しい七月王制も一日一日と益々聲望を失つて行つた時に、信心深い慈善家等の間には新しい傾向が發展し出した。社會主義は、今や宗教と寺院をより民主主義的にし、宗教と寺院とを原始キリスト教時代にたちかへらしめ、そしてそれを和解しようと努め出した。此のキリスト教的社會主義の最も有能な代表者はラメーヌスであつた。彼は、既に、一八三七年に、其の著書「ある信仰者の言葉」で、舊い寺院の傳統と縁を切り、勤主派と仲を絶つた。誠實な民主主義者であり、勤勞民衆の熱意ある擁護者であつた彼は、労働者のあはれた状態を鮮明に描き出し、舊約聖書の豫言者の如くに、新しい富豪を管打つた。社會の貧困を治療する手段として、彼は自由な聯合と貧民の生存權を保證するといふ諸方策をあげてゐる。彼はドイツの職人に對しても影響をあたへた。これ等ドイツの職人にとつてはベルネの翻譯になる彼の著書は一時は第二の福音書ともなつたのである。

キリスト教的社會主義のもう一人の大きな代表者はブッシュ(一七九六—一八六五)である。最初彼はサン・シモンの弟子であつた。後、彼はサン・シモンと分れ、キリスト教的な宗教と進歩の主要な發動者としての道德とを自分の理論の基礎とした。共產

「トーマス・カーライルは、ブルジョアジーの見解、趣味、思想が、全英國の御用文學を完全に壓倒してゐた時代にブルジョアジーに文學上で反抗したといふ功績を持つてゐる。且、かくして、彼の仕事は時として革命的性質を帯びたといふ功績を持つてゐるのである。即ち彼の「フランス革命史」において、彼のクロムウェル辯護論において、チャーチズムに關するパンフレットにおいて「過去と現在において。」然るに凡て此等の著書においては、現在の批判は奇妙と非歴史的な中世崇拜と密接に關聯してゐる。これは一般に、例えば、コベットやチャチストの一部のものに如き英國の革命家にしばしば見られるところであるが。彼は過去について、少くとも、社會的發展の一定段階の古典的時代を歎稱してゐる。一方に、現在の事は彼を絶望させ、將來の事は彼に戰慄を起させる。彼が革命を認める限りで、革命と云ふものは、彼にとつて、個々の人間に、クロムウェルやダントンを中心としたものなのである。クロムウェルやダントンを、彼は、彼れが其著、「英雄及び英雄崇拜論」にて現在の完全な絶望からの唯一の出路として、新しい宗教として説いたかの英雄崇拜をささげるのである。」

彼の最近の著述では革命的方面は消えてしまつてゐる。「彼がシユトラウスと意見を同じうする英雄崇拜といふ事からして、英雄といふ字は飛放してしまつてゐる。残つてゐるのは崇拜だけだ。」合衆國における奴隸廢止戰爭の時にはカーライルは奴隸所有者を擁護してたつた。同じく一八六五年には、その慘忍さで有名になつた、ジャマイカ島の英國知事を擁護して激しく戦つた。かくて遂に——と、マルクスは加へて云ふ——都市(決して農村ではない)労働者に對するトリー派のあてやかな同情の水ぶくれは破裂

主義者に反對し、彼は、主として、職人を豫想するところの生産の聯合と云ふ案を出した。ブッシュは、獨立して雑誌「職人」を出してゐたバリーの労働者の一團と結びつくことを得た。あらゆる労働者の組織と關係を結ぶ機會を決してのがさなかつた。エングルスは、そのバリー滞在中に、「職人」の編輯人と接近しようと試み、この雑誌に論文を寄せさへした。

一八四八年の革命に對する反動の勝利以後になると、キリスト教的社會主義は——その最も多様な色彩と混交とを持つた。即ちカトリック教と社會主義、キリスト新教と社會主義、英人氣風と社會主義、單にキリスト教と社會主義との混交を持つた、——その發展にとつての最も好都合な状態を得た。宣言の時代においては、それは唯プロレタリアートのほんの少部分を集めてゐたにすぎなかつた。

宣言におけると同じ様に、「獨逸ブリュッセル新聞」の紙上で出遇つた一論文との論戰においても辛辣に、マルクスは社會主義をキリスト教化さうとするあらゆる試みに對し、新しい平和な社會主義の基礎としてキリスト教的な道德をもち込まうとするあらゆる試みに對し、反對の意見を吐いてゐる。この論文の筆者はワザーネルと云ふドイツの保守的キリスト教社會主義の主要な代表者の一人であつた。彼はドイツ帝國の建設されたつと後になつて一つの政治的傾向として現れたのである。共產主義に對しキリスト教的社會的原理を對立せしめんとせる試みに對し、マルクスは此等の原理が歴史の上で演ずる役割の次の様な敘述に依つて答へてゐる。

「キリスト教の社會的原理は、古代的な奴隸制度を正當化さうと

することであり、中世絶的な農奴制度を稱揚せんとすることである。而して、必要な場合には、顔をしめながらだが、近代的なプロレタリアートの抑壓を擁護することも出来るのである。キリスト教の社會的原理は階級——支配者と奴隷化されたもの——の存在することの必要を説教して廻り、奴隷化された者にとつては、彼等によれば、唯、支配者が彼等に恵みをたれると云ふ信心深い望みがあるのみなのだ。キリスト教の社會的原理は忍従されてゐる凡ゆる汚穢さに對しての報酬を天國に移してしまふ。そしてそれによつて地上におけるこれ等の汚穢さの存続を正當化してしまふ。キリスト教の社會的原理は被抑壓者に對する抑壓者のあらゆる汚穢さを、或は、原罪（譯註）及び其他の罪の正當な罰であると揚言し、或はそれによつて、主が、その金貨を以て人々を贖ふために下された試煉であると揚言する。キリスト教の社會的原理は憶病、自己蔑視、卑下、服従、矛盾、一言にして云へば庶民たるのあらゆる性質を稱揚する（事である）。しかし、自分を人間の屑みたいたしあしらつてもいらたくないプロレタリアートにとつては、大膽、自覺、自負及び獨立の感情こそパンよりも大切なのである。キリスト教の社會原理には、奸策と偽善とのスタンブが介されてゐる。プロレタリアートは革命化してゐるのだ。キリスト教の社會原理とはかかるものである。

（譯註）アダムとイブが林檎の實を食つた罪。

勿論、「キリスト教の社會原理」が常に、この反動的役割をのみ演じたのでなかつたと云ふ事は容易に示す事が出来る。ずつと初期のキリスト教は、それが尙、古代世界に對する反抗と結びついて

ゐた間は、私有財産と國家に對し反抗した。そしてそれは禁欲主義と貧困とを傳導した。しかしこれは非常に大昔の事であり、天上のエルサレムの助けを借りるにあらずんば「勤勞者と被壓制者」のより完全な解放のために條件の存在しなかつた時代の事である。プロレタリアートは宗教と和解するが如きあらゆる試みはねのけなくてはならぬ。たとへそれが最も清純化されたキリスト教であらうと、高尚化されたそれであらうと、或は、「新キリスト教」であらうと、また或は「人間宗教」であらうと。

「宗教は人間が自分自身を未だかち得てゐないか、或は既に得て再び失ひ果てた場合の自己意識と自己感情化である。……宗教に對する闘争は、宗教を精神的香料としてゐるかの世界に對する闘争である。宗教的苦難は一つには現實的困難の表現であると共に、又一つには現實的困難に對する抗議である。宗教は抑壓せられたる活き物の嘆息であり、又、それが魂なき状態の魂である。等しく、それは無情の世界の感情である。即ちそれは民衆の阿片である。民衆の幻想的幸福としての宗教を止揚することは、彼等の眞實の幸福を要求することである。……天國の批判は地上の批判に、宗教の批判は法律の批判に、神學の批判は政治の批判に變じて來るのである。」併し、政治の批判はマルクスにあつては直ちに經濟の批判となる。「一定の生産關係は必然的に一定の社會形態と關聯して居り、そしてそれからして、一定の國家形態に、最後には一定の宗教的意識形態と關聯して居る。」と云ふ結論に到達せるマルクスは、エンゲルスもさうであるが、勿論のこと、プロレタリアートの解放運動をそれこれの形態の宗教意識によつて偽造せんとする試み、それを宗教の阿片によつて毒殺せんとする試みに

は、凡て、極度に否定的に對せざるを得なかつたわけである。

五一、シスモンチ 我々は勞働階級の間にも廣まつた種々な社會主義的教義を呼ぶに「小ブルジョア社會主義」なる言葉を用ひる事にならされてゐるので、「小ブルジョア社會主義」と云ふ節では、ブルジョア經濟學者、シスモンチでなく、すぐと、ブルードン、或はそう云つたもの、批評をさがしにとりかかるであらう。この誤解は、マルクスとエンゲルスとが、「社會主義」と云ふ言葉を我々とは異つた意味に用ひてゐると云ふ事に気がつけば容易に説明がつく。我々は、しばしば、「共產主義」と云ふ言葉を社會主義と云ふ言葉で代用し、或はその反對をやる。宣言の序文で、エンゲルスは、彼及びマルクスが社會主義と云ふ言葉を如何なる意味に用ひてゐたかを説明してゐる。社會主義は、マルクス及びエンゲルスにとつては、勞働者の運動としての共產主義とは異つて、或は、種々な妙薬や萬能の膏藥で社會の貧困を排除せんとするブルジョア運動であり、或は、前者の傾向の代表者と同じく「教養ある」階級、ブルジョアジーにのみうつたへる種々な空想主義的理論の追従者を意味した。そしてこれ等ブルジョア社會主義中に、マルクス及びエンゲルスは種々な集團を認めた。シスモンチは彼等にとつて小ブルジョア社會主義の代表者であつた。なんとすれば、シスモンチは、資本主義を批評するにあたり、小ブルジョアジー及び小農民的尺度をあてがつたからである。「シスモンチの如く近代社會のあらゆる基礎をそのままにしておいて、しかも、生産の正しき分配へ復歸せんと望む人々は、反動家である。なんとすれば、それをせんじつめると、これ等の人々は過去の時代の其他のあらゆる産業上の諸條件をも復活せしめんと望まなげ

ればならぬからである。」（マルクス）

しかしそれにもかかはらず、マルクスが、シスモンチをば資本主義秩序の批判者として高く評價してゐた、と云ふ事は、單に宣言の批評が示す處ばかりではない。マルクスをば剽竊者なりと難じるためにあらゆる努力をし、ある時にはこれ、ある時にはそれと云つた様な舊い經濟學者或は社會主義者を彼の先生に持つてくる。マルクスに對するブルジョアの反對者等は、シスモンチの功績を數へたてる事に依つて、マルクス主義の理論のなかに入つてゐながらもマルクス及びエンゲルスの「發見」でない、いくたの根本思想を發するであらう。尤も此等の彼等の以前に既に述べられた思想もしばしば彼の手を加へられて、一層深い意味を持つ様になり、その全理論のなかにあつて、それらを一層はつきりと明確にする様なり適當な位置にすえられてはゐるのだが。「經濟學批判」においても「資本論」の全巻を通じて、マルクスはシスモンチに對し大なる尊敬の念を以つて批評を加えて居り、且つ、彼をば經濟學の古典學派の最も秀でたる代表者の一人に加えてゐる。經濟學の古典學派——これに最初の大批評を加へた人こそシスモンチである。

「シスモンチは、資本主義生産が自ら矛盾におちいつてゐると云ふ事、その形態及びその生産關係は一方においては、生産力と富との抑止しうべからざる發達を鼓舞するが、他方においては、此の生産關係には、條件の加はつたものであると云ふ事、使用價值と交換價值、商品と貨幣、購買と販賣、生産と消費、資本と賃銀勞働等々の矛盾は、生産力がより發展すればする程、より大なる範圍を獲得してくと云ふ事を深く感得してゐた。シスモンチは、正に

一の根本的矛盾、即同時に、一方では商品よりなりたち貨幣に轉化されねばならず、他方においては生産者の大衆を不可缺の生存手段にのみ制限しておく基礎たらざるをえない生産力と富との抑止しうべからざる發展といふ事を感じてゐた。それ故にシスモンチにとつては恐慌といふ事は、リカードにおけるが如く偶然ではなく、大なる範圍と一定の時期における資本主義に具有された矛盾の本質的な現はれなのである。しかしシスモンチは常に逡巡、動搖してゐる。生産力を生産關係に適應せしむるために國家によつて生産力を抑制しなければならぬのであらうか？ 或は、生産關係の方を生産力に適應せしむるために生産關係を變化させなければならぬのであらうか？ と。彼はかかる際に、しばしば過去に避難所を求め、過去の時代の説教師となつてしまふ。しかしして資本に對する収入、或ひは生産に對する分配のそれやこれやの調整に依つて此の矛盾を除いてしまはうとすることさえも辭せない。分配關係といふ事が生産關係の異つた形態でしかあり得ないといふ事は彼の思ひも及ばないところである。

シスモンチが何よりも先づ推奨するのは國家が生産を獎勵する事を抑制することであり、新しい技術のあまりにも急速な發達にブレーキをかけることである。

しかしして、アンドレルが宣言の批判をあまりにも粗雑だと難じようとも、彼の同僚たるジード教授やリスト教授「(經濟學說史)は、いち早くマルクス及びエンゲルスに同意してしまつたのである。」

「生産を強制する事のかはりに政府は『盲目的なる熱中』を緩和しなければならぬ。學者に向つては、シスモンチは彼等が發明をたえられてゐるのは、唯次の點、即、彼等が、粗野な經濟學の代表者等の特徴となつてゐる労働階級の苦痛に對する犬儒主義的な無視を棄却してゐると云ふ點だけである。これ等は、マルクスが既に「哲學の貧困」において特徴づけた人道學派の代表者達である。

「彼等は、氣やすめのために、現實の對立をば少しでも隠蔽しやうとつとめる。彼等は眞面目に、プロレタリアの困窮と、ブルジョア相互間の放縱極まりなき競争とを、感訴する。彼等は、労働者に對して、節約を守るやうに、よく働らくやうに、子供を餘り作らないやうにと忠告する。またブルジョアに對しては、生産に際して、その熱中を抑制せん事を勧告する。この學派の學說の特質は理論と實際、原則、結果、理念と應用、内容と形式、本質と現實、權利と事實、善き側面と惡しき側面、を果てしもなく區別するところにある。」經濟學に道德味を加える事についてこんなにも多くの事をしやべる學派は他にない。而して、宣言の出た後に、この怯懦な傾向は倫理的經濟學派によつて新たに主張されるに至つた。

五二、眞正社會主義 獨逸或は「眞正社會主義」の辛辣な特徴の描寫は或る程度においてマルクスにとつて、自己批判をなすものである。同じくエンゲルスにとつては比較にならぬ程より大なる程度を以てその自己批判(をなすもの)である。エンゲルスは、ドイツの智識階級が發達の途次において歩んできたあらゆる段階を自分自身経験してゐる。そして、彼が以前に社會主義の哲學的改變物に引きつけられて居た事が強ければ強かつた程、後に至つて彼はより辛辣に、自分に對する以前の誘惑物をば批評したのである。この事は何にもまして次の斷片によつて證明せられる。そ

中止する様に懇願する、經濟學者の言葉たる「Laissez aie Laissez Passer」と云ふのを思ひ出させやうとする、そして、「餘計なものとなつてしまつた世代にもまた經過する時をあたえよ」と要求する。彼は同業組合と特權を附與されたツンプトとの時代に對して秘密な同情をかくしてゐる。それらを生産の利益に適合しない制度なりと非難しつつも、しかも、尙競争の亂用を抑止するためそこらから經驗をとり入れてはいけぬのだらうかと云ふ質問を課す。……可能な限り至る處での、労働と財産との結合の回復と云ふ事はその第一の目的である。このためにシスモンチは、農業においては、彼が父家長的所帯と名付けるもの、即、農民財産所有者の數の増加への復歸を説く。工業においては獨立せる職人の復活を希求する。」

シスモンチの理論の最後の言葉は工業のツンプト的組織と父家長的農村經濟である、と主張する宣言。言ふ所と全く同じではないか？

シスモンチは現代の經濟的諸著作に大きな影響をあたえてゐる。しかし自分の學派と云ふものをつくりあげなかつた。彼の最もすぐれた弟子はビュロー(一八一—一八四二年)である。彼には英國及びフランスの労働階級の狀態についての著書がある。彼はその師よりも若干、尙、つきすすんでゐる。労働及び社會立法の領域においてはサン・シモン主義者の影響が見られるいくつかの改革が、彼によつて推奨された。

オーギュスト・ブランキー及びアドルフ・ブランキー——經濟學史及びフランス労働階級の狀態に關する著作の筆者——兄弟、ドロイズ其他について云へば、シスモンチの影響が彼等に對し、あれは宣言の「眞正社會主義」に向けた非難に對する好個の評註たりうであらう。

「ドイツでは共產主義運動をも汚損しようとしてゐる。いつもながら此處でも、最下級且つ最も不活潑なドイツ人は自分の精神的假睡狀態をば自分の先輩に對する輕蔑と哲學的手前味噲とによつて隠蔽しようとしてゐるのである。共產主義が獨逸において首尾よく産れ出づるや否や、投機的な思想(軍勢はどつと一度にそれをとらえようとおしよせた。彼等はフランスやイギリスにおいて普及した)理となつてゐる。語句にヘーゲルの論理學の言葉の衣を着せれば奇蹟が行へると考へてゐる。而して、この最新の大智識をば何か全く新しいもの、「緊張せるドイツの理論」として世界に提出する。そして、今度は大いに満足して、狹隘なイギリス人及びフランス人の「無益な活動」及び「滑稽なる」社會理論に泥を投げかける事になるのである。幸ひにも、ヘーゲルの歴史哲學を嗅ぐことの出來、かつ、ある程度の無味乾燥なベルリンの教授によつて永久的範疇のスケマチズムにまでされたこの常に出來上つてゐるドイツの理論、後に至つては「フォイエルバッハ」を讀み、且つドイツ共產主義の若干の頁をひもどき、フランス社會主義に關してスタインの著書を見た、この常に出來上つてゐるドイツの理論、この最悪のドイツの理論は大した骨も折らずにスタイン氏に依つてフランスの社會主義及び共產主義をデッチあげ、それに下役をさせ、それに「優越し」、常に出來上つてゐる「ドイツの理論」のこのより高い發展段階にまで、それを「高めた」のである。……死ぬ事を欲しないドイツの理論のこの滑稽なる傲慢さに對して、何等かの時においてドイツ人に、彼等が社會問題を研究する

様になつた時以來、彼等が外面に負ふてゐるものを示してやる事は必要である。現在、獨逸の文獻中にあつて、眞正の・純粹の・獨逸的の共產主義或は社會主義なりとして宣言されてゐる、あらゆるこれ等聲高に叫ばれてゐる空言の中には、現在に至るまで、ドイツの土に育つた思想と云ふものは一つもないのである。フランス人やイギリス人が十年も、二十年も、時には四十年も前に語つたものを——且つ非常によく、非常に明瞭に、非常に美しい言葉で表現したものを、ドイツ人は一番後に至つて、ある部分ではほんの一年位前になつて知り、そこで、それをヘーゲル流に加工し或は最良の場合にあつても、ずつと前に知れてゐるものを再び發見し、且つそうしてそれをはるかに悪い、より抽象的な形態において全然新しい發見物として出版するのである。私は、自分自身の著作物をもこの中から除外するものではない。ドイツ人に屬するものとしては、唯、これ等の思想の表現された粗惡な、抽象的な理解しにくい不細工な形式があるのみである。而して眞正の理論家達に適するものとして、彼等は現在に至るまで、フランス人の有する（イギリス人を彼等はまだ殆ど全然知らない）ものうち、その最も一般的な原則以外には、唯、最悪且つ最も理屈っぽいものを、即ち將來社會の計劃を社會制度を、注意に値するものに數えてゐるにすぎないのである。「最良の部分、現社會の批判、社會問題研究の眞實の基礎、主要な任務は、彼等は、そつと等閑に付して置くのである。」

「それ故に、ドイツの絶對的社會主義も非常に貧弱なものである。最近語られてゐる様な「人間」と云ふ事、若干此等の人間、手つとり早く云えば怪物の「實現」即ち、第三も第四もの仲介者の

なる事が出来る。……マルクス——私の崇敬する人の名前はかく呼ばれる——は尙、ほんの若輩に過ぎないが、やつとのところで二十四歳位であらう。彼は中世の宗教及び政治に最後の打撃をあたえた人である。彼は、最も深い哲學者の嚴肅さを最もするどい鋭智と結合してゐる。ルソー、ボルテール、ホルバツフ、レッツィング、ハイネ、ヘーゲルを一人の人に結合して見よ、——私は結合せよ、と云ふのだ、決して一かたまりによせあつめよと云ふのではない。——すると、君はマルクスを其處にえるであらう。」

ヘッスは「ライン」新聞の創設に關與してゐる。そして既にその紙上においてマルクスよりも早く、共產主義に近づいてゐる。ケルンでは彼はエンゲルスと知合になつた。そして、ヘッスはエンゲルスに「共產主義」は「青年ヘーゲル學派」の必然的な行くべき道であると云つてゐる。數年後には、ヘッスはエンゲルスと共に、「社會の鏡」を出してゐる。その編輯論文においては次の様に云つてゐる。「プロシヤの専制はフランスの議會や或ひはフランス王よりも國民の貧民階級の悲愴に對する同情において缺くる所があるか？ これらの事實は一つの矛盾を示す。而して我が社會の悲愴の眞の且つ最後の原因を熟考すれば、この矛盾が確認されるのだ。そこで、我々は、あらゆる政治的自由主義の傾向に對して、無關心でさへゐるわけには行かなくなる。彼等は我々にとつて、すすんで憎むべき存在とさへもなつた。」

エンゲルスはほんの忽ちの間に哲學的社會主義の遺産から解放されてしまつた。ヘッスも同じく次第にマルクスの新しい見解へと近づいてきた。併し、彼が舊い唯心論的遺産から解放されたのは、はるか遅々たるものであり、困難なものであつた。一八四

手を経たブルードン流の財産に關する所説の様なものプロレタリアのために吐かれるために、若干勞働の組織と云つた様なもの、下層階級の生活水準の昂揚をばその目的とする云ふ貧弱な妖術、それに際しての經濟學及び實際の社會生活の領域における限りなき無智——これ、ドイツ社會主義の全部である。それはそれに加ふるに、理論的な冷やかさと「思想の絶對的な沈着」とに依つて、最後の血の一滴、現實的な力及び氣力の最後の一かけまでも失つてゐる。而してこの倦怠的なものによつて、ドイツを革命化し、プロレタリアートの運動をまき起し、大衆をして思想せしめ、行動せしめようとするのである。」

我々はエンゲルスが自分自身をも除外してゐないのを見る。彼はドイツ哲學的社會主義の最もすぐれた代表者たるモイセイ・ヘッスと非常に密接な關係の下にあつた。それは、マルクスがヘッスに對するよりも、はるかにずつと密接であつたのである。

ヘッス（一八一二——一八七五年）は、マルクス及びエンゲルスよりも數歳年長であつて、その文學的生活をも彼等より早く始めてゐる。マルクスと知合になる前に、彼は、「神聖なる人間性の歴史」（一八三七年）及び「ヨーロッパ・トリアルヒヤ」（一八四一年）を公表してゐる。その中で彼は、「事物の哲學」をば思想の哲學の補足物としてかかげ、己れの人間性の歴史の哲學を説いてゐる。一八四一年に彼は左翼ヘーゲル派と接近しマルクスと和合になつた。マルクスは彼に深い印象をあたえてゐる。

ヘッスはその親友なる有名なドイツの小説家、ベ・オイエルバツハにあつて、次々様な手紙をやつてゐる。——「君は、最も偉大なる、且つ、多分は現存する唯一の哲學者であらうと人と知合に

六年の七月 彼は次の如くマルクスに書き送つてゐる。「最初に共產主義的傾向とドイツの思想とを結び合せる事が必要であつた如くに、現在では、歴史的及び經濟的諸前提を基礎づける事が必要となつた。さもなくば「社會主義者」をやつつける事も出来ないであらうし、あらゆる傾向の反對者をやつつける事も出来ないであらう」と。

共產主義者同盟の組織に伴つたかの執拗なフラクシヨンの闘争においては天性、實際的活動に向かないヘッスは、一方の側から他方の側へとよるめいて居た。共產主義者同盟の大會の前、あつては、彼は全くマルクス及びエンゲルスと立場を異にしてゐた。一八四八年の革命が起つた時には、彼は殆ど始終外國に居り、それが敗北した後になつては、ウイリツヒヤヤツツベルのフラクシヨンに加はり、數年後には全く革命運動から離れ、シオニズム（譯註）の最初の宣言者となつてしまつた。ラツサルがその煽動を始めた時には、彼はこの運動に加はつた。しかし、ラツサールの死後にはこの一派と別れてしまつた。彼は、尙第一インタナショナルにも参加してゐる。彼はバークニンの反對者であつた。

（譯註） ユダヤ人の間におけるブルジョアの國民運動。

宣言の公表以前にあつてはかくの如きものであつた。眞正社會主義の代表者等に對する攻撃がその問題となる限りでは、宣言の辛辣なる批評は主として、カール・グリュニンに向けられたものである。それはエンゲルス自身が宣言の最後の版で註で云つてゐるが如くである。彼についてはメーリングの批評をくりかへす事が出来る。「この人間は純粹、まぢりけのない新聞記者であつた。」

それはその言葉の悪い意味においてである。彼は少しの深さも、ほんの一寸した眞面目さへもない皮相なものに決定的な宣告を下す、粗野な印象をあたふる人であつた。この粗野は、場當りの、氣轉のきいた言葉がそれをかへつてかくすどころか明るみへ出してゐたのである。マルクスとエンゲルスとが眞正社會主義者中の最も嫌悪すべき人間は彼れであると考へたのは正しい。」

マルクスは、宣言、出づる數ヶ月前に「ウエストスフアリアの汽船」誌に載せた「眞正社會主義の歴史」といふ評論の中で、既に、グリニウンのヘッスに對する精神的從屬を指摘してゐる。

「非常につかみどころのない、かつ、神秘的なヘッスの思想も、尙最初のうちはある種の利益を代表してゐたし、かつそれは後に至つて始めて——それが既に陳腐化した時に至つても尙永久的にくりかへされた事に依つて——退屈な反動的な思想となつたにすぎない。しかしこの思想もグリニウンのもとにおいては完全に無意味な代物となつてしまつた。」

グリニウンの書いたものから若干の引用を行へば、それで、理論的にも實際的にも「眞正社會主義」がどんなものであつたかを示すのに充分である。

「フオイエルバッハと云ふ時には、これに依つてペーコンから現代に至るまでの哲學の全著作を云ふ事になるのだ。同じくまたこれによつて、哲學の最後の法廷においては何が要求されるかを、またそれは何を意味するかを云ふ事になるのだ。——我々は世界史の最後の結論として人間を有する。これに、勞働賃銀、競争、憲法の不備をとりあつかふよりもはるかにより確實、かつ根本的な方法である。我々は人間を獲得した。宗教、死んだ思

想、人間にとつて、縁のないすべてのもの及びそれ等の實際上における現はれから解放された人間、純粹の、眞正の、「人間」を獲得した。」

次にかかげるカール・グリニウンの考察の見本は、宣言が何故此の文書を衰弱した文書と云つたかを示す。

「プロシアで憲法を要求してゐる者は誰か？ 自由主義者。自由主義者とは如何なる人間達か？ 自分の家の主人、或ひは自身自身で家を持つか、または此等の尊敬を受けてゐる家屋及び工場所有者の望む所よりは廣い世間を見得ない著述家達である。此等の少數の財産所有者達がその文筆上の防禦者等と共に民衆を構成し得るか？ 否。民衆は憲法を望んでゐるか？ 夢にも望んでゐない。……若しシレジャのプロレタリアートが自覺して居り、かつ此の自覺に對してその所有する権利がふさはしいものであれば、彼等はシレジャのプロレタリアートは憲法に反對する請願をなすに違ひない。併し、プロレタリアートには、このために自覺もなければ權利もない。それ故に我々は彼等にかはつて運動する。我々は反抗する。」

此等の云ひ方は、民主主義者であり、共和主義者であり、共產主義者とは、彼等は「政治的要素」の意義を全く知らず、本質的には「專制主義の從僕」であると云つて非難したハインツェンの如き執拗な共產主義の反對者の火の手に油をそそぐ様なものであつた。

「眞正社會主義」との論戰以外に、この今研究の對象になつてゐる一節は、フランス革命の影響の認められる限り獨逸哲學をも批判してゐるのである。そして第一にカントの哲學を祖上になつて

ゐる。カントの哲學はフランスの革命の要求からして「實踐理性」の要求をこしらへあげた。マルクス及びエンゲルスは此の現象を小町人階級の存續を助けてゐる獨逸の經濟的發達の特殊事情によつて説明してゐる。

「前世紀の終りにおけるドイツの状態は全く明確にカントの實踐理性批判の中に反映せしめられてゐる。フランスのブルジョアジーが、歴史上最大の革命に依つてヨーロッパ大陸の支配者となり、それを占有して了つた時に、一方、まだ政治的には既に解放されてしまつてゐた英國のブルジョアジーが生産を革命化し、政治的にはインドを、商業的には殘餘の全世界を從屬せしめてしまつた時に、無力なドイツのブルジョアは只やつと「善良なる意志」と云ふ事に到達しただけであつた。カントはこの純粹なる「善良なる意志」が何等の結果をもたらさない場合でもそれだけで満足してしまつてゐる。この「善良なる意志」の實現、「善良なる意志」と人間の慾望及び衝動との間の調和は、彼を彼岸の世界へ持つて行つてしまふのである。此の善良なる意志はドイツ・ブルジョアの無力、憂愁、虛無に全く相應するものである。ドイツ・ブルジョアのコレコレした利害は決して共通の國民的階級利害にまでは發展し得ない、そして、それ故にドイツ・ブルジョアは常にあらゆる殘餘の國民のブルジョアジーに依つて搾取せられてゐるのである。此等のコレコレした局部的利害は、一方においてはドイツ・ブルジョアが現實に於て局部的に地方的に制限されてゐることに相應して居り、他方に於てはそれの世界主義的な傲慢さに相應するものである。一般に云つて宗教改革の時以來ドイツの發達は純粹なブルジョアの性質をとつてきた。昔の封建貴族は大部分農民

戰爭の時に滅ぼされてしまつた。残つたのは、一はドイツ帝國的な小諸侯であつた。彼は次第次第に可成りな獨立を獲得し、小さく、小都市的規模に專制王制を模倣した。一は小地主であつた。彼等は自分の少しばかりの、小さな屋敷にくつつい、財産を蕩盡してしまふと陸軍や政府の役所に小ぼけな仕事を求めた。他は田舎の小貴族であつた。彼等は最もけち臭いイギリスの地主やフランスの田舎貴族でさへも恥ぢる様な生活をしてゐた。農業は小農耕作でもなければ大農耕作でもないといつた様な方法で行はれてゐた。そして、その方法は農奴的從屬と賦役ともかかはらず、農民を解放のための闘争にはかりたてなかつた。それはこの生産方法自身が能動的な革命階級の形成される事を許さなかつた事もその一因であり、かかる農民に相應した革命的ブルジョアジーが排除してゐた事もその一因であつた。」

他の個所で、マルクスはドイツの産業ブルジョアジーの遅々たる發達を條件づけてゐる處の、たの原因をあげてゐる。十六世紀における貿易路の變遷。それは中世紀的な産業及び貿易の衰微をもたらすと共に、新しい世界市場をつくり出し、イギリスに、オランダに、フランスに、マニファクチュアを發達せしめた。國內の人口を一掃し、處々においては野蠻状態にまで國を投げ込んでしまつた三十年戰爭（一六一八—一六四八年）の影響。十八世紀の終り以來再び復活したが、尙父家長的關係が支配してゐた國民的産業部門——亜麻産業——の性質。土地貴族の力の増大を助け、都市ブルジョアジーの障害となつた。農業生産物に依つて占められた輸出品の性質。——凡て此等はドイツ・ブルジョアジーの發達を妨げ、その政治的自立を抑制した。

「利害の細分は政治組織の細分に、——小公國及び自由都市に相應したものである。そのために必要な經濟的條件の凡てが欠けしるる國に、どうして政治的集中化が行はれ得ようか？」

これよりして、王制時代に發達し、ドイツに於ては特に漫畫化された不恰な形をとつた國家と官僚制度との優越が生ずるのである。國家はあたかも、官僚のうちに現實化されたる全然獨立的な權力であるかの様になつてしまつた。これよりしてドイツを特徴づける忠實なる官僚的思想形態、國家に對するあらゆる幻想、自分の理論をばブルジョアの利害とは全然直接の關係なしにつくり上げる國法に關す理論家達の外見上の獨立が生じてくる。」

「その故郷においては現實的な階級的利害に據つてゐたフランス自由主義がドイツでとつた特徴的な形態として、我々はまたもそれをカントに見るのである。彼はドイツのブルジョアの如くに——彼はそれの辯護者であつた。此等の理論的なブルジョア思想の基礎に物質的利害と物質的生產關係によつて決定され條件づけられてゐる意志とがある事に氣がつかなかつた。そこで、彼は、この理論的表現をば、それが云ひ表してゐる利害と引き離して置つた。そして、物質的に動機づけられてゐたフランス・ブルジョアの意志決定をば「自由なる意志」の、意志それ自身の、人間の意志の、純粹なる、自己決定としてしまひ、かくして、それから純粹に觀念的な觀念と道德基準とをつくり出してしまつた。正にこれ故にこそ、ドイツの小ブルジョアは、この勢力的なブルジョア自由主義が最初には恐怖の支配と云ふ形をとり、次には無恥なブルジョアの利潤の追求と云ふ形をとつた時にその現實におびやかされてしまつたのである。」

漸く七日革命の後に至つて始めて、其時までは單に現實的な自由主義の映像であり、發達しつつあるブルジョアの觀念形態でもなければ、その階級利害の反影でもなかつたところのドイツ自由主義はより現實的な形態をとるに至つたのである。「より益々強化されてきた外國の競争、ドイツにとつてより益々避けられなくなつてきた世男市場への從屬は、個々に分離してゐた地方的利害をある程度の共通性のうちに結合せしめた。正に一八四〇年以來、ドイツのブルジョアは此等の共同の利害を保證する事を考へ始め、彼等は國民的になり、自由主義的になつて行つた。彼等は關稅と憲法とを要求した。」

正に、此の時からして「真正社會主義」が發達し始める。舊い哲學的觀念を通して、あまり好ましくない、しかし現實のドイツ・ブルジョアの利害を見る事多ければ多い程、また工業ブルジョアと封建領主との間の關係が——たとへ「尊敬すべき王」に呼びかける卑屈なる言葉に蔽蔽されてゐやうとも、尖鋭化されればされる程、グリニオン等々の様な真正社會主義者達は、此の自由主義に對する呪咀を空費しドイツ労働者が自分の政治的綱領をつくり上げるのを妨げたのであつた。

ハインツェンに對するマルクスの答へは同時にグリニオンに對する答へでもある。

「プロレタリアートはブルジョアにとつて 國民の幸福と云ふ事が主要な目的であるか否かと云ふ事は問はうとは思つてゐない。ブルジョアがプロレタリアートを肉弾として利用しようとしてゐるか、否かと云ふ事も問はうとしてゐない。プロレタリアートはブルジョアが何を欲してゐるか云ふ事を問ふのではなく、ブルジョアが何をしなければならぬかと云ふ事を問ふのである。問題は次の事に歸する。プロレタリアートにとつては如何なる制度が、その目的を達する上により多くの手段をあたへるか云ふ事に。それは現在の政治制度、即官僚の支配であるか或は自由主義者が欲してゐる制度、即ちブルジョアの支配かと云ふ事に。イギリス、フランス及びアメリカにおけるプロレタリアートの政治的狀態をドイツのプロレタリアートの状態に比較すれば、ブルジョアの支配が全く新しいブルジョアに對する、闘争の武器をプロレタリアートの手にあたへるのみでなく、プロレタリアートのために全然新しい状態を——公認される黨といふ状態を保證すると云ふ事を確保するに充分であらう。」

正にこの見地からしてマルクス及びエンゲルスはかくも熱心に「真正社會主義」に對して闘争したのである。真正社會主義は封建主義の重い抑壓を自分の肩の上に感じてはゐるもの、同時に工業ブルジョアの政治的支配をも恐れてゐたドイツ町人階級の觀念形態たるに至らざるを得なかつたのである。

四十八年の革命の經驗は、自分自身階級として政治的に結成しない以前からして、既にプロレタリアートに對立してしまつた。ドイツ・ブルジョアのみならず、フランス及びイギリスのブルジョアも、プロレタリアートがブルジョア革命からして自分の、即ちプロレタリア革命の出発点をつくりあげるや否や、むしろそのプロレタリア革命よりもその摘出権を棄却しようとする事を示したのは事實である。しかしこれは單に變化した條件に應ずる新しい戦術を指示するものにすぎない。

五三、ブルードン 宣言においてはシスモンチが小ブルジョア

社會主義の古典的代表者となつてゐる一方、我々現代の讀者にとつて意外な事には、我々が小ブルジョア社會主義と不可分に結びつけてゐるブルードンの名を、單にブルジョアの或ひは保守的社會主義の主要な代表者の中に數えられてゐることである。宣言の分類が現在では歴史的意義を有するに過ぎないと云ふ一つの新しい證據が與えられたわけである。

マルクス自身、一八六五年、ブルードンの死後にブルードンの一般の特徴を叙述したなかで、彼は、既に一八四七年に「貧困の哲學」をば小ブルジョア社會主義の法典と呼んだ、と書いてゐる。マルクスがブルードンに對し大なる尊敬の念を以つて向つた時代もあつた。「神聖家族」では、マルクスは尙、ブルードンを經濟學における革命家と見てゐる。

「ブルードンは經濟學の基礎——私有財産を批判的な研究、而も最初の徹底的な、顧慮する所なき同時に學問的な研究の題目とした。これは彼の爲したる大なる學問上の進歩である。經濟學に革命を起し、眞の經濟學を始めて可能ならしめた進歩である。」(譯註)

(譯註) 「マルクス、エンゲルス全集」第一卷五四七頁。一八六五年に、マルクスがブルードンの同じ述作を批評したなかでは、それを全然異つた風にとりあつかつてゐる。

「この著書の表題そのものが、既にこの著書の不満足なる所以を示してゐる。問題の提出の仕方は極めて拙劣であり、之に對して正確に解答することは不可能であつた。ギリシャローの財産は封建的財産によつて置き換えられて居り、封建的財産はブルジョアの財産によつて置き換えられてゐた。歴史それ自身が、

過去の財産關係に對する一種の批判を背負はされてゐた。ブルードンの取扱はふと思つたのは、近代のブルジョアの財産關係であつた。かかる財産關係は何であるかの間に對しては、經濟學の批判的分析——それは之等の財産關係の總體を、意志關係としてのその法律的表現としてではなしに、その現實の形態において、即ち生産關係として把握するところのもの——によつてのみ、答へられ得たのである。ブルードン君は、之等經濟的關係の總體を、所有權といふ法律的概念に從屬せしめてゐるから、從つて彼は、既にプリソトにおいて一七八九年よりも前に「財産とは盜掠である。」と云ふ言葉の中に立てられた答へから、一步も出ることが出来なかつたのである。」(譯註)

(譯註) 「哲學の貧困」三二二頁—三二二頁參照。

此等二つの批評の間に存在する激しい矛盾——これら二つの批評の間にはブルードンの第二の大著述「貧困の哲學」及びマルクスによるそれへの答へが介在する——は、マルクスが「神聖家族」の中においては、プロレタリアートの見地に來てはゐるが、漸く哲學及び法律の批判から經濟學の批判へと向ひかけてゐるにすぎなかつた、と云ふ事に依つて説明されるのである。

ブルードンは一八四一年においても一八四六年においても一樣に小ブルジョアである。其間に違ひとも云ふべきものは、唯、彼が最初の著作においては尙フランス小農民の見地からして、ブルジョア社會を批評してゐると云ふ事、然るに「貧困の哲學」においては一般に小ブルジョアの見地からして批評を行ひ、そして其際尙小生産制と労働者との間をふらつてゐると云ふ事にすぎない。こ

小冊子の數は、一年増しにその數を加へて、それは全くストライキの數、工場を生長に比例して行つた。

これらの博愛のなかに「慈善事業の輕業師」が多勢ゐた事は事實である。しかし心から、労働者に盡さうと企てた人々のゐた事もまた事實である。彼等は勤勞階級の幸福のためにあらゆる同盟をつくつた。勤勞階級の間から「労働者がその状態に對する不満を強める」様な事、或は彼等の組織を助長する様な事はすべて注意してとり去らうとした。しかし工場階級たる以上に獎勵的な褒賞の支給と云つた様な事以上に、進んでゐたわけではなかつた。正氣な社會は、労働の道義的水準の昂揚と云ふ事を心にかけけるに至らざるを得なかつたのである。

この博愛主義の實踐にはその理解がともなつた。

「博愛學派は對立關係の必然性を否定する。彼等は、一切の人間をしてブルジョアたらしめんとする。彼等は、理論が實際から區別せられかつそれに對立が含まれてゐない限りにおいて、理論の實現を希望する。實際においては、絶えず矛盾にぶつかる場合でも、理論の上では、これらの矛盾を取りのけることの容易なのは、今更云ふ迄もないことである。ここに於いてかこの學説は、現實の理想化されたものとなる。それ故、慈善主義者はブルジョアの諸關係の本質を形成しかつたから切り離す事のできない、かの對立關係を除き去つたブルジョアの諸關係を、表現するところの範疇を、飽くまで保持しようとするものである。彼等は、自身では、ブルジョア的實際に對して眞剣に戦つてゐると思つてゐる。が、彼等は、他のものよりも、より一層ブルジョア的なものである。」(譯註)

れからしてあらゆるその矛盾が起つてくるのである。ブルジョア社會を改造せんと欲して、彼は實際においては、それをあらゆる矛盾から淨め去り、それを理想的なブルジョア社會にしようとするにすぎないのである。この意味において彼は、歴史の車輪を後もどりさせようとする反動的、小ブルジョア社會主義の主要な代表者としてのシスモンデとは異つて、保守的、小ブルジョア社會主義の代表者と呼ばれ得るものである。しかしブルードンは一八四八年の革命以後になつて、新たに、その見解をかえてゐる。現在、ブルードン主義の名で知られてゐるもの、「ミューチュエリズム」の名の下に第一インターナショナルの歴史中であつて、六十年代に非常に大きな役割を演じた思想は、ブルードンが、労働者運動の復活の影響下にその見解を、非常に大きな程度において都市プロレタリアートの要求に應ぜしめ始めた六十年代の始めに至つて漸く形成されたものである。これらの新しい見解は體系だつては「労働階級の政治能力」と云ふ述作中にのせられてゐる。それは既にブルードンの死後に至つて出版された。此處では彼は既にプロレタリアートの獨立した階級的組織の必要を説いてゐる。併し尙、ストライキや「直接政治闘争」にたづさわらる事は否定してゐる。彼は尙共產主義の反對者であり、協同組合と相互扶助の説教者であり、その最後のときに至つても尙小ブルジョア社會主義者以上にはなり得なかつたのである。

五四、ブルジョア博愛主義 三十年代及び四十年代は、西ヨーロッパにおいてブルジョア博愛主義の大いに榮へた時代である。貧困との闘争と云ふ問題は刻下の大問題たるに至つた。「プロレタリアートの腫物」との闘争と云ふ問題を取りあつた様な、著書

(譯註) 「哲學の貧困」二二二—二二三頁。

マルクスは、その「自由貿易論」において、労働階級のために自由貿易となえる經濟學者等をすばらしく巧みに特徴づけてゐる。「自由貿易論者は惟らく、資本にして一層有利に使用せらるれば、産業資本對賃銀労働者間の對立關係は消滅するであらう、と。しかし、かやうな推定は、全く判斷にふるしまざるをえぬ所である。事の真相は、むしろかやうな想像とは正反對で、その結果、

二階級間の對立關係は、ただ一層明白になるだけであらう。」一八四七年の九月に開かれたブリュッセル經濟學者大會においては社會主義者であり、かつ後には眞個の民衆立法の理論家として有名になつたリッテンハウゼン(一八一四—一八九〇年)が、保護税を擁護するために「労働階級のために」演説した。「獨逸ブリュッセル新聞」はこれに對して、この演説は保護貿易論者リストのもつとはつきりしたかつ生々とした演説とつかへた方がよかつたであらう、と書いてゐる。

同じくブリュッセルに一八四七年の九月に開かれた牢獄問題大會では、當時の懲罰制度の博愛主義的な改良の擁護者達はプロレタリアの犯罪者の道徳水準を高めるためには牢獄の獨房における禁錮が一番よいと云つてゐる。最後には労働者や貧民階級の運命を改善するために國際的團體を造る事が決定されてゐる。牢獄の獨房における禁錮——労働階級の利益のために!

五五、バブーフ(譯註) ベルンシュタインが革命的マルクス主義を攻撃しようとして時に、彼は次の様な事を證明しようとした。それはマルクス・エンゲルスは、實は精神的にプランキートの弟

子であり、ブランキーは、またバブーフ主義者であつて、バブーフの追随者であると云ふのだ。その證據の一つになつてゐるのは次の様な事柄である。それは、あらゆる社會主義文獻のうちにあつて何故かバブーフの述作は批判を受けて居ないと云ふことである。

(譯註) 一揆主義の指導者。

アンドレルはバブーフの見解が宣言の中で、審議されて居ないとしても、尙やはり、それは宣言の中で全然判定的な評價をうけて居り、それは反動派の中に入れてゐると信じてゐる。

宣言はバブーフの述作について一言も云つてゐないのみではない、それはブランキーについても一言も加えて居ないのである。宣言は、批判的空想的社會主義及び共產主義の節においてあらゆる革命的共產主義者を沈黙のうちに葬つてゐる。それはフランスの唯物論的共產主義者にも一言をも加えてゐない。それは、ヘー・デザミエーの如き共產主義者にさえも批評を加えてゐないのである。カペーに對してもあからさまには批判を加へてゐない。もつともこの共產主義者には、その著書に對して明らかにこの節の中で暗示がなされてゐる。

第一にバブーフは決して共產主義の理論家ではない。それはブランキー以上にそうである。「バブーフを共產主義の理論的代表者と考へることは」と、マルクスは云つて居る——唯、ベルリンの學校教師の思ひつく事である。「一八四五年に、フランス革命時代の社會運動史に關する仕事の諸成果を、數十年後においてかへり見つつ、マルクスはバブーフをこの歴史中における名譽

ある位置にすえてゐる。

「一七八九年社會・クラブに始まりその進路のなかばにおいてマルクレルク及びルーをその主たる代表者とし、バブーフの陰謀によつて一瞬間終熄したフランスの革命運動は、共產主義思想を呼び起した。バブーフの友のボオナロツチはその思想を一八三〇年の革命後再びフランスに移植した。徹底的に論及せられたこの思想は、まゝ、新たな世界状態の思想である。」

民主主義者、ハインツェンに對して、革命時代における社會問題の意義を指摘しつつ、マルクスは再びバブーフの役割を強調してゐる。その場合は、バブーフを、プロレタリアートの要求の活動的な發言者と見てゐる。

「我々は最初の眞に活動的な共產黨の出現をブルジョア革命において、立憲王制の廢せられた時に、見るのである。最も徹底せる共和主義者達——英國ではレバラー派、フランスでは、バブーフ、ブオナロツチ等——は最初にこの社會問題をひきおこした人々である。彼れの親友にして黨の同志たるブオナロツチによつて描かれてゐるバブーフの陰謀を見るに、これらの共和主義者達、王制と共和制と云ふ問題をのぞいてはプロレタリアートにとつてほんの一つも、「社會問題」は尙ほ解決されて居らないと云ふ確信を如何に「運動」の中から汲みとつてゐたかがわかる。」

二十年代の終りにおいては、フランスのバブーフ主義者達は、ふるい「平等の教義」に自分で洗練を加へて宣傳してゐたブオナロツチの精神的指導のもとに、次第に、純共和主義的要素から離れ去りつつ、かつプロレタリア的共產主義的グループに合流しつつ、フ

ランス革命運動において最もすばらしい役割を演じた。一八四八年の革命の前にはそれは地下へ追ひこまれたが、既にして二月の目から六月の敗北に至るまで、牢獄から出てきたブランキーの指導のもとに最も權威あるプロレタリア黨を形成しつつ、あらゆる革命の諸事件中であつて決定的な意義を得てゐた。

正にこの理由で、バブーフ主義者の意義と云ふものはすべて、共產主義理論の發展と云ふことのうちにあるのではなく、プロレタリアの組織の、プロレタリアの戦術の、プロレタリアートの獨裁時代における最低綱領の發展と云ふ事のうちに存在するのである。かつそしてこれこそ彼等を眞に革命的黨たらしむるものである。多くのバブーフ主義者の書いたものの中には、一般的禁慾主義とか、原始的な平等とか云つたやうな反動的思想さえも見らるゝものにもかかはらず、バブーフ主義者の唯物論が「粗雑であり非文明的である」と云ふ事についてはマルクス自身もすでに指摘してゐるところである。

禁慾主義が、宗教的色彩を持つた中世の反亂のすべてにとつて嘗微的なばかりでなく、何故、最近代のプロレタリア運動のすべての開始時にあつてもそうであつたか、と云ふ事についてはエングルスが我々に説明を加えてゐる。

「この禁慾主義的な厳格な習慣、この、あらゆる生活の喜びを拒絶しようとする要求は一方においては支配階級に對してスバルタ的なふるい平等を持ちこむ事であり、他方においては、それなしには社會の下層階級が決して運動を起し得ないと云ふ一つの必要な過渡段階をなすものである。己れの革命的な勢力を發展させるために、自分自身に對して他のあらゆる社會要素に對する敵

對關係を鮮明にするために、階級として結成するために、この社會層は尙ほ自分を現存社會制度と和解さす可能性のあるすべてのものを拒否する事から始めなければならぬのである。それは、一時的にもせよ、ひどい自分の生活をいくらかでもたえ得る様に、最もひどい抑壓も尙ほ彼れからそれを奪ひ去り得なかつた若干の悦びをも拒否せざるを得ないのである。この平民的、プロレタリア的、禁慾主義なるものは、その粗野にして狂信的な形態においても、またその内容においてブルジョア禁慾主義とは何等の共通點をもたないものである。ブルジョア禁慾主義は、ブルジョアのルーテル的道德や英國清教徒等（獨立派より徹底せる宗教派と異つて）が説くところであり、その全秘密はブルジョアの節約と云ふ事に歸するのである。しかし、この平民的プロレタリア的禁慾主義も、一方においては近代的生産力の發展が、享樂資料を始ど無限に増加して、スバルタ的闘争等を餘計なものとし、他方においてはプロレタリアートの生活環境が、従つてプロレタリアート自身がより一層革命化するに従つて、その革命的性質を失うに至るのである。

「英國革命時代におけるレバラー派、より正確に云へばその最左翼、及びフランス革命時代におけるバブーフの他に、エングルスは、近代プロレタリアートの多かれ少かれ發達せる先行者たる層の獨自的な運動のうちトーマス・ミュンツェル一派をも加える。トーマス・ミュンツェルはドイツの改革時代、農民戰爭時代においてチエーリッゲンの平民達の間にあつてそのプロレタリア的要素の表現者であつたのである。「ミュンツェルの宗教哲學は無神論に輕くふれてゐたが、それと同様に彼の政治綱領は共產主義に一寸ふ

れたものがあつたのであるが、近世のミュンツェル派の多くは二月革命の前後においてすら十六世紀における「ミュンツェル派」よりもより豊富な理論的武器を持つてゐたわけではなかつたのである。」(譯註)

(譯註) 「マルクス、エンゲルス全集」卷三〇七頁。

この世紀において、發展しつつある資本主義の地盤の上に成長せる、理想的社會秩序の最初の空想主義的描寫たるトーマス・ムーアの理想郷があらはれた。それにつづいてカンパネラがでてゐる。十八世紀には、既にあきらかに共產主義的メトリエやモレーリーの理論があらはれてゐる。パプーフ及び彼れの同志達は現存の不平等の批判や彼等の實際上の要求においてはこのメトリエやモレーリーの理論に従つたのである。

五六、大空想主義者 サン・シモン、フリーエ、及びオーエンの思想は既に十九世紀に關するものである。彼等は皆、いちやうにフランス大革命及び發達し行く大産業の經驗に立脚してゐる。

エンゲルスは、たびたび、科學的社會主義が如何にこれ等すべて三人の偉大なる空想主義者におふ所が大であるかを指摘してゐる。「ドイツの科學的社會主義は、それが、サン・シモン、フリーエ、及びオーエンの背中におぶさつてゐるのだ、と云ふ事を決して忘れないであらう。この三人はその教義の迷信的になると、空想的なるとにかゝはらず、あらゆる時代を通じて最もすぐれた智慧を有する人々のうちにこそえられる、彼等は天才的に、多くのものを豫想し、豫見したのである。それらの正しい事は現在においても我々が科學的に證明し得るところなのである。」

大空想主義者の著作中において將來の社會の狂信的な描寫とな

らんで發展せしめられた、ブルジョア社會の根本にまでふれるその批判は勞働者の啓蒙とそのいくたの根本的な確固たる要求にとつて貴重な材料を提供する。それらの要求をプロレタリアートはそれらからして、尙それにくつついてゐる空想主義的な性質をとり去つた上で社會革命時代において提出する事ができる。

しかしこれら三つの、空想的社會主義の主要な思想は科學的社會主義の創設者に對して一樣な影響をあたえたわけではない。

特にマルクスにはサン・シモンの影響が少い。エンゲルス自身は次のやうな事を認めてゐる。「サン・シモンにあつてはプロレタリアの利益の擁護は尙ブルジョアの傾向と混合してゐる」と。サン・シモンは産業社會を封建社會から擁護する事からしてその仕事を始めたのである。三つの階級即ち封建階級、中間階級、工業階級への分析を行ひつつ、彼は工業階級のうちに、勞働者のみならずまた工場主をも商人をも一般にありとあらゆる産業資本家を加へるのである。この産業資本家に向つて彼は主として働きかけたのである。

「サン・シモンはその最後の著書、『新キリスト教』において初めて、はつきりと勞働階級のために書き勞働階級の解放をば自分ののぞむ最終の目的である、と宣言したにすぎないと云ふ事は一般に忘れてならないところである。彼のより以前の著書はすべて、事實上近代ブルジョア社會と封建主義とを比較して、ブルジョア社會を讚美してゐるにすぎない。工業家や銀行家を、將軍やナポレオン時代に法律をつくつた法律家と比較して、その工業家や銀行家を讚美してゐるにすぎない。オーエンの同時代の著作と比較して如

何にことなることであらう。」

エンゲルスがマルクスのこの言葉に註を附して、マルクスは原稿に手を加へたとしたなら、疑ひもなく必ずこの箇所をひどく直したであらう、と云つたが、彼も亦自身「反デューリング論」において同じことを強調しなければならなかつたことを忘れてゐるのである。

マルクスが最後になつて、(しかし上に指摘したサン・シモンの特徴はマルクスが一八四七年にも一八六三年にもいちやうに強調せるところである)驚きの眼を見はつてサン・シモンの天才と百科事典的な頭腦とを語つたと云ふことは、サン・シモンがこれ等三人の空想主義者のなかにあつてマルクスに一番影響をあたえたこととが、少かつたと云ふ事實と、何等矛盾するものではない。マルクスが「資本論」の四巻全部を通じて、また他のあらゆる著作においても、自分の見解を確證するものとして、一度もサン・シモンを引證しなかつた、と云ふ事はさぶる特徴のある事實である。

マルクスは、彼が社會制度を研究する様になるやいなや、プロシヤにおける封建社會との彼の闘争は確固たる進歩を見せるやうになつた。封建社會との闘争、それを彼はライン地方における新しい「工業社會」を代表する人々と一緒に行つた。この社會の批判はこの社會の經濟に求めなければならぬと云ふ結論に到達して、マルクスはやがて忽ちの間にサン・シモンからフリーエ及びオーエンに移つて行つた。フリーエ及びオーエンはこの點で「新キリスト教」の著者よりも高い見解に達してゐた。史的唯物論の領域においてマルクスをサン・シモンの弟子とする事が甚だしく滑稽な様に經濟學の領域においてもロードベルトスと同じくマルクスまでを

もサン・シモンの弟子にしてしまふ事は實に滑稽である。フリーエやオーエンとならんでサン・シモンの獨自的な功績を強調することとに努めてゐたエンゲルスはかうした條項をいくつも引用してゐる。しかしエンゲルスは、もしサン・シモンの新社會主義思想の殆どすべての萌芽をとらへ得てゐるとしても、それはだた、純經濟の領域に屬さないのみである、と云ふ事は認めてゐたにちがひない。

國家の單なる生産管理者への轉化と云ふ問題におけるただほんの一命題に於てのみ——そしてこれは既に宣言において強調せられてゐる——サン・シモンは、マルクス主義の國家理論に影響をあたへ得るのである。また實際においてもあたへてゐるのである。一八一六年にサン・シモンは政治は生産の科學であると喝破してゐる。そして政治學が經濟學中に完全に包含されるに至るべきことを豫言してゐる。政治制度が經濟的基礎より發生してきたと云ふ考へが、ここではただほんの萌芽たるにすぎないと云へ、政治權力は事物の管理に、生産過程の統制者になると云ふ思想、「國家は廢止される」やうになると云ふ思想は全く明瞭に表現せられるのである。」

サン・シモンはそれ故に哲學的にも史學的にもマルクスに何の影響もあたへてはならないのである。マルクスは一八四年には既に徹底せる唯物論者である。しかるにサン・シモンは唯心論者である。フリーエ及びオーエンについては事情が異つてゐる。彼等は二人とも唯物論者であつた。人間の諸關係及びその歴史の領域からしてあらゆる神祕を追放してしまふ、嚴格な徹底した唯物論なしには徹底せる共產主義もまたあり得ないのである。

エンゲルスがサン・シモンのために證據となるものを拾ひあげ、傑出した時に當面しなければならなかつた困難に比較して、いかにやすやすとフリーエの功績を描くためには、その言葉や證據を見出してゐるかを知るためにはエンゲルスによつてなされたフリーエに關する敘述をサン・シモンに關する敘述と比較すれば充分である。そして、實際、フリーエはエンゲルスにもマルクスにも大きな影響をあたへてゐるのである。

「神聖家族」においても、其他のいくたの著作においても、マルクスは自分の見解を確證するものとしてフリーエを引用してゐる。彼の、ブルジョア社會の結婚及び家族に對する批判はマルクスによつて工匠的と呼ばれてゐる。教育に對する彼の見解はマルクスによつて「この領域において存在する最良のものであり、最も天才的な觀察を藏してゐる」と云はれてゐる。

エンゲルスは既に一八四六年に「真正社會主義」の判斷に對してフリーエを對立せしめてゐる。彼はフリーエの主要な著作を獨逸語で出版しようとした。この計畫は實現しなかつた。そしてエンゲルスはフリーエの貿易に關する一個の論文の翻譯だけで我慢しなければならなかつた。このフリーエの著作に對するエンゲルスの深い研究は、彼がフリーエに關するすばらしい敘述を行つた際にも見られるところである。その中では單に彼に對する尊敬の念が見られるのではない、また偉大なるフランスの空想主義者に對する彼の個人的な共鳴さへも見られるのである。

「フリーエにおいては、又純フランス式の奇抜さを持つた、しかもそれがために深刻味を失はない、現存社會狀態の批評が見られる。フリーエはブルジョアに對し、又革命前の熱狂的なフリーエ

し、絶えず新たに矛盾を作り出しては、それを解決することができないで、つまりいつまでも、自分がそれに到達しようと思ひ、或ひはそれを獲得したと稱する所のもの、正反對に到達する。例へば、『文明のもとにあつては、豊饒、過多そのもの間から貧困が発生する。』(譯註)

(譯註) 「マルクス、エンゲルス全集」第一二卷五四九—五〇頁を見よ。

オーエンの影響は、エンゲルスに對しても、——彼は最初にイギリスに渡つた時、既にオーエンの機關紙で働いてゐる——またマルクスに對しても——彼れにとつては、それはエンゲルスよりも大きい——決して小さなものではない。「資本論」においては數ヶ所においてオーエンの思想がいかに大きな意義を有するかが指摘されてゐる。そしてその理由は、「オーエンは、その實驗に際して、單に事實上で工場制度から出發したのみではなく、また理論的にも工場制度を社會革命の出發點とした」からなのである。彼れはこの點では、サン・シモンの上にあるのではなくまたフリーエをもりようがしてゐる。丁度それは當時の英國が、資本主義國として、あまり大工業の發達してゐなかつた當時のフランスをりようがしてゐただけの程度においてりようがしてゐたのである。オーエンは共產主義者になつてからはブルジョア社會を共產主義的にする事をさまたげてゐる主要な諸障害即ち、私有財産、宗教、近代的な結婚形態と熱烈な闘争を開始してゐる。斷乎たる唯物論者たりし彼は、次の様な命題、即ち、人間の性質は外的影響の産物である、と云ふ事、人間は、生得的或は何等か超自然的な力によつて與えられた思想や、能力や道德感情や良心の様なものは何等持たな

ジョア豫言者、及び革命後の偏ぼなブルジョア頌徳者に對し、その言質をとらへる彼はブルジョア世界における物質的及び道德的の醜態を假借なく摘發する。彼はそれとならべて、前代の啓蒙學者達の燦爛たる約束、——道理ばかりが行はれるはずの社會、幸福にみちあふれる文明、人間の限りなき完成などといふ約束——をあげ、更に彼と同時代の、ブルジョア思想家連の美辭麗句をあげる。そして彼は、いかにその最も華々しい言葉がいたる處において最も哀れな現實と對照してゐるかを示し、痛烈な皮肉をもつてこの救ふに由なき、文飾の大失敗を罵倒してゐる。フリーエは單なる批評家ではない。彼れのもつ快活な性質は彼を諷刺家となし、しかも古今を通じての最大諷刺家の一人となした。彼は力もあり艶もある筆致をもつて、革命の没落と共に榮えだした詐欺的投機、及び當時のフランス商業界における一般の商賣人氣質を描寫してゐる。なほそれよりも見事なのは兩性關係ブルジョアの形態、ブルジョア社會における婦人の地位に對する彼の批評である。ある一つの社會において、その婦人解放の程度は即ちその一般的解放の自然的尺度であるとは、實に彼が初めて喝破した所である。しかしフリーエの最大な點は、社會の歴史に關する彼れの解釋である。彼は今日までの社會の全過程を四つの發展段階に分つてゐる。即ち蒙昧時代、野蠻時代、父家長時代、文明時代。この最後のものは今日のいはゆるブルジョア社會、即ち十六世紀以後、行はれてゐる所の社會制度に相當するものである。そして彼は論證する。『文明社會は、野蠻時代において單純に行はれてゐた各種の惡徳を、複雑な、曖昧な、意義の不明な、偽善的な存在にすりかへる。』又文明は『惡循環』をもつて、矛盾をもつて進行

い、と云ふ命題から出發した。「實際において、良心と云ふものは、綿と云ふ物質や其他の生産物の如くに人間の手でできた生産物である。』——この命題は粗野な、非歴史的な唯物論のあらゆる命題よりもより深い思想を含有してゐる。彼は労働立法の、理論的にも、實際的にも主要な先驅者である。彼は最初に兒童の教育と生産労働とを結びつける事を現代の任務として提案した人である。彼はまた職人や労働者の協同組合的な市場の父である。しかるに、彼は決して、彼の模倣者の如くに、これ等の孤立した改革要素のもつ意義については幻想を抱かなかつた。彼は、これらを唯共產主義制度へ移行する過渡段階と見なしてゐるにすぎない。また、フリーエをのぞいては、彼の如くに、都市と農村との對立を止揚すべき必要と條件とに關する問題を根本的にきかめた人もない。

五七、フランス及びドイツにおける共產主義者連 エチエンヌ・カペーもまた穏和な共產主義者であつた。彼には二月革命の前夜において最も普及した空想主義の著書「イカリヤ旅行記」がある。彼はまた自分の空想を、資本主義的環境のもとに、現實のアメリカに、新しいエルサレムを建設する事によつて、實現しようとした。しかし彼はブルジョアの心臓の慈愛心にうつつたへただけではなかつた。労働大衆の間に非常な共鳴をえて、彼は、一八四七年にはアメリカ移民案を提案し、そこに小イカリヤ國を建設しようとした。彼は種々な労働團體に助力を求めた。その中には、「労働者教育協會」も入つてゐる。この指導者は共產主義者同盟の組織において非常に大きな役割を演じてゐた。パウエル、ミル、シャベル、レスネルであつた。「労働者教育協會」の會員達は労働者のために盡されたカペーの闘争の功績は充分認められたが、この計畫に對

しては反對の意を表明した。彼等はカペーに、その必然的な失敗がただブルジョアジーの喜びを呼び起すばかりであらうと云ふ事を指摘した。また、彼等は共産主義者にとつては財産の共有は一つの過渡的時代を有し、その時代において私有財産が徐々に社會的財産たるにいたるのでなければ、丁度海かぬ種から收穫を豫想する事が出来ないと同様に不可能であらうと説明してゐる。カペーは自分の計畫が實現し得る事を彼等にとくためにロンドンに來させしめた。この新しい十字軍に對しては皮肉が、きびしくあびせられた。既にして、接近しつつある社會的暴風雨の雷鳴が歴史の舞臺に聞えだした、まさにその時に、一八四八年の二月三日に、最初の移民達の一行はアメリカに旅立つた。續いて同じ一八四八年のうちに、他の一行が數回におたつて旅立つた。これらは皆舊世界との生氣ある直接の闘争を回避して旅立つたのである。しかし、彼等は數年後にはすつかり幻滅して同じ西ヨーロッパに舞ひ戻つてきた。

しかし、ドイツにおいてもフランスにおいても穏和な共産主義者以外に、革命的共産主義もあつた。マルクス及びエンゲルス以前の最もすぐれた共産主義者は、仕立屋のウイヘルム・ワイトリングである。宣言は彼の名をあげてゐないが、しは疑ひもなく、バブーフが屬したと同じグループに屬してゐるのである。その他、宣言の第一章には明らかに、後のパークニンと同じく、ルンペンプロレタリアートに過大な意義を附し、彼等を重要な革命的要素と見てゐたワイトリングに直接反對して向けられた一ヶ所がある。

ワイトリングはフリーエと同じく人間嗜好や要求の分析と云は共産主義が十八世紀のフランス唯物論に依據する事を確證して、次の様に云つてゐる。

「フリーエは直接フランス唯物論者の學說から出發した。バブーフ主義者は粗野な文明化されなぬ唯物論者であつた。しかしより發達せる共産主義者もその起原を直接フランスの唯物論に於いてゐるのである。英國に追はれたフランス人カペーは、その地で、その地の共産主義思想の影響を受け、そして、フランスに歸つて、最も皮相的であつたといへば最も通俗的な共産主義の代表者たるに至つた。より科學的なフランスの共産主義者、デザミール、ヤヘー、その他は、オーエンの如くに唯物論の教義を現實的な人道主義學說として、かつ共産主義の論理的基礎として發展させた。」

デザミールについてはマルクスは彼の他の著作においても論及してゐる。彼は共産主義的な労働者の團體の中にあつて活潑に動してゐた。モレーリ、バブーフ、トルオーナロッツチを高く尊敬してゐた。しかも極端な共産主義者であつた彼はワイトリングの如くに直接プロレタリアに向つてその努力を向けた。しかしドイツの共産主義者と異なるところは彼が徹底せる唯物論者であつたと云ふ事である。空想主義者と共に彼を産んだのは將來社會の共産主義的制度的獨立的な案をば——それは彼れによつて非常に詳細に究められてゐる——第一番におし進めようといふ傾向であり、且つ、近代社會をより高い階程に、即ち共産主義の階級へ變革するには、この案を宣傳する事によつてだけで凡てそれに必要な諸條件を準備し得ると云ふ確信であつた。しかし、オーエン主義及びフリーエ主義の若干要素の入つてゐる彼のブルジョア社會に對する批判は疑ひもなく或る種の影響をマルクスにもあたへてゐる。

ふ事から出發した。彼は未來社會に對する自分の計畫をたてた。その中で彼は實用科學の代表者達に權威ある位置をあたへてゐる。しかし、彼は新制度を得る最良の手段として現存の無秩序をば民衆がもたえ得なくなるまで極端におしすすめる事を考へてゐる。そこで彼はドイツにおいてブルジョアジーが支配階級となるであらうやうな過渡時代の必然と云ふ思想とは和解する事ができなかつた。またかかる過渡時代の環境にプロレタリアートの戰術を適應させるなどと云ふ事は聞く事も欲しなかつた。この見解の不一致はかつて一度は、その最初の時代の論文の一つで、たとへ説明の點でブルドンにおけるとも理論的な點ではしばしばブルドンを越えてゐるワイトリングの天才的な著作に對して好意的な一文を寄せたマルクスとも彼を分裂させた主要な原因をなすものである。マルクスにとつては、これは「獨逸労働者の類例なきすばらしい文筆上の初の登場」であつた。それを彼は獨逸の政治的文書の臆病な凡庸さと對比せしめてゐる。ワイトリングとマルクスとの終局的な分裂は共産主義者同盟組織される少し前に起つてゐる。

フランスにおける革命的共産主義者には、地下的な革命運動と密接に結びついた一グループが屬する。この地下的な革命運動は一八三九年にブランキー及びバルベスによつて企てられた、反亂の企圖が失敗に終つた後にもやまなかつた。尚、この企圖にはロンドンにゐた將來の獨逸共産主義團體の創立者たちも加つてゐる。労働階級の間において大なる成功をもち得てゐた此等共産主義者達の主要な代表者はデザミール及びその同志達であつた。フランス唯物論史に對するその興味ある考證においてマルクス

る。その反響とも云ふべきものを、我々は「共産黨宣言」中にあたへられたブルジョア社會に對する批判のうちに見るのである。デザミールやその一派は多くの労働者をそのまはりにつぎつける事ができた。「共産主義者」唯物論者」はそのいくたの亞流と共にすでに我々が云つた如く、一八四八年の革命に先だつて地下運動において大きな役割を演じた。これらの要素はブランキー主義者の黨を形成する時にその核心となつた。

ラメーヌ及びカペーに對する論戰的な小著作の他に、デザミールは二つの大きな著作を持つてゐる。即ち、一八四三年に出た、「コムミュンの諸法律の自由」及び一八四五年に出た「社會主義によつて征服せられたるエスワット教派」である。また、彼によつて特に労働者のために出版された「コムミュンの層」と云ふのがある。

五八、オーエン主義者とチャーチスト

オーエンはサン・シモンやフリーエと異り、官許的社會と斷つてからは直接労働階級に向つて働きかけ、數十年の間、労働者の間にあつて働いたのであるが、彼は尚穏和な空想主義者たるにすぎなかつた。且つあらゆる革命的活動を拒否し、労働階級をばブルジョアの黨に對立した特別の黨に政治的に組織する事の必要をも理解しなかつた。労働階級の政治的権利のために戰つてゐたチャーチストとオーエン主義者との不一致も亦これによつて説明されるのである。

四十年代におけるオーエン主義者とチャーチストとの關係はエングルスによつて「英國労働階級の狀態」の中に描かれてゐる。「社會主義者等は極めて柔順で平和を愛好する。彼等は、現存秩序が如何に悪くあつても、それを改造するに、合法的な宣傳の

方法以外のあらゆる他の方法は否定すると云ふ事の限りで、現存秩序を認めてゐるのである。……彼等は一切の歴史的發展を承認しない。それ故に國民を忍びにして共産主義的狀態にもたらさうと欲して、現存秩序がそれ自身滅びなければならぬ様な時に到る迄はそれを次第に持つて来やうとはしない。彼等は勿論労働者のブルジョアに對して憤怒する理由を理解してゐるが、しかしこの憤怒を——無効果と看做し、英國の現状にとつてはそれよりも更に一層無効な仁慈博愛を説いてゐる。」(註譯)

(註譯)「英國労働階級の狀態」邦譯三三三——三三四頁を見

エンゲルスはチャーチストが非常におくられており、大衆の中にあつて非常に發展度の低いものであると云ふ事に眼を閉ぢはしなかつた。しかし彼はチャーチストのうちに眞實正銘のプロレタリアとプロレタリアートの眞實の代表者を認めたのである。まさにこの理由で彼は社會主義とチャーチズムとの合流を必要不可欠のものとして考へたのであつた。この任務のために彼は、オーエン主義者ともチャーチストとも關係を結び、オーエン主義の中央機關紙においても、チャーチストの中央機關紙においても働いたのであつた。

コンシデーランを首領にいたゞくフリーエ主義者達は、舊來の「フアランガ」と共に、日刊新聞「平和的民主主義」を出してゐた。それは、この名前だけでその政治的綱領を暗示してゐる。これ等フリーエ主義者達は、フランスの民主主義社會主義者の機關

第四章への註解

五九、イギリス及び北アメリカにおける共産主義及び労働者組織 共産主義者と労働者諸黨との關係と云ふ問題は既に第二章で究明されてゐる。共産主義者は他の労働者諸黨に對立する如何なる特殊な黨をつくるわけでもないから、この理由からして次の事が起つてくる。かかる労働者黨が存在する處にあつては、共産主義者は、その労働者運動の諸條件、過程、一般的结果を知つてゐると云ふ優越點を理論的に有するその最も果敢なる部分にすぎない、と云ふ事これである。これだけで、既に、當時存在してゐた二つの労働者組織、即ち英國におけるチャーチスト及び北アメリカにおける農業改革派に對するその關係は定つてゐる。

既に以前においてチャーチストとは最も近い關係にあつたマルクス、特にエンゲルスは、今や、チャーチストの共産主義派たる、ジョージ・ユリアン・ハリヤーやアーネスト・ジョンソンとより近い關係を結ぶに至つた。そしてこの點においては共産主義者同盟のロンドンの同盟員達が彼を助けたのである。

しかし共産主義者同盟がそこで自分の組織をもたなかつた北アメリカにおいては異つた事情の下にあつた。アメリカで暮してゐた獨逸人の労働者の間にあつては一八四五年にアメリカに來つたヘルマン・クリーゲが非常な勢力をもち得てゐた。ヘルマン・クリーゲは、秘密結社「青年アメリカ黨」のために合法的な隠庇物とする目的をもつて一八四五年の始めに設立された所謂「國民改革協會」と云ふアメリカの一組織と關係を結んだ。この黨は、エンゲルスの言葉によれば、民主主義的統治方法をばブルジョアジーに

紙たり「革新」と論戰した。これは、エンゲルスが既に「神聖家族」において表現した様にフリーエ主義ではあるが水に割つたフリーエ主義であつた。それは博愛的なブルジョアジーの一部の社會的教義以外の何物でもなかつた。若干の無政府主義者がマルクス及びエンゲルスの教師にしようとしてゐるコンシデーランは相戦ひつゝある諸階級の利害を和解させる事をその任務とした人であり、尙ほ三十年代において「フランスにおける政治の凋落」を祝福した人である。彼は一八四八年の革命以後になつても新しい「共産主義的生活圖」の建設と云ふ幻想を抱いてゐる。その「共産主義的生活圖」は、己れを例證として資本家階級に終局的に、その主義を「信せしめる」と云ふのである。コンシデーランはテュカスに行つた。そこで彼は「協同團」と云ふのを創立したが、それはこうした方面の以前の試みと同様に荒々しい現實との闘争において失敗に終つてしまつた。「労働階級の利害に對し熱心に心を向けてゐた彼は、非常な高齢になつて(一八九三年の五月八日に)フランスにおける新らしい労働者運動を祝福してゐる。

向け様と云ふ黨であつた。それは民主主義的統治方法をばプロレタリアートのために利用しようとして云ふ黨であつた。この國民改革協會をば、アンドレールがなした様に、所謂「地代反對同盟」と一掃してはならない。それは一八三九年にニューヨーク州に起つた強力な農業運動の結果として、はるか以前に、組織されてゐたものである。

理由もなしにいつの間にか何萬エーカーもの土地を獲得してしまつてゐた豪奪者からその土地の一部を借りてゐた農業者達は地代の支拂を拒絶した。この地代は以前にあつては非常に安かつた。しかるにより實際的な後繼者達は今やそれを高くしたのみでなく、あらゆる農産物にかけて、それを搾り出さうとしたのであつた。こうした事情の上に農民の動搖が起つた。そして地代反對同盟の組織は地主に對する、そのより穏和な煽動のために役立つた。これは反地主派とも云はれた。それは裁判制度によつて、地主に對する地主達の要求の、合法性の、如何を争つたものである。

「青年アメリカ黨」の代表者達は、上に記された「國民改革協會」を通じて、より急進的な農業綱領たる、土地の國有財産への轉化、使用のために與へられた土地の量を百六十エーカーに制限する事、と云ふのを提出してこの運動に干渉した。

同じ年にボストンにつてられた「新英國労働者同盟」と共に、「青年英國黨」は一八四五年の十月に労働者大會を召集した。大會は一つの綱領を採決した。それには生存權及び自由に對する權利と共に各人の幸福を保持するに必要なだけの土地部分を各人は獲得する權利があると云ふ事が宣言されてゐた。

マルクスはこの綱領の實際上の性質について何等の幻想をもい
だかなかつた。まさにその理由で彼及び彼の同志達は、この綱領
をば終局的の最高の目的としようとしたクリーゲの企圖に、この
運動からして、代表的な共産主義運動をつくりあげようとしたク
リーゲの企圖に對しても、かくも辛辣な抗議を提出したのであつ
た。

「もし、クリーゲが土地財産の解放に役立つべきこの運動を
ば、或る環境のもとにおいては必然的なプロレタリア運動の原
基の形態と見なしてゐたのなら、それを産んだ階級の生活環境に
よつて必然的に共産主義運動に發展すべきものとして見てゐた
のなら、また、クリーゲが、アメリカにおける共産主義的傾向は
最初は、この明かに共産主義に矛盾する農業形態をとらなければ
ならなかつたのだ、と云ふ事を證明してゐたのだとすれば、これ
に對して反駁すべき事もまた何もなかつたであらう。」マルクスの
意見によれば、この運動は、近き將來において近代的ブルジョア
社會内における工業制度の發展を速めるべきものであつた。が、
一方において、土地財産に對する攻撃としてのそのプロレタリア
運動たる結果としては、それ自身の結果によつて共産主義の事業
を前進さすべきものであつた。

實際においてこの運動はやがて、農業立法の分野におけ
る若干の小改革が行はれた後には凋落してしまつた。その本質か
らしては、それは小作人運動なのであつた。それに加つてゐる所
の若干の労働者達は「土地への誘引」が彼等を導いてゐたにすぎ
なかつた。

しかしマルクス及びエンゲルスは、この運動は、アメリカ労働者

に勢力を有してゐたこの組織と連絡を持つ事を、一八四五年から
一八四八年にかけて極度に重要な事だと考へてゐた。もつとも、
彼等兩人はマルクスの民主主義者、ハインツェンに對する論戰に
おいてもなほ知られるが如くに、そのプロレタリア的性質を強
く誇張し過ぎてゐた。

(譯註) 日本の小作人に非ず、地主から土地を借りて工場主
が工場を經營するが如くに労働者をやとつて土地を
經營してゐる人々。

「英國において労働者はチャイナストの名のもとに結成してゐ
る様に、北アメリカにおいては労働者は國民改革黨の名のもとに
政治的、黨に結成してゐる。彼等の合言葉は決して王制か共和制
かと云ふ事ではなく労働階級の支配かブルジョアジーの支配か、
と云ふ事である。」これは疑ひもなく誇張されてゐる。それは事情
に通じなかつたがためである。

如何なる意義をマルクス及びエンゲルスがこの問題に對して認
めてゐたかは次の事からしてもわかる事である。獨逸共産主義者
のヘンツェル、グルーブは、アメリカの運動に對するクリーゲの
戰術を辛辣に批評した二つの特別の廻狀を作つてクリーゲに
對して攻撃を加へる事を必要だと考へた。もつともワイトリン
グのみはそれへ署名する事を拒んだ。マルクスによつて書かれた
この廻狀は、既にマルクス及びエンゲルスの見解に近づいてきて
ゐた革命的共産主義者達と、革命的な空辭と倫理學的宗教的な判
斷とを一緒にしてゐるクリーゲ型の共産主義者との間の分界に對
して一刺激をあたえたものであつた。

六〇、フランス及びスウエスにおける共産主義者及び急進主義
者 フランスにおける社會民主黨、換言すれば民主主義者、社
會主義者の黨は最もよく二人の人間の名前——ルイ・ブランとレ
ドリユー・ローレンによつて其の特徴を表はしてゐる。

一八四八年革命時においてかくもあはれな役割をか演じ得な
かつたこの黨は小ブルジョアのみから成り立つてゐたわけでもな
かつた。それには自分の階級の解放條件を尙ほ知らないでゐる、
且つ、「労働の権利」とか「労働の組織」とか、生産的聯合とか云
つたものに尙ほ期待を置いてゐたプロレタリアも加つてゐた。彼
等に對する態度について提起されるべき戰術は、エンゲルスにより、
他の機會においては次の様に云はれてゐる。

「それ故に共産主義者は、これらの社會主義者等がブルジョア
ジーの御用を勤め、共産主義者に對して攻撃をなすに至らない
限り、その進出にあたり、民主主義的社會主義者とも協調し、で
きる限り一般政策を一時的に共同に遂行するであらう。もつと
も彼等と共同にするこの行動形態が見解の不一致について批評す
ることをさまたげるものでない、と云ふことは明かな事である。」
この方面における主要な機關紙は「改革」紙であつた。その編
輯者の一人にはフロイマンがあつた。此の機關紙と關係を
結ぶと云ふ仕事はエンゲルスの役割であつた。彼はルイ・ブランや
フロイマンと知合であつた。この關係を強めるために、エンゲル
スは「改革」の協働者となり、それに英國の運動に關した論文を
寄せた。

スウエスにおいては共産主義者は急進主義者を支持する様に勸
められてゐる。この黨は非常に混交的な黨であつたとは云え、共

産主義者が行動を共にし得る唯一の黨であつた。最も急進的な
は、フランス縣の急進主義者、ジュネヴ及びローザンヌの急進主義
者であつた。ジュネヴにおいてはジェームス・フアージュの指導
下に行はれた一八四六年十月の民主主義革命の後にフランスの共
和主義者に近い立場にある一つの急進黨がかためられた。一方
ローザンヌ(ワルド縣)においては、一八四五年の二月に保守黨政
府が顛覆された。そしてそのかはりにドリユーエを首班とする急
進黨政府が擇まれた。彼は後には縣の憲法にフランスの民主主義
者、社會主義者、要求の一つであつた。「労働の組織」と云ふのを
加へる事を提議した位である。それもこれもフアージュと云ひドリ
ユーエと云ひ、一八四九年の五月の反亂の失敗以後に自由なスウ
エスにそのかくれが求めなければならなかつたドイツの社會主
義者に對しては——民主主義者に對してさえも、——ヨローツバ
の反動の柔順な命令遂行者であつたのだが、一八四七年から一八
四八年にかけては、彼等は未だ悪い評判は得てゐなかつた。そし
て保守派の縣の同盟たるゾンデルブンドの闘争の先頭に立つてゐ
た。「現在、民主主義者等が、牧畜業的、原始的な諸縣の、粗野な
キリスト教的、獨逸的民主主義に反對して、文明的、工業的、近
代的民主主義的スウエスの闘争を支持してゐる時においては、
彼等は至る處において進歩の擔當者であり、反動の最後の微光も
消え去つて居り、且つ彼等は、十九世紀における民主主義の意義を
理解する事を既に學んでゐると云ふ事を證明してゐるのである」
(エンゲルス)メツテルニヒとギゾーとの愛情深き支持を受けてゐ
たエスイット教とゾンデルブンドに對するこの闘争においてヨ
ロッパの民主主義者及び社會主義者等の同情は、すべて急進主義

的諸縣の側に集つてゐた。それは一八四七年の十二月にはゾンドルブに對し斷固たる行動にいで始めた、そしてやがて忽ちの間にフレイブルグ及びリユツセルを降伏さしてしまつた。

その少し前に、マルクスやその他のドイツ共産主義者等の参加のもとにブリユツセルに創設された「民主主義協會」は、その第三回集會においてスウキスの國民にメツセージを送る事を決議した。このメツセージはマルクス、ワーラ、ウキルヘルム・ウオルフ、エム・ヘッス、その他によつて署名されてゐる。このうち、ワーラウと云ふのは植字工であつて、ブリユツセルのドイツ労働者團體の議長であつた。

六一、共産主義者とポーランド問題
ポーランドにおいて共産主義者が支持しなければならなかつた黨は、一八三二年にポーランド亡命者の貴族的部分に反對してつくられた「ポーランド民主主義協會」であつた。一八三〇—一八三一年におけるポーランド革命失敗の主要な原因をポーランドの民主主義者は貴族の利己的傾向に見てゐた。彼等は、ポーランドを救ふものは單に武裝反亂のみではなく、それと一緒に進められる急進的且つ民主主義的革命でなければならぬとした。そこで、彼等は民衆に、農民に訴えやうとした。そのために、その綱領中には農民、農民の土地財産の封建的抑壓物からの解放と云ふ要求が加えられてゐた。一八四五年には、プロシヤ及びオウスタリイで活動してゐた諸支部の影響のもとにポーランド民主主義協會は、メロストラフスキの指導のもとに再び反亂を準備しようとした。一八四六年一月二十四日にはクラコウで國民政府が宣言された。それは二月の二十二日には農民に、一つの宣言を發して彼等によつて耕される土地の自

由な所有と共に、權利の平等を約束した。反亂は失敗に終つた。地主に對する最も嫌惡すべき惡煽動によつて教唆され——この點ではメツテルニヒは非常な達人であつた——農民達は自分から數千のポーランド地主を殺して反亂を抑壓することに力をかけた。當時残つてゐた獨立せる舊ポーランドの最後の部分——クラコウ共和國も、プロシヤとロシアの同意のもとにオウスタリイに併合されてしまつた。

しかしこの反亂はまた新たにヨーロッパの民主主義者の間にポーランドに對する同情を呼び醒ました。この反亂は一八四七年の全年をそれに終始させ、二月革命によつてやんだ革命運動の序幕となつた。
民衆そのものに訴えると云ふ企圖によつてはかなくも悲劇的に終らなければならなかつたこの反亂の社會的特質、この反亂を一八三〇年から一八三一年にかけての反亂から有利に區別づける斷固たるその社會的特質は、今やポーランド人に對して新しい同情を労働階級の中に獲得させることとなつた。ポーランドの再興は、クラコウの反亂以後始めて、イギリス、フランス及び、ドイツの労働階級の對外政策の根本原則の一つたるに至つたのだ、と云つても過言ではあるまい。

この事は我々に次の事を説明する。一八四七年以來、何故、ヨーロッパ民主主義者達のあらゆる重要な國際集會には、ポーランド問題が、いつも日程に上つてゐるか云ふ事を、一八四七年十一月二十九日には、一八三〇—一八三一年のポーランドの反亂を記念してロンドンに開かれた集會において、マルクス及びエングルスはヨーロッパ・プロレタリアートにとつてのポーランド

問題の意義について演説してゐる。

マルクスは、その演説において、ポーランド問題をば一般的民族解放闘争の一部として考究してゐる。「民族が眞に結合され得るがためには、それは共通の利害を有するものでなければならぬ。しかし彼等の利害が共通たらんがためには、近代的財産關係が廢止されてゐるのでなければならぬ。なんとすれば、近代的財産關係は、民族の近代的搾取を條件づけてゐるからである。近代的財産關係の廢止に對して利益を感じてゐるのはただ労働階級のみである。ただ労働階級のみがよくこれを遂行するための手段を所有してゐるのである。プロレタリアートのブルジョアジーに對する勝利は、それと共にまた、現在各種の民族を相互に敵對的に對立せしめてゐる國民的、産業的衝突に對する勝利でもある。ブルジョアジーに對するプロレタリアートの勝利はそれ故に同時にあらゆる被抑壓民族の解放に對する合圖である。」

エングルスは、また自分の見地からして、何故ドイツ人はポーランドの解放に對して特に利害を有するかを指摘してゐる。「如何なる國民も、その國民が他の國民を抑壓してゐる間は解放される事は出来ない。ドイツの解放は、それ故に、ポーランドがドイツ人の抑壓がら解放されるに至らない限り、遂行される事はないであらう。」

一八四八年二月の二十一日には、マルクスは、クラコウの反亂を記念するために開かれた集會で再びポーランド問題について發言してゐる。彼は、今度は、聴衆にクラコウの反亂の意義を説明しようとしてゐる。クラコウの反亂の教訓を彼は、それが民族解放問題と民主主義及び抑壓階級の問題とを結びつけた事のうちに

見てゐる。まさにその理由からして、封建的ポーランドならざる民主主義的ポーランドの解放は、全ヨーロッパ民主主義者の名譽の問題となつたのである。

エングルスは再びドイツ人の任務について考察してゐる。クラコウの反亂が始めて、ポーランド問題をば同情的な空言からあらゆる民主主義者にとつての實際的な問題としたのであつた。特にドイツは喜ばなければならぬ理由があつた。それは、ドイツは、始めて、民主主義的ポーランドと云ふ同じ様な利害を持つ、忠實なる同盟者を持つに至つたからである。ドイツ及びポーランドにとつて、その解放の第一の前提となるものはドイツの政治的革命化、プロシヤ及びオウスタリヤの衰微、ツアルのロシアをドニエブル及びドビナ河の向ふへ追ひやる事であつた。

今や、何故、マルクス及びエングルスが、共産主義者に對して、ポーランド人の間にあつてかの黨——農業革命をば國民解放の條件と認め、一八四六年のクラコウの反亂を引き起した黨を支持する様に提議してゐるか云ふ事が明かとなつた。

六二、ドイツにおける共産主義者の任務
ドイツにおいては共産黨はブルジョアジーと相共に戦つた。しかしそれは單に、ブルジョアジーが反動勢力に對するその闘争において革命的である限りにおいてであつた。

マルクス及びエングルスはドイツ・ブルジョアジーの半端さと不徹底さとをよく知り抜いてゐた。工業的により發展せるライン地方やウエストフアリアを地盤として政府反對の運動の眞先に立つてゐたブルジョア部分でさえも、例へば一時はマルクスによつて編輯されてゐた「ライン新聞」を支持した事もある。カムフラ

ウゼン、ハンゼーマン、メーウイツセンの一派の如きも、プロシヤ聯邦議會において彼等はミラボー、ラファイエットと殆ど同じものである事を説明したばかりであつた。しかしこの事はマルクス及びエンゲルスを混濁さしてはゐない。

「ドイツの労働者は、専制王制が、もしブルジョアジーの利益がそれを要求するならば、プロレタリアートを迎へるに霰彈と鞭をもつてする事に少しも逡巡しないであらうし、また逡巡し得ないと云ふ事をよく知り抜いてゐる。何のために、ドイツ労働者は、専制政府及びその半封建的從屬物の粗野な抑壓よりも、むしろブルジョアジーの直接の支配の方を擇ぶのか？ 労働者は、ブルジョアジーは、専制王制よりもより大なる讓歩を政治的方面でなすと云ふ事だけではなく、ブルジョアジーは自分自身の交易及び産業の利益のために、己れの意志に反して、労働者結合のための條件をつくり出すと云ふ事を、そして、この結合こそ彼等を勝利せしめる第一の條件である、と云ふ事をよく知り抜いてゐた。労働者は、ブルジョア財産關係の廢止は、封建的關係の保存によつては達し得ない、と云ふ事を知つてゐる。彼等は、ブルジョアジーの封建制度及び専制王制に對する革命運動は、彼等自身の革命運動をも速め得るのだ、と云ふ事を知つてゐる。彼等はブルジョアジーに對する彼自身の闘争は、ブルジョアジーが自身勝利者となつた日からしてのみ始まるのだ、と云ふ事を知つてゐる。すべてこれらの事にも拘はらず、彼等はハインツエンのブルジョアの幻想を抱いてゐない。彼等はブルジョア革命に参加し得るのだし、また参加しなければならぬ。なんとすれば、ブルジョア革命は労働者革命の開始の條件となるものだからである。し

ために。ブルジョア革命を、労働者革命の直接の序幕とするため

に。普通宣言の第四章の著者と考へられてゐるエンゲルスにとつてさへも、この戦術上の方針を見出し、云ひ表す事が如何に困難であつたかを知るためには、宣言におけるこの戦術の叙述とエンゲルスが書いた草案（「共産主義の原理」）中におけるそれを比較すれば充分である。エンゲルスが、共産主義者は自由主義的ブルジョアの黨を助けて政府と戦はなければならぬと云つてゐる場所で、マルクスは共産主義者は、ブルジョアジーが革命的である限りにおいてのみブルジョアジーと相共に、一緒に進まなければならぬと云ふ事を云つてゐる。マルクスは、英國やフランスよりも發達したるヨーロッパ文明の環境のうちにあつて行はれるべきブルジョア革命をば直接プロレタリア革命と結びつけ、それをプロレタリア革命の直接の序幕としてゐる。

共産主義者はドイツに存在せる特殊の諸條件を考慮に入れなければならなかつた、と云ふ事は次の事情が示してゐる。革命が燃え上るや否やドイツの共産主義者等は、若干の條項においては宣言の第二章に提案せられた綱領とは異なる實際的要求を持つた綱領を提出して戰つた。

その主要な差異をなすものは、既により發達したる國々、——北アメリカ、スイス、英國、フランス——に於ては一部分實現されてゐる——しかしあまりにも不十分な程度において——のいくたの要求である。これらの要求を實現するにあらざれば、ドイツの労働者に對し、ブルジョアジーに向ける武器たり得るであらうが如き社會的及び政治的諸條件はつくる事は不可能で

かして労働者は寸時といえどもブルジョア革命をその終局の目的と見る事は出来ない。」

事實、ドイツのブルジョアジーは非常に遅れてゐた。彼等は専制王制との闘争、己れの政治權力を強固にしようとする闘争を、既にあらゆる發達した國々に於ては、ブルジョアジーが労働者階級の最もすさまじい闘争に入つてゐた時に、その政治的幻想が既にヨーロッパの意識において時代おくれとなつてしまつた後に、始めたのであつた。ドイツにおいては既にブルジョアジーと労働階級との間の近代的な矛盾が存在してゐた。それらは既に公然たる闘争となつてゐた。一例としてはシレジア及びボヘミアの労働者の動亂がある。かくてドイツのブルジョアジーは、それが政治的に階級として固まる前において、既にプロレタリアートと矛盾のうちにあつたのである。

こうした原因からして、ドイツのブルジョアジーには次の様な傾向があらはれた。彼等は出来さへするならば、専制王制をばブルジョア的に、革命なしに、平和な方法によつて改造しようとした。しかしこれは幻想であつた。なんとすれば専制王制は官僚や封建的身分と結びついたものであり、これらの官僚や封建身分にとつては、この問題は彼等が生きるか死ぬるかの問題であつたからである。ブルジョア革命はそれ故に必然的なものであつた。

しかし、共産主義者は一分時といへども自分自身の仕事を止めるべきではない。彼等は労働者の腦中に、出来る限り明確な、ブルジョアジーの利害とプロレタリアートの利害とは敵對的な對立にあると云ふ意識を、つくりあげる事を止めないであらう。ブルジョアジーに對する闘争が専制王制の壊滅後直ちに始まる様にする

あつた。

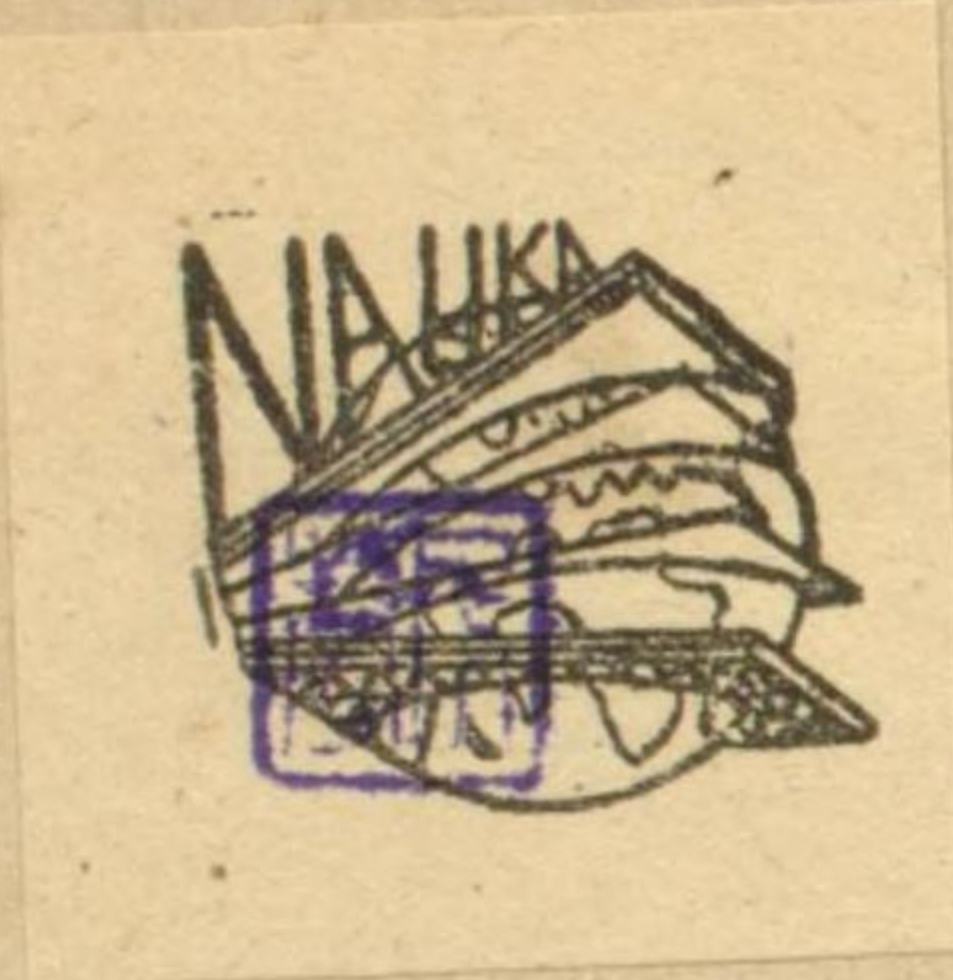
第一條から第六條まで、第十二條、第十三條は一般政治的要求を總計するものである。その實現はドイツをして、單一不可分な民主主義的共和國たらしめるものでなければならなかつた。その他の要求は社會經濟的要求の範圍に屬する要求をしるしたものである。それ等は宣言の綱領中の十ヶ條に相應するものである。しかしそのなかには、我々の興味を引くいくたの補足や變更がなされてゐる。何故興味を引くのか？ それは、その補足や變更がなされて、マルクス及びエンゲルスが、共産主義者同盟のロンドン大會において各種の傾向間の聚會的審議、及びそれこれの妥協の結果として宣言にある様なかたちで、これ等、全ての要求を宣言の綱領中に入れる事を餘儀なくされてゐなかつたならば、如何にこれ等の條項を書いたであらうか、と云ふ事がそこから知られるからである。

獨逸革命の實際は、やがてすぐと、次の事を示したのであつた。ブルジョアジーが、自分の意志に反し、専制王制に對する革命運動に加はる事を餘儀なくされた時には、それは、労働階級の黨がより決然と、より斷乎として、自分自身の特殊の要求を提出すればする程、より速やかに反動勢力と妥協しようとする、と云ふ事であつた。しかるに、マルクス及びエンゲルスがドイツのために提出したやうな要求は單にドイツ・ブルジョアジーを死ぬ程につくりさせただけに止まらなかつた。それはドイツの民主主義者にとつてさへもあまりに急進的すぎるものであつた。

六三、共産主義者と民主主義 かくて、共産主義者は現存の社會及び政治的關係に反對して戰はれるあらゆる革命運動を、フ

フランスにおいても、スウイスに於ても、ポーランドにおいても、あらゆる國々において支持するものである。なんとすれば被抑壓民衆の政治的解放の道程上における、あらゆる一步一步は、プロレタリアートのブルジョアジーに對する階級闘争のためにより好都合な条件をつくり出すものだからである。しかし、これらの運動におけるすべてにおいて、彼等は民主主義者とは異つて、根本的問題として眞先に、王制の問題でもなければ政治問題でもなく、財産問題をかかげるのである。この問題は、ブルジョア財産關係の廢止が問題となつた十九世紀においては労働階級にとつて生きるか死ぬるかの問題となつたのである。最後に、共產主義者はいたるところで、萬國の民主主義的諸黨の協同一致に盡力する。

これ何故に共產主義者同盟が、いたるところで第一番に、共產主義者を、労働者の諸黨と結合しつゝ、尙單一的な民主主義的戦線の建設に努めたか、と云ふ事の理由であり、それが、マルクス、エンゲルス、及びウオルフの手によつて、封建的制度及び反動との戦ひにおける萬國の民主主義者の協同一致の實現に努めたか、と云ふ事の理由である。もつもこの際、民主主義が用ひてゐる革命的な空言や幻想を批判的にとりあつかふと云ふ事の権利は拋棄してゐない。この任務を遂行したものに、ブリュッセル市における「國際民主主義協會」と云ふのがあつた。マルクスはその副會長であつた。その他、英國には「民主主義者同盟」と云ふ組織があつた。その中では、チャーチスト達が非常にすばらしい役割を演じてゐた。かつ、その組織にはシャツペルその他の、ロンドン在住のドイツ共產主義の代表者達が加はつてゐた。



昭和二十一年九月十日 印刷
昭和二十一年九月十五日 發行

マルクス、エンゲルス著

共産黨宣言

リザノフ註解版

【定價 貳拾圓】

譯者 早川二郎

發行者 東京都世田谷區世田谷三ノ二四二九 大竹博吉

印刷所 長野市南縣町六五七 信濃毎日新聞社印刷出版局

發行所 東京都世田谷區世田谷三ノ二四二九 ナウカ社

配給元 振替東京八〇一四七番 會員番號A二二四〇一七 日本出版配給株式會社

4-G 51

